秋田県文化財調査報告書第207集

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅸ

— 太田遺跡 —

秋田県立博物館文化財センター

1991・3

秋田県教育委員会

東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅸ

— 太田（おおた）遺跡 —

1991・3

秋田県教育委員会

序

秋田県には、私達の祖先が営々として築きあげてきた貴重な文化遺産が数多く残されています。

東北横断自動車道秋田線は、秋田県の高速交通体系の根幹となるもので、すでに秋田市から横手市までの57.4kmについては、平成３年度の完成を目指して着々と工事が進められております。秋田県教育委員会では、昭和60年度から路線内に存在する遺跡の発掘調査を実施し、歴史的に貴重な資料を得て逐次その成果を公表してまいりました。

本報告書は、昭和63年度に調査した太田遺跡の調査成果をまとめたものであります。本書が、埋蔵文化財の保護に広く活用され、郷土の歴史や文化を研究する資料として、多くの方々に御利用いただければ幸いに存じます。

最後に、本調査の実施及び本書を刊行するにあたり、御援助、御協力を賜りました日本道路公団仙台建設局、大曲市・大森町教育委員会をはじめ、関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成３年２月15日

秋田県教育委員会

教育長　橋本　顕信

例　言

1．本報告書は、東北横断自動車道秋田線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の９冊目の報告書である。

2．本報告書は昭和63年度に調査した大曲市所在の太田遺跡の調査結果を収めたものである。

3．本書の執筆は、第３章第３節 調査の経過と第４章第１節 ３土坑を小山内透が、その他を谷地薫が分担した。

4．土色の表記は、農林水産省農林水産技術会議監修　財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』に拠った。

5．方位は真北（座標北）である。磁北は７度30分西側に偏っている。

6．発掘調査および遺物整理にあたって、下記の方々からご指導・ご助言を賜った。記して感謝の意を表する次第である。（五十音順）

板橋範芳　澤谷 敬　千田和文　奈良正毅　能登谷宣康　本間 宏

凡　例

1．柱穴に付した数値はプラン確認面からの深さで、単位はcmである。

2．各遺構・遺物に付している略記号は以下のとおりである。

ＳＢ（建物跡）ＳＩ（竪穴住居跡）ＳＫ（土坑）ＳＮ（焼土遺構）ＳＸ（柱穴群）ＳＷ（炭焼遺構）

3．遺構の番号は検出順に通し番号とした。精査段階で欠番となったものもある。

4．挿図中の遺物実測図と拓本はすべて通し番号とし、図版中の遺物もそれにしたがった。

5．文章中および表中の法量の推定値は（　）で表示した。

6．拓本の断面は縦断面図のほか、必要に応じて横断面図も作成し、拓本の下に置いた。

7．拓本は、断面の左側に表面（外面）を置いた。ただし、表裏両面を載せる場合に限り、断面の左側に裏面（内面）、右側に表面（外面）を置いた。

8．挿図中のスクリーントーン、シンボルマークは以下のように使い分けた。これ以外のマークは各図中に凡例を示した。

地　山　　柱　跡　　● 土　器

焼　土　　撹乱・新しい剥離　　▲ 石　器

磨　り　　炭化物　　■ 礫

目　　次

序
例　言 …… ii
凡　例 …… ii
目　次 …… iii

第1章　はじめに …… 1
　第1節　調査に至るまで …… 1
　第2節　調査の組織と構成 …… 2

第2章　遺跡の立地と環境 …… 3
　第1節　遺跡周辺の地形・地質 …… 3
　第2節　歴史的環境 …… 6

第3章　調査の概要 …… 10
　第1節　遺跡の概観 …… 10
　第2節　調査の方法 …… 11
　第3節　調査の経過 …… 12

第4章　調査の記録 …… 19
　第1節　A区の検出遺構と遺物 …… 19
　　1　建物跡 …… 19
　　2　竪穴住居跡 …… 50
　　3　土坑 …… 107
　　4　焼土遺構 …… 129
　　5　柱穴群 …… 132
　　6　炭焼遺構 …… 132
　　小　結 …… 133
　第2節　A区の遺構外出土遺物 …… 136
　　1　土器・土製品 …… 136
　　小　結 …… 159
　　2　石器 …… 162
　　小　結 …… 227
　第3節　B区の出土遺物 …… 239

第5章　まとめ …… 244
図　版

第1章　はじめに

第1節　調査に至るまで

東北横断自動車道秋田線は、秋田市－横手市－岩手県北上市を結ぶ高速交通体系の基幹をなす道路であり、昭和53年11月には、秋田市－横手市間57.4kmについて第8次施行命令が下された。これに伴い昭和54年11月には、日本道路公団仙台建設局長から秋田県教育委員会教育長あてに、計画路線内に存在する埋蔵文化財包蔵地の分布調査の依頼があった。これを受けて秋田県教育委員会では、昭和55・56年の2カ年にわたって遺跡の分布調査を行い計画路線内に44遺跡が存在することを報告した。さらに昭和58年にはこれらの遺跡の詳細分布調査を行い、路線内に37遺跡が存在することを報告した。

その後、路線内におけるこれら37遺跡の保存について、日本道路公団と秋田県教育委員会との間で協議されたが、路線変更が不可能なことから工事によって消滅してしまう遺跡については、緊急発掘調査を行い最終的には記録保存の措置をとることで合意し、昭和60年度から調査が開始された。

発掘調査は秋田市寄りの遺跡から順次着手され、昭和60年度には河辺郡河辺町七曲地区の6遺跡、翌61年には仙北郡協和町中淀川地区の上ノ山Ⅰ・上ノ山Ⅱ・館野遺跡の3遺跡と同町峰吉川地区の半仙遺跡の一部の調査を実施した。さらに昭和62年度には半仙遺跡の残りの部分と、西仙北町上野台遺跡・寺沢遺跡、仙北郡南外村の大畑潜沢Ⅲ遺跡と小出Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡の一部、大森町の下田遺跡、横手市の手取清水遺跡の調査を行った。そして昭和63年度には小出Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡の残り部分と小出Ⅳ遺跡、北田山田ケ沢Ⅰ・Ⅱ遺跡(註1)、大曲市の石神・太田・下田谷地遺跡、平鹿郡平鹿町の竹原遺跡・横手市の上猪岡遺跡の調査を実施したのである。

註1　昭和63年に新たに確認されたもので、同年8月に遺跡範囲確認調査を実施している。

関係文献

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第79集　1981(昭和56年)

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第93集　1982(昭和57年)

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第116集　1984(昭和59年)

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第126集　1985(昭和60年)

秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅰ－石坂台Ⅳ遺跡・Ⅵ遺跡・Ⅶ遺跡・Ⅷ遺跡・Ⅸ遺跡・松木台Ⅲ遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第150集　1986(昭和61年)

秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ－上ノ山Ⅰ遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡・館野遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第166集　1988(昭和63年)

秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅲ－半仙遺跡・寺沢遺跡・上野台遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第180集　1990(平成2年)

秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅳ－下田遺跡・下田谷地遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第189集　1990(平成2年)

秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅴ－石神遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第190集　1990(平成2年)

秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅵ－手取清水遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第191集　1990(平成2年)

第2節　調査の組織と構成

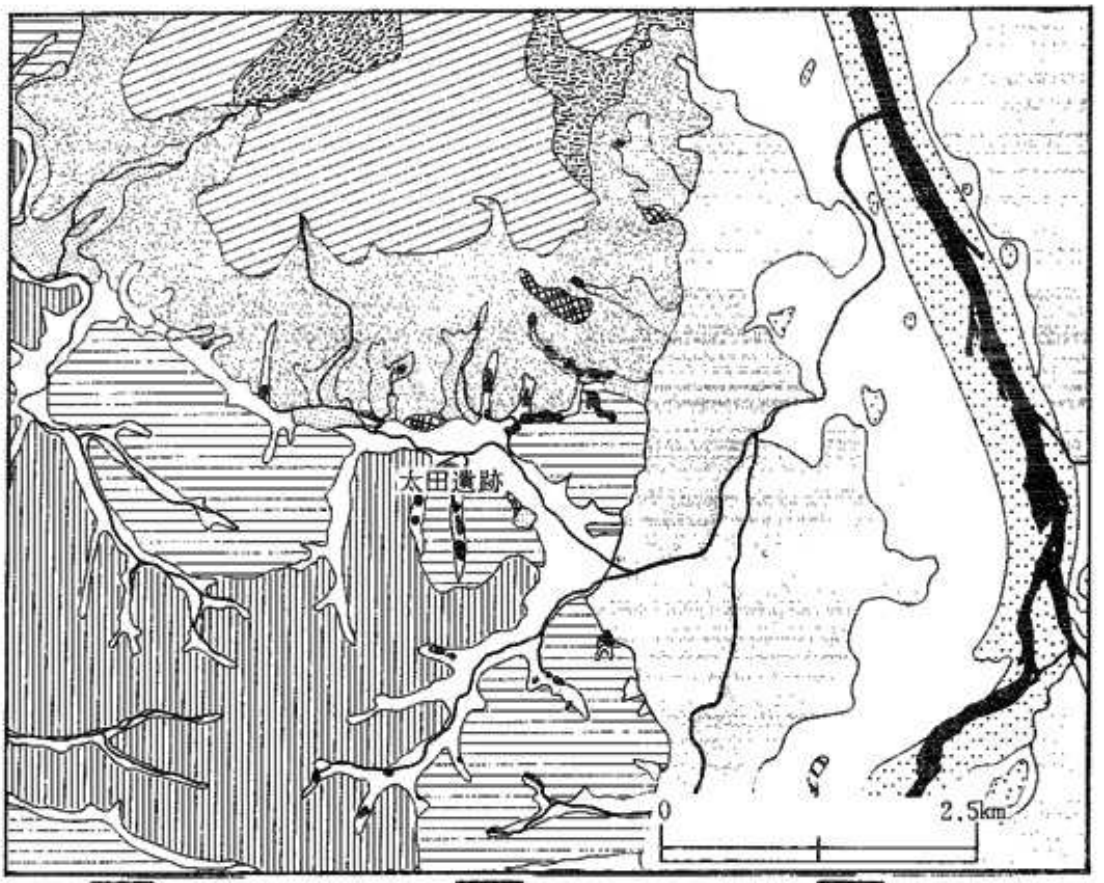
調査主体	秋田県教育委員会	
遺跡所在地	大曲市内小友字浅川53－1外	
調査面積	8,500㎡　(A区7,800㎡、B区700㎡)	
調査期間	昭和63年5月9日～10月31日	
調査担当者	谷地　薫	秋田県埋蔵文化財センター学芸主事
	小山内　透	秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員
専門指導員	白石　建雄	秋田大学教育学部助教授
	戸沢　充則	明治大学文学部教授
	林　謙作	北海道大学文学部助教授
	吉岡　康暢	国立歴史民俗博物館考古研究部教授
	渡辺　誠	名古屋大学文学部助教授
		(現　名古屋大学文学部教授)
総務担当	加藤　進	秋田県埋蔵文化財センター主査
		(現　秋田県立博物館総務課長補佐)
	佐田　茂	秋田県埋蔵文化財センター主査
	高橋忠太郎	秋田県埋蔵文化財センター主事
協力機関	大曲市・大曲市教育委員会	
	大森町・大森町教育委員会	

第2章　遺跡の立地と環境

第1節 遺跡周辺の地形・地質

太田遺跡のある大曲市は、秋田県南部の内陸部に広がる横手盆地のほぼ中央にある。太田遺跡は大曲市西部の内小友地区にあり、東経140度26分、北緯39度25分である。

遺跡は、出羽丘陵（出羽山地ともいう）東縁に帯状に発達する丘陵地で、起伏量100m未満の低位侵蝕面（大森面）に立地する。この丘陵地を雄物川の支流小友川が東流し、大きな開折



第1図　地形区分図

谷を形成している。その両岸には、開析谷に直交していくつかの小侵蝕谷が発達している。太田遺跡Ａ区はこの小侵蝕谷によって東西を区切られた、北向きに張り出した舌状台地上、水田内に遺物が散布する太田遺跡Ｂ区は、小友川の谷底平野の埋没微高地にある。

太田遺跡の立地する丘陵の基盤層は含油第三系の下部船川層である。

秋田県は東北地方グリンタフ地帯の一角を占め、新第三紀以降の地層が先新第三系を不整合に覆って広く分布している。この新第三紀の地層（新第三系）は伝統的に上下に二分される。下部は「下部グリンタフ」とよばれ、主として火山噴出物から構成されている。一方上部は「含油新第三系」とよばれ、泥岩・砂岩などの堆積岩からなる。含油新第三系を構成する地層は下位から順に女川層、船川層、天徳寺層、笹岡層に区分されている。これら含油新第三系を構成する堆積物は上位のものほど粗粒になる傾向がある。すなわち最下位の女川層は層理が発達した硬質で均質な頁岩からなるが、天徳寺層のシルト岩を経て、最上位の笹岡層では主として砂岩から構成されている。

下部船川層は上部船川層と調和したＳ字様分布を示す。下位女川層の硬軟互層を示す泥岩の軟部の要素を備えた岩相であり、暗灰色を呈し、全般に塊状を呈することが多く、葉片様に細かく砕けるのが特徴である。上部船川層同様拳～人頭大の石灰質団塊を含む。最下位層分布域に向かって薄化する傾向があり、下位女川層とは整合である。

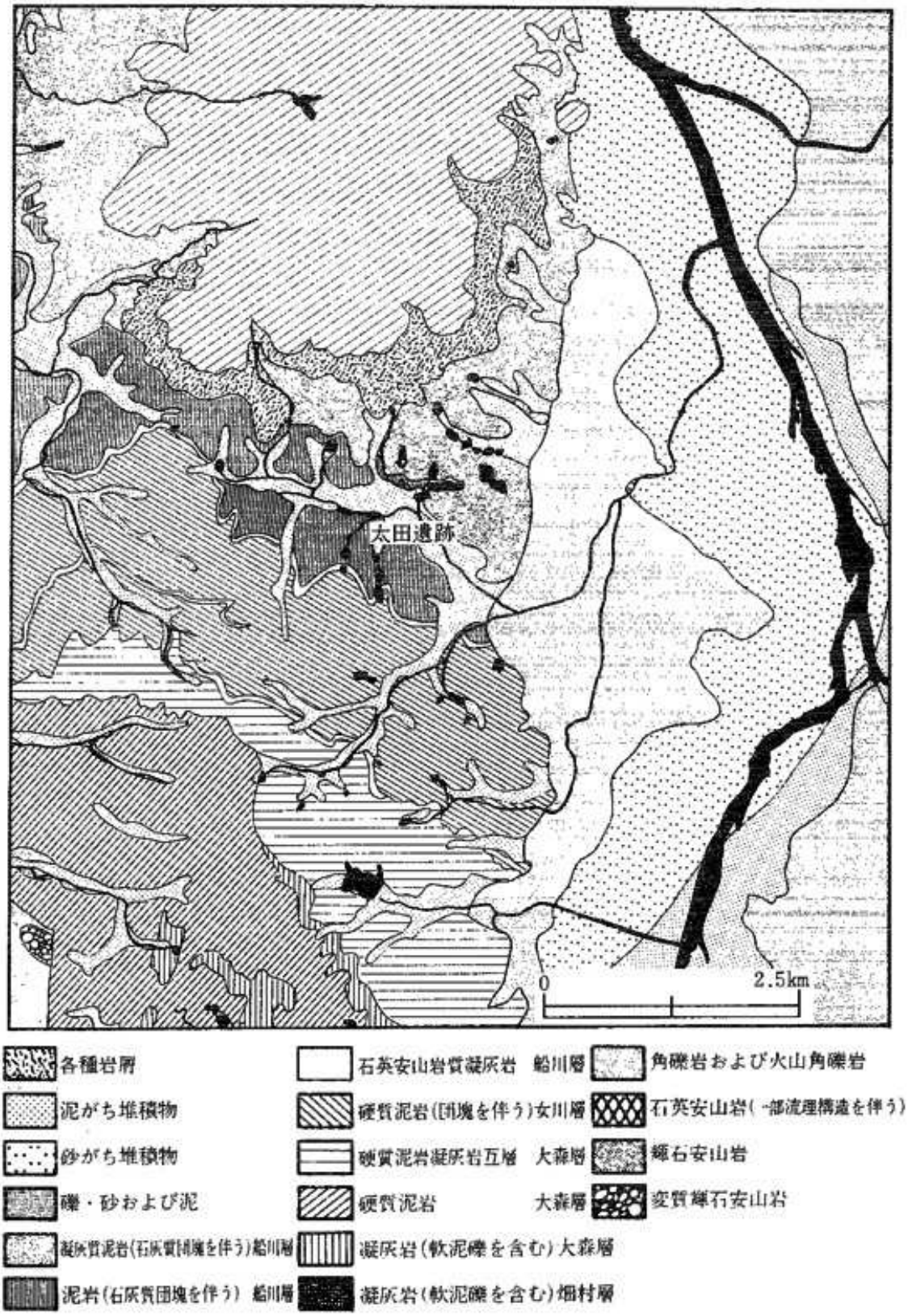
遺跡から出土した石器の石材として多く用いられている頁岩は主として女川層由来のものである。女川層は硬質泥岩を主とする岩相で、10～20cmの層理単位を示し、暗い灰色で硬軟互層を呈する。硬質部はフリント質であることが多く、軟質部は下位船川層と同質の葉片様に細かく砕ける泥岩である。苦灰質団塊を含んでいる。女川層は大森町下田付近から、大曲市高寺を経て小出沢付近までは南東から北西に幅約1.5kmの帯状に延び、さらに南外村外小友地区から西方に分布している。太田遺跡はこの女川層地帯の北縁から北約500mのところにある。

Ａ区の表層を覆う土壌は褐色森林土の軽井沢ａ統である。泥岩類を母材とする重粘な植地である。丘陵地として発達する地形的な特徴から、鈍重な尾根からその下部に分布し、表層の発達はあまり顕著でない。殆ど石礫の混入はみられず、堅密であり、部分的に母材風化礫がみられる程度である。Ｂ区は地下水位が高く下層が還元状態となっており、地下水位30～60cmの位置から出現し微粒質の幡野統（グライ土壌）が発達している。

引用文献

秋田県文化財調査報告書第180集『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅲ　－上野台遺跡・寺沢遺跡・半仙遺跡－』　1989（平成元年）

秋田県農政部農地整備課　「大曲」『雄平仙中核都市建設計画地域　土地分類基本調査』　1978（昭和53年）


太田遺跡
0
2.5km
各種岩屑
泥がち堆積物
砂がち堆積物
礫・砂および泥
凝灰質泥岩(石灰質団塊を伴う)船川層
泥岩(石灰質団塊を伴う)　船川層
石英安山岩質凝灰岩　船川層
硬質泥岩(団塊を伴う)女川層
硬質泥岩凝灰岩互層　大森層
硬質泥岩　大森層
凝灰岩(軟泥礫を含む)大森層
凝灰岩(軟泥礫を含む)畑村層
角礫岩および火山角礫岩
石英安山岩(一部流理構造を伴う)
輝石安山岩
変質輝石安山岩

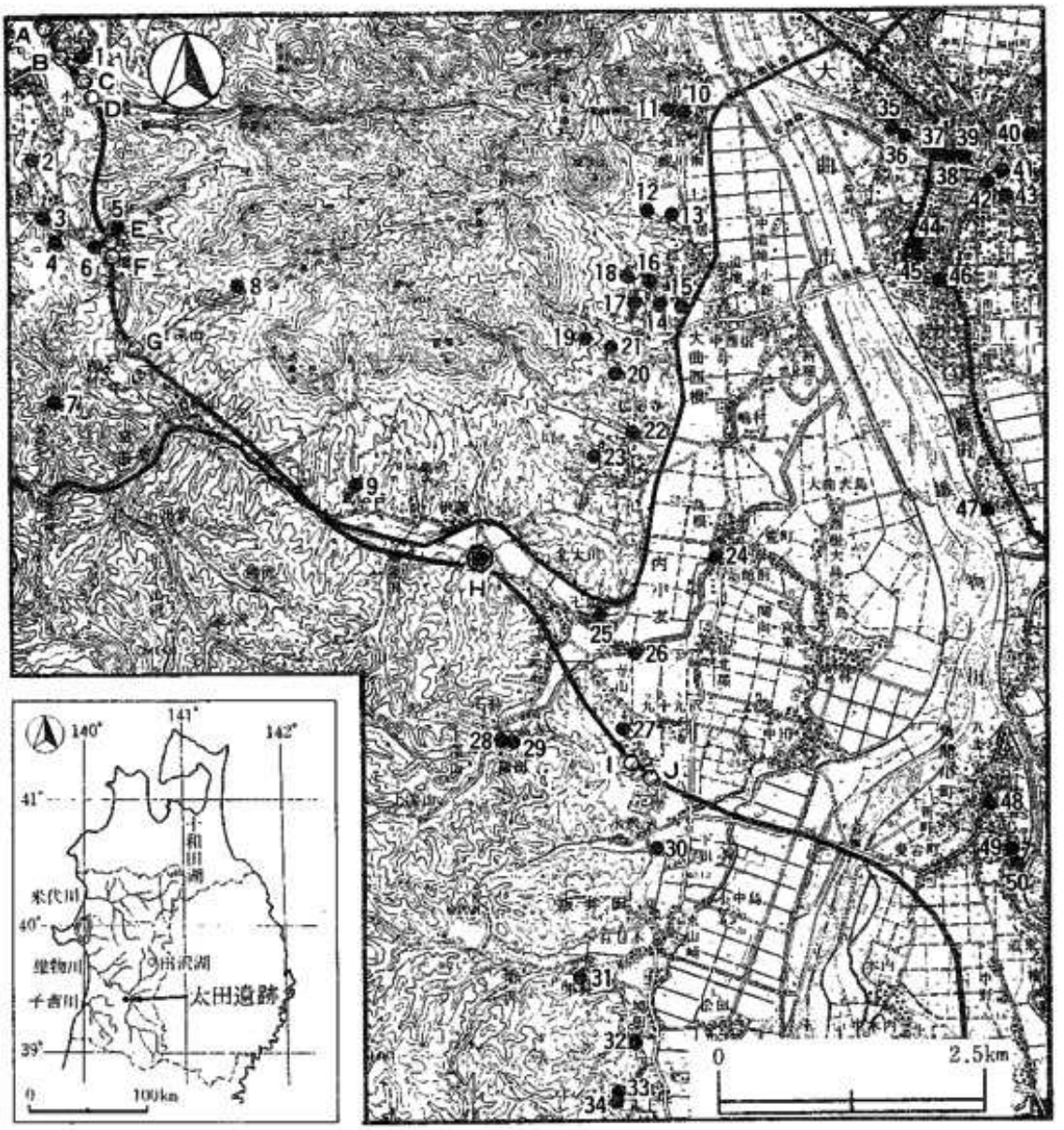
第2図　表層地質図

第２節　歴史的環境

太田遺跡は、横手盆地の西部に位置する。盆地内には県内三大河川の１つである雄物川が北流し、その両岸と支流沿いに多くの遺跡が分布している(注１)（第２図、第１表）。

太田遺跡周辺の古代以前の遺跡は、雄物川左岸の起伏量100ｍ未満の丘陵地と、雄物川の支流楢岡川の両岸に発達する段丘地に多く分布している。

太田遺跡Ｂ区では、縄文時代前期後葉の土器が出土したが、前期の遺跡には、前期初頭の下田遺跡(注２)と大木２ｂ式土器の出土した深山遺跡がある。両遺跡とも丘陵地に立地しているが、太



第３図　遺跡の位置と周辺の遺跡

田遺跡B区は谷底平野の埋没微高地にあり、立地の違いが注目される。

太田遺跡A区は縄文時代中期後葉の集落跡であるが、それに先行する中期中葉の土器もわずかに出土している。中期中葉の遺跡には、雄物川左岸では蛭川Ⅱ遺跡(註3)、楢岡川流域では小出Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡、山王台遺跡など多くの遺跡がある。中期後葉では小出Ⅰ遺跡で竪穴住居跡などが発掘調査された。後期初頭の土器は下田谷地遺跡、下田遺跡、小出Ⅲ遺跡などで出土し、小出Ⅲ遺跡で竪穴住居跡が1軒発掘調査されている(註4)。成沢Ⅱ遺跡では後期の集落が発掘調査され(註5)、下田遺跡、下田谷地遺跡では晩期の集落が発掘調査されている。このほか、縄文時代の遺跡が雄物川左岸の丘陵地に多く分布している。

弥生時代中期の遺跡には、宇津ノ台式の標式遺跡である宇津台遺跡がある。この遺跡からは昭和35年から昭和36年にかけて興野儀一氏によって採集された遺物があり、それについて昭和44年に須藤隆氏の報告がある(註6)。また、下田遺跡では弥生時代後期の遺物が出土している。楢岡

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
A	小出Ⅳ	旧石器・縄文(中)・弥生	21	宇津台	弥生
B	小出Ⅲ	縄文(中・後・晩)・中世	22	中沢Ⅰ	縄文・平安
C	小出Ⅱ	縄文(前)・平安	23	中沢Ⅱ	縄文
D	小出Ⅰ	旧石器・縄文(前・中・晩)・弥生・平安・中世	24	三浦館	中世
E	大畑潜沢Ⅱ	縄文	25	前崎山城	中世
F	大畑潜沢Ⅲ	縄文(中)	26	七頭館	中世
G	石神	縄文・中世	27	九十九沢窯跡	平安
H	太田	縄文(中・晩)・弥生	28	高寺経塚	中世
I	下田谷地	縄文(後・晩)・平安	29	高寺山城	中世
J	下田	縄文(前・晩)・平安	30	館小山	中世
1	山王台	縄文(中)	31	平野	縄文
2	桧山腰窯跡	中世	32	五庵畳館	中世
3	大畑窯跡	中世	33	影取Ⅰ	縄文
4	大畑	縄文	34	影取Ⅱ	縄文
5	大畑館	中世	35	大曲城堡	中世
6	大畑深山	縄文(晩)	36	石造五重塔	中世
7	六郎沢館	中世	37	大曲城	中世
8	深山	縄文(前)	38	土屋館	縄文(中)
9	荒山台	縄文	39	土屋館	中世
10	蛭川Ⅰ	縄文(中)・平安	40	保谷城	中世
11	蛭川Ⅱ	平安・近世	41	館の下	縄文
12	鳥居Ⅱ	縄文(晩)・平安	42	大川寺画像碑	中世
13	鳥居Ⅰ	縄文	43	門野目城	中世
14	成沢Ⅲ	縄文(晩)	44	大日碑	中世
15	成沢Ⅰ	縄文(晩)	45	大日碑	中世
16	成沢窯跡	平安	46	塩谷家・永和碑	中世
17	成沢Ⅱ	縄文(後・晩)	47	河野目城	中世
18	成沢館	縄文・平安・中世	48	浄蓮寺墓地大日碑	中世
19	仁応寺Ⅰ	縄文	49	大館城	中世
20	仁応寺Ⅱ	縄文・平安	50	旧喜福院墓地大日碑	中世

第1表　周辺の遺跡一覧表

川の右岸では小出Ⅳ遺跡で弥生時代前期の集落が発掘調査され、小出Ⅰ遺跡でも弥生時代前期の遺物が出土した(註4)。縄文時代同様に弥生時代を通してこの地域が人々の生活の場であったことを示すものである。

古代の遺跡は多いが、いずれも平安時代で、奈良時代以前にさかのぼるものは現在のところない。太田遺跡の東約1kmには余目の地名が残っていることから、平安時代にはこの地域は山本郡の余戸（郷）であったと考えられる(註7)。余戸は「山谷相険、地遠人希」の所に置かれたものとされるが(註8)、山本郡域にあって古代律令国家の中心的施設であった払田柵跡からは、大川（雄物川）をへだてた西側で、地理的に「地遠」であったと考えられる。また、雄物川の左岸には成沢窯跡(註9)、九十九沢窯跡(註10)があり、須恵器生産地帯であったと考えられるが、古代の集落跡は少なく、下田遺跡、小出Ⅱ遺跡で竪穴住居跡や建物跡が検出されているのみである。これらも同時期には1～3軒程度と考えられ、古代集落遺跡のあり方からも「人希」の地といえそうである。

中世以降では、雄物川左岸、楢岡川流域の丘陵地や段丘上のほか、雄物川右岸の沖積地にも城館が築かれている。雄物川右岸では四十二館跡が発掘調査され(註11)、掘立柱建物跡などが検出されている。楢岡川流域では、発掘調査された石神遺跡等丘陵上に館跡が分布する(註12)。さらに、珠洲系陶器を生産した大畑窯跡が発掘調査されているのをはじめ(註13)、中世～近世の窯跡も分布する。

雄物川右岸の沖積地には仏教関係遺跡が多い。交通の要衝を中心に中世武士団の領袖の拠点として城館が営まれ、それに伴って仏教関係遺跡も造営されたものと推測される。城館跡の位置や立地状況は、踏査によって明らかにされつつあるが、発掘調査された四十二館跡以外は、城館跡の具体的な遺構・遺物や一般集落の様相はほとんど不明である。太田遺跡B区で出土した多くの種類の中・近世陶磁器は城館の周囲の沖積地にも中・近世の遺跡が存在することを示すものである。

註1　32の名称については『秋田県の中世城館』によれば「量館」とあるが、発行年が新しい『秋田県遺跡地図（県南版）』に掲載されている遺跡名をとって「五庵量館」とした。

註2　秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅳ－下田遺跡・下田谷地遺跡－』秋田県文化財調査報告書第189集　1990（平成2年）

註3　能登谷宣康　「大曲市蛭川遺跡より採集された遺物について」　『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第5号　1989（平成元年）

註4　秋田県埋蔵文化財センター　『秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会』発表要旨　1989（平成元年）報告書は平成3年度に刊行予定である。

註5　大曲市教育委員会　『成沢遺跡発掘調査略報』　1974（昭和49年）

註6　須藤　隆　「秋田県大曲市宇津ノ台遺跡の弥生式土器について」　『文化』　第33刊 第3号

東北大学文学会　1969（昭和44年）

註7　『角川日本地名大辞典　5　秋田県』　角川書店　1980（昭和55年）

註8　新野直吉　「余戸論」　『史林』43巻5号　1960年（昭和35年）

註9　秋田県教育委員会　『成沢遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第36集　1976（昭和51年）

註10　秋田県　『秋田県史考古編（復刻版）』　1977（昭和52年）

註11　大曲市教育委員会　『四十二館跡発掘調査報告書』　1984（昭和59年）

註12　秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅵ－石神遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第191集　1990（平成2年）

註13　南外村教育委員会　『仙北郡南外村　大畑窯跡発掘調査報告書』　1981（昭和56年）

第1表の参考文献

秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図』（県南版）　1987（昭和62年）

秋田県教育委員会　『成沢遺跡発掘調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第36集　1976（昭和51年）

秋田県教育委員会　『出羽丘陵総合開発事業遺跡分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第42集　1977（昭和52年）

秋田県教育委員会　『秋田県の中世城館』　秋田県文化財調査報告書第86集　1981（昭和56年）

秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』　秋田県文化財調査報告書第155集　1987（昭和62年）

秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅳ－下田遺跡・下田谷地遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第189集　1990（平成2年）

秋田県教育委員会　『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅵ－石神遺跡－』　秋田県文化財調査報告書第191集　1990（平成2年）

大曲市教育委員会　『大曲市遺跡分布地図』　1987（昭和62年）

佐藤清一郎　『図説大曲・仙北の歴史』　上巻　無明舎　1984（昭和59年）

長山幹丸　『南外村の城と館』　南外村郷土史資料　1987（昭和62年）

南外村教育委員会　『南外村誌　資料篇第六集』　1982（昭和57年）

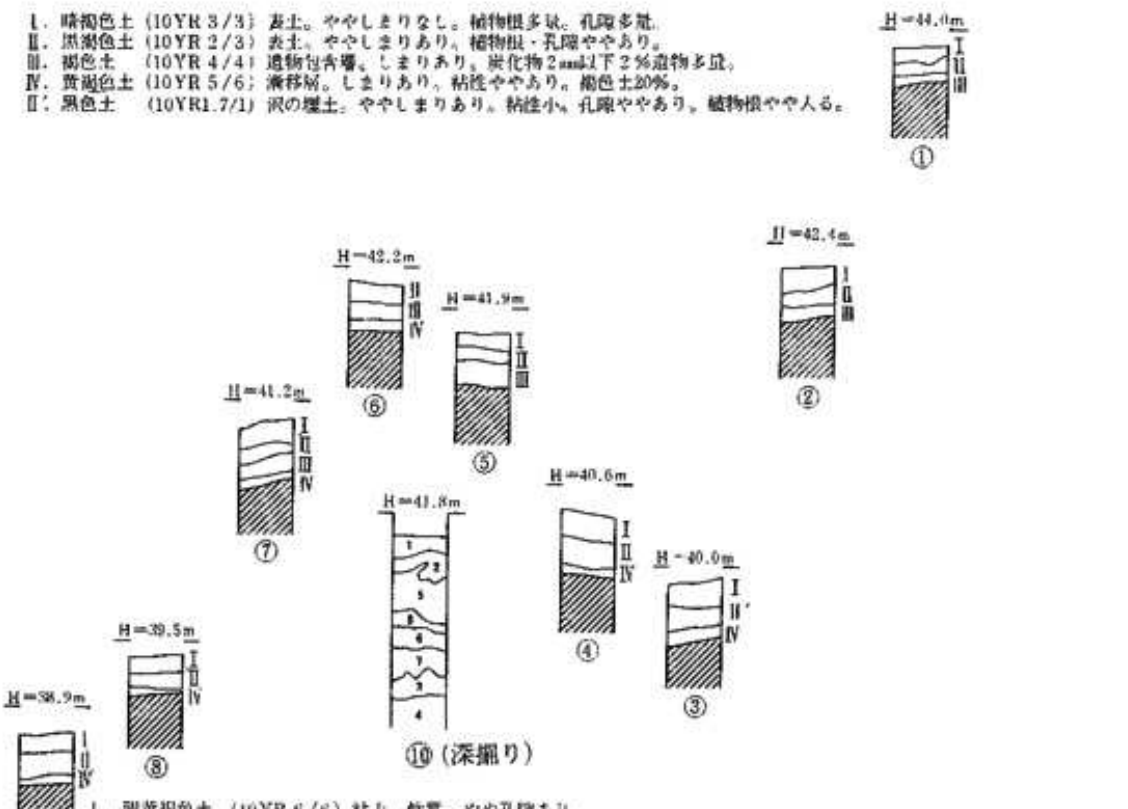
南外村教育委員会　『仙北郡南外村　大畑窯跡発掘調査報告書』　1981（昭和56年）

第3章　調査の概要

第1節　遺跡の概観

太田遺跡は丘陵上のA区と沖積地のB区からなる。A区中央部と沖積面との比高差は約9mである。A区北側の丘陵下を流れる小友川が沖積地で蛇行し、B区東側を東流して雄物川に至っている。

A区は縄文時代中期の集落跡である。丘陵中央の平坦部で重複も含めて竪穴住居跡14軒、建物跡9棟を検出した。東側の尾根から西斜面にかけては縄文時代の遺構はなく、少数の遺物が出土したにとどまった。その中には集落内に持ちこまれる前に分割、または剥離された石器類が含まれている。



第4図　基本層位図

出土遺物は縄文時代前期から弥生時代中期までの各期の土器と石器類である。量的な主体は集落を構成する竪穴住居跡や建物跡に伴う縄文時代中期後葉のもので、晩期後葉の土器がそれに続く。石器類の総数は2926点で、70件の接合資料がある。遠く離れたグリッドや遺構間で接合するものもあり、集落内における石器製作と使用・廃棄のあり方を知ることができる。土器・石器とも多くは遺構の集中する丘陵中央部と、その西・北・東の斜面から出土した。斜面を利用した捨場が形成されていたもので、特に斜面に構築された竪穴住居跡の廃絶後の凹地から多量の遺物が出土した。

A区の基本層位は、Ⅰ：暗褐色土（表土）（20～30cm）、Ⅱ：黒褐色土（20～40cm）、Ⅲ：褐色土（10～30cm）、Ⅳ：黄褐色土（漸移層）（5～15cm）、Ⅴ：褐色土（地山）の5層からなる（第4図）。縄文時代の遺物包含層はⅠ～Ⅲ層である。丘陵中央平坦部とその周囲の緩斜面では、Ⅰ～Ⅲ層に遺物が含まれるがⅢ層が主体である。Ⅲ層はそれ以外の場所では薄く部分的になり、遺物も含まれない。

竪穴住居跡や焼土遺構などはⅢ層中で検出したが、建物跡の柱穴はⅣ層上面あるいはⅤ層上面まで掘り下げて精査した結果検出できた。

B区は、現在の水田面にあり、小友川の蛇行によって形成された埋没微高地上にある。遺構はなく、縄文時代前期後葉の土器が3個体と石器類が出土した。石器類には石核も含まれるが、不定形石器などの使用された石器が139点中53点と多い。また、中世から現代に至る各時代の陶磁器が109点出土した。

第2節　調査の方法

発掘調査はグリッド法を採用した。東北横断自動車道秋田線路線内には、本線上と各ランプウェイ上の中心に中心杭が打設されているが、本遺跡は大曲インターチェンジ予定地であり、本線上には範囲が及んでいないことから、ランプウェイ上の中心杭1カ所（E－STA0＋00）を選定しこれをグリッドの起点MA50とした。MA50を通る南北基線と、それと直交する東西基線から、4m×4mのグリッドを設定し、20m毎に一カ所の杭を仮レベル原点とした。グリッド杭には、東西方向を表すLA→LT……というアルファベットと、南北方向を表す49・50・51……の南から北に向かって昇順となる連続する2桁の数字を組み合わせた記号を記入し、4m×4mの方眼杭の南東隅をグリッドの名称とした。A区とB区は離れているが、起点を別とせず同一の方眼でグリッドを組んだ。

A区は遺物包含層を覆う表土が30～50cmと厚いので重機による表土除去を行ったが、A区中央部の遺構・遺物の多い範囲は、表土中にも遺物が含まれるので、すべて人力で行った。

遺物の取り上げは、遺構外出土のものは、出土グリッド・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入し、遺構内出土のものは、出土遺構名・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げた。これら遺物の出土状況は必要に応じて適宜図面作成や写真撮影を行った。

遺構の調査は、主に四分法を用いた。住居跡などの規模の大きな遺構は、そのプラン確認後、二方向に直交する堆土堆積状況観察用のベルトを残して調査を進めた。規模の小さな土坑などの遺構は、長軸に沿って二分割して調査した。調査の記録は、主に図面と写真によった。図面は、基本的には1／20の縮尺で作図することとしたが、竪穴住居跡の炉など、細部の表現が必要な遺構に関しては1／10で行った。

写真撮影は、基本的には35㎜、必要に応じて60×45㎜のモノクロとリバーサルフィルムを使用した。

室内における整理は、遺構は現場で取った平・断面図より第2原図を作成し、これをトレースした。遺物は洗浄・注記の後に実測図・拓影図の作成、写真撮影を行った。

第3節　調査の経過

発掘調査は、昭和63年4月11日の現況視察の後、5月9日から10月31日まで行った。

5月9日　プレハブ設置とA区の清掃を行い、調査前の近景を撮影した。

5月10日　プレハブ設置が完了。発掘機材を搬入し、B区から粗掘を開始した。

5月16日　A区の重機による表土除去の土層・土厚確認のためにA区斜面にトレンチを入れた。グリッド杭打設がB区より始まる。

5月18日　B区及びA区の人力による表土除去範囲のグリッド杭打設終了。残りは重機による表土除去後に行う。進入路の補修工事を行い、以後、必要に応じて行った。

6月2日　B区精査終了。遺構は検出されず、陶器・縄文土器・石器等の遺物が出土した。土層ベルトを除去し、完掘全景を撮影した。

6月3日　本日より作業の主体はA区に移り、遺跡中央部丘陵の南側から粗掘を始め、ベルトコンベアー稼働後は、北東側緩斜面からも行った。

6月10日　地形測量等の残っていた実測を終え、B区の調査をすべて完了した。

6月13日　A区中央部の表土除去終了。遺物の出土は中央部平坦面と緩斜面にほぼ限られるようである。MD・ME43グリッドではフレーク・石核等の石器がまとまって出土するブロックを検出した。

6月14日　Ⅲ層上面の遺構検出を行うが、プラン確認が困難なため、Ⅲ層を除去することと

し、遺物の希薄な南側と東側から始める。

6月15日　ＬＰ50・51グリッドのⅢ層中で多量の遺物が出土し、ＭＢ45グリッドでは大型のフレーク５点が重なった状態で出土した。中央部Ⅲ層中では遺物はブロック的にまとまる傾向があり、遺構の存在を考え遺物を全点測量することとした。ＬＭ53グリットで埋設土器１基（ＳＢ40炉）が検出し、北東側の粗掘を拡張した。

6月22日　Ａ区中央部以外の重機による表土除去を開始する。

6月29日　中央部南側からⅣ層上面での遺構検出を始める。

7月４日　調査区南西部からⅡ層除去を始める。ＬＭ53グリッドで検出した埋設土器は5～7重に重なった土器片囲炉であることが判明した。MJ51グリッド（ＳＫ72）でチップ・フレイクがかたまって出土した。

7月８日　ＬＳ48・49グリッドで範確２トレンチ内の焼土を確認する。専門指導員戸沢充則明治大学教授が来跡し、石器・集落跡について御教示いただく。

7月13日　ＬＳ46・47グリッドで遺物を多く含む落ち込み（ＳＩ20）を確認した。

7月15日　調査区北端部Ⅱ層掘り下げを始める。これまでのところⅢ層は中央部丘陵にのみ認められ、遺物・遺構の分布もほぼ一致して限られるようである。

8月１日　ＳＢ32は２つの地床炉を囲み柱穴が巡るようである。

8月３日　ＳＩ20は２つの地床炉をもつ８本柱の楕円形住居跡であることが判明した。

8月５日　専門指導員吉岡康暢国立歴史民俗博物館考古研究部教授が来跡し、Ｂ区の陶器について御教示いただく。

8月27日　中央部東西ベルトより南側の遺構検出をほぼ終え北側に取りかかる。専門指導員林謙作北海道大学助教授が来跡し、縄文土器、建物跡について御教示いただく。

8月29日　残っていた調査区南東部の粗掘を開始。

9月５日　中央部丘陵Ⅳ層上面での遺構検出をほぼ終える。西側では竪穴住居跡（ＳＢ70・73・75）等を調査中であるが、東側では焼土を囲むピットのプランが不明瞭なため、地山面まで掘り下げることとした。

9月17日　小林達雄国学院大学教授が来跡し、縄文中期の集落について御教示いただく。

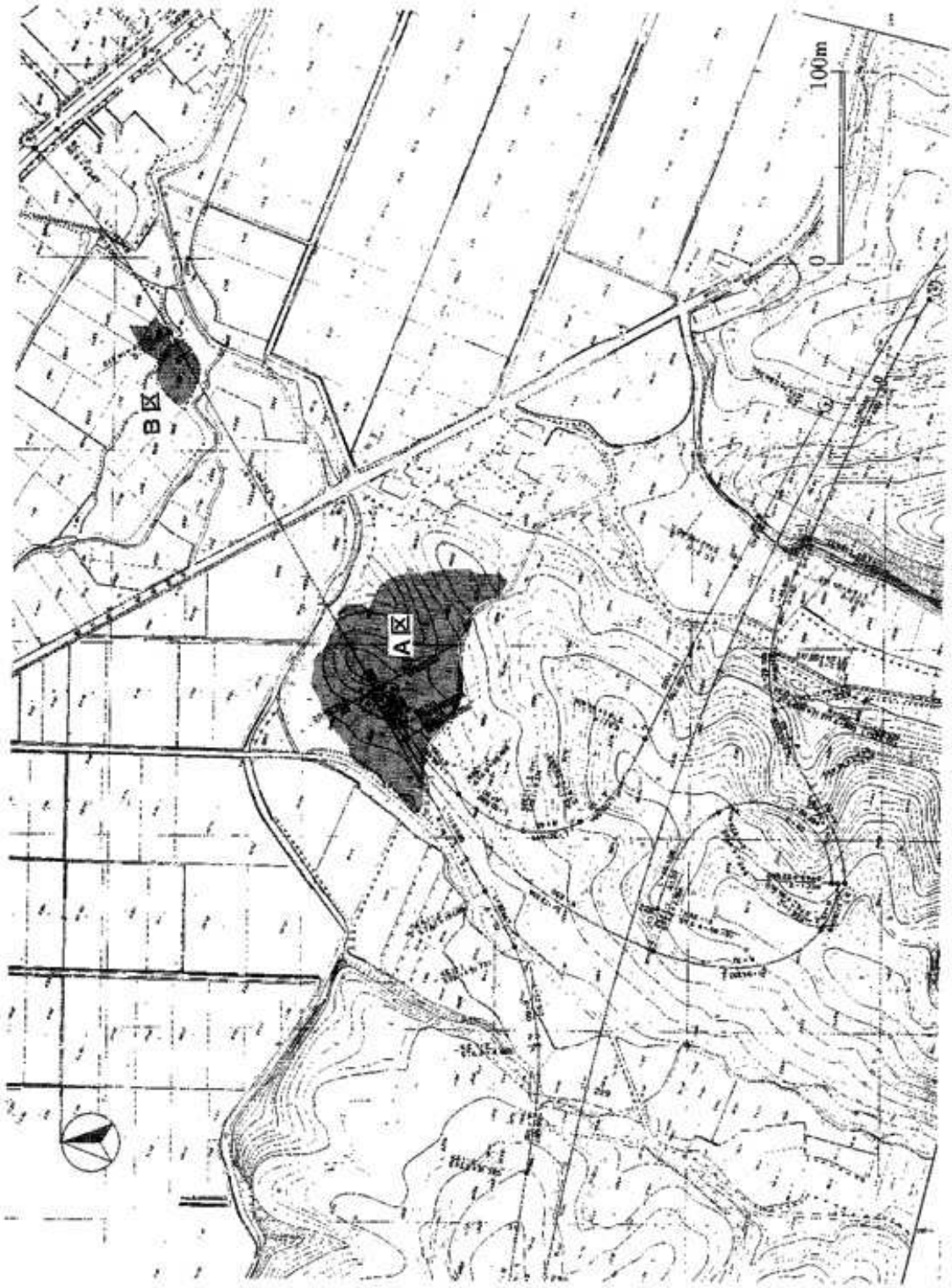
9月29日　ＬＰ・ＬＱ50･51グリッドで検出していた焼土群はＳＩ20・ＳＢ32と同形態で２個の焼土と８本柱の建物跡（SB22・30・89）であることが判明した。

10月20日　若干の遺構調査を残し、機材を撤収し、大半の作業員が現場作業を終了。

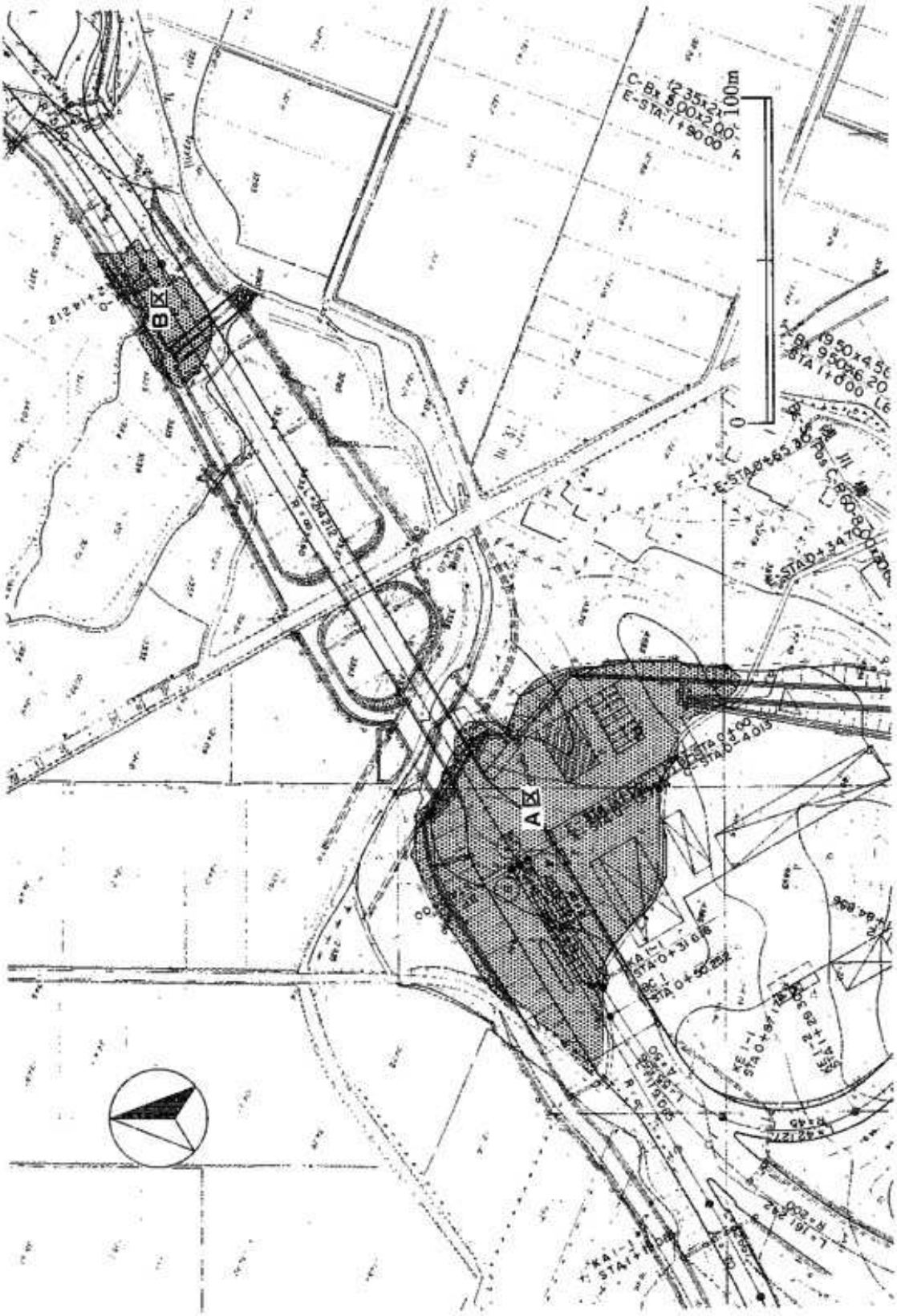
10月28日　残った機材を撤収し、作業員による現場作業をすべて終える。

10月31日　遺構実測等調査の補足をし、本日で発掘調査の現場作業をすべて完了した。

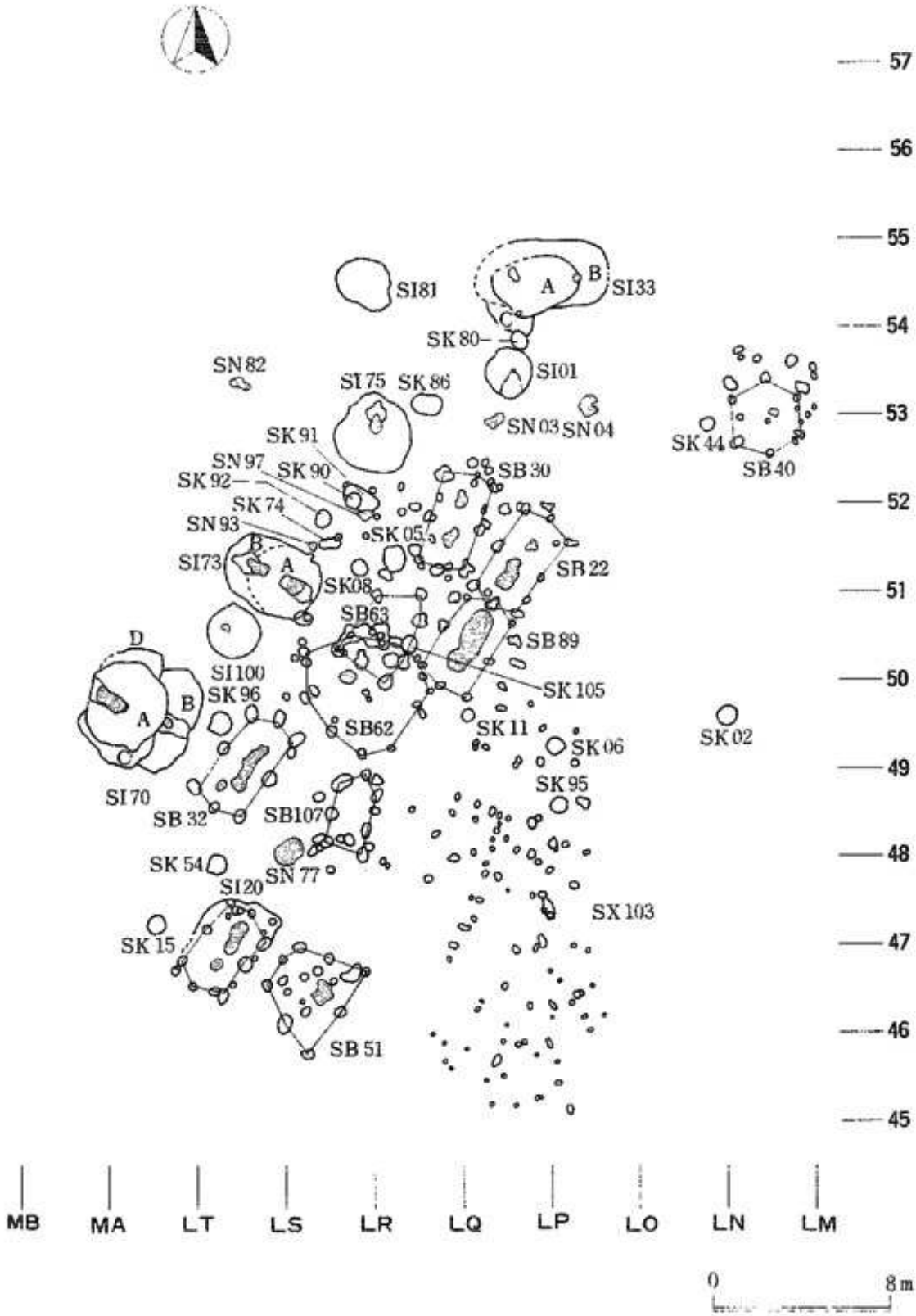
この後、埋蔵文化財センターで、遺物、図面類の整理作業を行い、報告書を作成した。



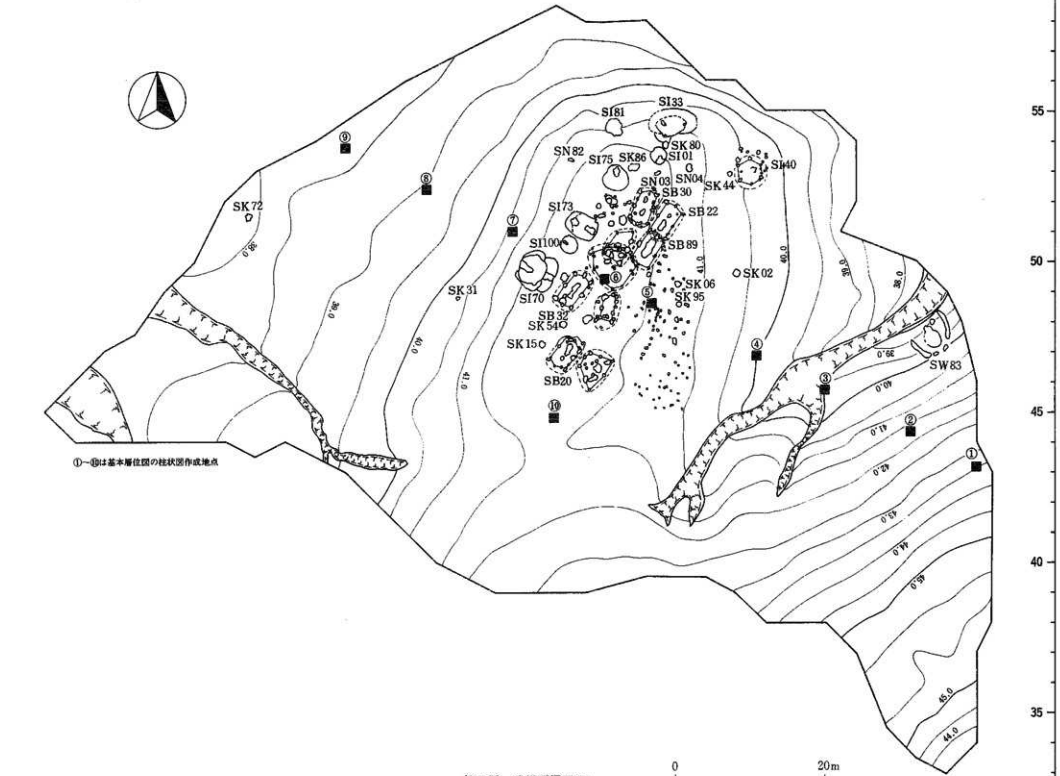
第5図　調査範囲図



第6図　工事計画図と調査範囲


57
56
55
54
53
52
51
50
49
48
47
46
45
SI81
SI33
A
B
C
SK80
SI01
SN82
SI75
SK86
SN03
SN04
SK44
SB40
SK91
SN97
SK90
SK92
SB30
SK74
SN93
SK05
SI73
SB22
SK08
SB63
SB89
D
SI100
SK96
SK105
SB62
SK11
SK06
SK02
SK95
SI70
SB32
SB107
SK54
SN77
SI20
SX103
SK15
SB51
MB
MA
LT
LS
LR
LQ
LP
LO
LN
LM
0
8m

第7図　遺構配置図（1）


SI81
SI33
SK80
SI01
SN82
SI75
SK86
SI40
SN03
SN04
SK44
SB30
SK72
SI73
SB22
SI100
SB89
SK02
SK31
SK06
SI70
SK95
SB32
SK54
SK15
SW83
SB20
①～⑩は基本層位図の柱状図作成地点
0
20m
55
50
45
40
35
MP
MK
MF
MA
LP
LK
LF

第8図　遺構配置図(2)

第4章　調査の記録

第1節　A区の検出遺構と遺物

1　建物跡

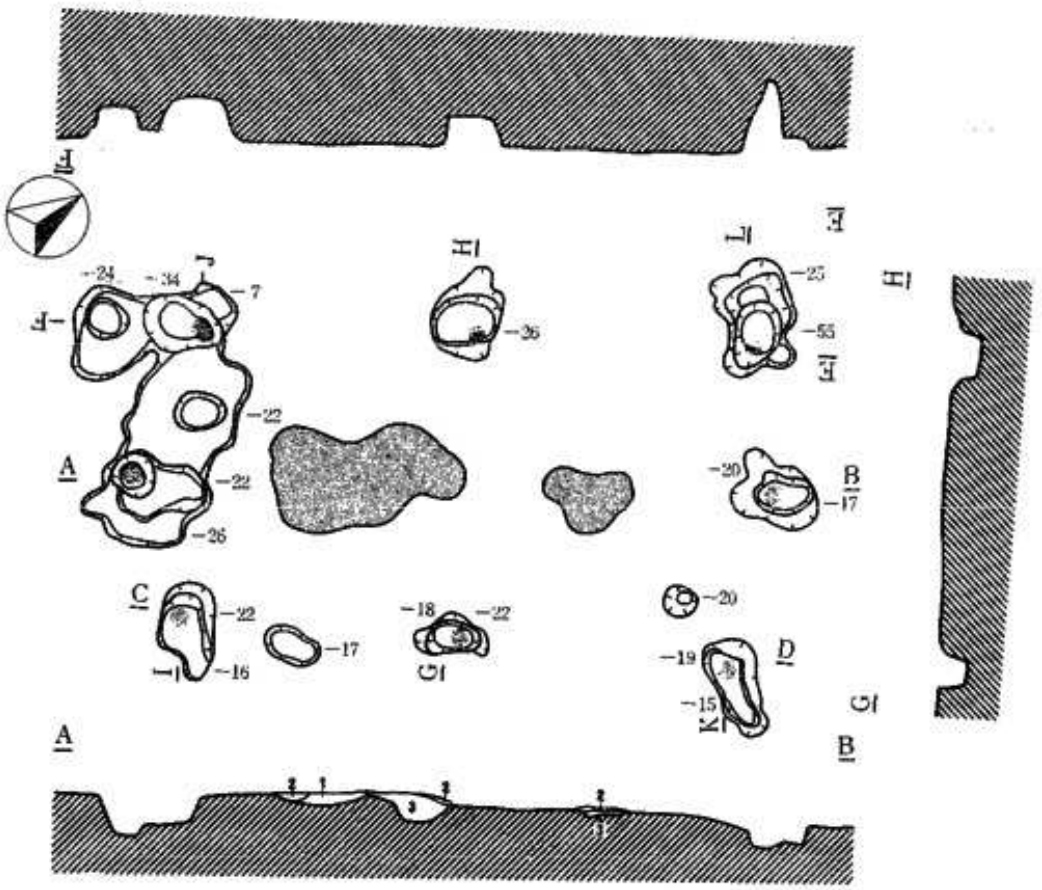
調査区中央平坦部の東側で9棟検出した。建物跡の柱穴の多くはⅣ層上面を精査した段階ではプランが不明瞭であった。SI20・SI70などの竪穴住居跡はⅣ層上面で、Ⅲ層あるいはⅡ層が残ることによって平面形が土色の違いとして確認されたが、建物跡とした遺構はⅣ層上面ではそのような土色の違いによる平面形は確認できず、Ⅳ層をⅤ層上面まで徐々に掘り下げていく過程とⅤ層上面で柱穴を検出したものである。柱穴の埋土はⅣ層とよく似た土色で、若干暗褐色土が混じる。

Ⅳ層上面・Ⅳ層中を精査の過程では柱穴の外周にⅣ層を掘り込んだ壁は検出できなかった。しかしSB22建物跡出土遺物の垂直分布では長軸方向の両端に近いほど出土レベルが高く、レンズ状の分布をしているともみえる。またSI20竪穴住居跡は北側にはⅣ層上面からⅤ層までを掘り込む壁があったが、南側はSB22建物跡等と同様にⅤ層上面まで掘り下げて柱穴を検出したもので、南側にもⅤ層まで達しない壁があったと推定される。したがってSB22建物跡などでもⅣ層上面から掘り込みⅤ層上面にまで達しない浅い竪穴を掘り低いながらも壁をもつ構造であったとする可能性も捨て切れない。ここでは明らかに平地に建物を建てたとする積極的な根拠は欠くが、Ⅳ層上面またはⅣ層中で壁の存在を確認できなかった遺構を建物跡、掘り込みの中にⅡ層またはⅢ層が堆積し、Ⅳ層上面またはⅣ層中で土色の違いとして明瞭に平面形を確認できたものを竪穴住居跡として扱う。

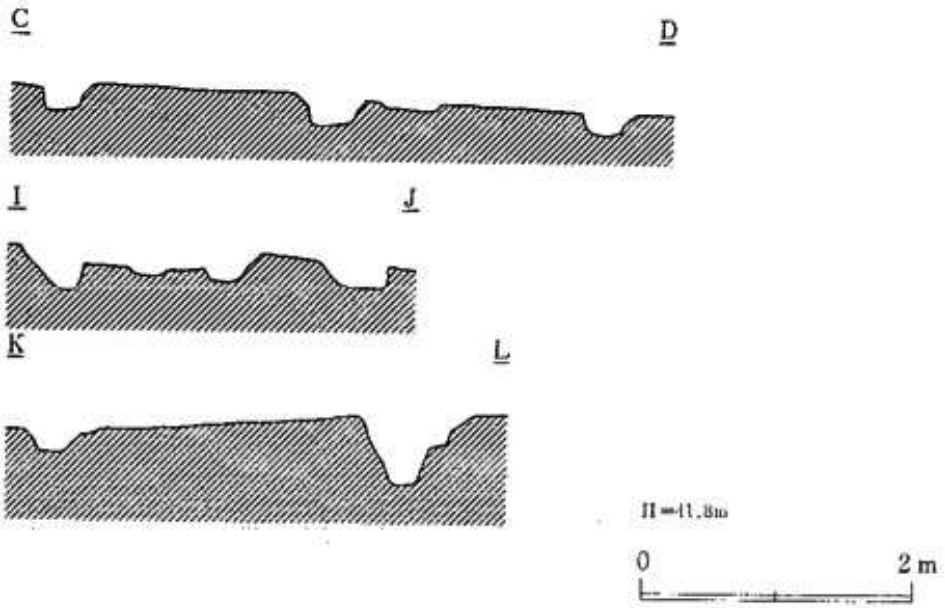
柱穴配置に規格性が認められたのは4棟ある。それは2カ所の地床炉を囲んで長軸2間、短軸1間の6本の柱穴と長軸中央の両端にやや突出して2本の柱穴のある建物跡（SB22・30・32・89）である。ほかに石組炉のSB63、土器片囲炉のSB40、地床炉のSB51、建物内に炉のないSB63、SB107である。SB107は屋外炉（SN77焼土遺構）が付属する可能性がある。また、この区域では建物跡としてはプランの確定ができない柱穴も95本検出した（SB103柱穴群）ので、さらに数棟の建物の存在が考えられる。

SB22建物跡（第9図～第14図・第118図）

LP50・51グリッドで検出した。西側にSB30建物跡が隣接し、南側でSB89建物跡と重複する。調査区中央平坦部北東区域では、Ⅲ層掘り下げ中に多数の遺物が出土し、6カ所の焼土を検出した。焼土の周囲に遺構が集中する傾向があったため、Ⅳ層上面から精査を繰り返したところ、地山面で、焼土を囲む柱穴群を検出したものである。

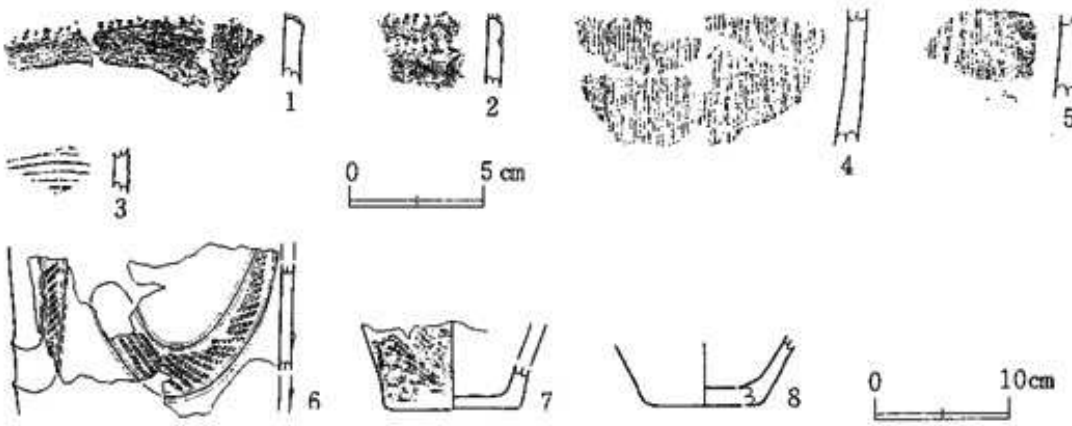


SB22
1．明赤褐色土(5YR5/8)　焼土。しまりあり。炭化物少量含む。
2．褐色土　(7.5YR4/4)　しまりあり。焼土粒少量含む。炭化物多量含む。
3．褐色土　(10YR4/4)　しまりあり。焼土粒微量含む。炭化物多量含む。



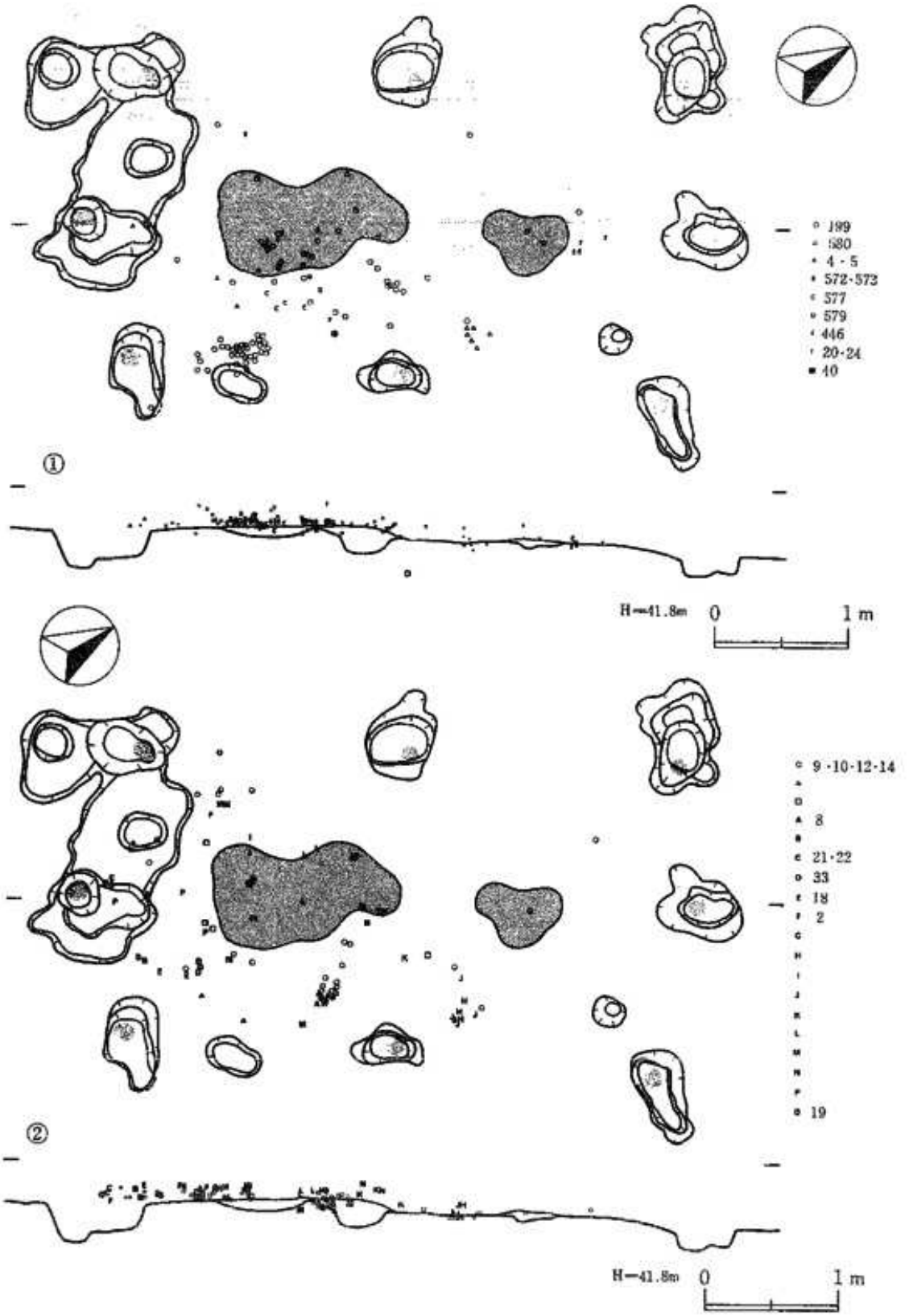
第9図　SB22建物跡

第10図　SB22建物跡遺物出土分布図

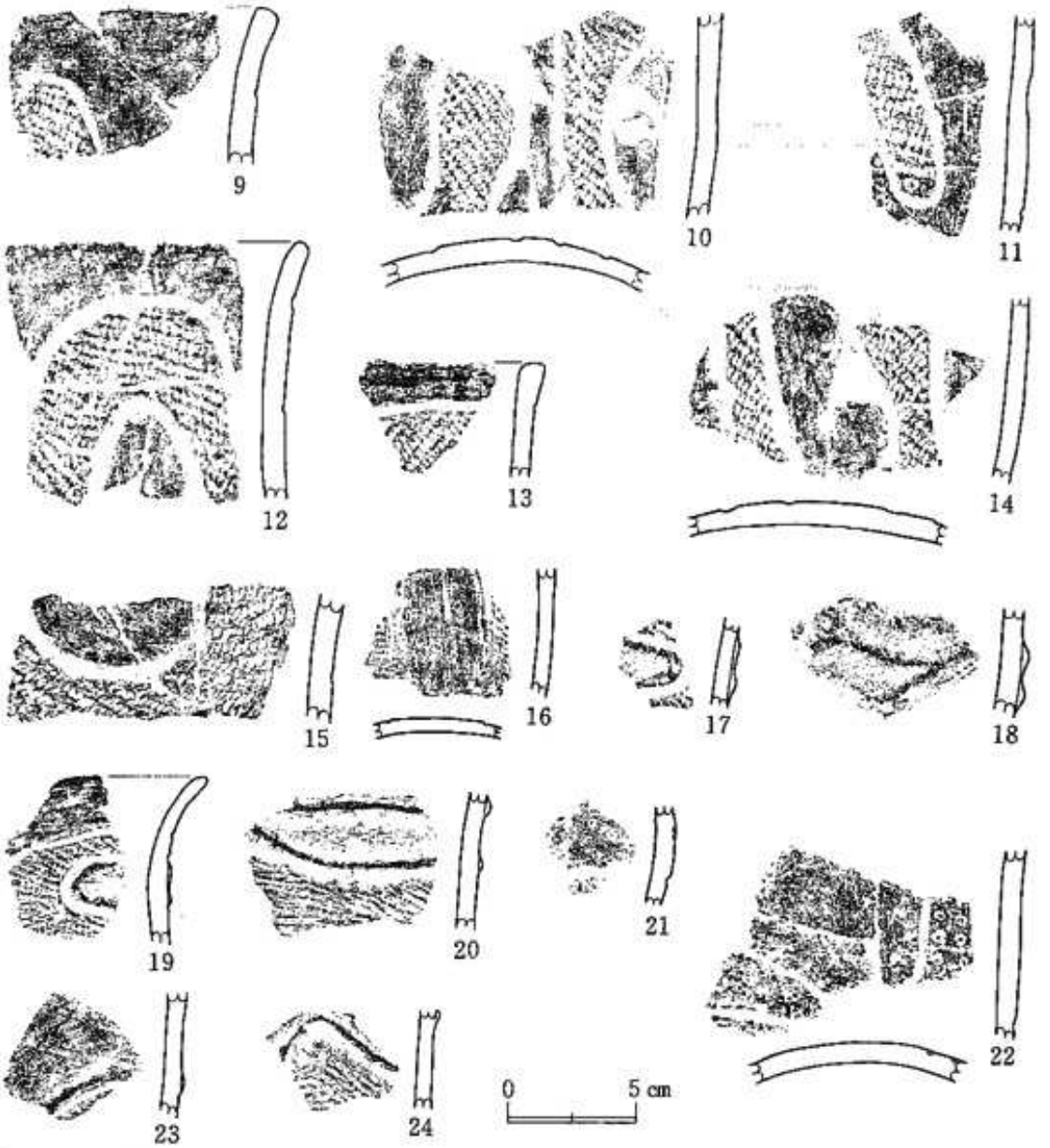


番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
1	SB22	Ⅳ	深鉢	Ⅱ	3	H	横位連続刺突	
2	〃	Ⅳ	〃	Ⅱ	3	H	〃	
3	〃		〃	Ⅳ			工字文	
4	〃	Ⅳ	〃	Ⅵ	胴c			
5	〃		〃	Ⅵ	胴c			
6	〃	Ⅳ	〃	Ⅱ	3	B2	縄文部	
7	〃	Ⅳ	〃	Ⅵ	底d		LR縦回転	
8	〃	Ⅳ	〃	Ⅵ	底d			

第11図　SB22建物跡出土土器(1)

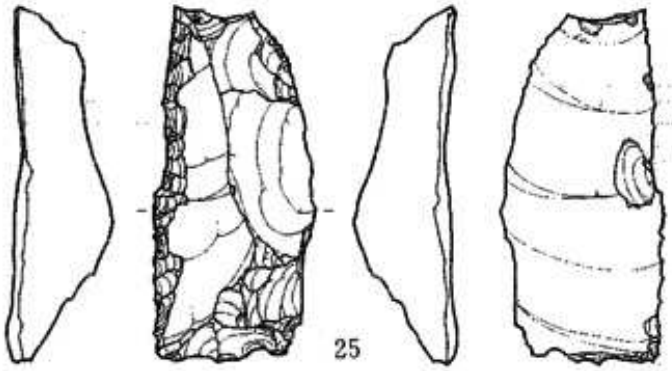


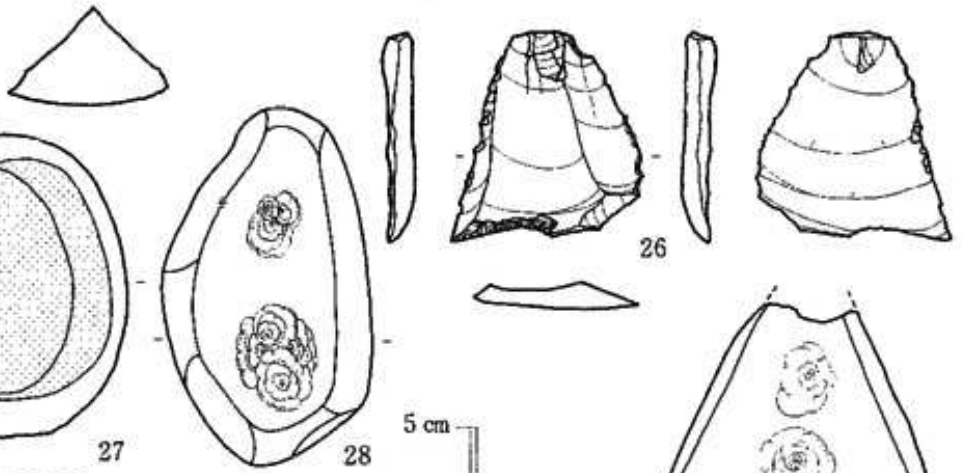
第12図　SB22建物跡接合・同一個体出土分布図

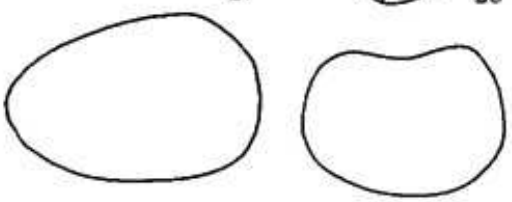


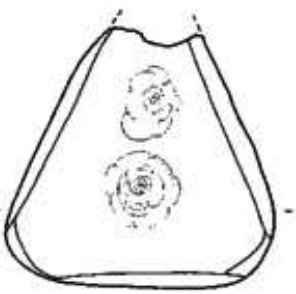
番号	出土位置	層位	器種	部	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
9	SB22	Ⅳ	深鉢	Ⅱ	3	A	縄文部	表
10	〃	Ⅳ	〃	Ⅱ	3	A	〃	表
11	〃		〃	Ⅱ	3	A	〃	
12	〃	Ⅳ	〃	Ⅱ	3	A (B1)	〃	
13	SB30		〃	Ⅱ	3	B1	不明	
14	SB22	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	A・B1	〃	表
15	〃	Ⅳ	〃	Ⅱ	3	B1	無文部	
16	〃		〃	Ⅱ	3	A	不明	
17	〃	Ⅳ	〃	Ⅱ	3	B2	無文部	
18	〃		〃	Ⅱ	3	B3	〃	
19	〃		〃	Ⅱ	3	B2	〃	
20	〃		〃	Ⅱ	3	B3	縄文部	
21	〃	Ⅳ	〃	Ⅱ	3	H・B1	刺突部	
22	〃	Ⅳ	〃	Ⅱ	3	H・B1	〃	
23	〃	Ⅳ	〃	Ⅱ	3	B3	無文部	
24	〃	Ⅳ	〃	Ⅱ	3	B3	縄文部	

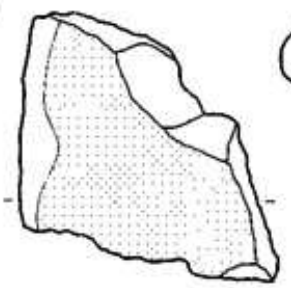
第13図　SB22建物跡出土土器(2)

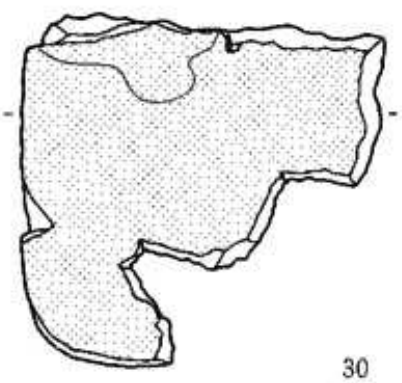












番号	出土位置	器　種	長　さ	幅	厚　さ	重　量
25	ＳＢ22	不定形石器	8.7	4.0	3.4	69.4
26	〃	不定形石器	5.2	4.7	0.7	13.6
27	〃	磨　石	11.2	9.3	6.1	784.7
28	〃	凹　石	13.2	7.8	5.4	709.2
29	〃	凹　石	(9.6)	9.8	2.8	317.7
30	〃	石　皿	(17.1)	(17.9)	4.6	(1767.2)
31	〃	石　皿	(9.8)	(9.5)	4.2	(467.5)

第14図　SB22建物跡出土石器

柱穴と焼土の位置関係、遺物の出土分布から、すでに検出していたSB32建物跡と同様の柱穴配置をとる建物跡であると判断した。2カ所の焼土（地床炉）を囲んで長軸2間、短軸1間の6本の柱穴と、長軸中央の両端に外側にやや突出して各1本の柱穴をもつ構造である。中央部の長軸柱穴間は約4.8m、短軸は約2.3m、長軸方位はN-35°-E、8本の柱穴を結んだ内側の面積は10.0m²である。

炉は地床炉で長軸中心線上に2カ所ある。焼土の広がりは北側が長径約70cm、短径約50cm、南側は長径約1m40cm、短径約60cmで、南側の炉は焼土の形成も大きく中心的な炉である。

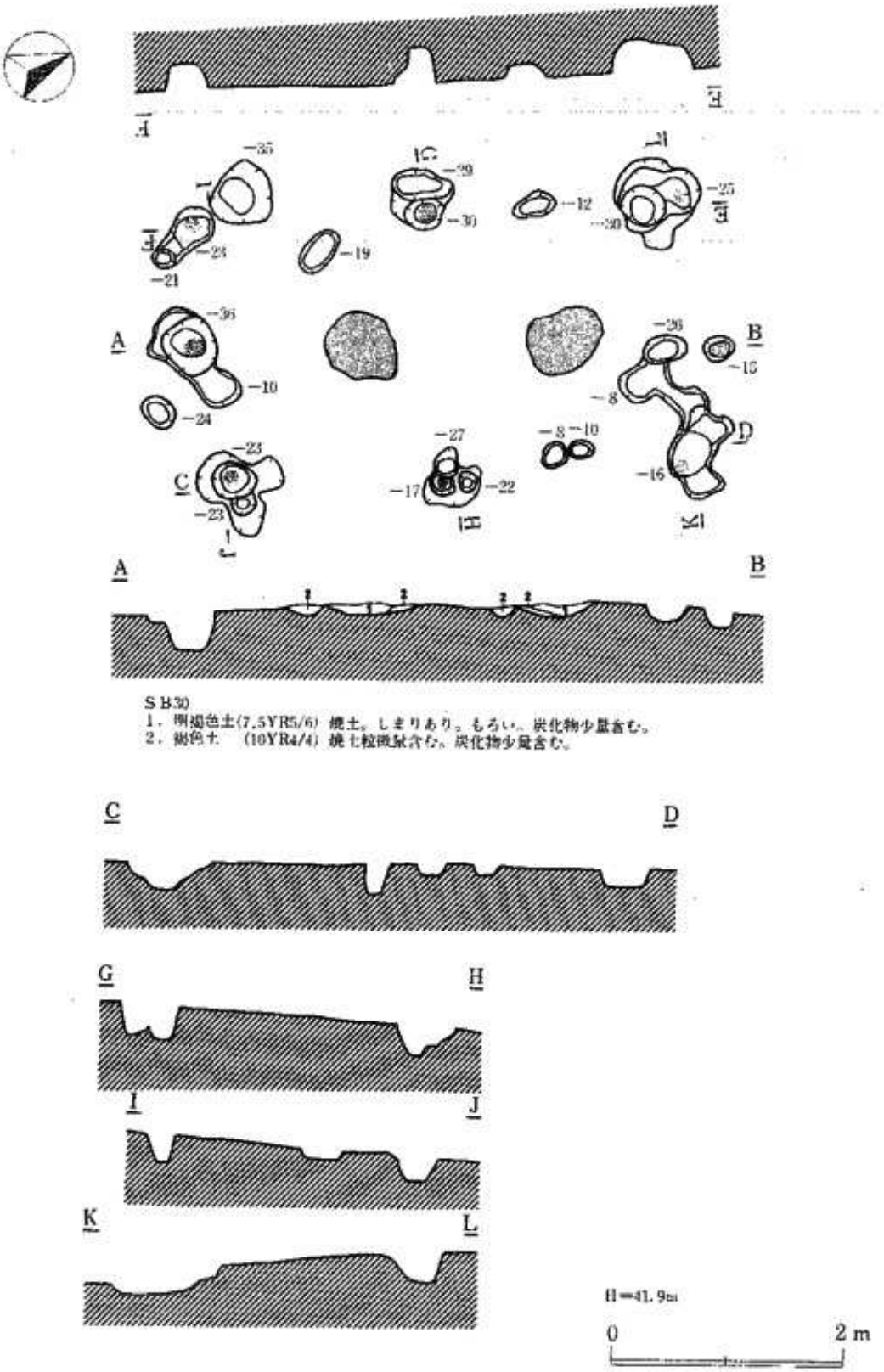
床面（地山面）は平坦で、緩やかに北東に傾斜する。しかし、遺物の垂直分布をみると、遺物出土レベルの下限は遺物の多い南側がより高く、南北の炉にもレベル差があり、中央から南と北では床面に段差があったと思われる。遺物は南側の炉を中心にまとまって出土し、建物跡の南側で多く、北側は少ない。SB89建物跡との明確な切り合い関係は不明だが、重複部分の遺物の出土分布はSB22建物跡の南側炉を中心とするまとまりの一部と把えられるので、SB22建物跡が新しい遺構であると考えられる。

土器は、Ⅱ群3類（以下土器の分類は遺構外遺物の項を参照）が主体で、文様表現技法は、A技法およびB3技法が多い。Ⅱ群3類が炉から出土しており、本建物跡の時期は縄文中期後半である。SB30建物跡、SI20・SI70・SI73・SI75竪穴住居跡から出土した遺物と接合・同一個体のものがある。石器は不定形石器2点と、炉の周辺から、石皿・凹石が出土した。

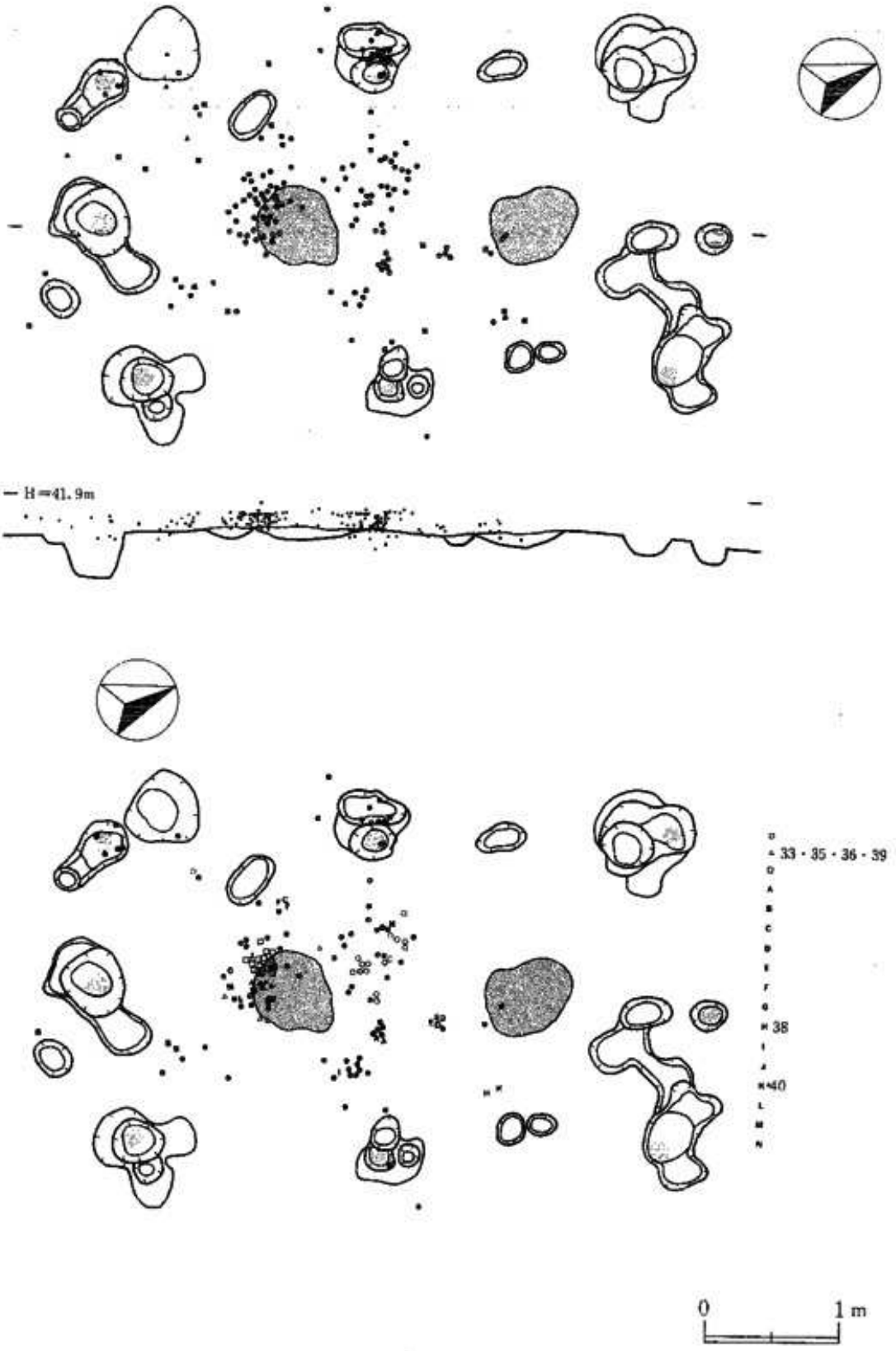
SB30建物跡（第13図・第15図～第18図）

LP50・51、LQ50・51グリッドで検出した。SB22が東に隣接し、西側にSI75竪穴住居跡がある。本遺構もSB22建物跡と同様に中央平坦部北東地域での精査の結果検出されたものである。柱穴の配置、焼土との位置関係から長軸2間、短軸1間で、長軸中央の両端に外側にやや突出した柱穴をもつ8本柱の建物跡と判断した。柱穴の規模及び重複状態からみて建て替えの可能性も考えられる。長軸柱間約4.6m、短軸柱間約2.3mで長軸方位N-25°-E、柱穴を結んだ内側の面積は10.1m²である。壁は遺存せず、柱穴を検出した地山面では北東に向かい緩やかに傾斜している。炉は長軸中心線上の南北2カ所に地床炉があり、それぞれ径約60cmの広がりをもつ。

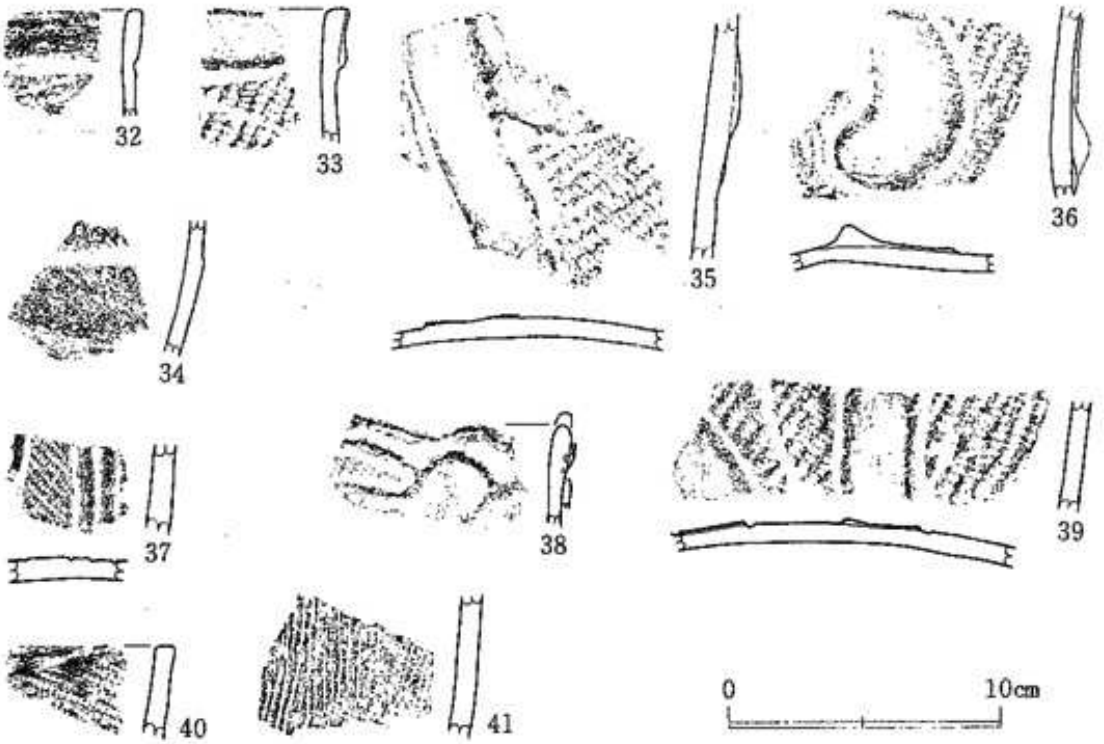
遺物はSB22建物跡と同様に南側の炉の周辺に集中する。土器はⅡ群3類とⅥ群が主で、炉直上からはⅡ群3類のB2技法のものが出土した。SB22建物跡出土土器と接合・同一個体のものがある。石器は炉周辺から不定形石器が出土した。44は折れた不定形石器の刃部である。



第15図　SB30建物跡



第16図　SB30建物跡遺物出土分布図(上)、接合同一個体出土分布図(下)



番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	属化物付着
32	SB30		深鉢	Ⅱ	3	B1	不明	
33	〃	Ⅳ	〃	Ⅱ	3	B2	〃	
34	〃		〃	Ⅱ	3	B2	〃	
35	〃		〃	Ⅱ	3	B2	無文部	
36	〃		〃	Ⅱ	3	B2	〃	
37	〃	Ⅳ	〃	Ⅱ	2	A	〃	裏
38	〃		〃	Ⅱ	3	B3	不明	
39	〃		〃	Ⅱ	3	B2	無文部	
40	〃	Ⅰ	〃	Ⅵ	11b		LR縄回転	
41	〃	Ⅳ	〃	Ⅵ	類b		R燃糸文	表・裏

第17図　SB30建物跡出土土器

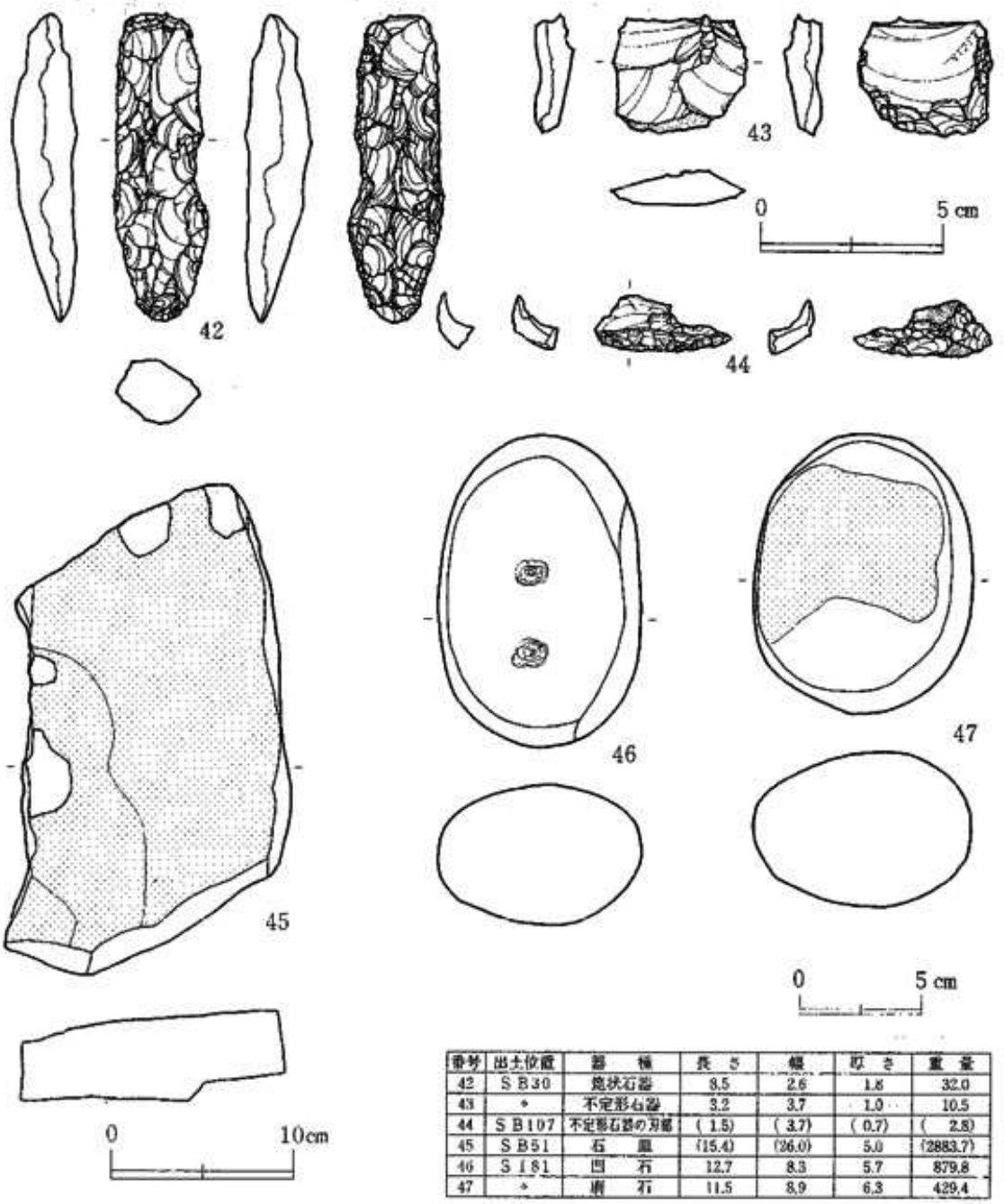
SB32建物跡（第19図～第22図）

LS48・49グリッドで検出した。調査区中央平坦部のほぼ中央にあり、西側約5mにはSI70竪穴住居跡がある。範囲確認調査時に漸移層上面で焼土が確認されていたもので、Ⅴ層上面を精査をした結果、焼土を囲む柱穴を9本検出した。長軸2間、短軸1間で、長軸の中央両端のやや突出する位置にも柱穴がある。長軸柱間約4.8m、短軸柱間約2.5mで、長軸方位はN-40°-Eである。柱穴を結んだ内側の面積は10.7㎡である。壁は遺存せず、床面はⅤ層上面であり、北東は攪乱により凸凹があるがほぼ平坦であった。

地床炉の焼土は長軸中心線上に長さ約2.6m、幅約0.5mの帯状に認められるが、中間は火熱のうけ方が弱く、燃焼部は南北2カ所である。南側がより強く焼けている。炉の状態と柱穴配置はSB22建物跡、SB30建物跡、SB89建物跡と類似する。

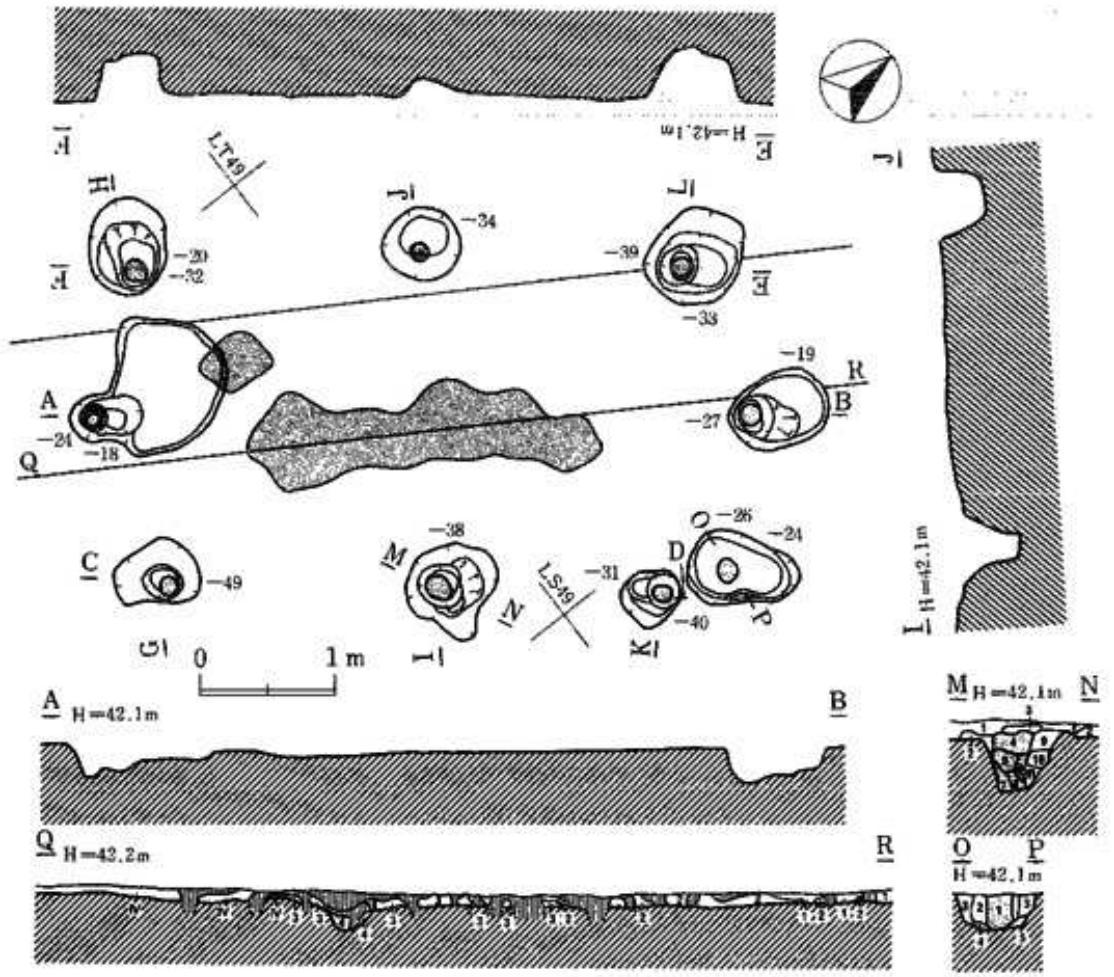
遺物は炉の南側を中心にまとまりがあり、建物（柱穴を結んだ範囲）よりも外にも接合・同

一個体が散在する。土器はⅡ群3類とⅥ群で、Ⅱ群3類深鉢にはA技法、B2技法のものがある。48は波状口縁の頂部から逆U字状に沈線で区画文が描かれ、その内側に刺突を充填している。区画文の頂部にはコブ状に粘土粒を貼り付けている。



番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
42	SB30	楔状石器	8.5	2.6	1.6	32.0
43	〃	不定形石器	3.2	3.7	1.0	10.5
44	SB107	不定形石器の刃部	(1.5)	(3.7)	(0.7)	(2.8)
45	SB51	石皿	(15.4)	(26.0)	5.0	(2883.7)
46	SI81	凹石	12.7	8.3	5.7	879.8
47	〃	磨石	11.5	8.9	6.3	429.4

第18図　SB30・51・107建物跡、SI81竪穴住居跡出土石器

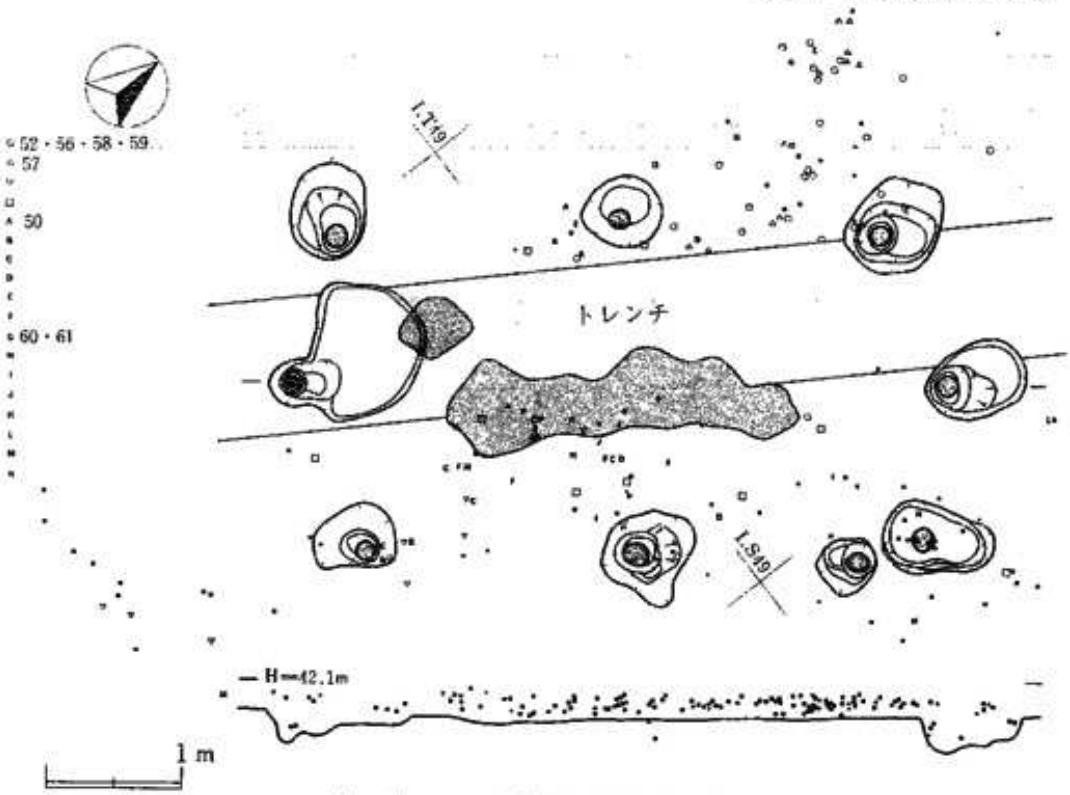


SB32 Q－R
1．褐色土　(10YR 4/4) しまりややあり。基本層位の第Ⅲ層。
2．褐色土　(10YR 4/6) しまりあり。炭化物微量含む。
3．明褐色土 (7.5YR 5/6) しまりあり。炭化物微量含む。(焼土)

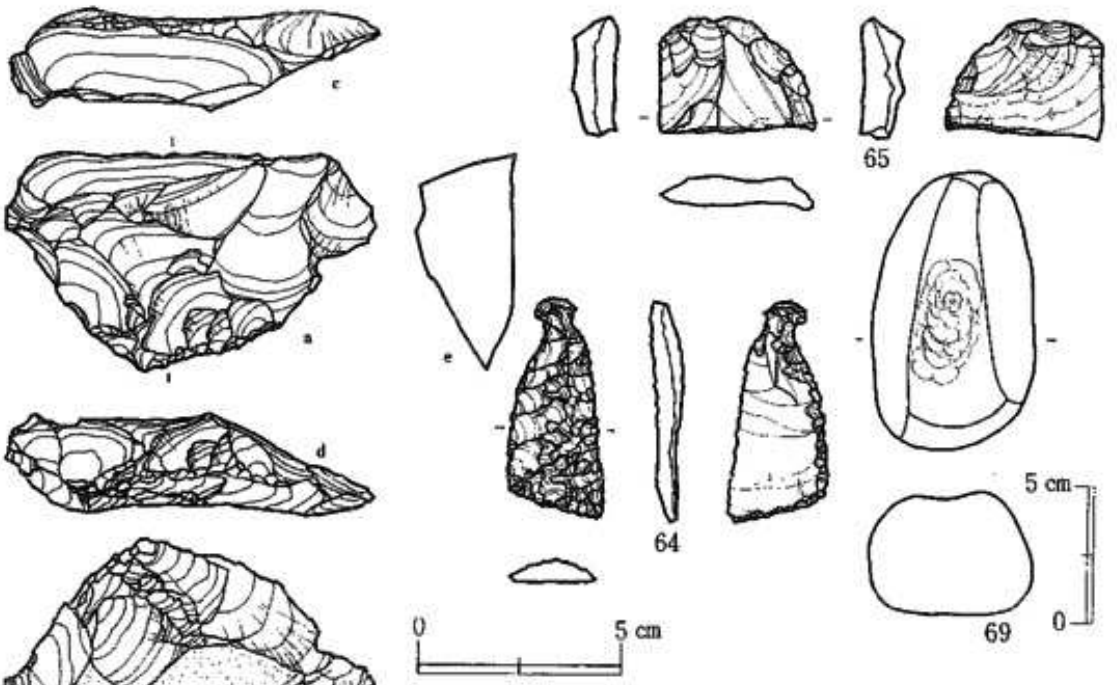
SB32 M－N
1．暗褐色土 (10YR 3/3) しまりややなし。孔隙多。炭化物微量含む。
2．褐色土　(10YR 4/6) しまりややあり。
3．黄褐色土 (10YR 5/8) きわめてしまりあり。粘性あり。
4．褐色土　(10YR 4/4) しまりあり。
5．黄褐色土 (10YR 5/6) しまりあり。
6．褐色土　(10YR 4/4) きわめてしまりあり。
7．暗褐色土 (10YR 3/4) 粘性ややあり。しまりややあり。粘性あり。
8．褐色土　(10YR 4/4) しまりややあり。粘性あり。
9．黄褐色土 (10YR 5/6) しまりあり。
10．褐色土　(10YR 4/6) しまりあり。
11．褐色土　(10YR 4/4) しまりあり。粘性あり。

SB32 O－P
1．褐色土　(10YR 4/6) しまりややあり。炭化物少量含む。
2．褐色土　(10YR 4/6) しまりあり。
3．黄褐色土 (10YR 5/6) きわめてしまりあり。
4．褐色土　(10YR 4/4) しまりあり。炭化物少量含む。地山ブロックが多量に混入。
5．にぶい黄褐色土 (10YR 5/4) しまりあり。炭化物微量含む。地山ブロックが多量に混入。

第19図　SB32建物跡

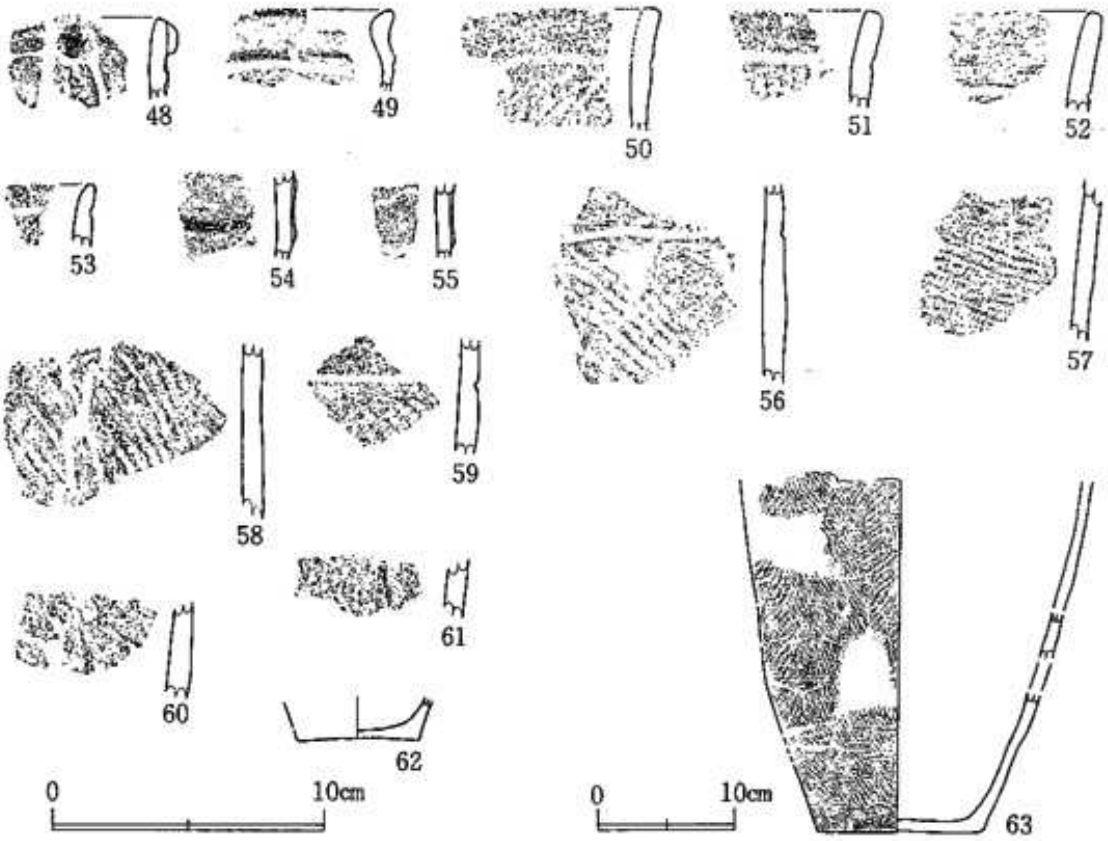


第20図　SB32建物跡遺物出土分布図

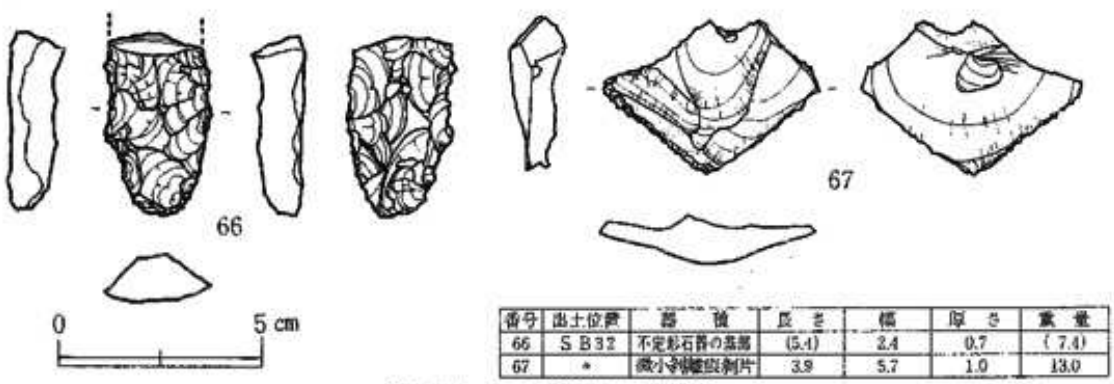


番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
64	S B32	剥製石器	5.1	2.4	0.7	7.4
65	〃	不定形石器	2.9	3.9	0.9	10.8
68	〃	石　核	5.4	9.1	2.4	96.9
69	〃	凹　石	10.2	6.2	4.5	306.1

第21図　SB32建物跡出土石器



番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
48	SB32	Ⅱ	深鉢	Ⅱ	3	H・F	粘土粒貼付・縄突文	底
49	〃	Ⅱ	浅鉢	Ⅱ	3	B3	不　明	
50	〃		深鉢	Ⅱ	3	G	〃	
51	〃	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	A	〃	
52	〃	Ⅳ	〃	Ⅱ	3	A	〃	
53	〃		〃	Ⅱ	3	A	〃	
54	〃	Ⅳ	〃	Ⅱ	3	B2	無文部	
55	〃		〃	Ⅱ	3	B2	不　明	表
56	〃	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	A	〃	
57	〃	Ⅱ	〃	Ⅵ	胴a		LR縦回転	
58	〃	Ⅱ	〃	Ⅵ	胴a		〃	(結節回転文)
59	〃	Ⅱ	〃	Ⅱ	3	G	不　明	
60	〃		〃	Ⅵ	胴a		LR縦回転	
61	〃		〃	Ⅵ	胴a		R結節回転文	
62	〃	Ⅱ	〃	Ⅵ	底d			
63	〃		〃	Ⅵ	胴d		LR-RL 縦回転	(異種原体)

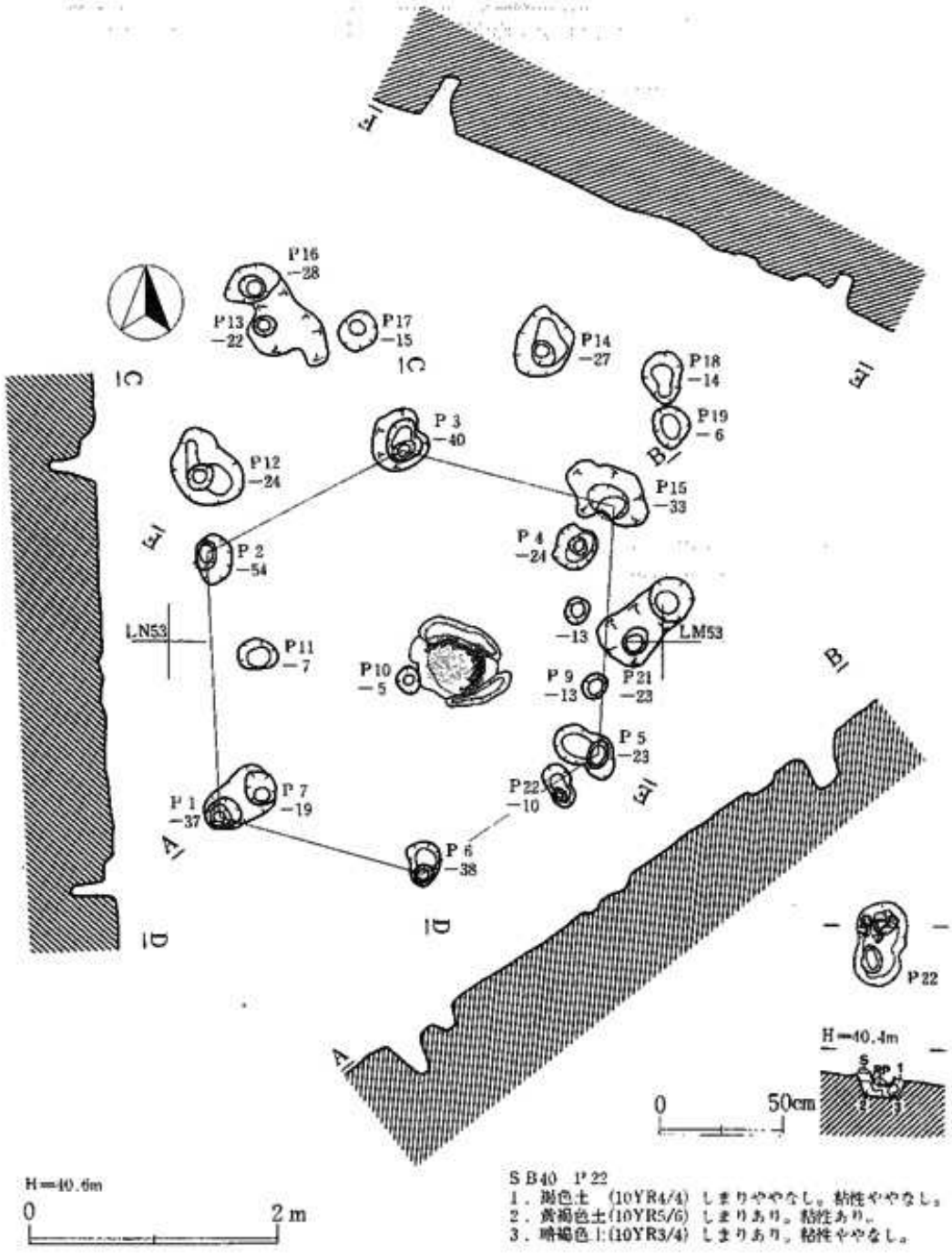


番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
66	SB32	不定形石器の基部	(5.4)	2.4	0.7	(7.4)
67	〃	微小剥離痕剥片	3.9	5.7	1.0	13.0

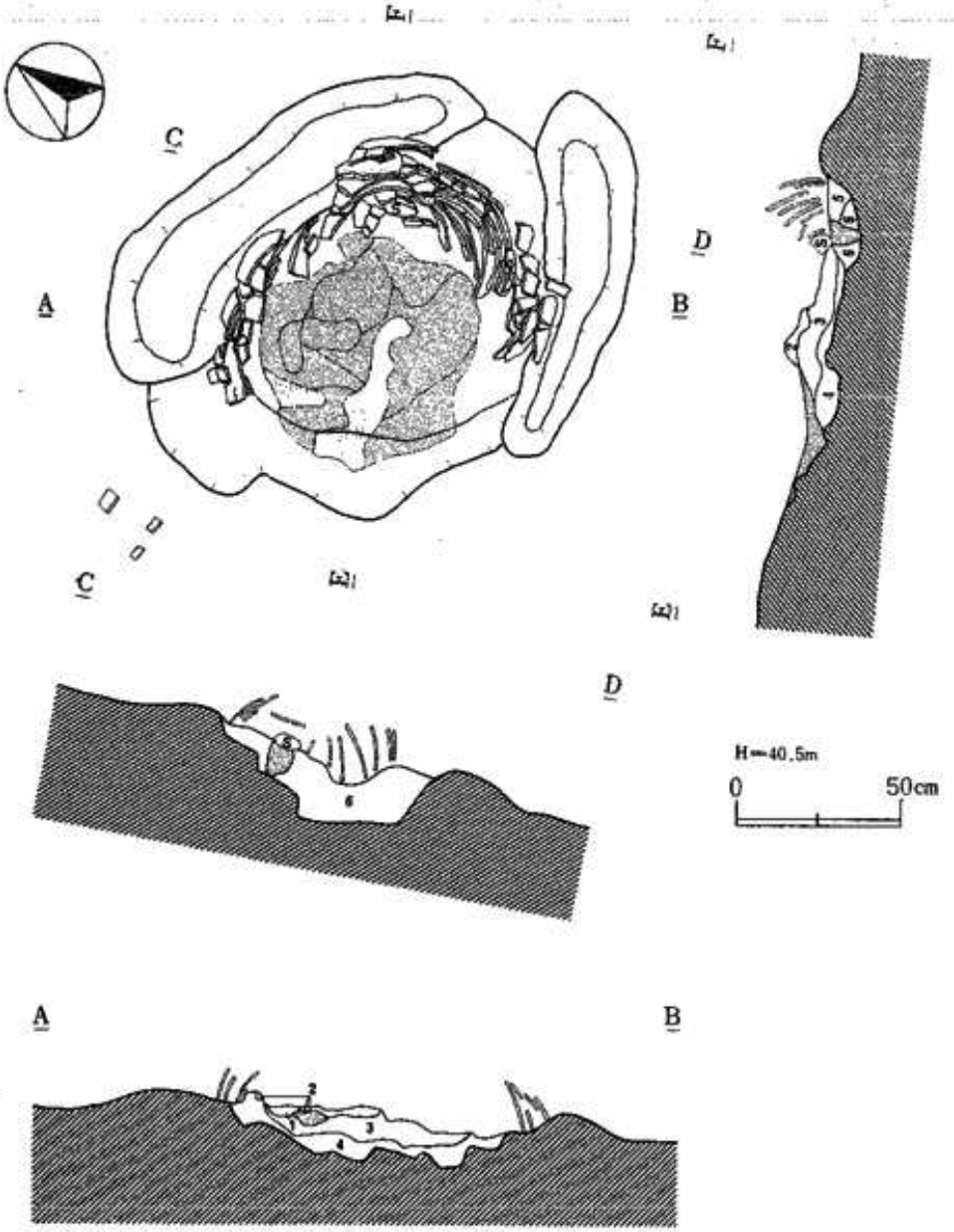
第22図　SB32建物跡出土遺物

SB40建物跡（第23図～第27図）

LM52・53グリッドで検出した。丘陵中央平坦部の遺構の集中する地域から離れた北東側緩斜面に位置する。Ⅱ層（黒褐色土）除去中に土器片囲炉を検出したため、精査したところ、地山面で炉を囲む柱穴を22本検出した。規模、深さ、配置からみてP1～6を主柱穴とする六角形の柱穴配置をとる建物跡と判断した。P1～6ではP1がやや浅いほかは、底面標高約40.00～40.08mで



第23図　SB40建物跡



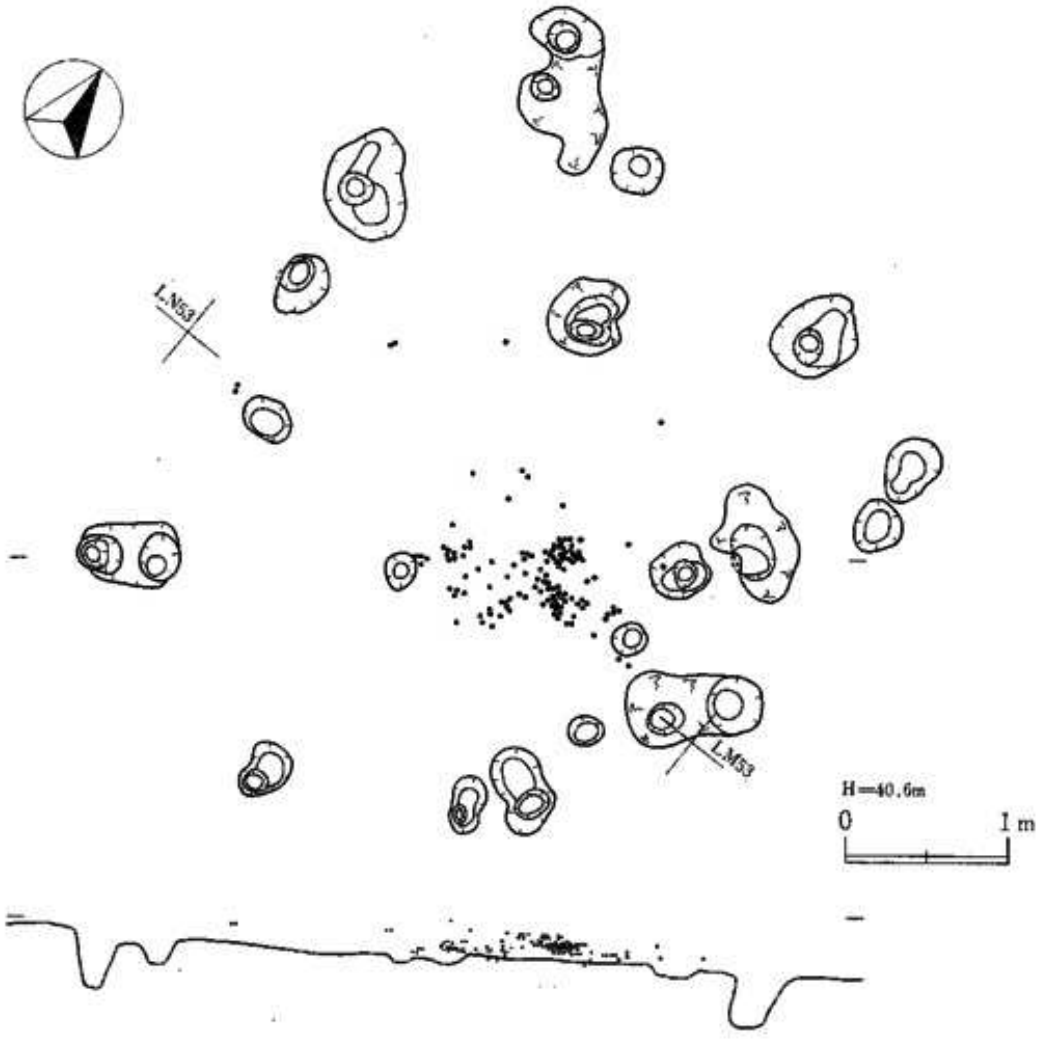
SB40 炉
1．明赤褐色土（5YR5/8）強く火熱を受け固い。
2．赤褐色土　（5YR4/8）最も火熱を受けている。
3．赤褐色土　（5YR4/6）強く火熱を受け固い。
4．明褐色土（7.5YR5/8）火熱を受け赤変している。
5．明褐色土（7.5YR5/6）しまりあり。やや赤変している。
6．褐色土　（10YR4/4）しまりややあり。
1～3は硬化してブロック状。5・6は土器片の固定に使用。

第24図　SB40建物跡炉

ある。北側にはさらに柱穴があり立て替えあるいは重複の可能性も考えられる。柱間は約1.7mでP1・2間のみやや広く約2.1mである。

壁はなく、柱穴を検出した地山面は遺構の周囲より傾斜は緩いものの、地形なりに東側に低くなり、約17cmの高低差がある。炉に使用されている土器片が地山面よりやや浮いており、東側の床面は地山面より上位であった可能性がある。

炉は深鉢形土器4個体分の胴部上半部を割った土器片を利用した土器片囲炉である。土器片はもとの土器を幅5～10cmの帯状に切断しそれを長さ10～30cmに分割したものを用いている。焚き口は南西側を向く。中央の焼土を「ハ」の字形に囲む地山の盛り上がる部分の内側の北西側に半円形に5～7重に土器片を立て並べ、さらに両側に広がるように土器片を3重に並べた袖部が続く。全体に土器片はやや内傾して立てられている。炉の中心線のとる方位はN-60°-Eである。

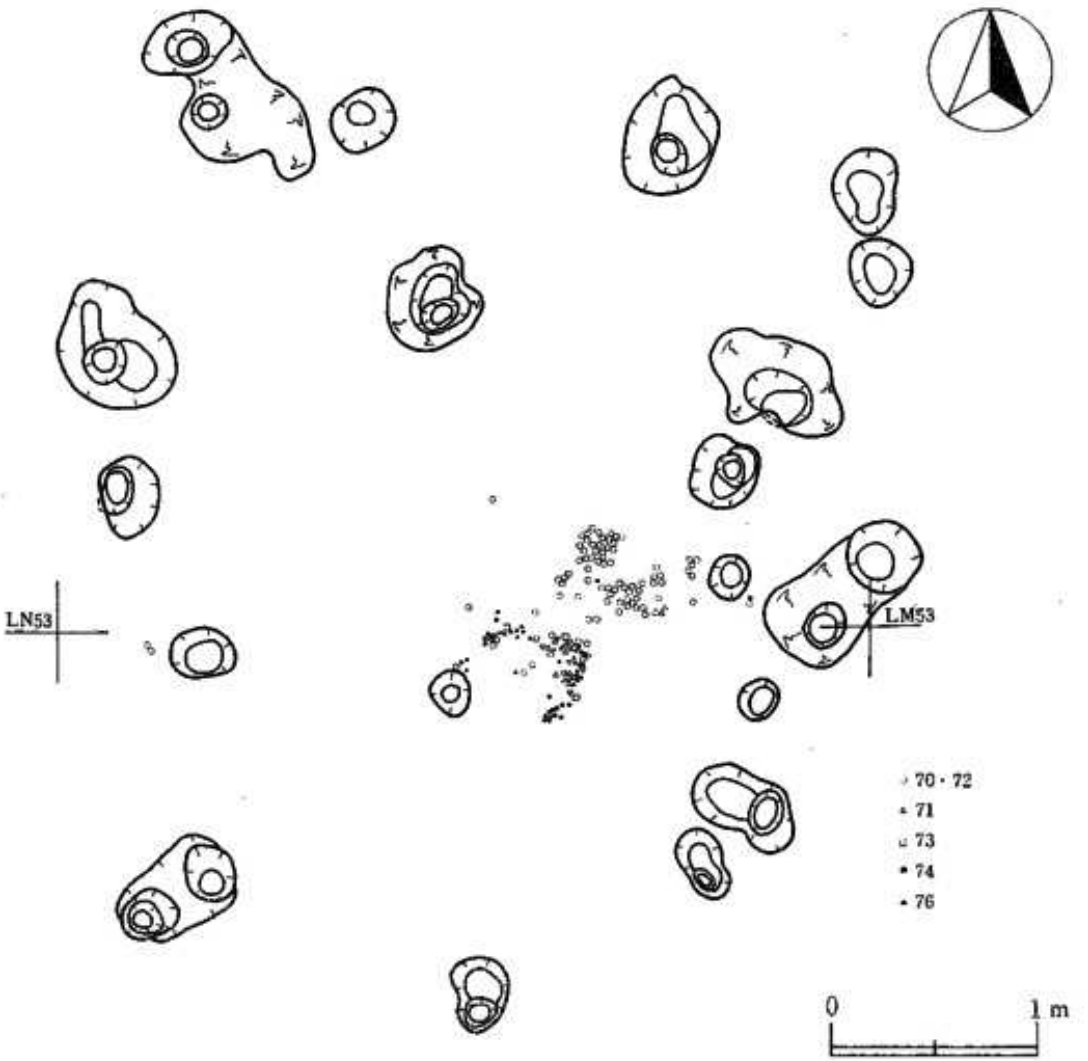


第25図　SB40建物跡遺物出土分布図

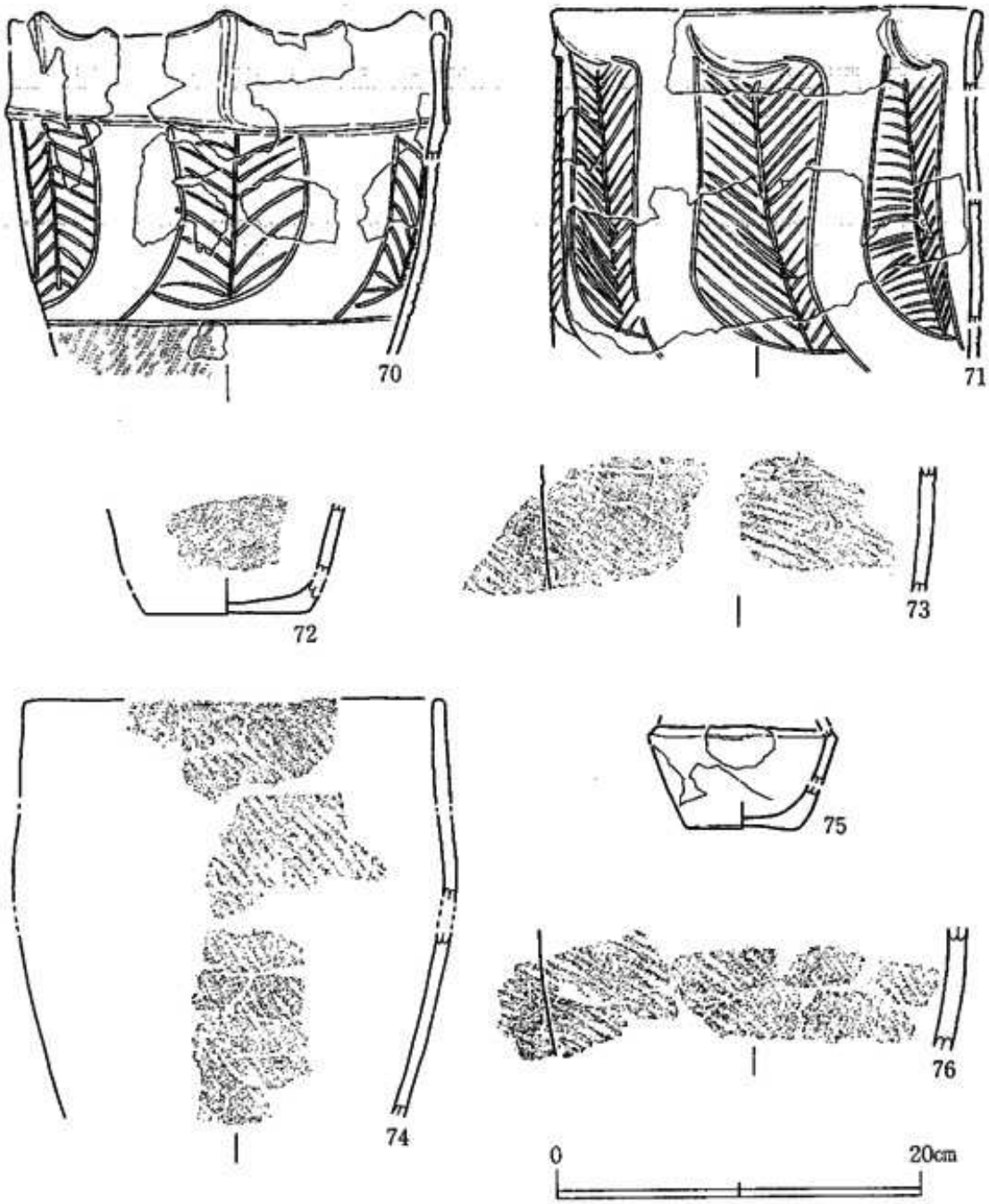
遺物は炉周辺に集中する。第27図70は炉の周辺及び炉内から、72は炉内から出土したものである。71～74・76は炉に使用されていた土器で、焼成、色調、胎土から70と72、71と73はそれぞれ同一個体の可能性がある。

70は大6小6の12カ所に山形突起を有する波状口縁の深鉢形土器で、大突起下に粘土紐を貼り付けた隆帯が垂下し、口縁部と胴部を区画する横位隆帯に右側に少し曲がり気味に接続する。胴部上半には大突起の下に葉脈状文が充填された区画文が細い沈線で描かれ、左側の区画線は胴上半と下半を区切る横位の沈線に接続する。胴下半は縦回転のRL縄文である。

71は平縁の深鉢形土器で、口縁部の8カ所に逆「ノ」の字状の粘土隆帯が貼付けられる。隆帯は70と同様に断面形が三角形になるように貼付後よく調整されている。この粘土隆帯を一辺として長方形に近いモチーフが細い沈線で胴上半部に描かれる。右側に垂下する線は弧を描いてさらに下に延び、左側の線はやはり弧を描いてこれに接続する。区画内には葉脈状文が充填さ



第26図　SB40建物跡接合・同一個体出土分布図



番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
70	SB40		深鉢	Ⅱ	3	E・F	繁縄状文	
71	〃		〃	Ⅱ	3	E・F	〃	
72	〃		〃	Ⅵ	胴a			
73	〃		〃	Ⅱ	3			
74	〃		〃	Ⅵ	口b		L R 縦回転	
75	〃		〃					
76	〃		〃	Ⅵ	胴a		L R 横回転	

第27図　SB40建物跡出土土器

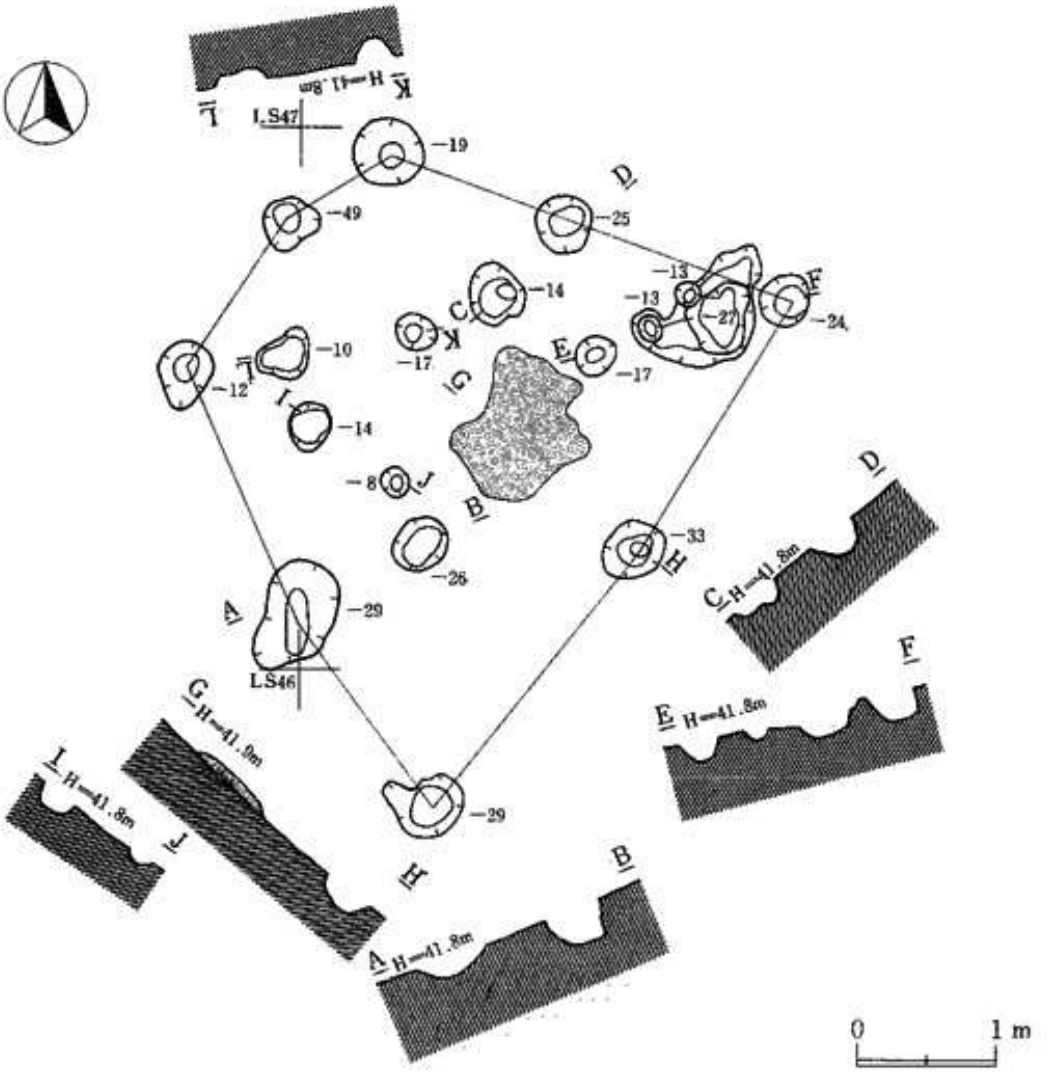
れている。73が同一個体と断定はできないが、同一個体とすれば細い横位の沈線で区切られた胴下半部は縦回転のＬＲ縄文である。

75はＰ22脇の浅い掘り込み内から出土したもので胴部上半が中央から屈曲して内傾する。全体に無文で上半部には細い沈線で曲線文様が描かれている。

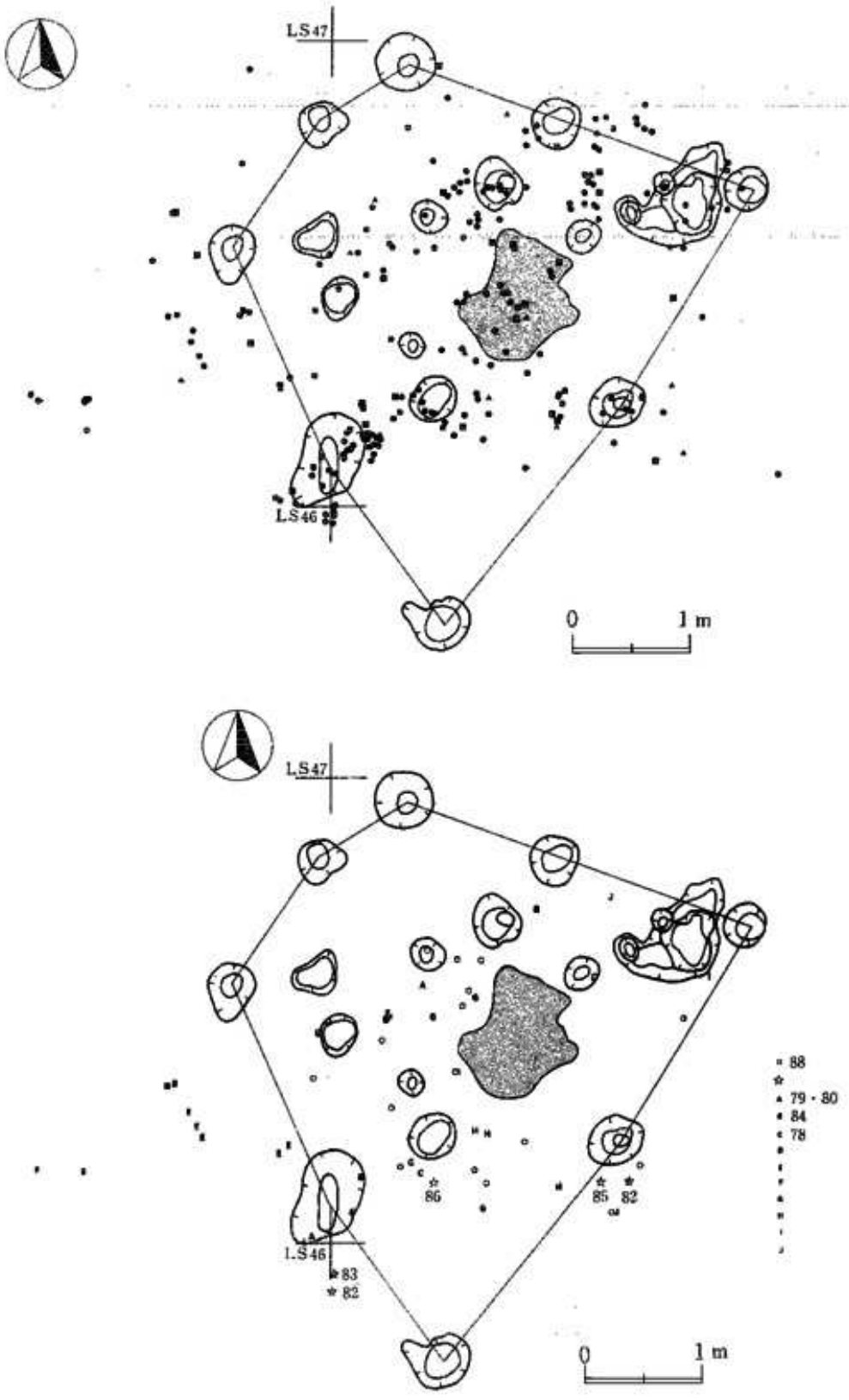
SB51建物跡（第18図・第28図～第30図）

LR45・46、LS46グリッドで検出した。焼土（地床炉）を囲む18本の柱穴群である。これらの柱穴がすべて同時のものか、建て替えがあったのか不明だが、最も外側の８本を結ぶと、台形に近い形となる。さらに内側の柱穴がコの字形に焼土を囲む配置である。外側の柱穴で囲まれた部分の面積は11.8㎡である。

遺物は炉を中心とした建物内から、建物外の西側にかけて多く出土した。建物範囲の内外問



第28図　SB51建物跡



第29図　SB51建物跡遺物出土分布図(上)、接合・同一個体出土分布(下)

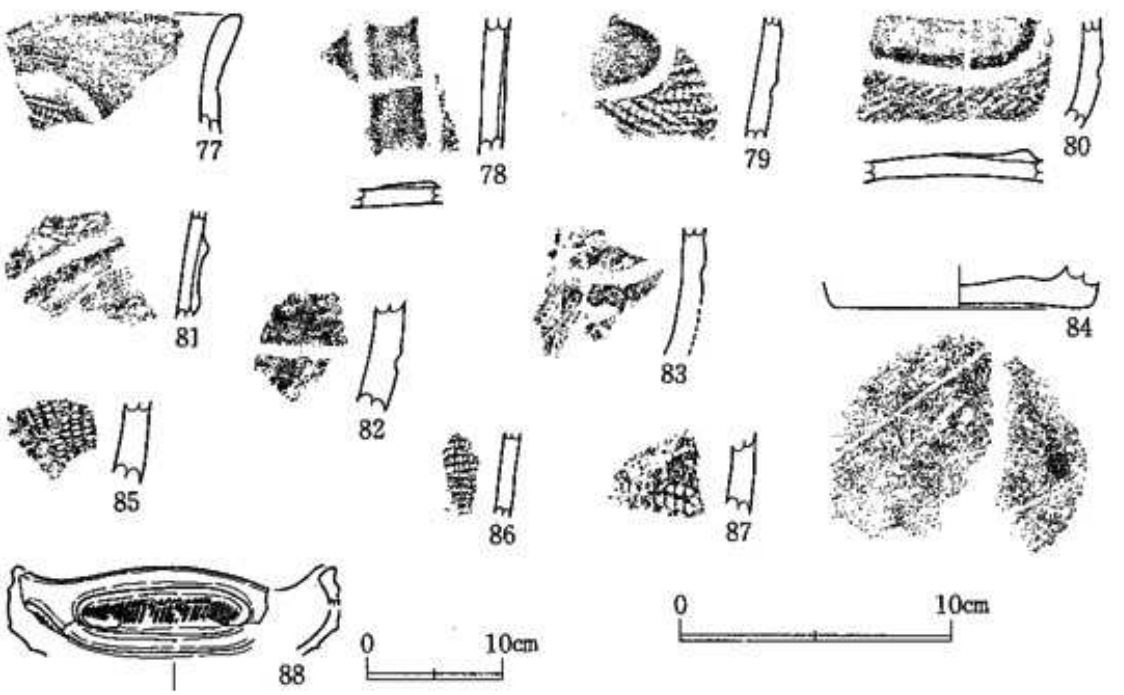
で接合・同一個体が認められる。土器はⅡ群3類とⅥ群が主で、Ⅱ群3類ではB2技法のものが多い。88の浅鉢は4単位の波状口縁で、4カ所の独立した横位の楕円形区画文を抱くように区画された隆線の下半部が縄文帯となる。焼土近くで大型の石皿が出土した。

SB62建物跡（第31図～第33図）

LQ49・50、LR49・50グリッドで検出した。SB88建物跡の南端と隣接し、SB63建物跡、SK105土坑と重複する。石囲炉を囲む22本の柱穴からなる建物跡である。

第Ⅳ層掘り下げ中にLP49グリッドで石囲炉を検出したが、周囲の柱穴は地山面に至って、プランを確認したものであり、柱穴群と関連するものと判断した。LP49グリッドの石囲炉をとり囲んで卵形の配置をとる柱穴群をSB62建物跡、それと重複するが、P1～P6を主柱穴とする長方形の配置をとる柱穴群をSB63建物跡とした。

石囲炉を囲む柱穴群は、P6・P7以外は近接するもう1本の柱穴がある。これはほぼ同じプラ

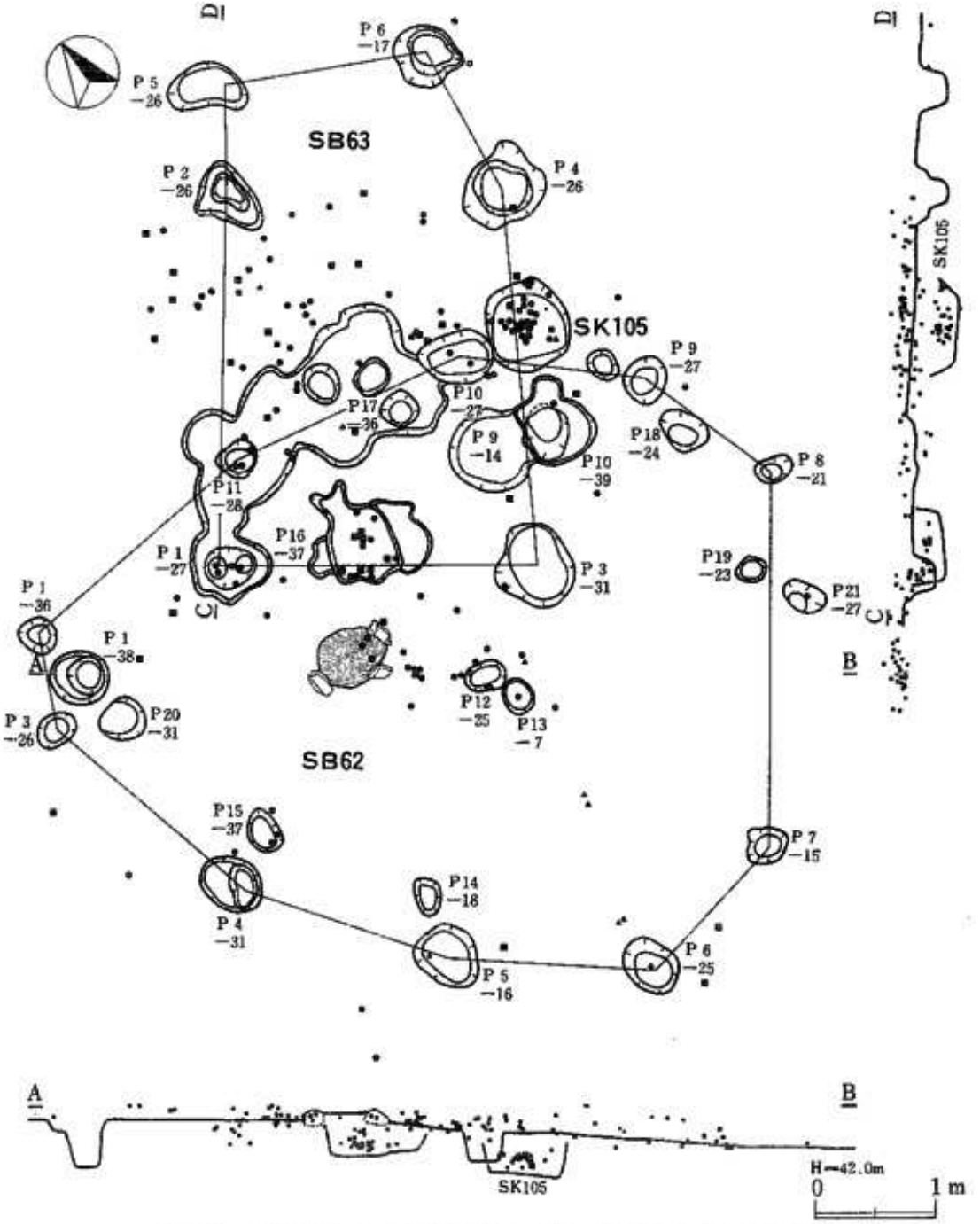


番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
77	SB51	Ⅲ	深鉢	Ⅱ	3	B1	縄文部	
78	〃	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B2	不明	
79	〃	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B2	無文部	
80	〃	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B2	〃	
81	〃	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B2	〃	
82	〃		〃	Ⅱ	3	G	不明	表
83	〃	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	G	〃	
84	〃		〃	Ⅵ	底b			
85	〃		〃	Ⅵ	胴a		LR縦回転	
86	〃		〃	Ⅵ	胴a		LR斜回転	表
87	〃	Ⅱ	〃	Ⅵ	胴a		LR横回転	
88	〃	Ⅲ	浅鉢	Ⅱ	3	B3	縄文部	

第30図　SB51建物跡出土土器

ンで建物の建て替えが行われたためと思われる。

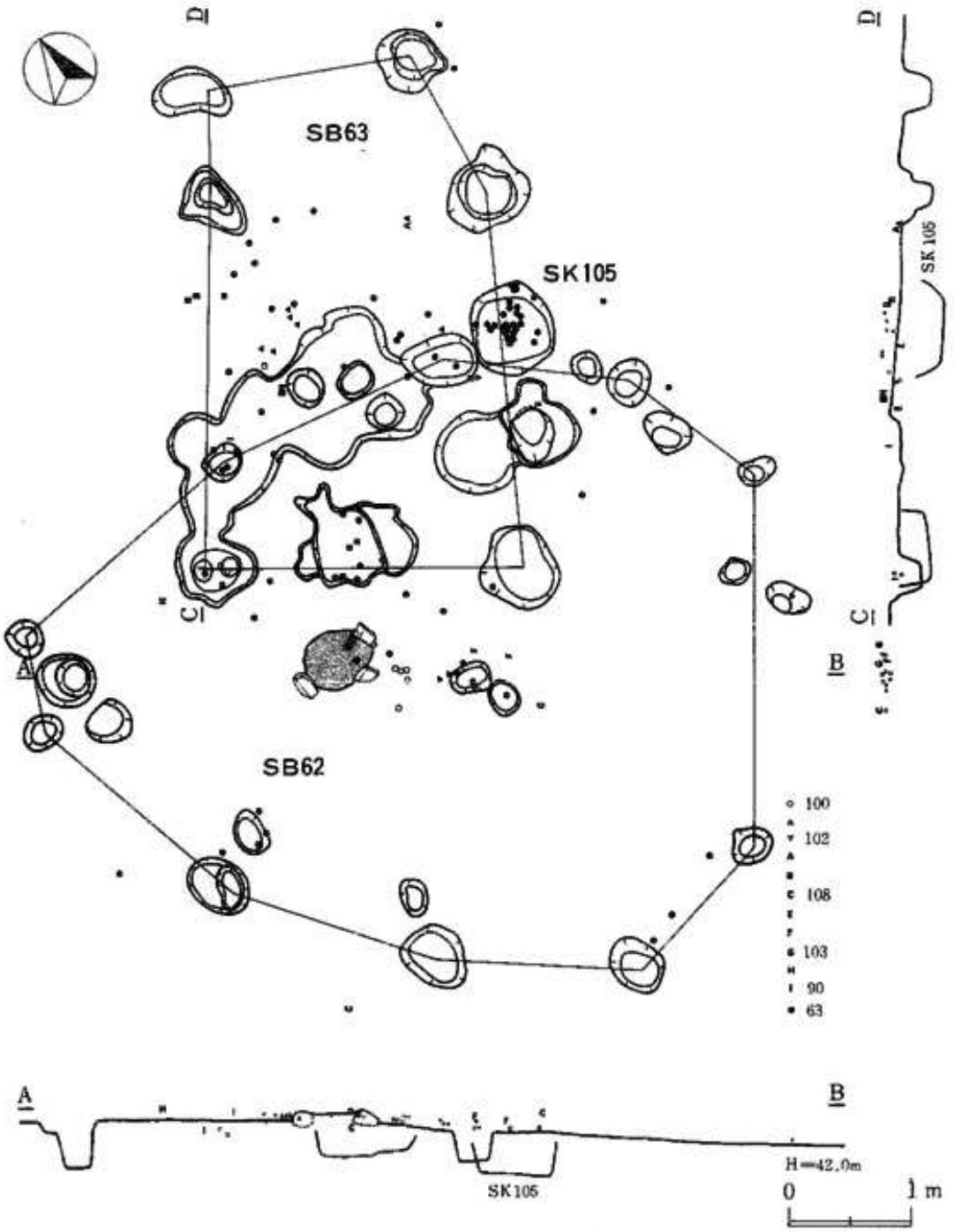
西側の深くてしっかりした柱穴が4本まとまっている部分と、石囲炉を結んだ線上の建物の中心付近にP12・13がある。この主軸方向はN-56°-W、柱穴で囲まれた内側の面積は23.3㎡である。この中軸線にほぼ対称な位置に他の柱穴が配置される。柱穴配置はSB22・30・32・89建物跡よりもSI70・73・75竪穴住居跡のような複式炉のある竪穴住居跡の柱穴配置に似る。炉の東



第31図　SB62建物跡・SB63建物跡・SK105土坑遺物出土分布図

側には、この建物跡に付属すると思われる不整形の土坑があり、さらに東側の柱穴が集中する部分は柱穴群をとりまくように浅い掘り込みがある。

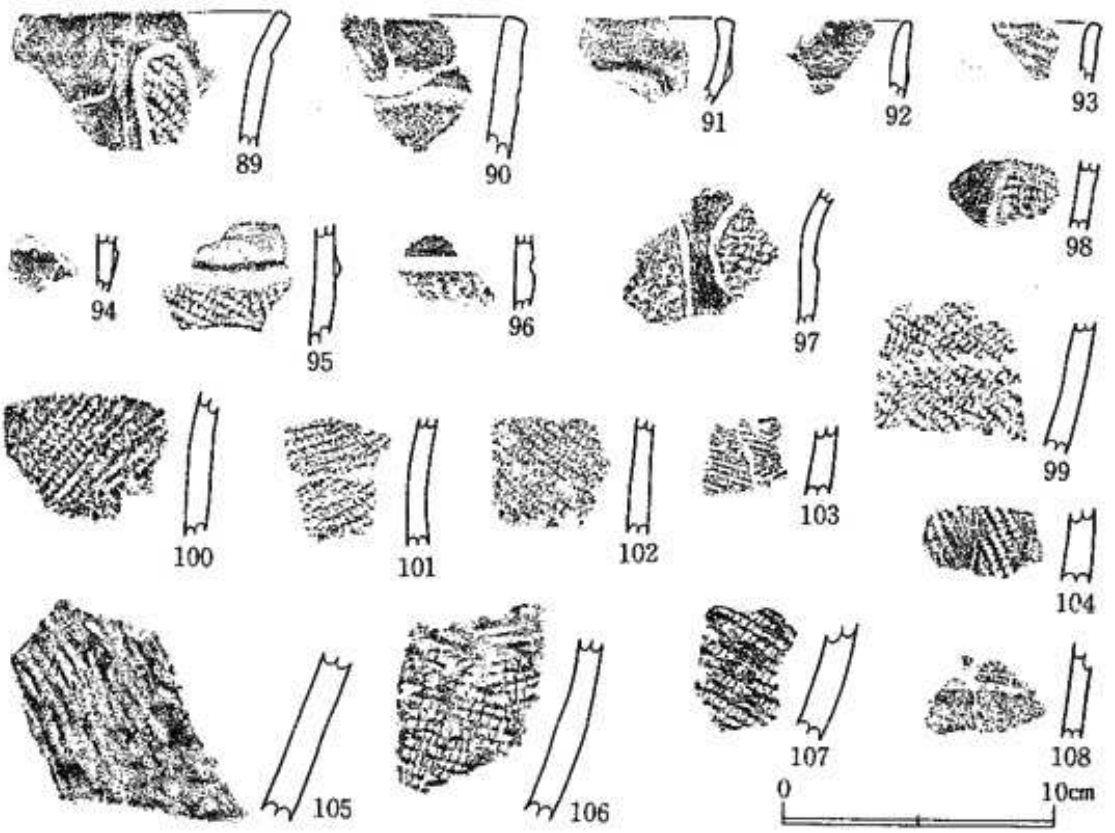
遺物は炉の付近に多い。SB63建物跡と重複しない範囲では、89・96のⅡ群3類G技法のものとⅥ群が出土した。



第32図　SB62建物跡・SB63建物跡・SK105土坑接合・同一個体出土分布図

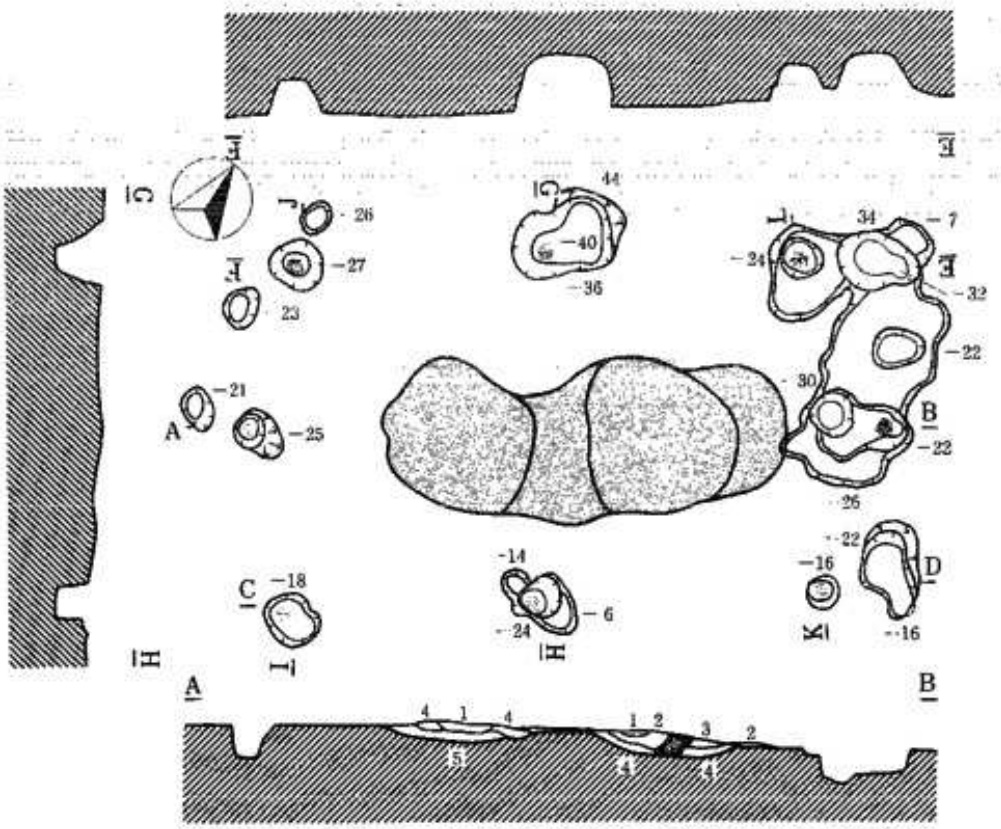
SB63建物跡（第31図～第33図）

南西側がSB62建物跡の北東部と重複している。P1～P4が長方形に配置され、さらにP5・P6が長軸方向の延長線上に並ぶ。P6は少し内側に入った位置にある。柱穴の配置はSB107建物跡と類似する。P1・2・5を結んだ方向はN-34°-Eで、SB62建物跡の主軸方向と直交する。柱穴で囲まれた内側の面積は9.8㎡である。壁、炉はなかった。

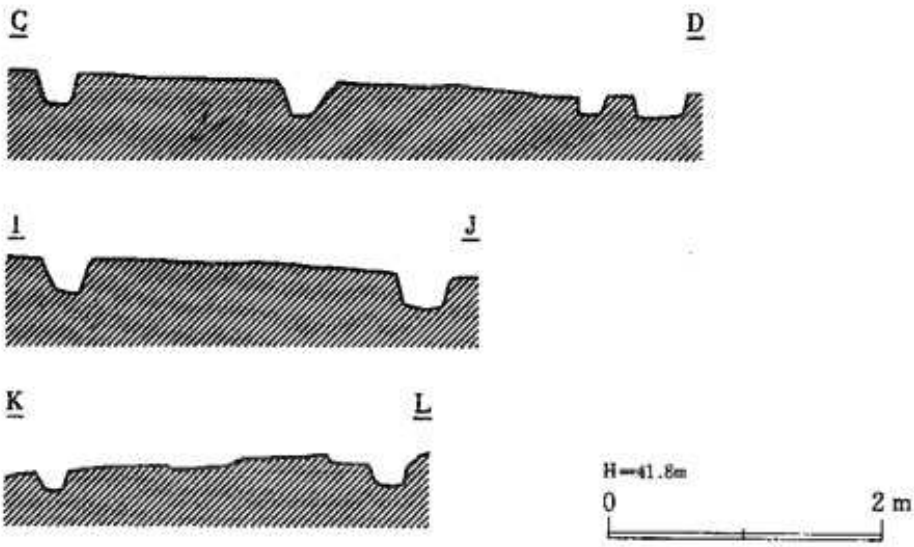


番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
89	SB62		深鉢	II	3	G	縄文部	
90	SB63(SB62)	III	〃	II	3	B1	不明	
91	SB63		〃	II	3	B2	縄文部	
92	〃	III	〃	II	3	G	不明	
93	〃	III	〃	VI	口a			表
94	SB63(SB62)	III	〃	II	3	G	不明	
95	SB62(SB63)	III	〃	II	3	B3	〃	
96	〃		〃	II	3	G	〃	
97	SB89		〃	II	3	A	縄文部	表・裏
98	(SB62)		〃	II	3	A	不明	表・裏
99	SB62(SB63)		〃	VI	胴a		LR縦回転	表
100	SB62		〃	VI	胴a		RL縦回転	
101	〃		〃	VI	胴a		〃	
102	〃	III	〃	VI	胴a		LR縦回転	
103	〃	III	〃	VI	胴a		RL縦回転	表
104	SB62(SB63)		〃	II	3	D	LR縦回転	
105	(SB62)		〃	VI	胴a		〃	
106	〃		〃	VI	胴a		〃	
107	〃		〃	VI	胴a		〃	
108	〃	III	〃	III		E		

第33図　SB62建物跡・SB63建物跡・SB89建物跡出土土器



SB89
1．暗褐色土　(10YR3/4) 焼土粒・炭化物少量含む。
2．明赤褐色土(5YR5/8) 焼土。炭化物少量含む。
3．褐色土　(10YR4/4) 焼土粒・炭化物少量含む。
4．褐色土　(7.5YR4/6) しまりあり。炭化物少量含む。
5．明赤褐色土(5YR5/8) 焼土。上部は粒子状に固まっている。炭化物少量含む。



第34図　SB89建物跡

遺物は北西側に多く、Ⅱ群3類のB2技法、G技法のものが多く出土した。SB62建物跡と重複する範囲からは、Ⅱ群3類のB1技法、B3技法、D技法のものとⅦ群が出土した。

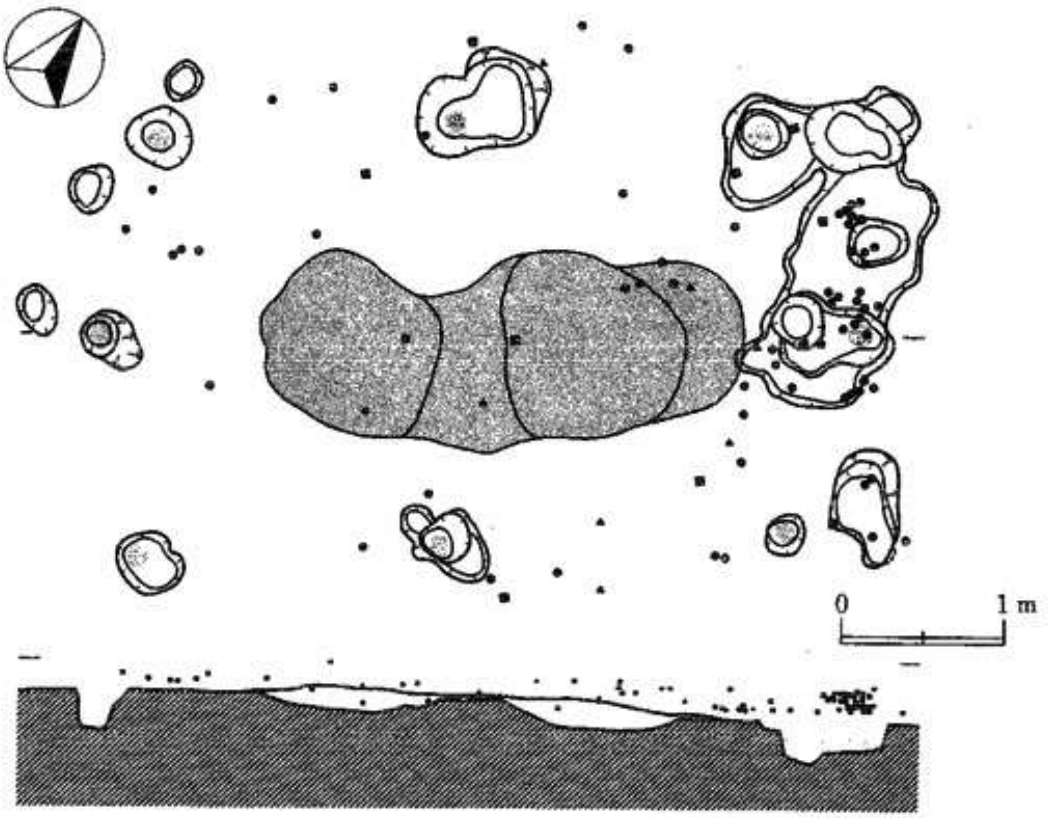
SB89建物跡（第33図～第35図）

LP49・50、LQ49・50グリッドで検出した。南側でSB62建物跡と隣接し北側がSB22建物跡と重複する。遺物の出土状況から本遺構が古い。柱穴の配置、焼土との位置関係からP1～8を主柱穴とする建物跡と判断した。長軸柱間約4.7m、短軸柱間約2.6m、長軸方位N-35°-Eである。柱穴で囲まれた内側の面積は10.7m²である。壁はなく、床面は平坦で北東に向かい緩やかに傾斜している。炉は長軸中心線上にあり長径約3m、短径約1mの広がりのある地床炉であるが、中間は火熱の受け方が弱く、燃焼部は南北2カ所である。

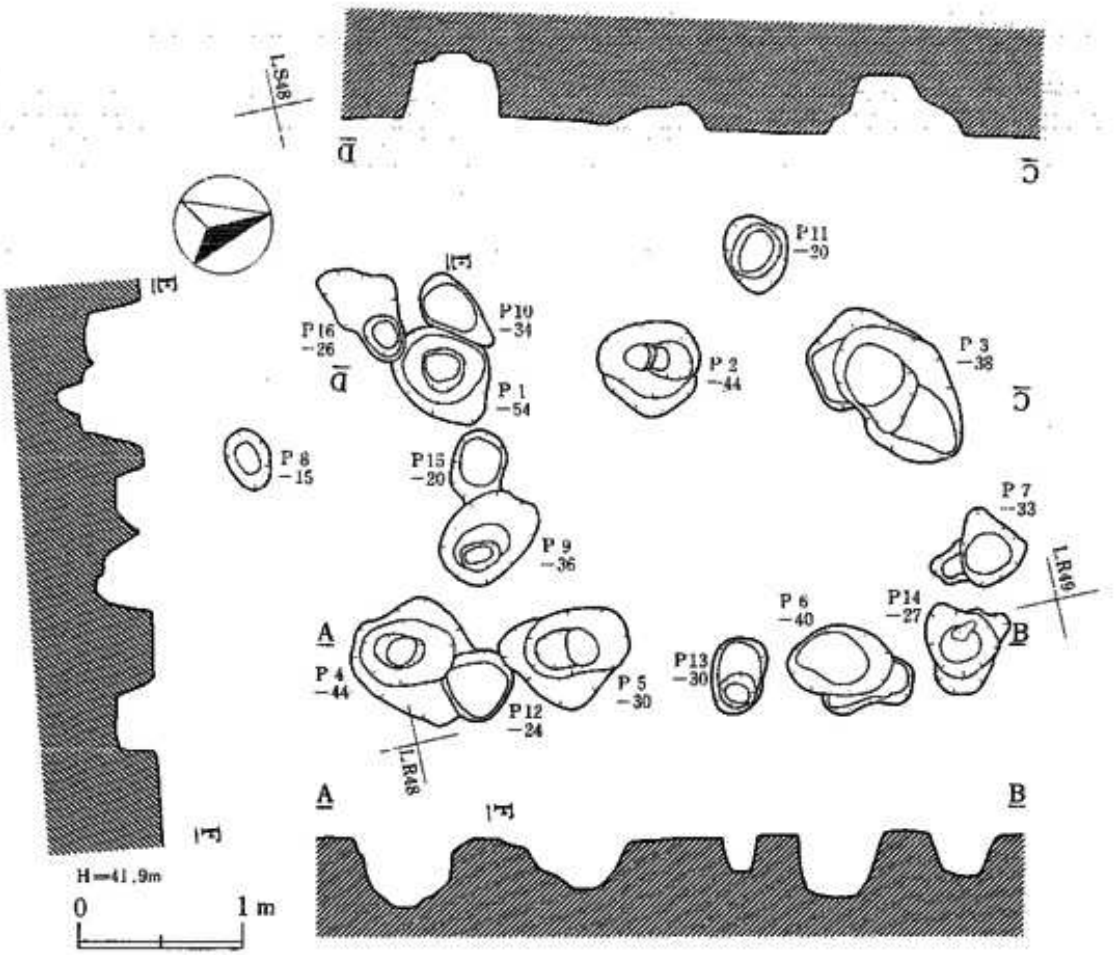
遺物は少なく建物内全体に散布する。ほとんどが摩滅した小破片である。97はⅡ群3類A技法で、縄文部で文様を表現している。

SB107建物跡（第18図・第36図～第39図）

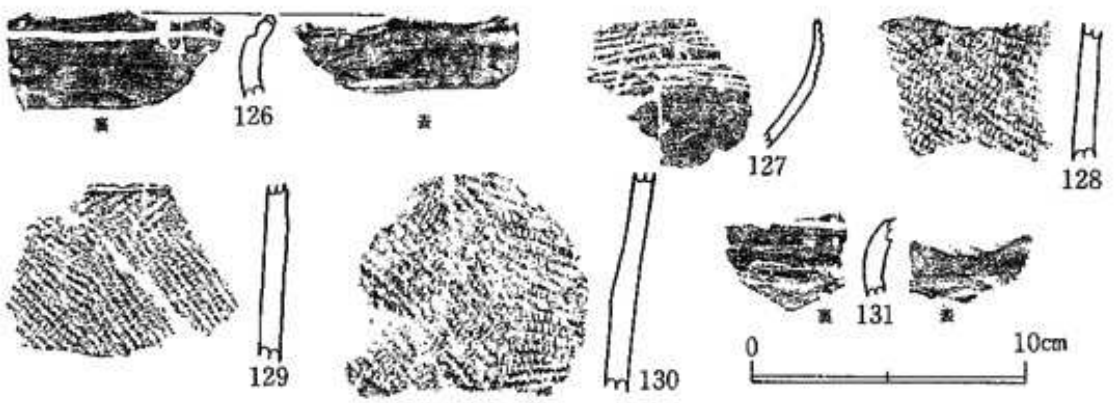
LQ48、LR47・48グリッドで検出した。全部で16本の柱穴群である。北側にSB62建物跡、西側にSN77焼土遺構が隣接し、やや離れて西側にSB32建物跡、東側にSX103柱穴群がある。第Ⅲ層掘り下げ中に周辺より遺物が多く出土し、精査したところ地山面で柱穴群を検出したもので



第35図　SB89建物跡遺物出土分布図

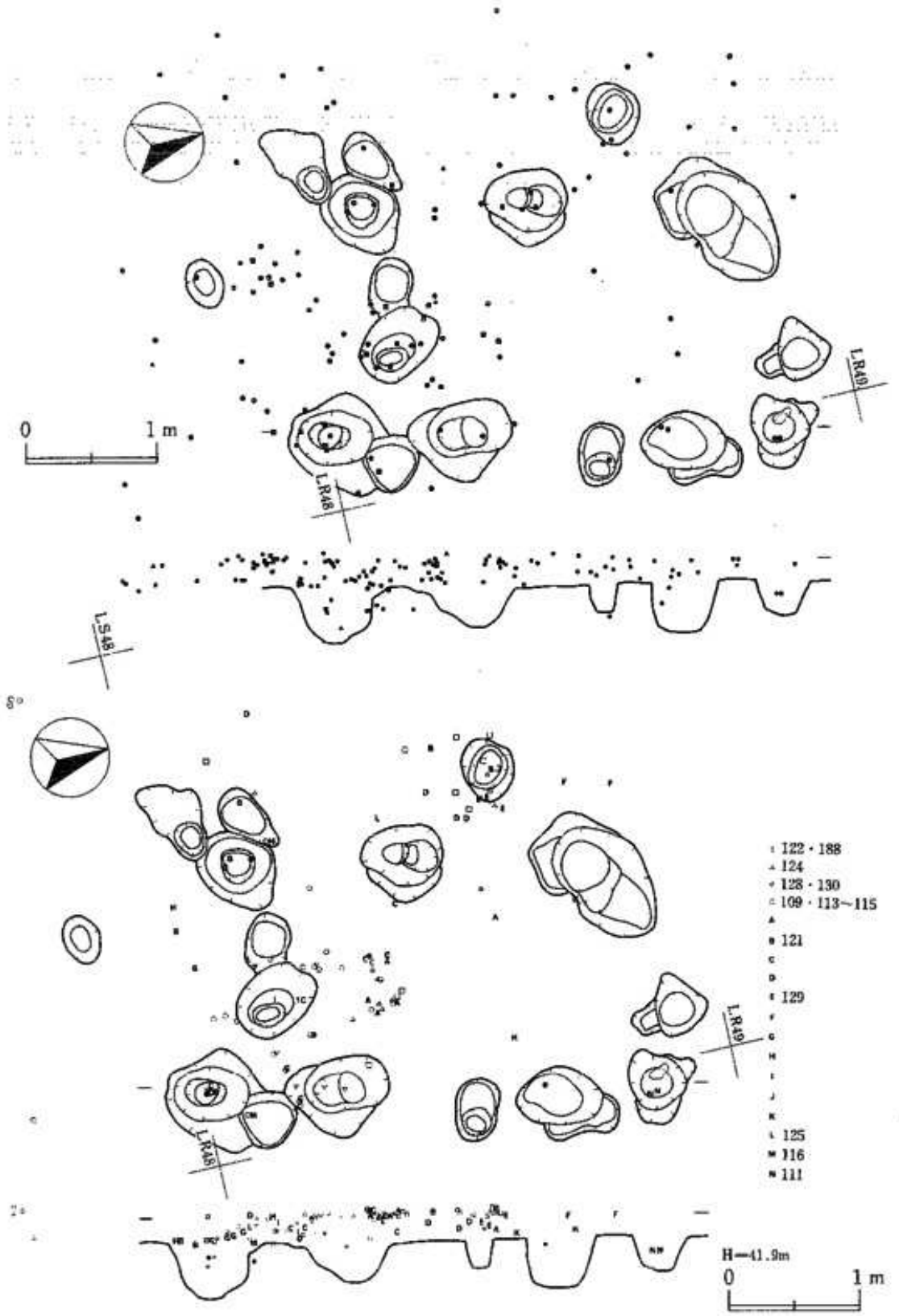


第36図　SB107建物跡

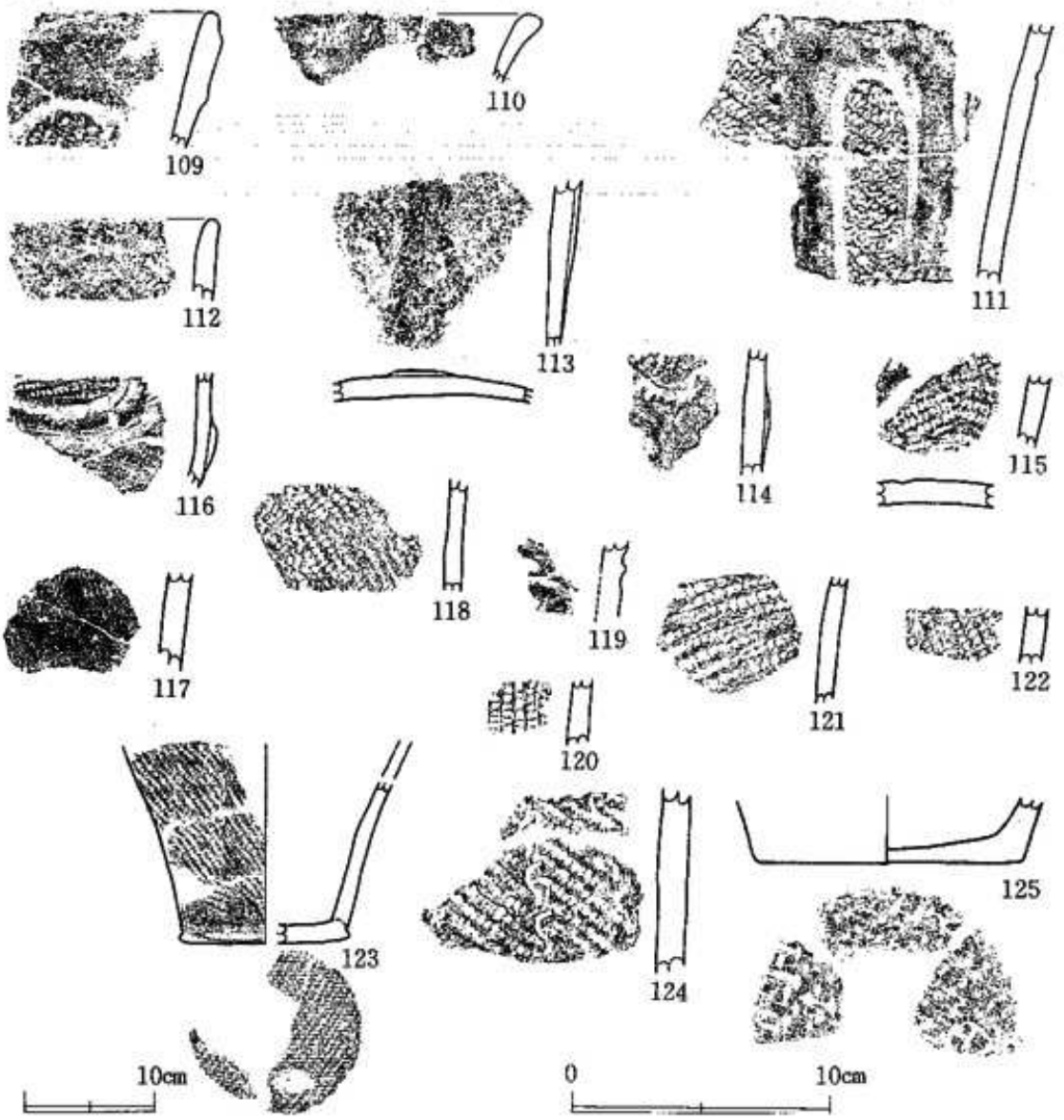


番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
126	SB107	Ⅲ	鉢	Ⅳ			口唇内面沈線	表・裏
127	〃	Ⅲ	〃	Ⅳ			工字文	
128	〃	Ⅰ	深鉢	Ⅵ	群a		LR縦回転	
129	〃	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	G	〃	表
130	〃		〃	Ⅵ	群a		LR異方向	
131	〃	Ⅲ	鉢	Ⅳ			口唇内面沈線	表

第37図　SB107建物跡出土土器(1)



第38図　SB107建物跡遺物出土分布図(上)、接合・同一個体出土分布図(下)

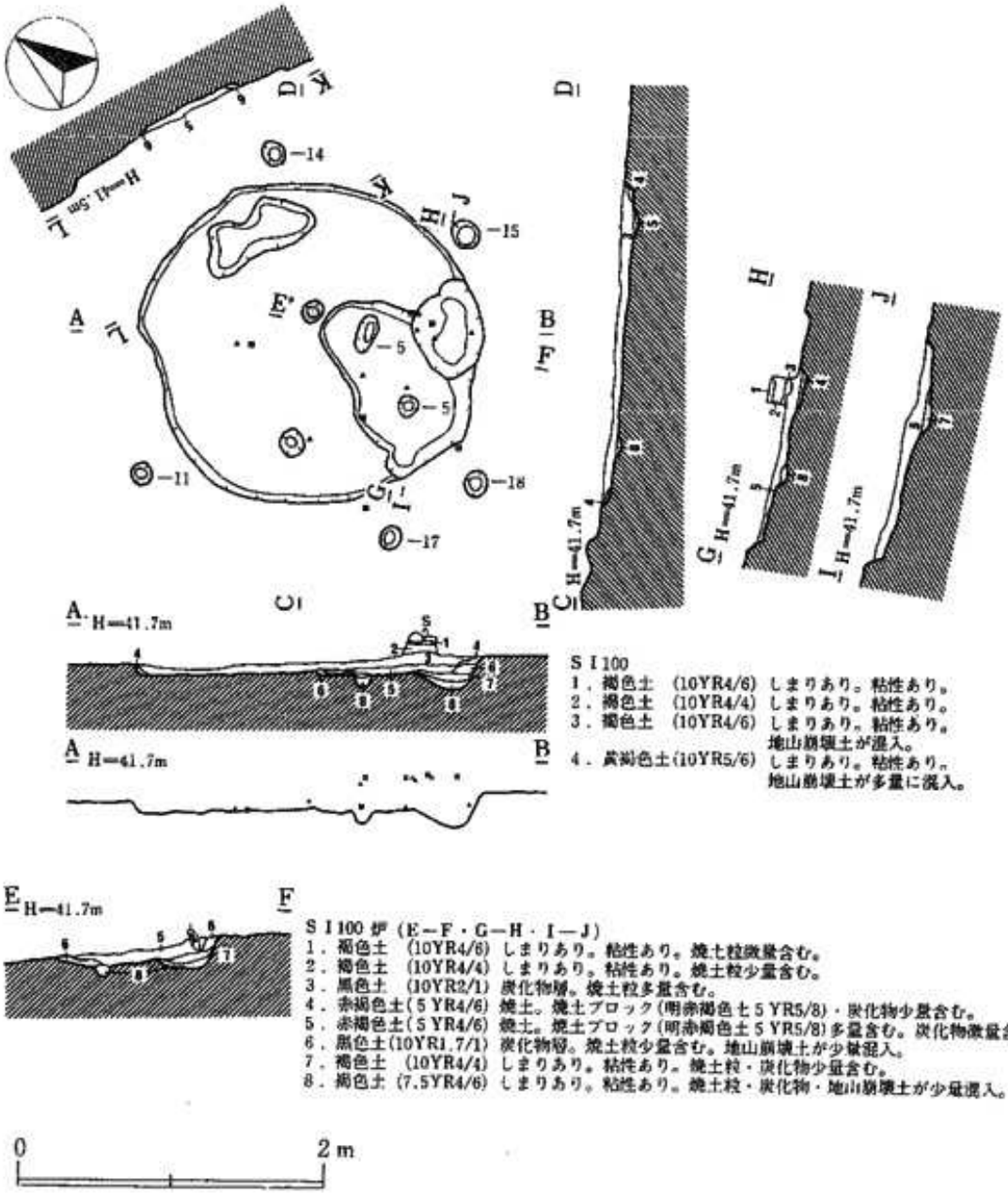


番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
109	SB107	Ⅲ	深鉢	Ⅱ	3	B2	無文部	
110	〃	Ⅰ	〃	Ⅱ	3	G	不明	
111	〃		〃	Ⅱ	3	A	縄文部	
112	〃	Ⅲ	〃	Ⅵ	口a			
113	〃		〃	Ⅱ	3	B2	縄文部	表
114	〃		〃	Ⅱ	3	B2	無文部	
115	〃		〃	Ⅱ	3	B2	不明	
116	〃	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B3	縄文部	
117	〃		〃	Ⅵ	胴d			表
118	〃	Ⅲ	〃	Ⅵ	胴a		LR横回転	(結節回転文) 表
119	〃		〃	Ⅱ	3	E・H		表
120	〃	Ⅰ	〃	Ⅵ	胴a		RL斜回転	表
121	〃	Ⅲ	〃	Ⅵ	胴a		LR横回転	
122	〃		〃	Ⅵ	胴a		LR縦回転	表
123	〃	Ⅲ	〃	Ⅵ	底a		〃	
124	〃	Ⅲ	〃	Ⅵ	胴a		〃	(結節回転文)
125	〃	Ⅲ	〃	Ⅵ	底a			内

第39図　SB107建物跡出土土器(2)

ある。床面は平坦で西側に緩く傾斜している。柱穴の深さや規模、配置から考えて主柱穴がP1～P6の6本で構成される1間×2間の建物が想定される。P4・P5・P14を結んだ方向はN-13°-Eである。柱穴は一部で重複しており建て替えがあったと思われるが、各期の明確なプランは不明である。最も外側の柱穴を結んだ内側の面積は8.7㎡である。西側に隣接するSN77焼土遺構は本建物跡に伴う屋外炉の可能性が考えられる。

遺物の出土分布は南側にまとまりがあり、北側は少ない。土器はⅡ群3類とⅥ群が主でⅣ群も少量含まれる。柱穴内からはA技法の第38図111、B技法の116が出土した。126・127はⅣ群



第40図　SI01竪穴住居跡

で、柱穴群の南側から出土した。第18図44は不定形石器の折れた刃部である。

2　竪穴住居跡

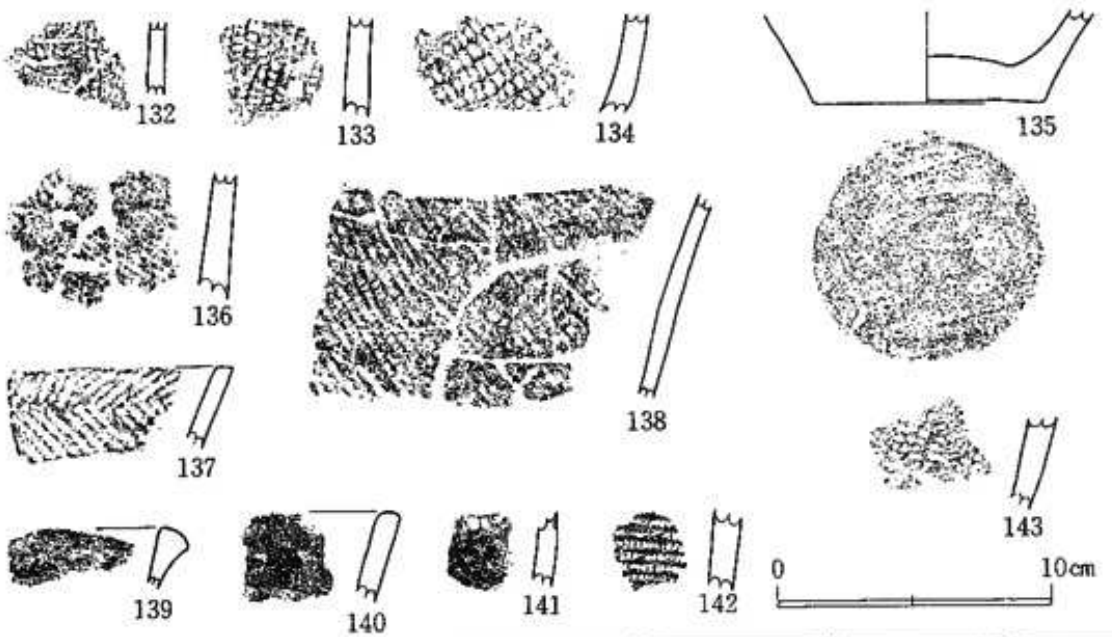
竪穴住居跡は丘陵中央平坦部を西側からとり囲むように8カ所あり、重複も含めて14軒を検出した。

複式炉のある円形または楕円形のもの（SI70・SI73・SI75）、小型円形のもの（SI01・SI81・SI100）、楕円形のもの（SI33）、楕円形で、SB22建物跡などと柱穴配置や炉の形態が似ているもの（SI20）がある。SI70、SI33は斜面にあり、廃絶後の凹地が捨場とした利用され、埋土中から多量の遺物が出土した。

SI01竪穴住居跡（第40図～第42図）

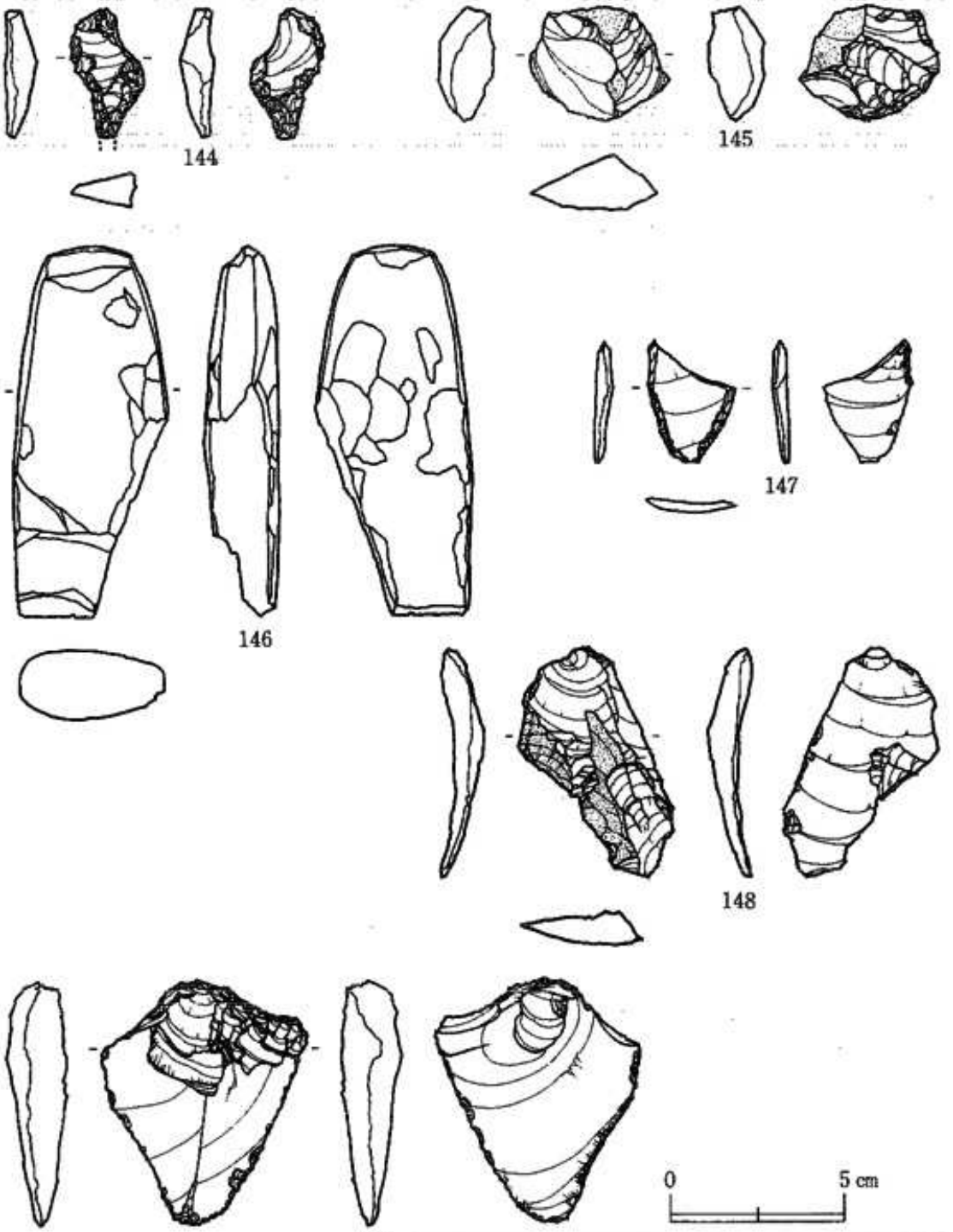
遺跡中央平坦部北端のLP53グリッドで検出した。確認面はⅣ層上面である。平面形は径約2m20cmの円形で、確認面から床面までの深さは約6cmである。床面積は3.3㎡である。壁はほぼ垂直に立ち上がり床面は平坦である。

床面のほぼ中央に径約15cm、深さ約7cmのピット状の掘り込みがあって上部が火熱を受け赤



番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
132	SI01		深鉢	Ⅵ	胴a			表
133	〃		〃	Ⅵ	胴a		LR縦回転	
134	〃		〃	Ⅵ	胴a		RL横回転	
135	〃		〃	Ⅵ	底d		（けずり）	内
136	〃		〃	Ⅵ	胴a			
137	SI100		〃	Ⅵ	胴a		非結束羽状縄文	
138	〃		〃	Ⅵ	胴a		RL横回転	
139	〃		浅鉢	Ⅱ	3	F		
140	〃		深鉢	Ⅵ	口d			表
141	〃		〃	Ⅱ	3	H		
142	〃		〃	Ⅵ	胴a		LR縦回転	
143	SI81	1	〃	Ⅵ	胴a		RL縦回転	

第41図　SI01・81・100竪穴住居跡出土土器



番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
144	S I 01	石鏃	3.7	2.1	0.9	4.7
145	＊	不定形石器	3.3	4.0	1.7	13.7
146	＊	磨製石斧	10.6	4.5	2.1	158.3
147	S I 81	不定形石器	3.5	2.6	0.3	2.2
148	＊	微小剥離痕剥片	6.6	4.4	0.9	16.2
149	＊	微小剥離痕剥片	6.9	5.9	1.6	41.0

第42図　SI01・81竪穴住居跡出土石器

変しており、地床炉と考えられる。炉から南側には扇形に広がる浅い掘り込みがあり、南側の壁に達している。深さは北側で約3cm、南側で2～7cmで、床面積の27%を占める。この浅い掘り込みの南東側の壁際には長径約60cm、短径約40cm、床面からの深さ約18cmの掘り込みがある。柱穴は住居跡内に3本、外周に5本の計8本検出した。P1・2・5・7・8は褐色土（10YR4／4）、P3・6は暗褐色土（10YR3／4）、P4が暗褐色土（10YR3／3）の埋土であった。

出土土器はすべてⅥ群で、時期が判断できるものはない。146は折損した磨製石斧の基部である。144は先端が折損した石錐で、基部の周縁にも二次加工を施している。

SI20竪穴住居跡（第43図～第46図・第118図）

LS46・47、LT46・47グリッドで検出した。Ⅳ層上面での確認時では、長径約4m、短径約3mの楕円形プランであったが、精査した結果、南西側でも地山面で6本の柱穴を検出した。柱穴配置及び焼土との位置関係からみて主柱穴はP1～8で、楕円形のプランであると推定される。本竪穴住居跡の柱穴配置及び炉の状況はSB22・30・32・89建物跡と類似し、2カ所の焼土（地床炉）を囲む長軸2間、短軸1間の6本の柱穴と、長軸中央の両端にやや突出して各1本の柱穴を配置する構造である。

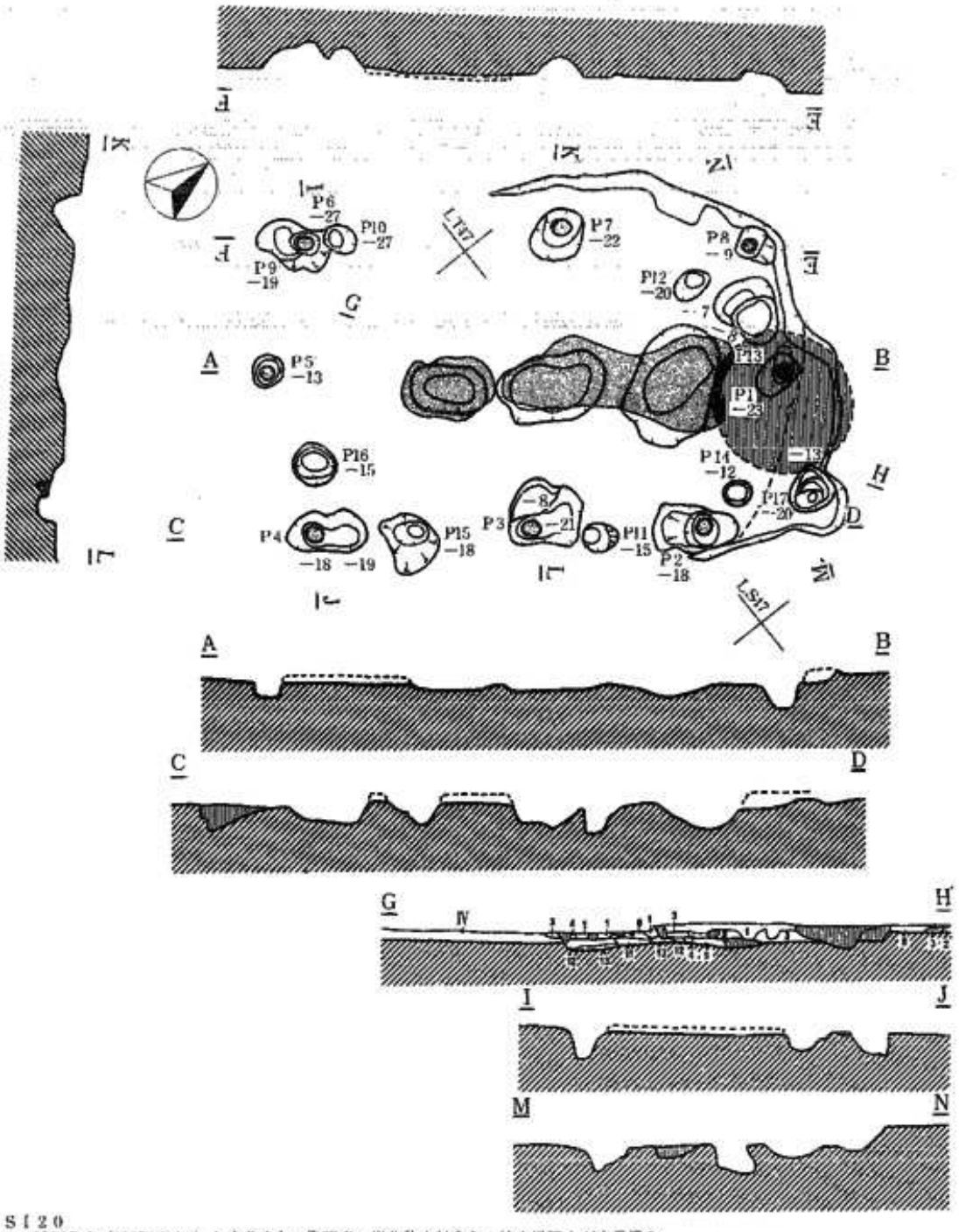
長軸柱間は約4m30cm、短軸柱間は約2m60cmで長軸方位はN-40°-E、床面積は約9.6m²である。壁はおよそ北側半分が遺存し、高さ約10cmでやや斜めに立ち上がる。北東隅は植樹により破壊されていた。柱穴はP6・P4で複数が切り合い、また北東側の壁とP17も突出しており、建て替えの可能性もある。床面はほぼ平坦であるがP3・7間より北側は階段状に約7cm低くなっており、床面は南側がⅣ層（漸移層）中、北側が地山面であった。

炉は長軸中心線上に2つの地床炉が並び、北側は長径約1m80cm、短径約50cm、南側は長径約80cm、短径約50cm、深さ約10cmの浅い掘り込みがある。

遺物は壁の遺存していた北側から多く出土した。土器はⅡ群とⅥ群である。第45図150～153は、焼土内から出土した破片とLP50グリッド出土の破片が接合したもの、及び同一個体のものである。緩やかな波状口縁で、口唇部直下に刺突列が巡る。文様はB3技法で表現され、152では隆線どうしの交叉点がみられる。他にⅡ群3類のA・B1・B2技法の土器も多い。165はB1技法で独立したU字状区画文を表現した小型深鉢形土器で、胴部中央に波状の区画線が入り、下半部は縦回転のRL縄文が施文されている。SB22建物跡、SI70・SI100竪穴住居跡出土土器と接合・同一個体のものがある。他に床面から大型の石皿が3点出土した（第46図168～170）。

SI33（A・B・C）竪穴住居跡（第47図～第51図）

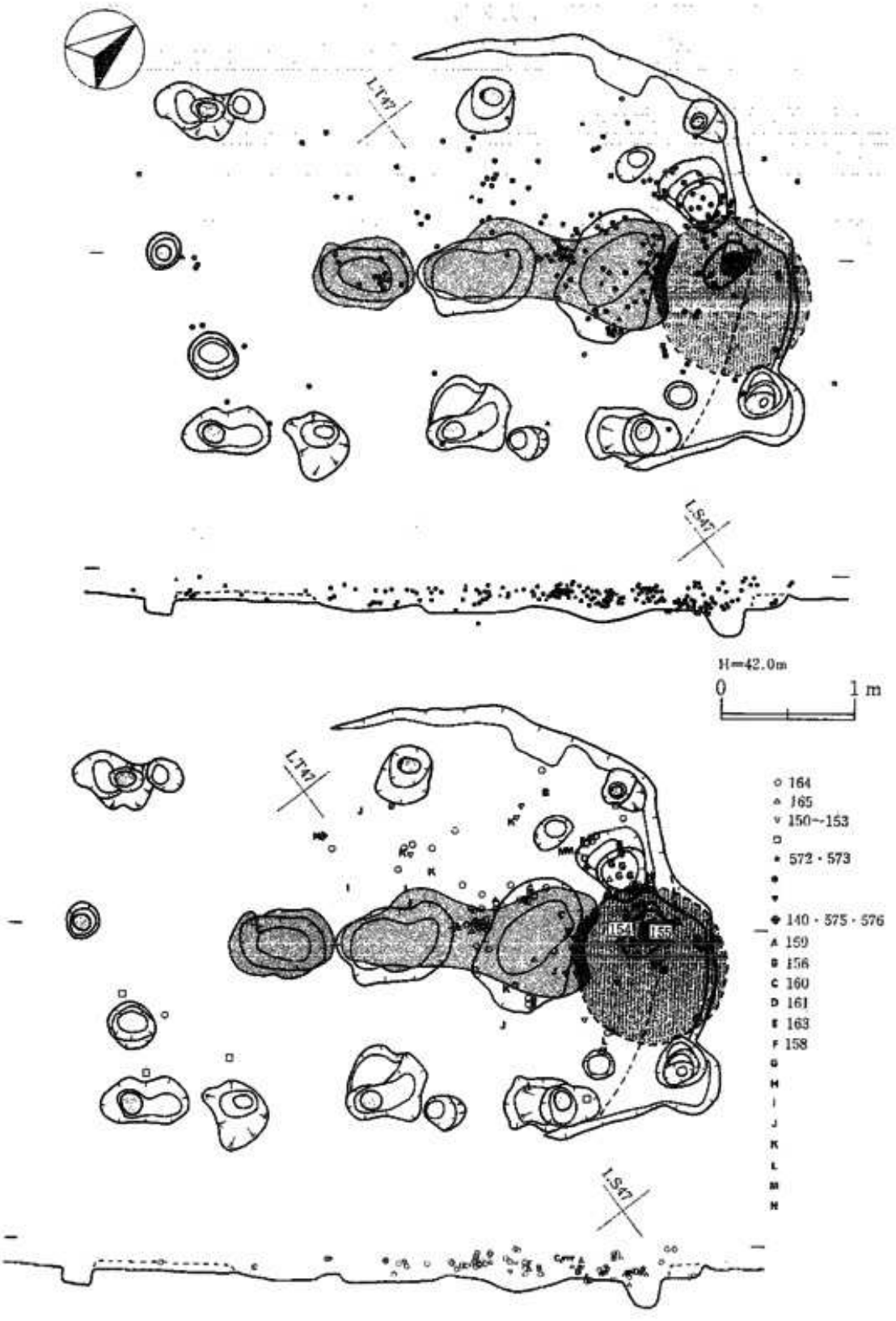
LO54・LP54グリッドで検出した。遺跡中央平坦部北端の斜面をやや下った所にある。確認面はⅣ層上面である。確認時では、平面形が楕円形の竪穴住居跡1軒と思われたが、精査した結果、壁及び床面の遺存状態、焼土の位置、柱穴の配置からみて3軒の竪穴住居跡が重複しているもの



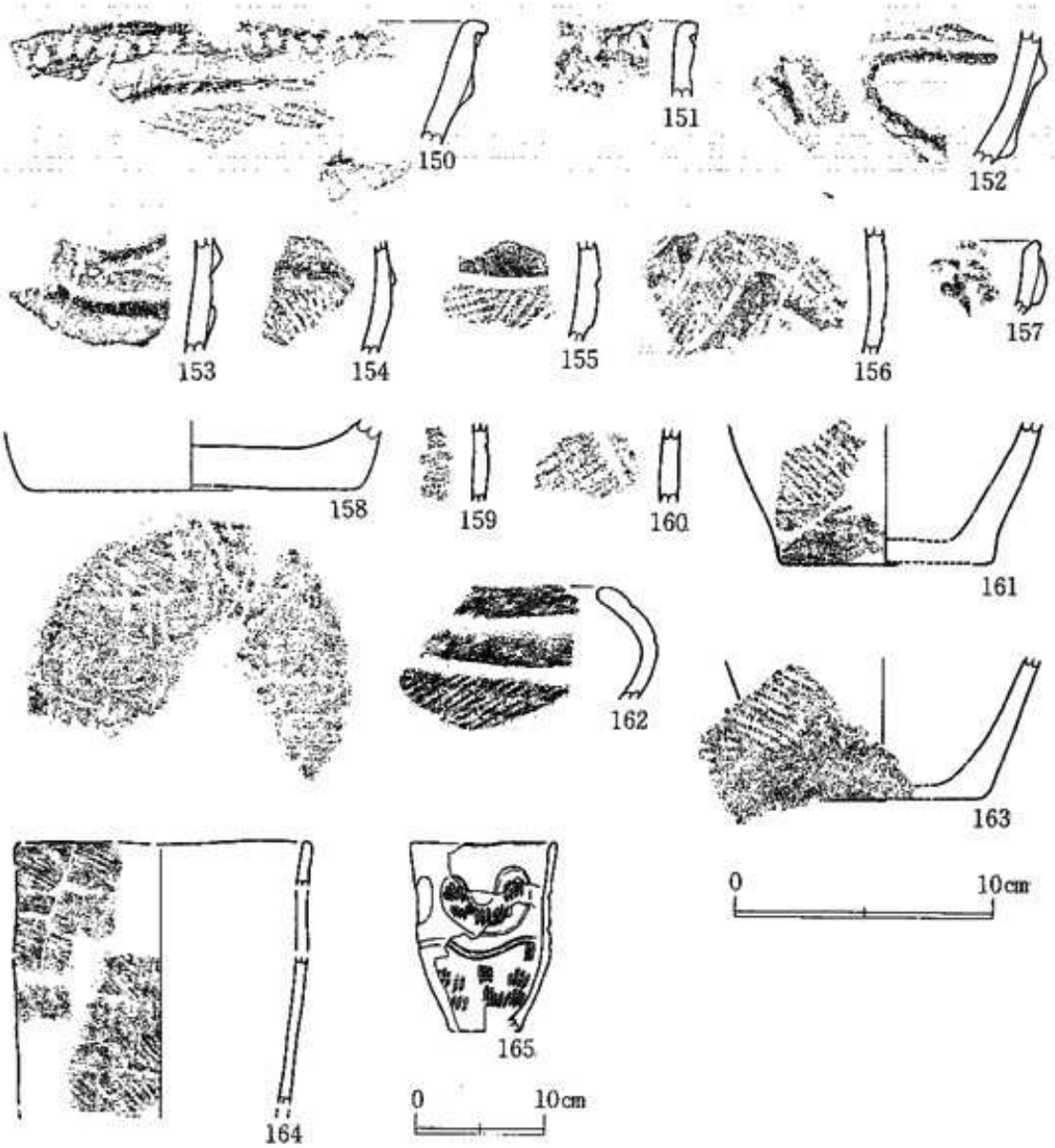
SI20
1．暗褐色土　(10YR3/4)　しまりなし。孔隙多。炭化物少量含む。地山崩壊土が少量混入。
2．黄褐色土　(10YR5/6)　基本層位の第Ⅳ層。
3．褐色土　(10YR4/4)　しまりあり。粘性ややあり。炭化物微量含む。地山崩壊土が少量混入。
4．褐色土　(10YR4/4)　きわめてしまりあり。粘性ややあり。炭化物少量含む。地山崩壊土が少量混入。
5．明褐色土　(7.5YR5/6)　焼土。しまりあり。炭化物少量含む。
6．黒褐色土　(10YR2/3)　しまりややなし。孔隙多。炭化物多量含む。
7．褐色土　(10YR4/4)　しまりややあり。地山ブロック多量含む。
8．明褐色土　(7.5YR5/8)　焼土。しまりややあり。炭化物少量含む。
9．黄褐色土　(10YR5/6)　しまりややなし。焼土粒少量含む。炭化物微量含む。
10．黄褐色土　(10YR5/8)　しまりあり。焼土粒少量含む。火熱を受け赤変している。

H=42.0m
0　2m

第43図　SI20竪穴住居跡

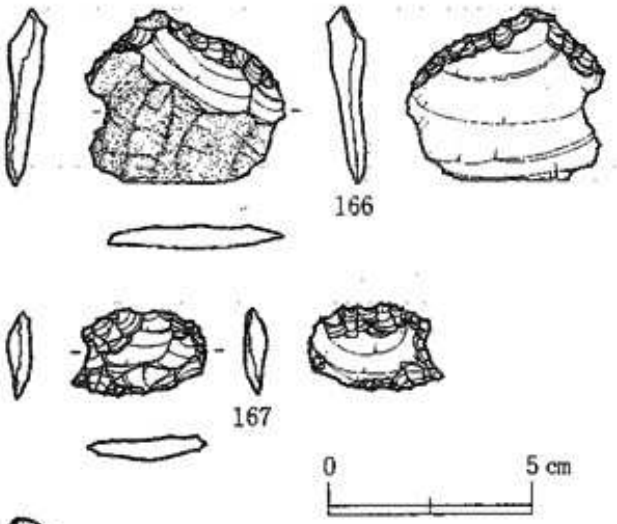


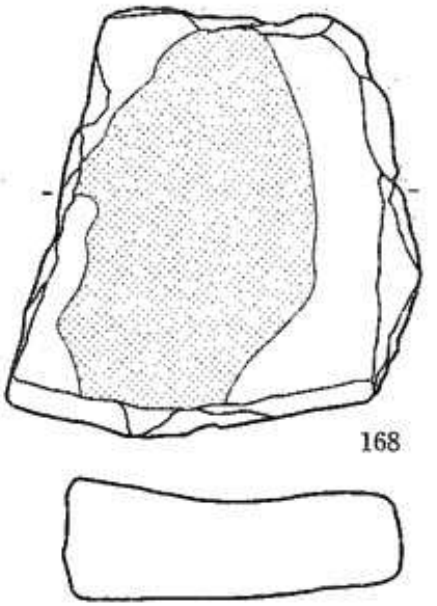
第44図　SI20竪穴住居跡遺物出土分布図(上)、接合・同一個体出土分布図(下)

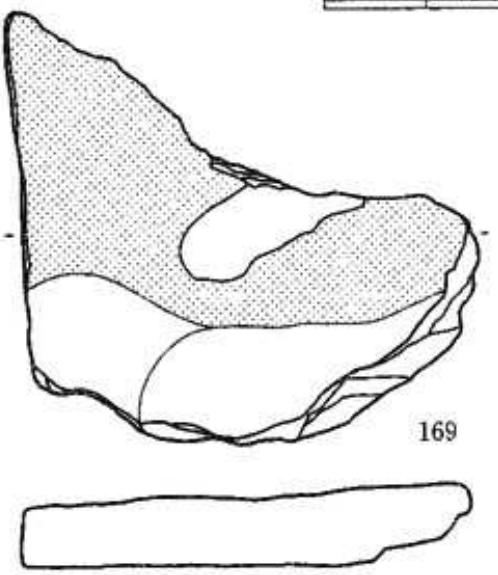


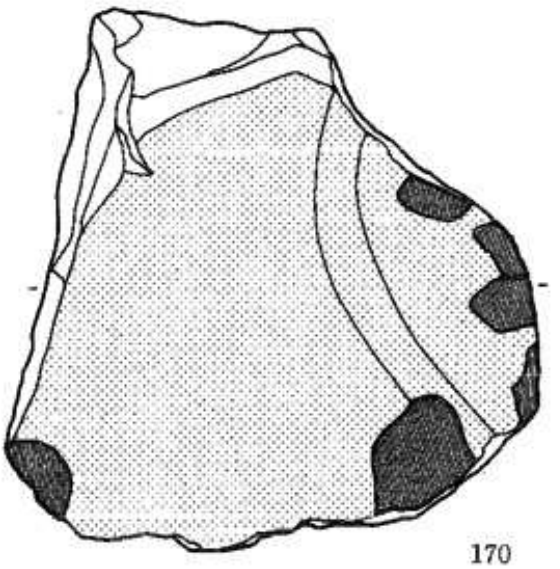
番号	出土位置	単位	器種	部	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
150	S120-LP50		浅鉢	II	3	B3・H	不　明	
151	S I 20		〃	II	3	H		同一
152	L P 50		〃	II	3	B3	無文部	外
153	S I 20		〃	II	3	B3	不　明	
154	〃		深鉢	II	3	B2	〃	
155	〃		〃	II	3	A	〃	表
156	〃		〃	II	3	A	縄文部	裏
157	〃		〃	II	1			
158	〃	3	〃	VI	底c			
159	〃		〃	II	3	E		裏
160	〃		〃	II	3	B1		裏
161	〃		〃	VI	底d		LR縦回転	
162	〃	1	浅鉢	II	3	B2	不　明	
163	〃	1	深鉢	VI	底d		LR縦回転	
164	〃	1	〃	VI	口a脚a		〃	
165	〃	1	〃	II	3	B1	縄文部	

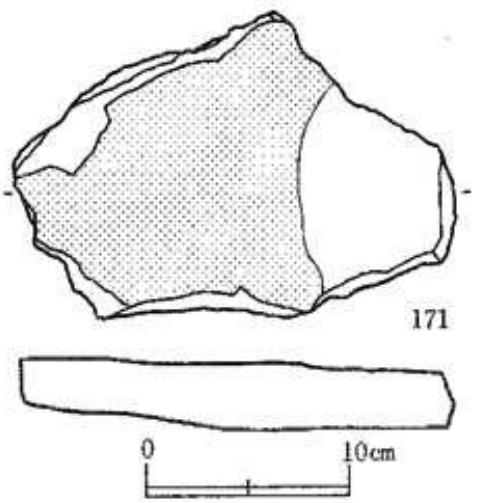
第45図　SI20竪穴住居跡出土土器





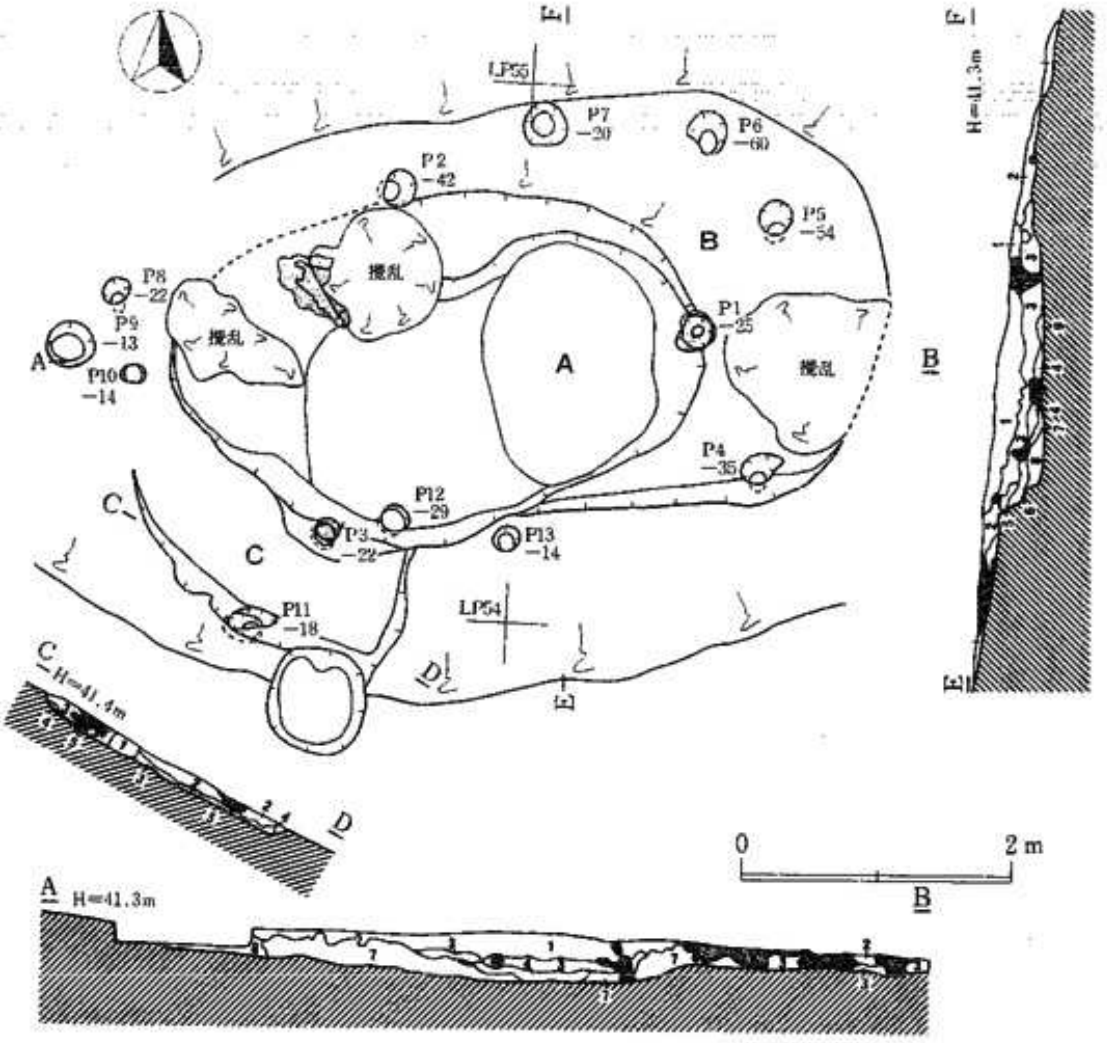




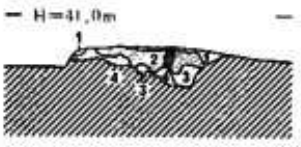


番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
166	S I 20	不定形石器	4.2	4.8	0.6	12.6
167	S I 20	不定形石器	2.1	3.2	0.5	3.4
168	S I 20	石　皿	(21.0)	(20.2)	5.9	(9600.0)
169	S I 20	石　皿	(21.1)	(23.0)	4.0	(2000.0)
170	S I 20	石　皿	(27.0)	26.5	8.9	(7800.0)
171	S X 103	石　皿	(14.8)	(21.7)	3.4	(1328.0)

第46図　SI20竪穴住居跡・SX103柱穴群出土石器



S133炉



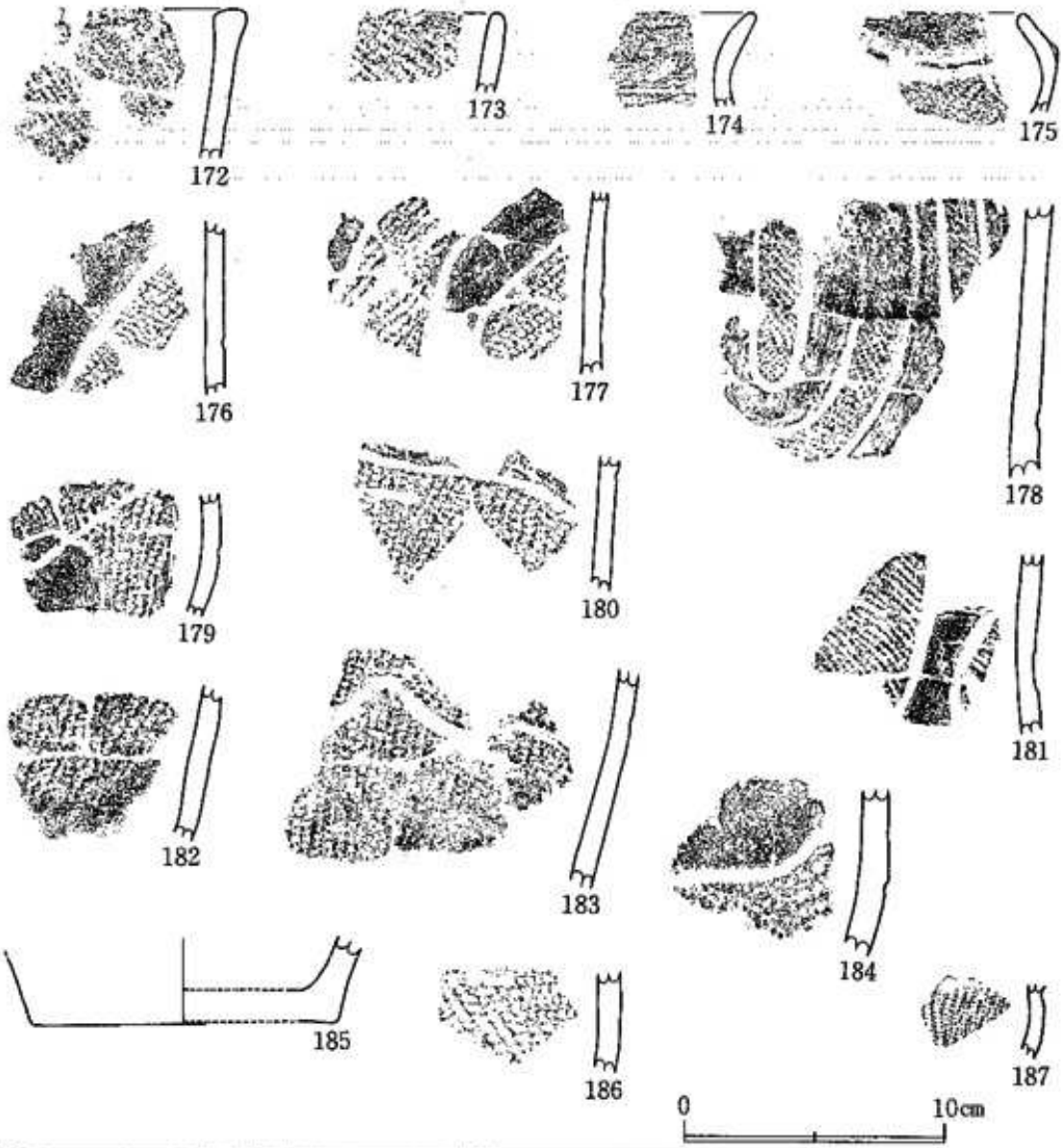
S133　A−B
1．黒色土　(10YR 2/1) しまりややなし。粘性なし。炭化物微量含む。
2．黒褐色土 (10YR 2/3) しまりややあり。粘性なし。
3．黒褐色土 (10YR 2/3) しまりあり。粘性ややあり。炭化物少量含む。
4．黒色土　(10YR 2/2) しまりあり。粘性なし。
5．褐色土　(10YR 4/4) しまりあり。粘性あり。炭化物微量含む。壁崩壊土。
6．黄褐色土 (10YR 5/6) しまりあり。粘性あり。焼土粒微量含む。炭化物微量含む。
7．暗褐色土 (10YR 3/3) しまりあり。粘性ややあり。炭化物微量含む。
8．暗褐色土 (10YR 3/4) しまりややなし。粘性なし。焼土粒微量含む。炭化物微量含む。
9．黄褐色土 (10YR 5/8) 地山ブロック。

S133　C−D
1．褐色土　(10YR 4/6) しまりあり。粘性あり。炭化物少量含む。
2．褐色土　(10YR 4/4) しまりあり。粘性ややあり。炭化物微量含む。
3．褐色土　(10YR 4/4) しまりあり。粘性あり。地山崩壊土が混入。
4．黄褐色土 (10YR 5/6) 壁崩壊土。
5．黄褐色土 (10YR 5/6) 地山崩壊土が多量に混入。

S133炉
1．暗褐色土 (7.5YR3/4) しまりややあり。粘性なし。焼土粒多量含む。炭化物少量含む。
2．赤褐色土 (5 YR4/6) 焼土。
3．褐色土　(7.5YR4/6) 火熱を受け赤変。
4．褐色土　(7.5YR4/6) 火熱を受けやや赤変。

第47図　SI33竪穴住居跡

第48図　SI33竪穴住居跡遺物出土分布図(上)、接合・同一個体出土分布図(下)

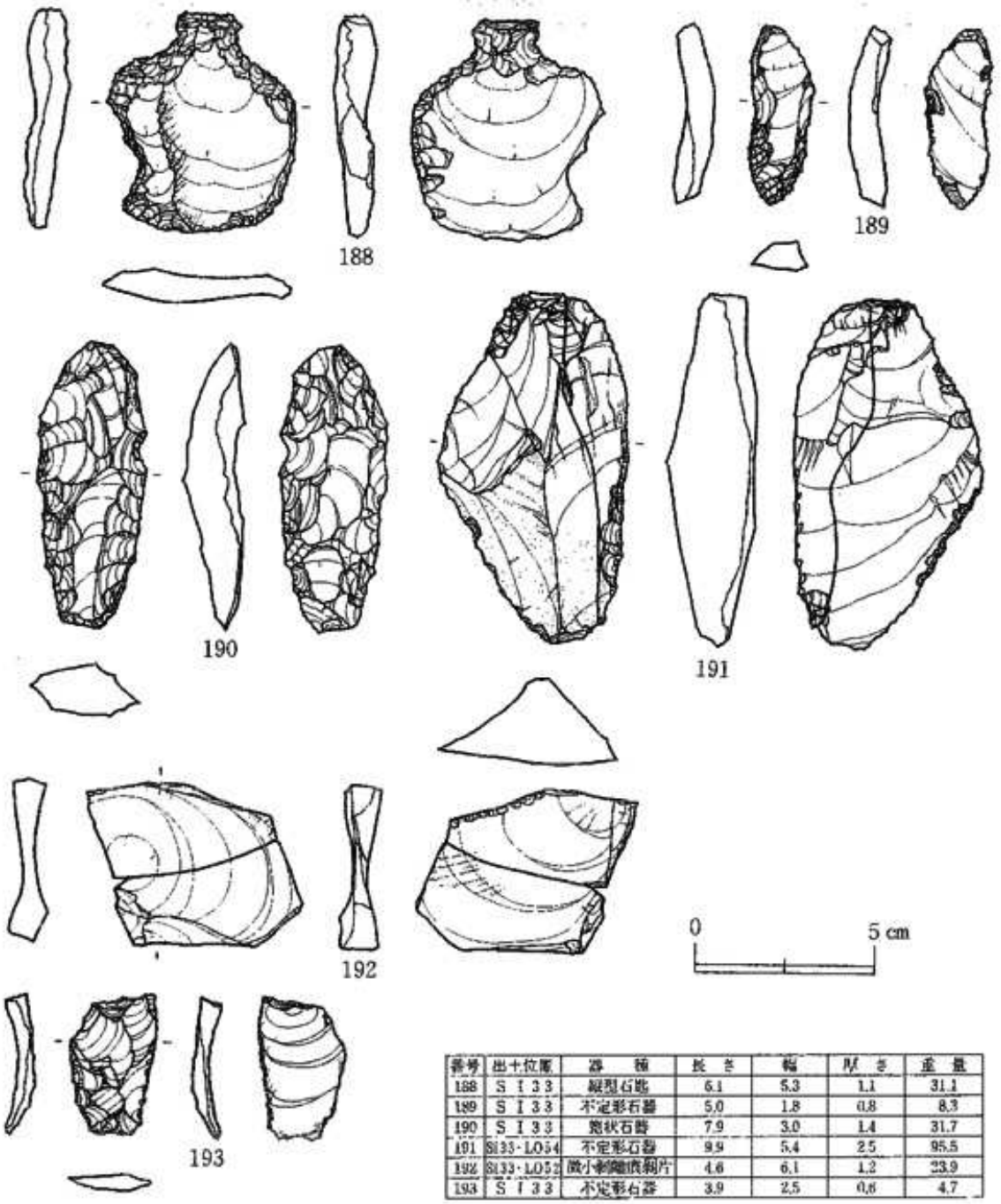


番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
172	SI33	1	深鉢	Ⅵ	口a		LR縦回転	
173	〃	1	〃	Ⅵ	口a		〃	
174	〃	1	鉢	Ⅳ			無文	表
175	〃	1	浅鉢	Ⅱ	3	B3	不明	
176	〃	1	深鉢	Ⅱ	3	A	〃	表
177	〃	1・2	〃	Ⅱ	3	A	〃	表
178	〃	1	〃	Ⅱ	3	A	縄文部	表
179	〃	1	〃	Ⅱ	3	A	不明	表
180	〃	3	〃	Ⅱ	3	G	〃	表
181	〃	1・2	〃	Ⅱ	3	A	縄文部	
182	〃	3	〃	Ⅵ	胴a		RLR縦回転	
183	〃	3	〃	Ⅱ	3	D	〃	表
184	〃	3	〃	Ⅱ	3	B1	不明	表
185	〃	3	〃	Ⅵ	底d			
186	〃	3	〃	Ⅵ	胴a		LR縦・異方向回転	
187	〃		鉢	Ⅴ			RL縦回転	表

第49図　SI33竪穴住居跡出土土器

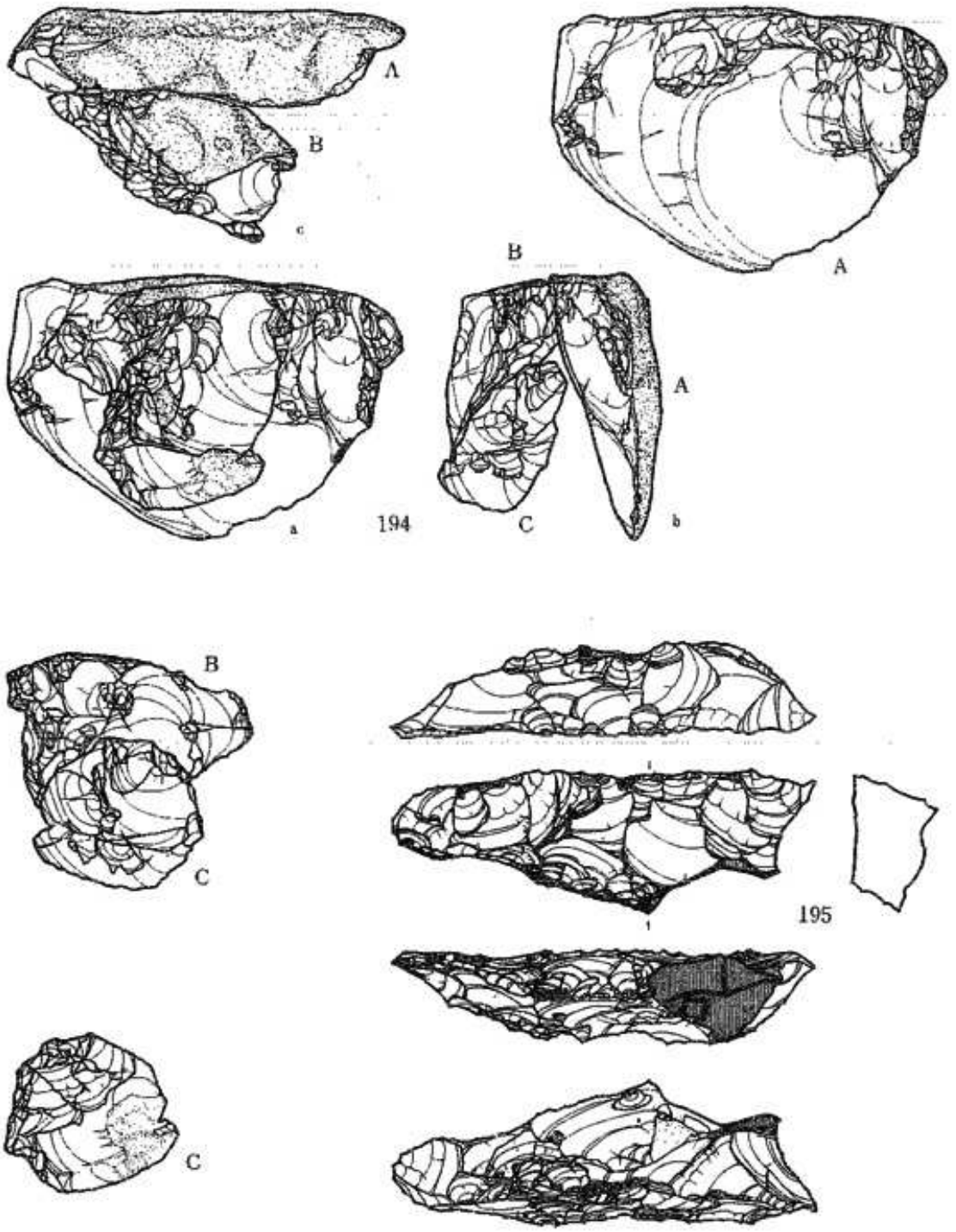
と判断した。遺物の出土状況、焼土の遺存状態からみて最も深い掘り込みをもつもの（A）が新しく、最も広いもの(B)と遺存状態の悪いもの(C)の新旧関係は不明である。

AはBの中央やや西よりにあり、BはAよりひと回り大きく、CはBの南西側に位置する。A・Bの長軸方位はN-80°-Eである。推定される平面形はAが長径約4m、短径約2m60cm、Bが長径約6m、短径約3mの楕円形を呈すると思われる。床面積はAが5.6㎡、Bが6.3㎡、Cは



番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
188	S I 3 3	縦型石匙	6.1	5.3	1.1	31.1
189	S I 3 3	不定形石器	5.0	1.8	0.8	8.3
190	S I 3 3	楔状石器	7.9	3.0	1.4	31.7
191	SI33・LO54	不定形石器	9.9	5.4	2.5	95.5
192	SI33・LO52	微小剥離痕剥片	4.6	6.1	1.2	33.9
193	S I 3 3	不定形石器	3.9	2.5	0.6	4.7

第50図　SI33竪穴住居跡出土石器(1)



番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
194A	S I 33	剥片	7.7	11.3	2.6	271.5
B	L P 51	剥片	6.0	7.4	2.4	71.8
C	S I 33	剥片	4.5	5.6	1.1	24.6
195	S I 33	G 核	12.1	4.1	2.6	104.8

第51図　SI33竪穴住居跡出土石器(2)

検出された部分のみで約1.5㎡である。

Aは北から西にかけて幅約20~90cmのテラスが半周しており、北側は床面から高さ約3～15cmの段差があるが、西側では明瞭な段差がなく床面へと続き東へ緩やかに傾斜する。壁は北側を除き遺存している。南側は床面からやや急角度に立ち上がるが、東西の壁は、緩やかに立ち上がる。高さは南側約26cm、東側約10cm、西側約5cmを測る。床面はいずれもやや凸凹があった。

Bは南壁の東側のみ遺存し、高さ約10cmで斜めに立ち上がる。

Cの壁は東及び南側で約10cmが遺存する。南東隅はSK80土坑と重複し、SK80土坑が新しい。柱穴は13本を検出した。P1・2・10・12がA、P4・5・6・7・8・9・3・13がBの柱穴と思われる。CはP11のみ確認できた。Aの炉は北西側にある地床炉である。P14の近くでも地床炉であったと思われる焼土が認められた。また、P1・9には多量に焼土が堆積し、周囲がやや赤変していた。P1の地点にBの炉、P9の地点にCの炉があったと推定される。

埋土は自然堆積である。Aの廃絶後床面を覆って最下層(7層)が堆積し、その後1～4層が流入したものである。遺物は埋土の1～4層中から多量に出土した。7層に含まれる遺物は少ない。1～4層の遺物はAの埋没過程において、7層が堆積する凹地に後から投棄されたものと推定される。

土器は、Ⅱ群3類とⅦ群が主体である。第49図176・177・179・180・182は同一個体である。胴部中央付近に横位の波状沈線がめぐり、上半部にLRL縄文の充填された独立区画文がA技法で描かれる。B3技法の浅鉢形土器(175)やB1技法のものも含まれる。183はD技法により胴部の上下を区画する波状沈線が描かれている。

石器類では接合資料が3件あった。いずれもSI33竪穴住居跡と遺構外出土のものとの接合である（第50図191・192)。第51図194BはSB22建物跡のすぐ東側から出土した剥片である。195は石核C類である。

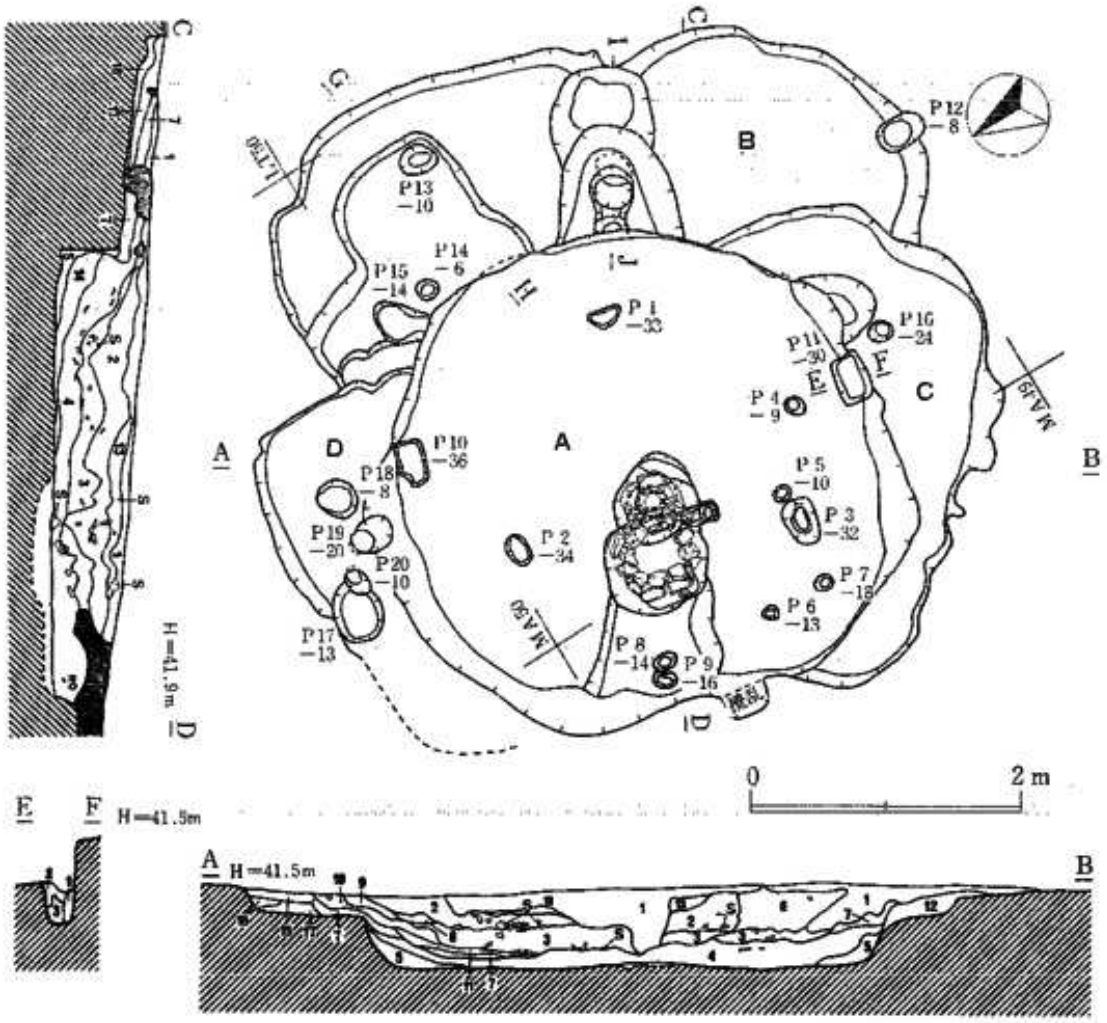
SI70（A・B・C・D）竪穴住居跡　（第52図～72図・第82図・第118図）

LT49・50グリッドで検出した。丘陵中央平坦部の西側斜面にあり東側の平坦面にはSK96土坑をはさんでSB32建物跡が、北側にはSI100竪穴住居跡が近接する。

本遺構は4軒の竪穴住居跡の重複が認められた。新しい方から順にA・B・C・Dとする。確認面は第Ⅳ層上面である。

SI70A

平面形は径約3m70cmの円形で、床面積は約9.6㎡である。埋土は自然堆積で、遺物は1層～3層には多量に含まれている。最下層の5層には遺物を含まず、4層にも少ない。東側の壁より外側はSI70Bに貼り土をしている。床面は平坦で、壁は東側ではほぼ垂直に他は斜めに立ち



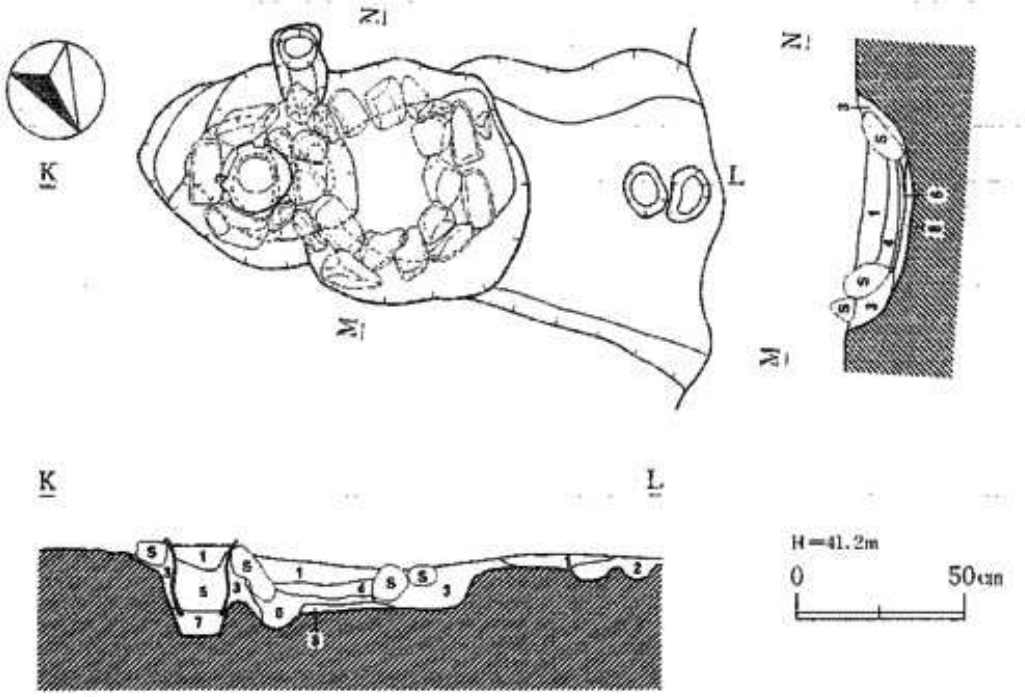
S I 7 0　A−B・C−D

1．黒褐色土（10YR2/3）しまりややなし。孔隙多。
2．にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまりあり。炭化物多量含む。
3．黒褐色土（10YR3/2）きわめてしまりあり。炭化物多量含む。
4．黄褐色土（10YR5/6）きわめてしまりあり。粘性大。炭化物多量含む。
5．明黄褐色土（10YR6/6）きわめてしまりあり。粘性あり。地山ブロックが多量に混入。崩壊土。黄褐色土（10YR5/6）多量混入。
6．褐色土　（10YR4/4）しまりややなし。孔隙多。炭化物少量含む。住居跡埋没後の倒木痕で、主に4層が掘り起こされたもの。
7．黄褐色土（10YR5/6）きわめてしまりあり。粘性ややあり。炭化物少量含む。地山ブロックが多量に混入。
8．褐色土　（10YR4/4）しまりややあり。粘性ややあり。炭化物微量含む。地山崩壊土が少量混入。
9．黄褐色土（10YR5/6）しまりあり。粘性あり。炭化物微量含む。
10．褐色土　（10YR4/4）きわめてしまりあり。粘性あり。炭化物多量含む。
11．にぶい黄褐色土（10YR5/4）きわめてしまりあり。粘性あり。炭化物多量含む。地山崩壊土が少量混入。
12．黄褐色土（10YR5/6）しまりあり。粘性あり。炭化物微量含む。地山崩壊土が多量に混入。S I 7 0Cの埋土。
13．暗褐色土（10YR3/3）しまりややあり。炭化物微量含む。
14．褐色土　（10YR4/4）きわめてしまりあり。粘性ややあり。炭化物多量含む。地山崩壊土が混入。
15．黄褐色土（10YR5/6）きわめてしまりあり。粘性ややあり。地山崩壊土が多量に混入。S I 7 0Dの埋土。
16．7層と同じ。S I 7 0Dの埋土。
17．褐色土　（10YR4/6）しまりあり。粘性あり。地山崩壊土が少量混入。S I 7 0Dの埋土。
18．黄褐色土（10YR5/8）きわめてしまりあり。粘性ややあり。地山ブロックが多量に混入。S I 7 0Dの埋土。

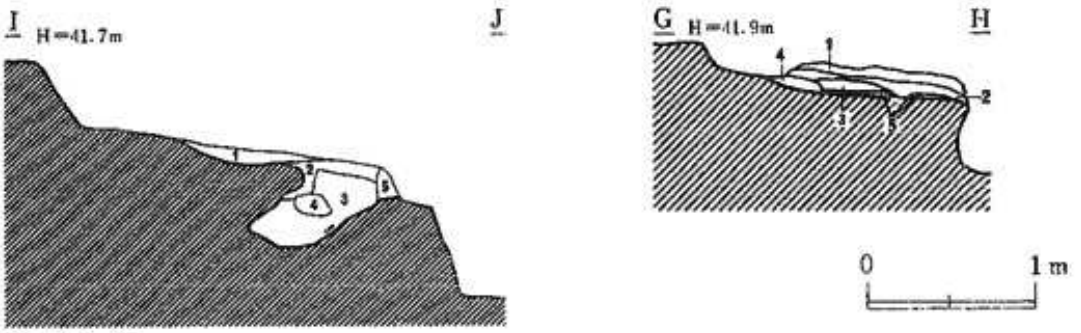
S I 7 0　E−F

1．暗褐色土　（10YR3/3）しまりあり。炭化物少量含む。地山ブロックが混入。
2．明黄褐色土（10YR6/8）きわめてしまりあり。地山ブロックが多量に混入。
3．にぶい黄褐色土（10YR5/4）しまりあり。地山ブロックが多量に混入。

第52図　SI70竪穴住居跡



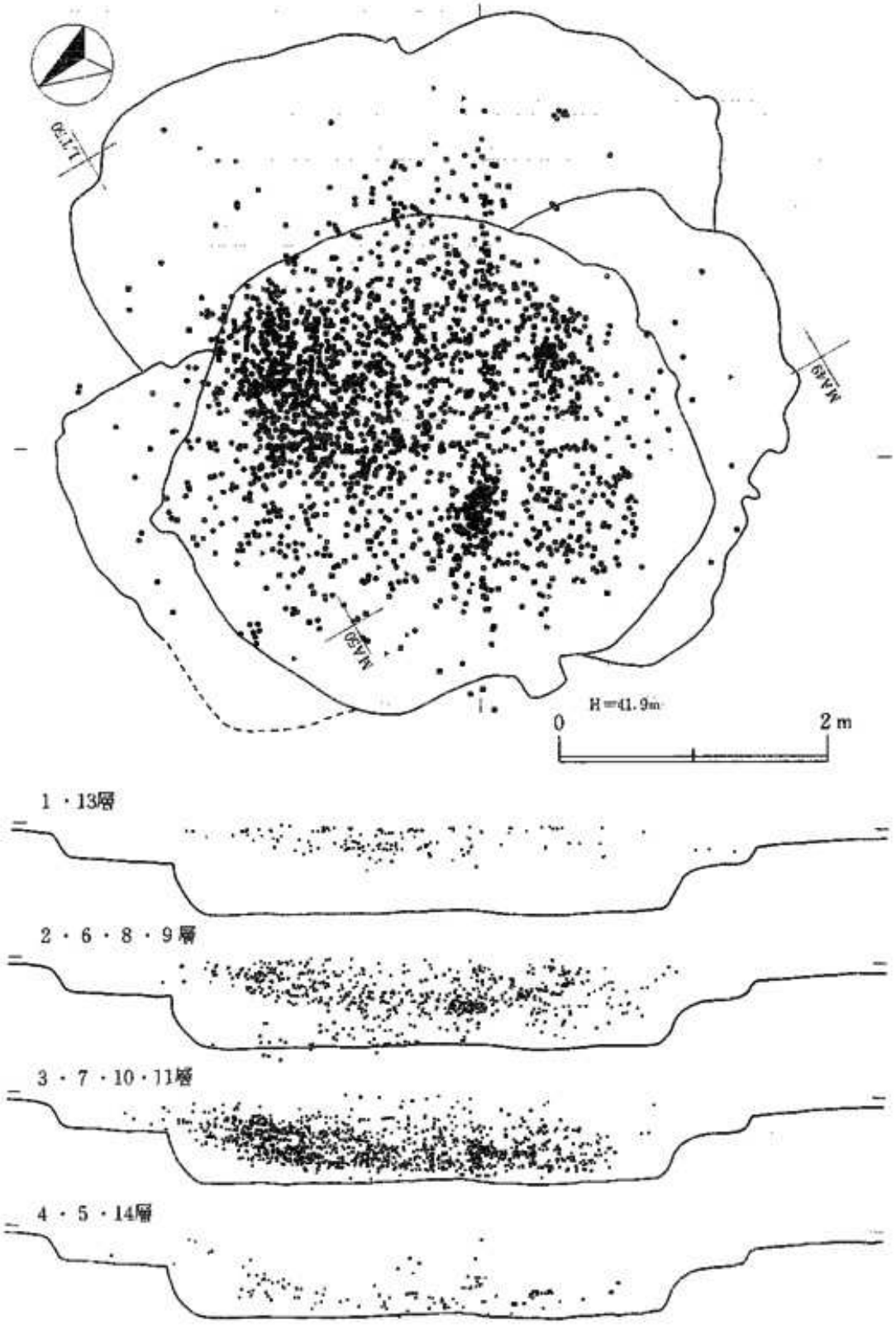
S I 7 0 A 炉
1．褐色土　(10YR4/4) しまりあり。炭化物多量含む。地山崩壊土が混入。
2．褐色土　(10YR4/4) しまりあり。炭化物多量含む。地山崩壊土が多量に混入。
3．褐色土　(10YR4/6) きわめてしまりあり。炭化物多量含む。地山ブロックが多量に混入。
4．黒褐色土 (10YR2/3) 焼土粒多量含む。炭化物多量含む。地山崩壊土が混入。
5．褐色土 (10YR1.7/1) 炭化物層
6．明赤褐色土 (5YR5/3) 焼土。しまりあり。炭化物多量含む。地山崩壊土が混入。
7．明黄褐色土 (10YR6/6) しまりあり。粘性あり。炭化物多量含む。砂が混入。
8．地山が火熱を受け赤変している。炭化物少量含む。



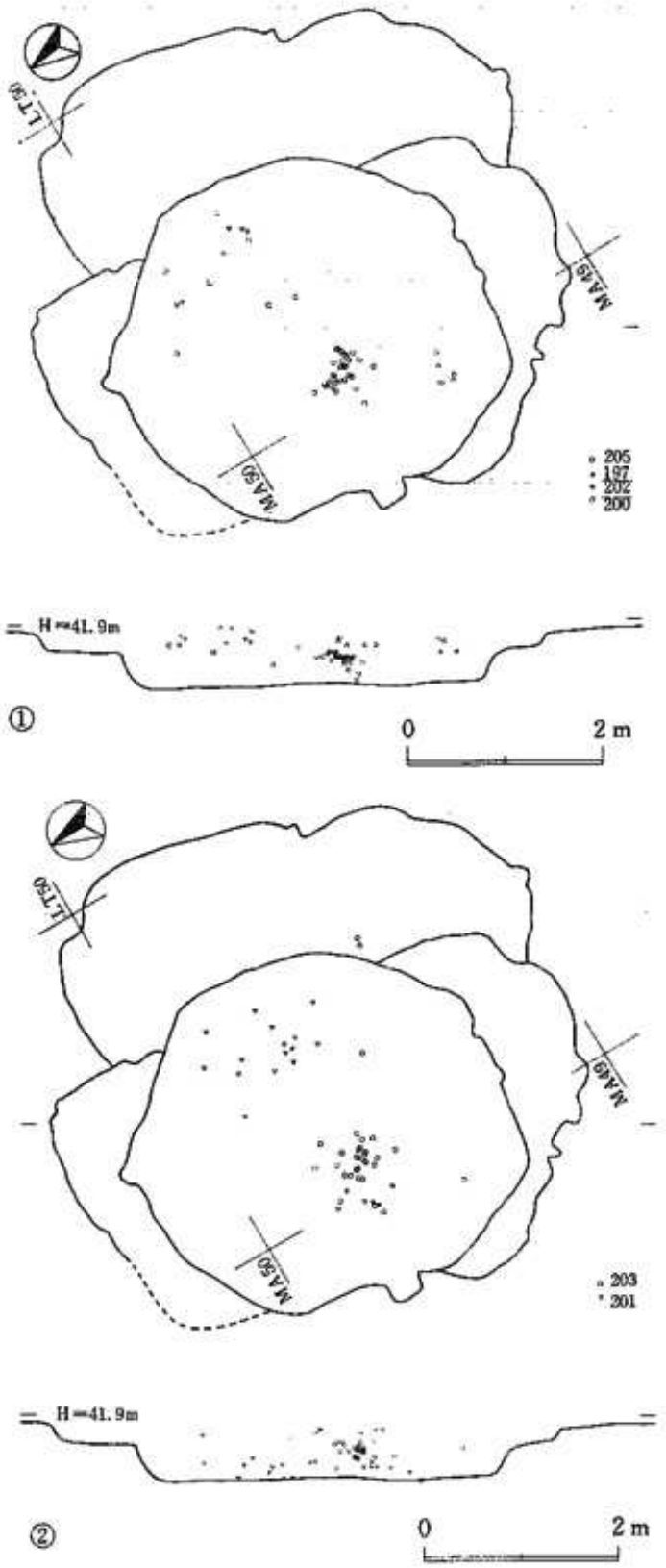
S I 7 0 B 炉
1．黒褐色土 (10YR2/3) しまりあり。焼土粒少量含む。炭化物多量含む。地山崩壊土が混入。
2．にぶい黄褐色土 (10YR4/3) きわめてしまりあり。炭化物少量含む。地山崩壊土が少量混入。
3．褐色土　(10YR4/4) きわめてしまりあり。炭化物多量含む。地山崩壊土が多量に混入。
4．明黄褐色土 (10YR7/6) きわめてしまりあり。粘性大。
5．褐色土　(10YR4/4) きわめてしまりあり。もろい。焼土粒少量含む。炭化物多量含む。地山崩壊土が混入。

S I 7 0 B
1．黄褐色土 (10YR5/8) きわめてしまりあり。地山土を貼っている。
2．褐色土　(10YR4/6) きわめてしまりあり。炭化物微量含む。地山崩壊土が少量混入。S I 7 0 Bの埋土第1層。
3．褐色土　(10YR4/4) きわめてしまりあり。炭化物少量含む。地山崩壊土が少量混入。S I 7 0 Bの埋土第2層。
4．褐色土　(10YR4/4) しまりあり。炭化物少量含む。地山崩壊土が多量に混入。S I 7 0 Bの埋土第3層。
5．明黄褐色土 (10YR6/6) きわめてしまりあり。粘性ややあり。地山崩壊土が多量に混入。

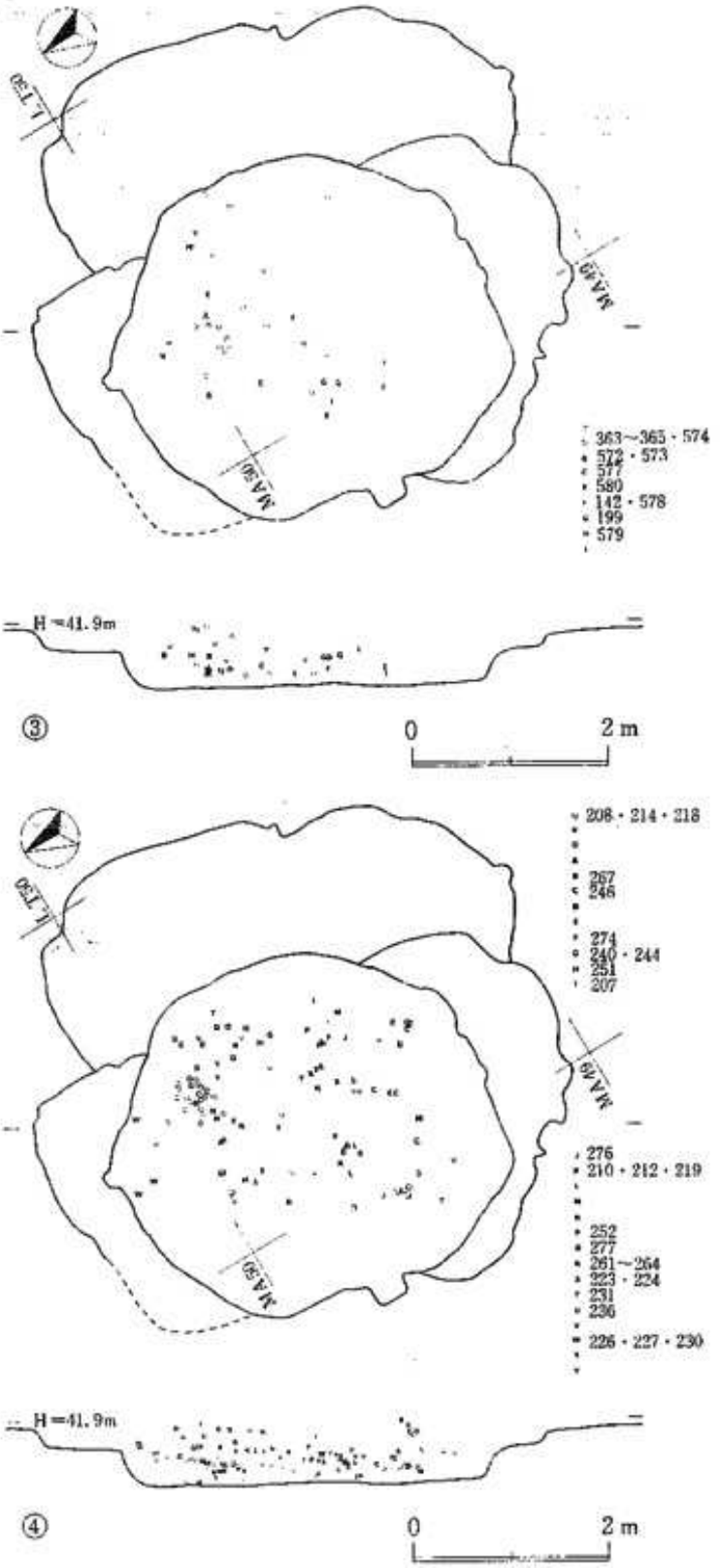
第53図　SI70竪穴住居跡炉



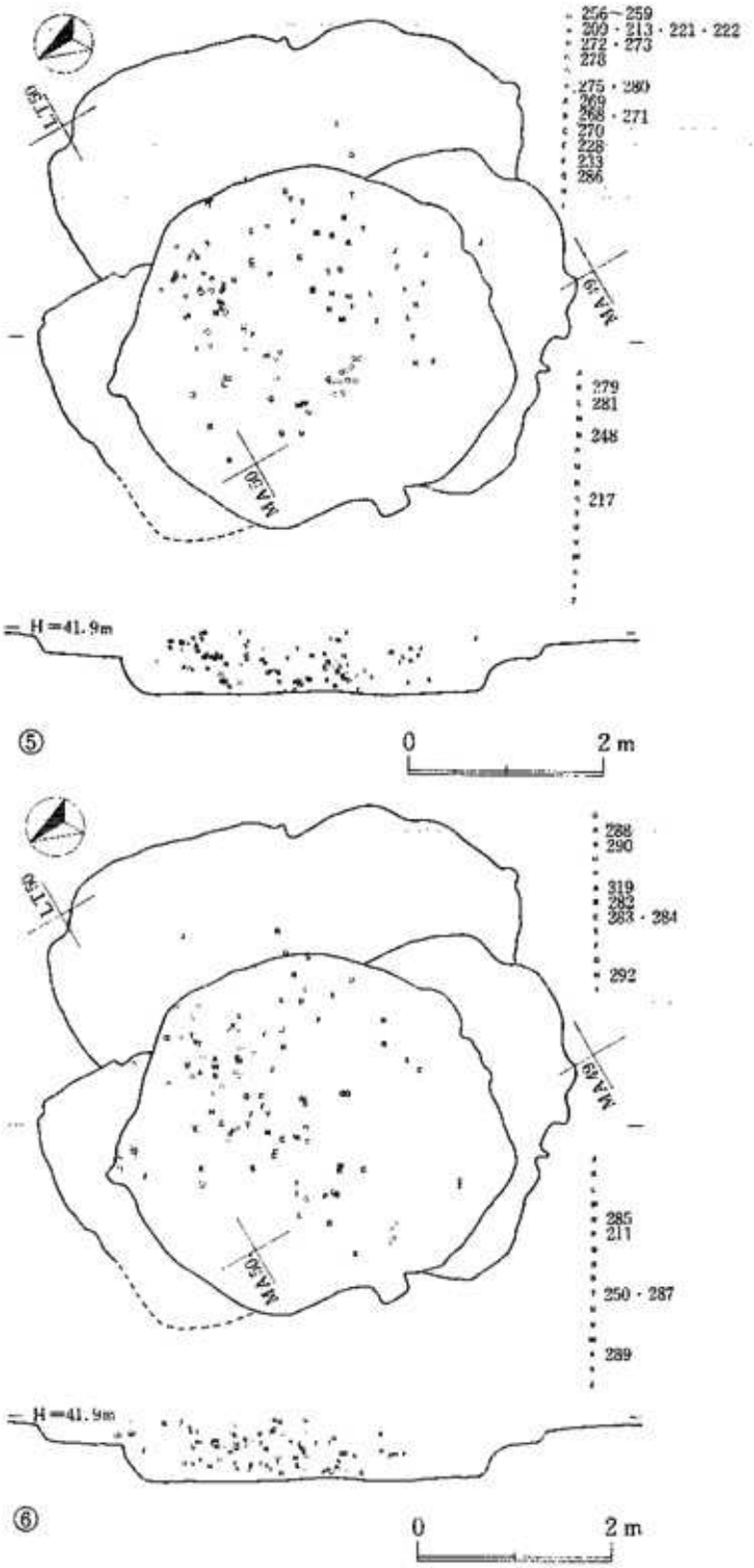
第54図　SI70竪穴住居跡遺物出土分布図



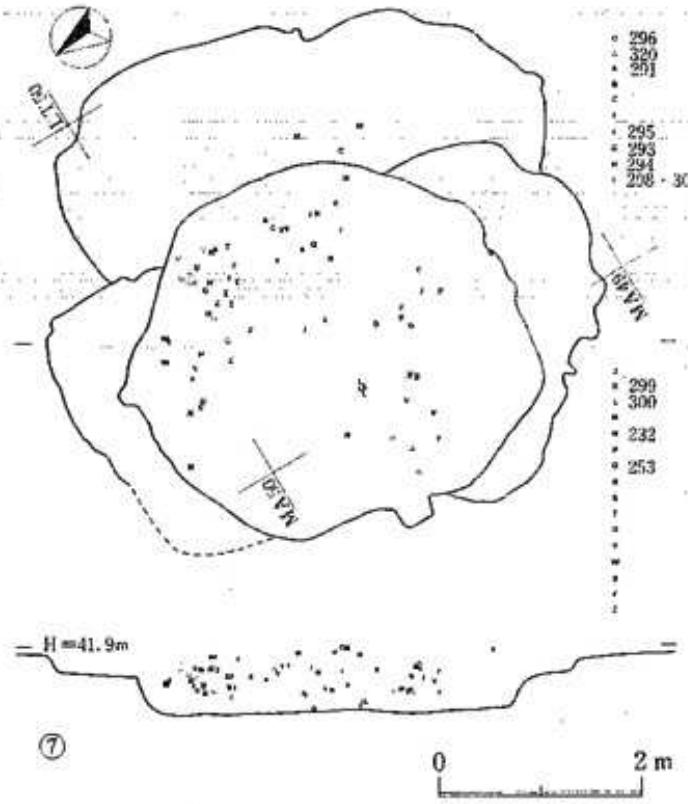
第55図　SI70竪穴住居跡接合・同一個体出土分布図(1)



第56図　SI70竪穴住居跡接合・同一個体出土分布図(2)



第57図　SI70竪穴住居跡接合・同一個体出土分布図(3)



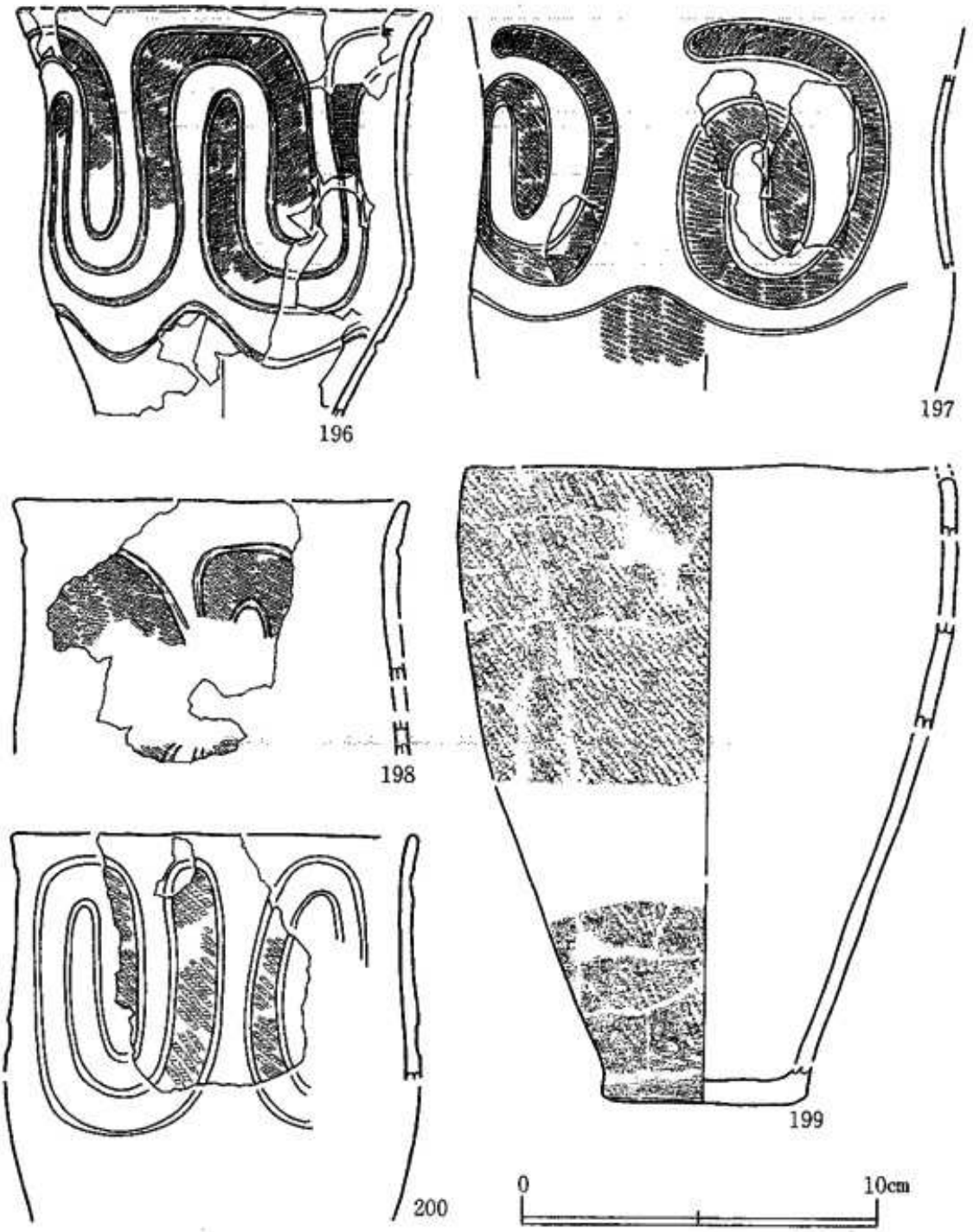
第58図　SI70竪穴住居跡接合・同一個体出土分布図(4)

上がり、壁高は東側で約46cm、西側で約16cmである。柱穴はP1～3およびP10・11が主柱穴である。壁際にある平面形が長方形のP10・11は断面観察で柱穴の中に地山土を詰め込んで板状の柱を立てた痕跡が認められた。

床面中央から西側に埋設土器、石組部、掘り込み部からなる複式炉があり、掘り込み部はやや広がりながら西側壁まで達している。埋設土器は胴下部から下を欠く深鉢形土器で(196)、正立して埋設されており、その周囲を5個の石で囲っている。中には炭が厚く堆積していた。石囲部は19個の石を組並べて作られている。石は被熱し赤化しており石囲部の中央には焼土が形成されている。

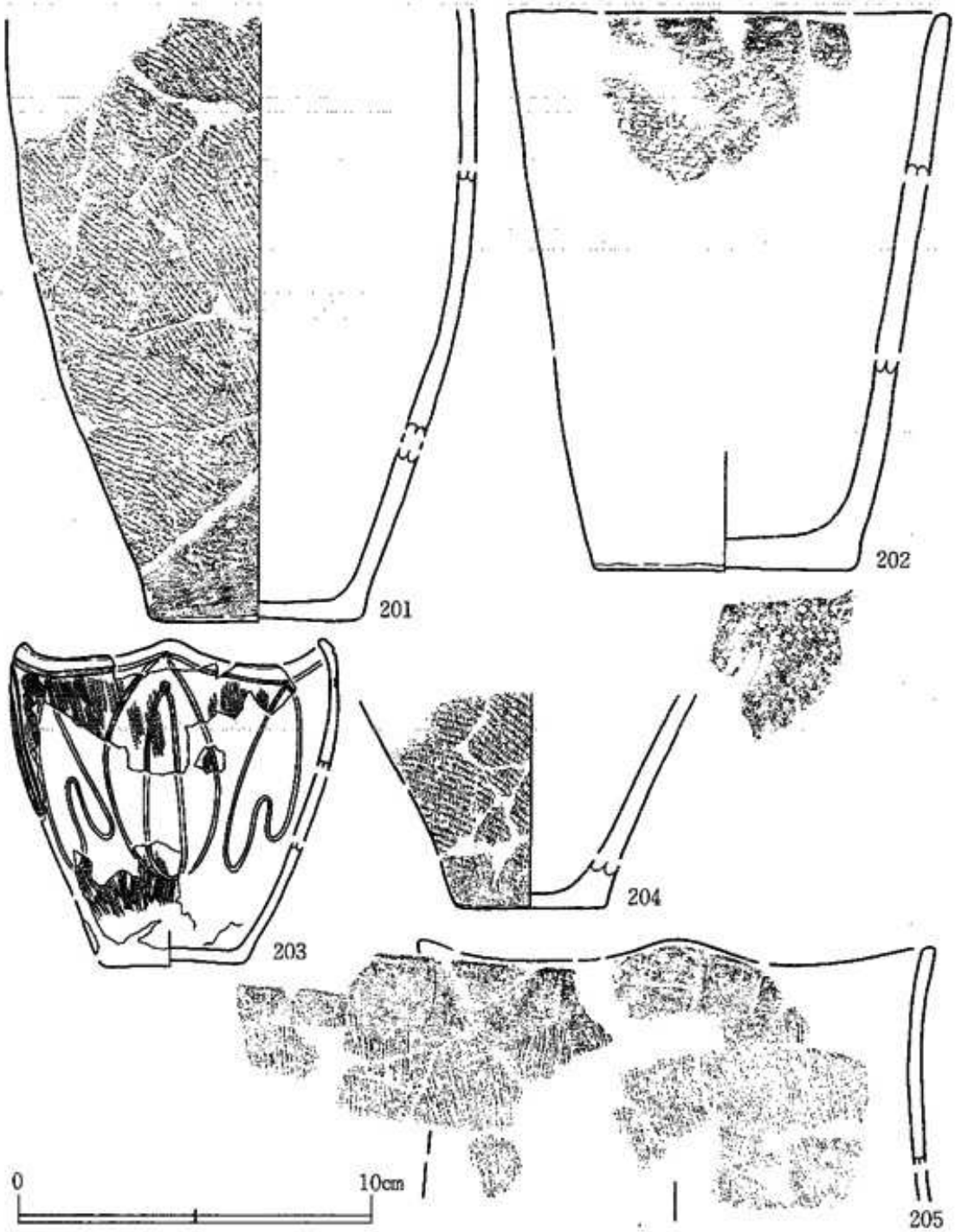
SI70B

SI70Aの東側で検出した。西側の大部分はSI70Aによって切られている。推定される平面形は隅丸方形で、SI70Aよりも大型である。東側の壁から中央にかけて複式炉の痕跡が残る。床面は平坦で緩やかに西側に傾斜するが、SI70C及びDの上に貼り土をして平坦面を作っている。柱穴はP12～15の4本を検出したが、配置は不明である。複式炉の埋設土器を抜き取ったピットが東側に斜めに入り込んでいる。石囲部はなく、埋設土器の東側に掘り込み部があって壁まで続いている。



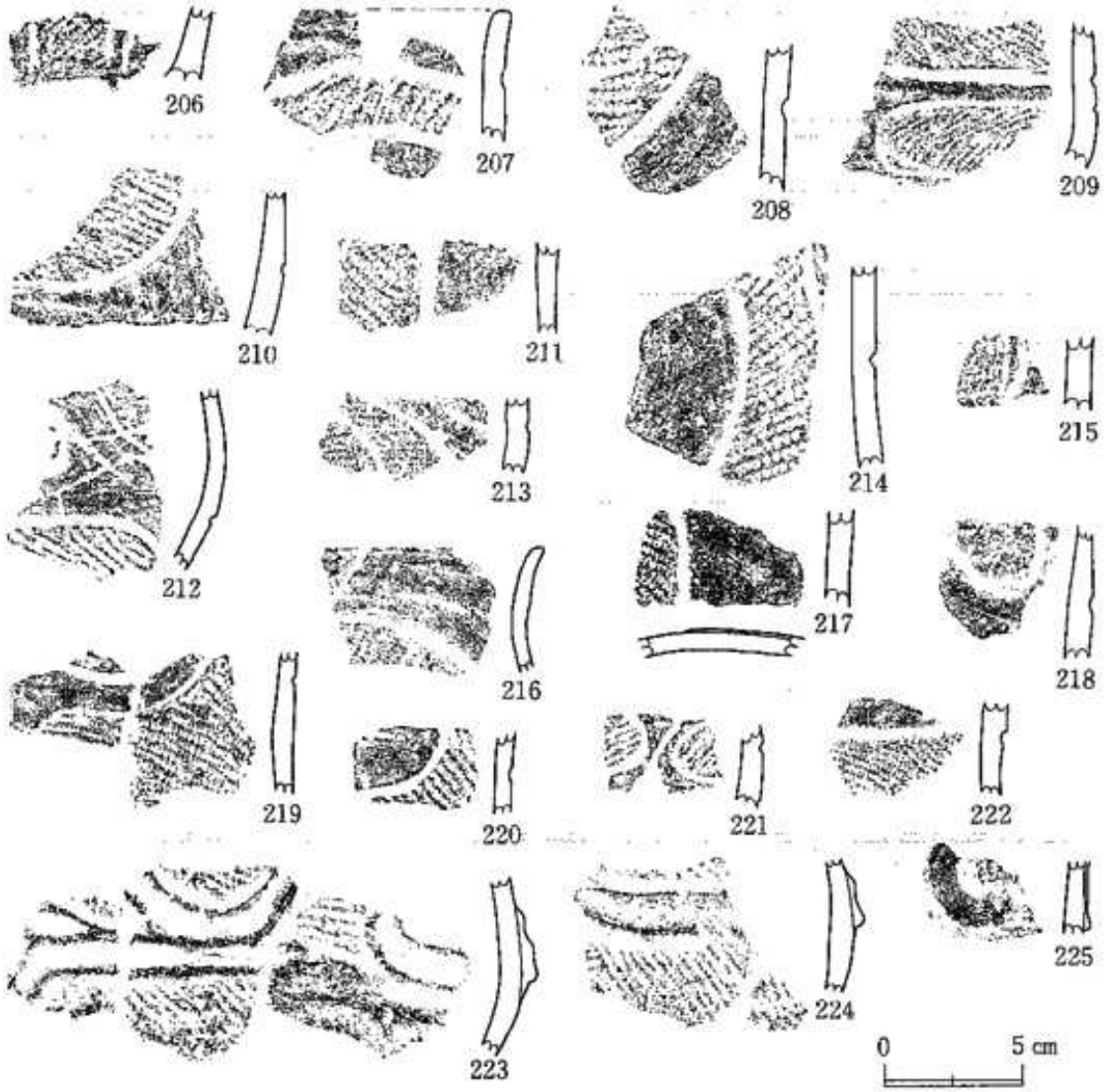
番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
196	S I 70	炉埋設	深鉢	II	3	A	縄文部	
197	〃	3 6	〃	II	3	A	〃	表・裏
198	〃	3	〃	II	3	A	〃	
199	〃	2	〃	VI	口a 胴a		L R横回転	
200	〃	2 - 3		II	3	A (Ⅱ, B 1)	縄文部	

第59図　SI70竪穴住居跡出土土器(1)



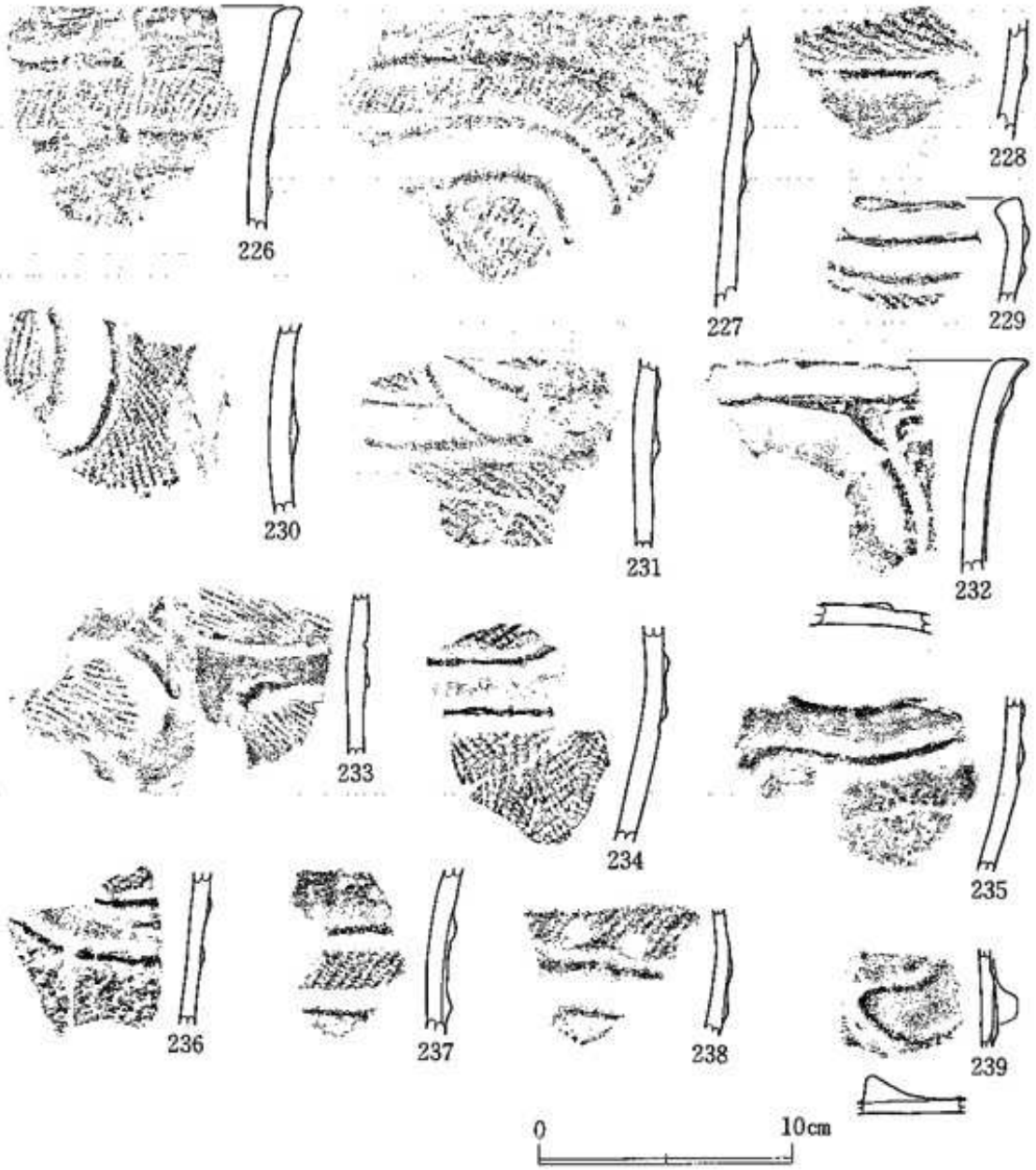
番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
201	S I 70	3	深鉢	VI	類c		LR縦回転	
202	〃	1・2	〃	VI	LJb 類a		RL縦回転	
203	〃	2・3	〃	III		C1	無文部	
204	〃	3	〃	VI	類a		LR横回転	内・外
205	〃	2	〃	VI	LJb		R撚糸文	

第60図　SI70竪穴住居跡出土土器(2)



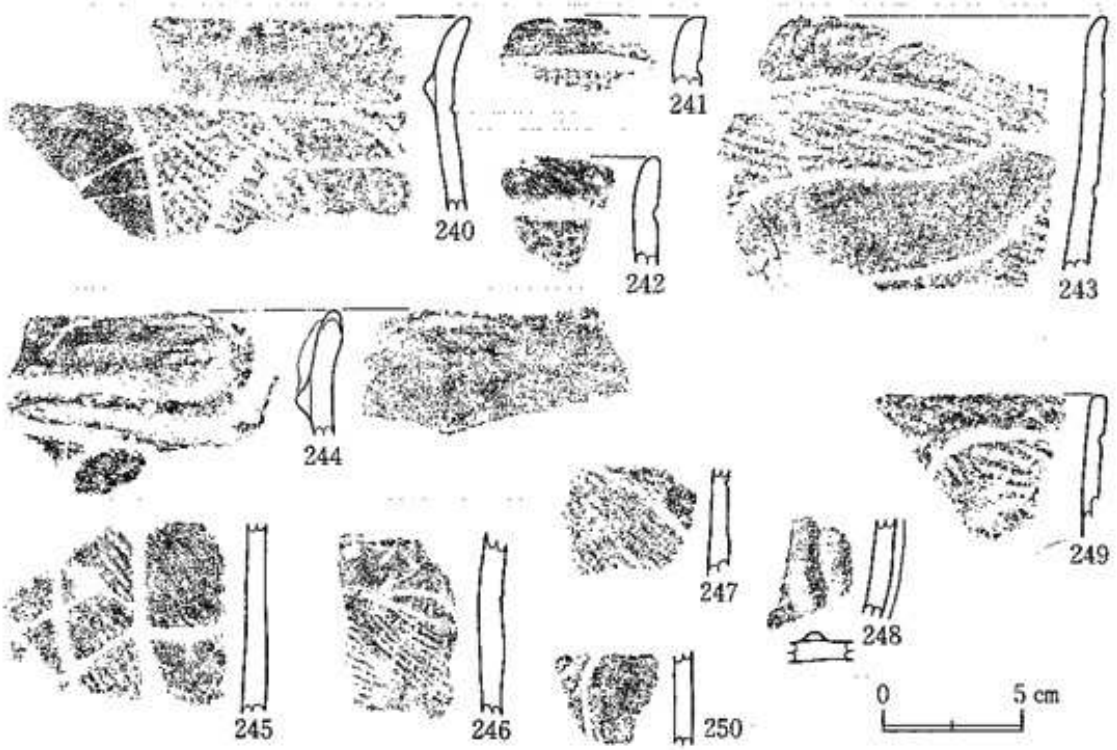
番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
206	S I 70	3	深鉢	II	2	A	縦位平行沈線文	
207	〃	3	〃	II	3	A	縄文部	
208	〃	3	〃	II	3	A	〃	
209	〃	3	〃	II	3	A	〃	
210	〃	3	〃	II	3	A	〃	表
211	〃		〃	II	3	A	不明	表
212	〃	3	〃	II	3	A	縄文部	表
213	〃	2	〃	II	3	A	〃	
214	〃	3	〃	II	3	A	〃	
215	〃	1	〃	II	3	B 1	不明	
216	〃		〃	II	3	B 1	縄文部	
217	〃		〃	II	3	B 1	〃	表・裏
218	〃	3	〃	II	3	B 1	〃	
219	〃	3	〃	II	3	A	〃	
220	〃	4	〃	II	3	B 1	〃	
221	〃	3	〃	II	3	B 1	〃	
222	〃	2	〃	II	3	B 1	不明	
223	〃	3・2	〃	II	3	B 2	無文部	表
224	〃		〃	II	3	B 2	〃	表
225	〃		〃	II	3	B 2	〃	

第61図　SI70竪穴住居跡出土土器(3)



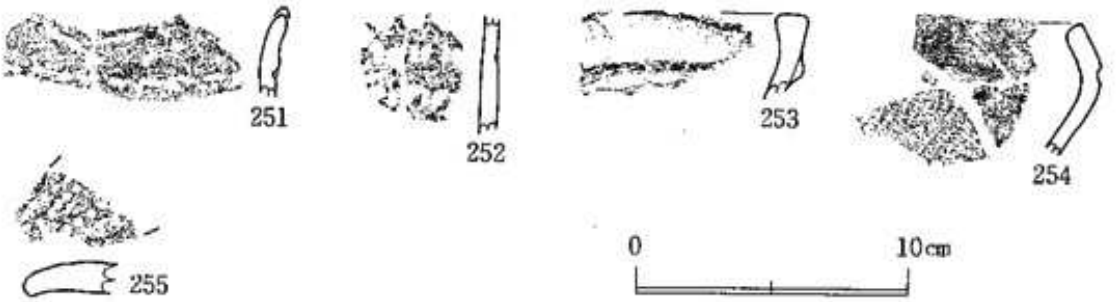
番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
226	S I 70	3	深鉢	II	3	B 3	不　明	
227	〃	3	〃	II	3	〃	縄文部	表
228	〃	4	〃	II	3	〃	不　明	表・裏
229	〃	3	〃	II	3	〃	〃	表
230	〃		〃	II	3	〃	無文部	表
231	〃	3	〃	II	3	〃	〃	
232	〃	3	〃	II	3	〃	〃	
233	〃	3	〃	II	3	〃	縄文部	
234	〃		〃	II	3	〃	〃	表
235	〃		〃	II	3	〃	無文部	表
236	〃	3	〃	II	3	〃	〃	表
237	〃		〃	II	3	〃	不　明	
238	〃	1	〃	II	3	〃	〃	
239	〃		〃	II	3	〃	無文部	

第62図　SI70竪穴住居跡出土土器(4)



番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
240	S I 70	3	深鉢	Ⅱ	3	G	不　明	
241	〃	2	〃	Ⅱ	3	G	〃	
242	〃	3	〃	Ⅱ	3	G	〃	
243	〃	3	〃	Ⅱ	3	G	縄文部	
244	〃	3	〃	Ⅱ	3	G	不　明	
245	〃	4	〃	Ⅱ	3	G	〃	炭
246	〃	3	〃	Ⅱ	3	G	〃	
247	〃		〃	Ⅱ	3	G	〃	
248	〃		〃	Ⅱ	3	B 3	〃	炭
249	〃	3	〃	Ⅱ	3	G	縄文部	
250	〃		〃	Ⅱ	3	G	無文部	

第63図　SI70竪穴住居跡出土土器(5)

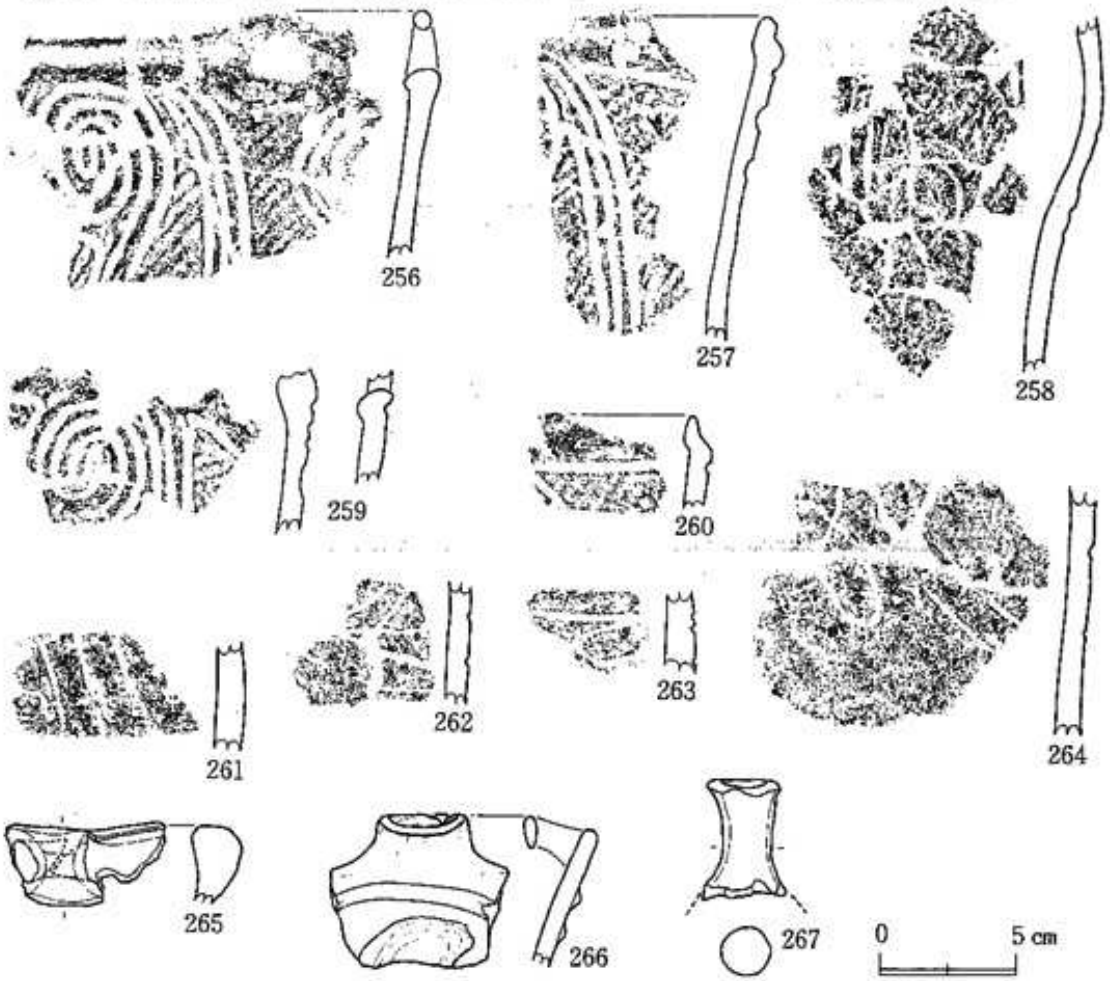


番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
251	S I 70	2	深鉢	Ⅲ		H	横位刺突列	
252	〃	3	〃	Ⅲ		H	〃	
253	〃	3	浅鉢	Ⅱ	3	B 3	不　明	
254	〃	3	〃	Ⅱ	3	G	縄文部	
255	〃	3	土製品			H		

第64図　SI70竪穴住居跡出土土器(6)・土製品

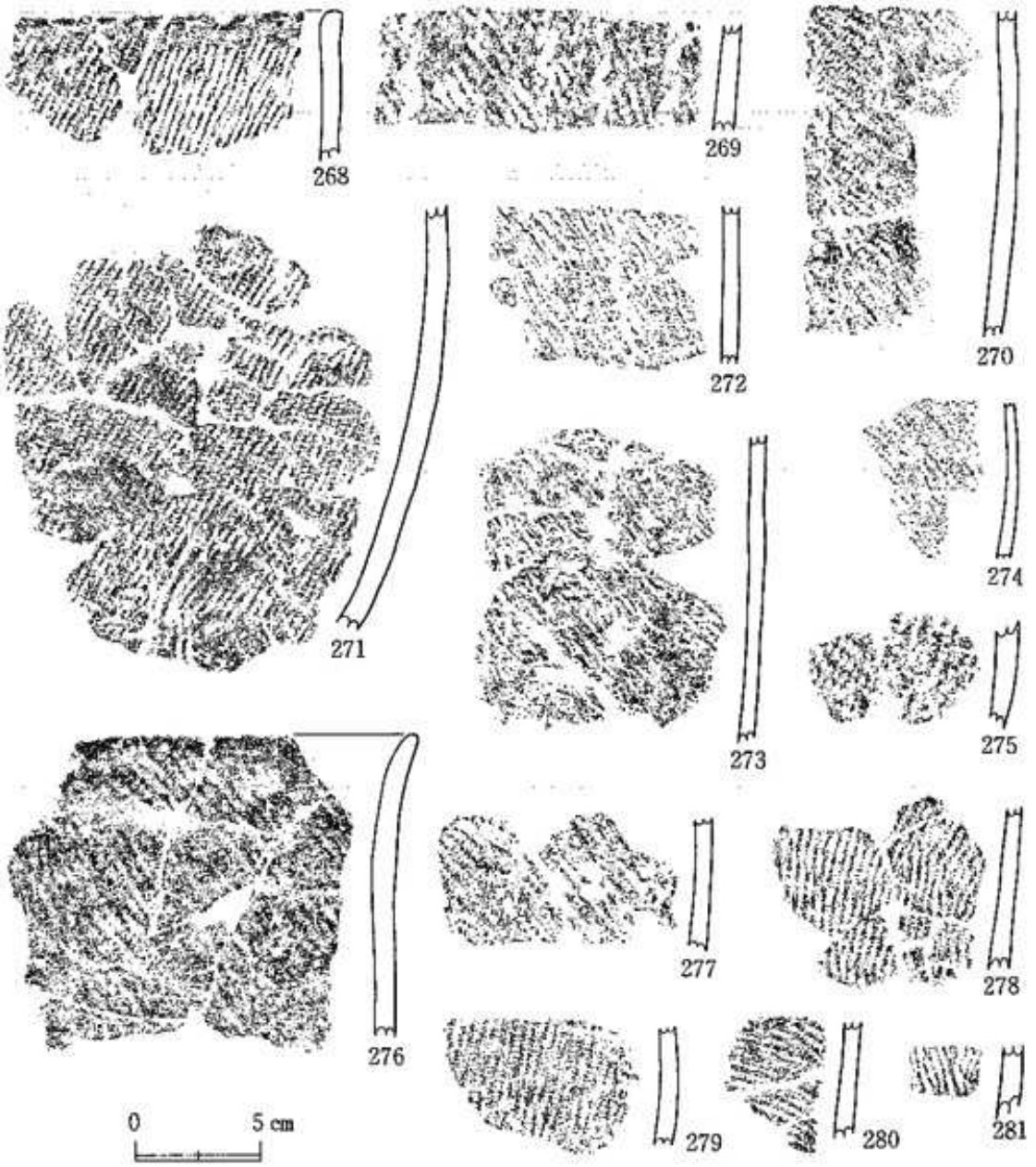
SI70C・SI70D

直接の切り合いはない。どちらもSI70Bより古い遺構である。SI70CはSI70Aよりも南西に張り出している部分が残存する。壁は約10cmで、床面はやや北側に傾斜するが平坦である。床面の範囲にはP16があるが、SI70Aの側に傾斜していること、SI70AのP11は板状のものを建てた痕跡があり、支柱としては強度にかけることからSI70AのP11を外側から支える柱の柱穴とも考



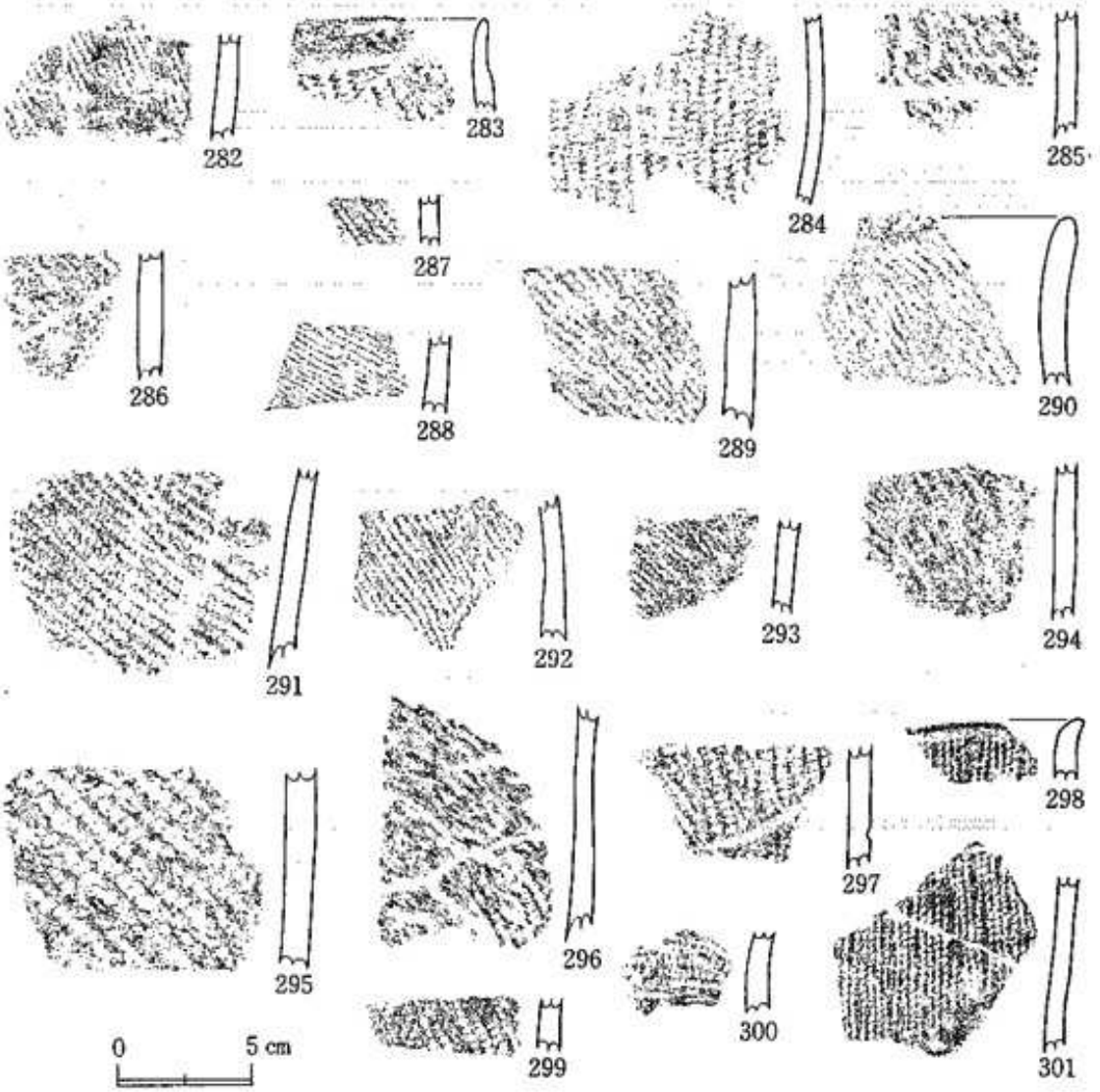
番号	出土位置	層位	器種	胎	焼	文様技法	文様表現	炭化物付着
256	SI70	3	深鉢	Ⅲ		D		表
257	〃	3	〃	Ⅲ		D		表
258	〃	2	〃	Ⅲ		D		
259	〃	2	〃	Ⅲ		D		表・裏
260	〃	3	〃	Ⅲ		D		表・裏
261	〃	1	〃	Ⅲ		D		
262	〃	3	〃	Ⅲ		D		
263	〃	2	〃	Ⅲ		D		
264	〃	2・3	〃	Ⅲ		D		
265	〃	1	〃	Ⅲ				
266	〃	3	〃	Ⅲ				
267	〃	1	底	Ⅲ				

第65図　SI70竪穴住居跡出土土器(7)



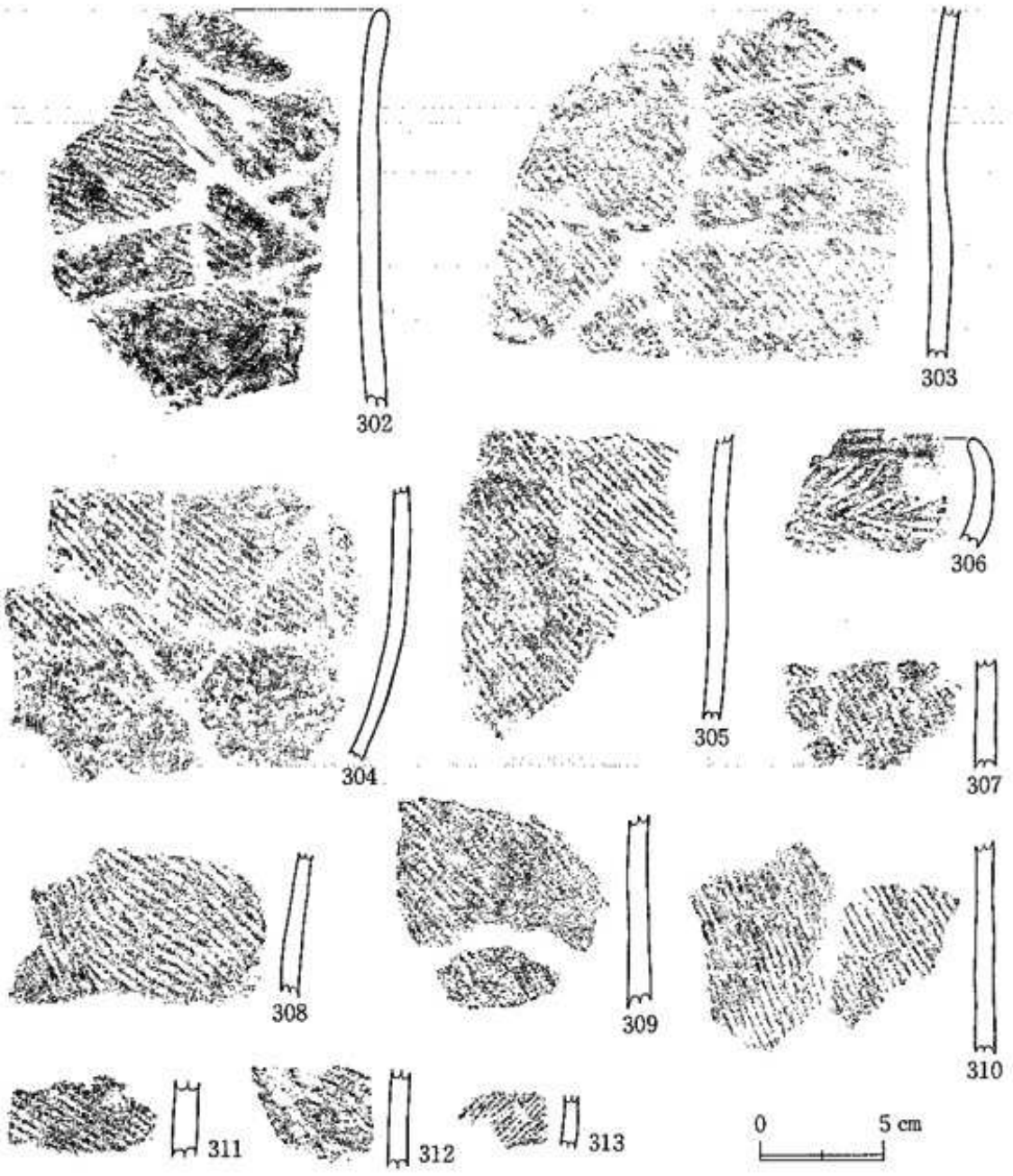
番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
268	S I 70	2・4	深鉢	VI	口b		RL縦回転	表
269	〃	3	〃	VI	胴a		LR縦回転	表
270	〃		〃	VI	胴a		〃	表
271	〃	4	〃	VI	胴a		RL縦回転	表
272	〃	3	〃	VI	胴a		LR縦回転	
273	〃	3	〃	VI	胴a		〃	表
274	〃	3	〃	VI	胴a		〃	
275	〃	1	〃	VI	胴a		RL横回転	表
276	〃	3	〃	VI	口b		LR縦回転	
277	〃	2	〃	VI	胴a		〃	
278	〃	3	〃	VI	胴a		RL縦回転	
279	〃	2	〃	VI	胴a		〃	表
280	〃	3	〃	VI	胴a		RL縦回転	
281	〃	3	〃	VI	胴a		RL異方向回転	

第66図　SI70竪穴住居跡出土土器(8)



番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
282	S I 70		深鉢	VI	綱a		LR縦回転	表
283	〃	1	〃	VI	口c		RL横回転	表
284	〃	1	〃	VI	綱a		RL縦回転	表
285	〃	2	〃	VI	綱a		LR縦回転	
286	〃	3・2	〃	VI	綱a		〃	
287	〃	3	〃	VI	綱a		〃	
288	〃		〃	VI	綱a		〃	表
289	〃	3	〃	VI	綱a		〃	
290	〃	2	〃	VI	口b		〃	
291	〃		〃	VI	綱a		〃	
292	〃	3	〃	VI	綱a		〃	
293	〃	1	〃	VI	綱a		〃	
294	〃	3	〃	VI	綱a		〃	
295	〃	3	〃	VI	綱a		〃	
296	〃	3	〃	VI	綱a		〃	表
297	〃		〃	VI	綱a		〃	
298	〃	3	〃	VI	口a		L撚糸文	
299	〃	2	〃	VI	綱b		LR縦回転	
300	〃	3	〃	VI	綱b		RL斜回転	
301	〃	3	〃	VI	綱b		L撚糸文	

第67図　SI70竪穴住居跡出土土器(9)



番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
302	S I 70	床面	深鉢	VI	口b		L R横回転	表
303	〃	3	〃	VI	胴a		〃	
304	〃		〃	VI	胴a		〃	
305	〃	3	〃	VI	胴a		〃	
306	〃	3	〃	VI	口b		L R異方向回転	表
307	〃	3	〃	VI	胴a		L R横回転	表
308	〃	3	〃	VI	胴a		L R多条横回転	
309	〃	4	〃	VI	胴a		L R横回転	表
310	〃	2	〃	VI	胴a		〃	表・裏
311	〃	3	〃	VI	胴a		〃	
312	〃	2	〃	VI	胴a		〃	
313	〃	1	〃	VI	胴a		L R横回転	

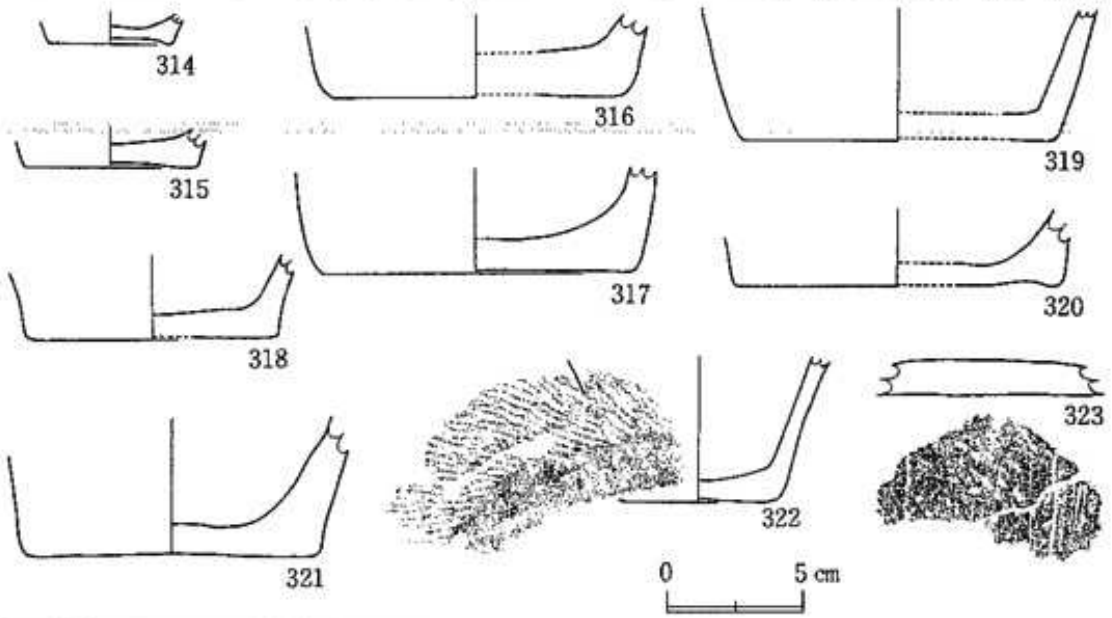
第68図　SI70竪穴住居跡出土土器(10)

えられる。

SI70DはSI70Aの北に張り出している部分が残存する。東側と北側は約10cmの壁が残存するが西側はしだいに壁が低くなりP17より西では消滅する。しかし平坦面の痕跡が認められ床面の範囲は推定できる。平面形は隅丸方形または楕円形であろう。P18・P19はSI70CにおけるP16に対応し、SI70AのP10を支える柱の柱穴の可能性があり、SI70Dの柱穴として考えられるのはP17・P20である。

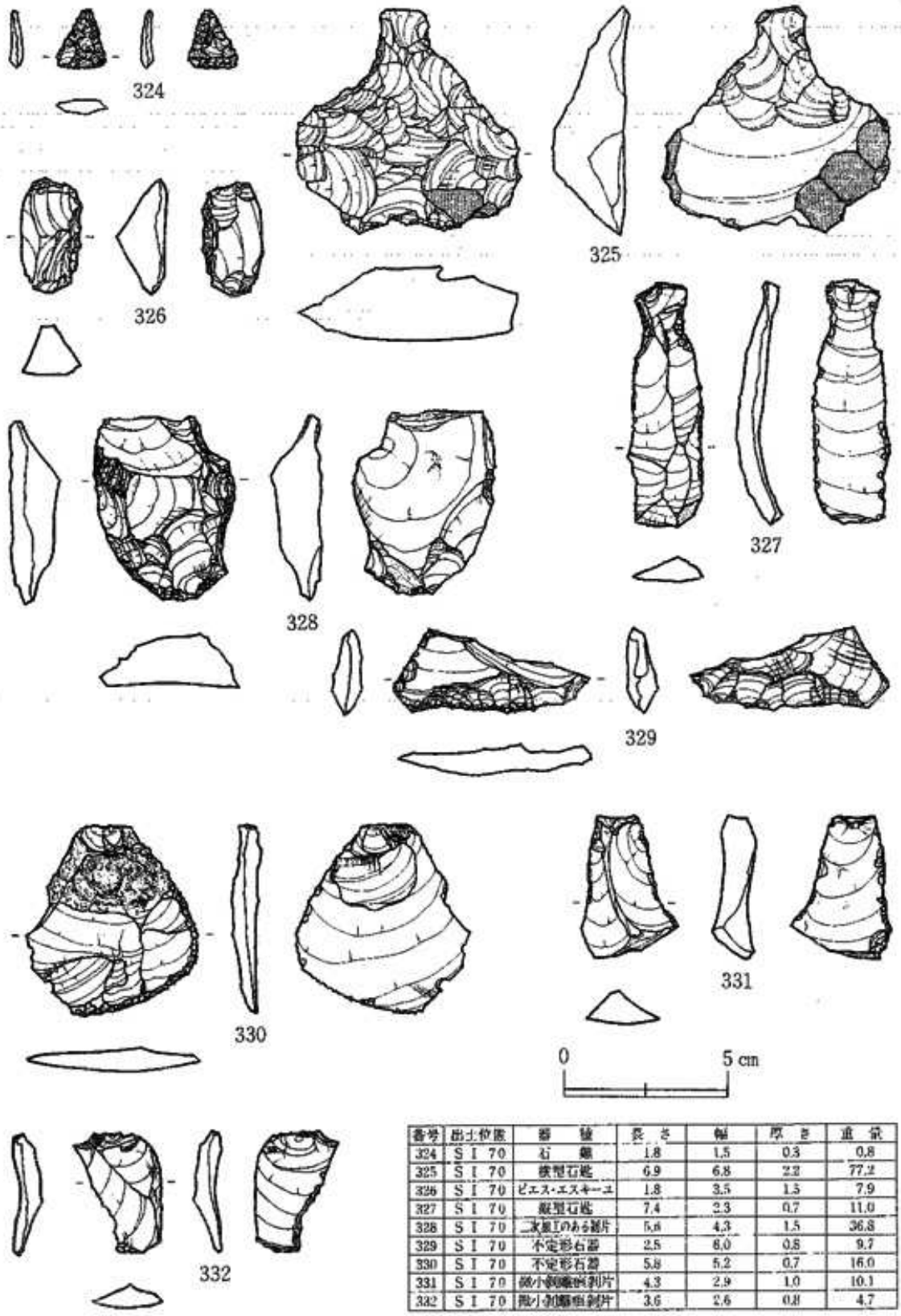
本遺構の埋土中からは大量の遺物が出土した。土器の出土状況はⅡ群・Ⅲ群が混在して出土しており、最下層には遺物が含まれないことから、竪穴住居跡が廃絶し、5層・4層が堆積した後、埋没しきらない状態がある程度続いた結果西側斜面の下り際に形成された凹地となり、そこに多量の遺物が投棄されたものと推定する。他の遺構（SB22建物跡、SI20・SI73・SI75・SI100竪穴住居跡）出土土器と接合・同一個体のものがある。

出土土器はⅥ群以外ではⅡ群3類が最も多く、次いでⅢ群である。第59図196は炉埋設土器である。深鉢形土器の胴部を波状沈線で区切り上半部にA技法で入組横S字状文を描く。文様は縄文部で表現される。下半部は縄文が施文されていると思われるが、表面の磨滅が著しく判別



番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
314	SI70	2	深鉢	Ⅵ	底a			
315	〃	4	〃	Ⅵ	底a			
316	〃	2	〃	Ⅵ	底a			
317	〃	3	〃	Ⅵ	底b			内
318	〃	3	〃	Ⅵ	底a			
319	〃	3	〃	Ⅵ	底a			
320	〃	1・3	〃	Ⅵ	底a			
321	〃	3	〃	Ⅵ	底a			
322	〃	3	〃	Ⅵ	底a		RL横回転	
323	〃	1	〃	Ⅵ	底c			

第69図　SI70竪穴住居跡出土土器(11)

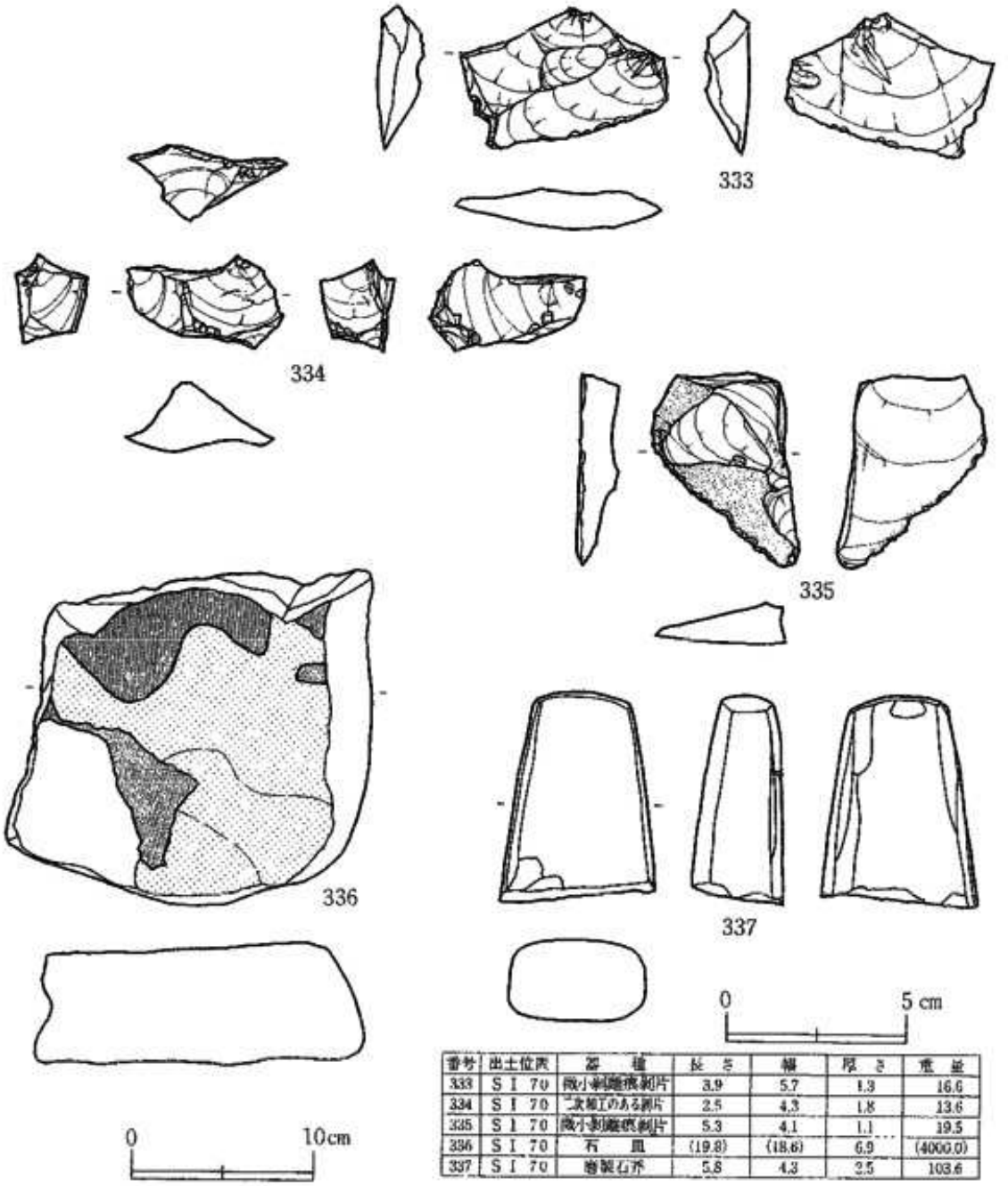


番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
324	S I 70	石鏃	1.8	1.5	0.3	0.8
325	S I 70	楔型石器	6.9	6.8	2.2	77.2
326	S I 70	ピエス・エスキーユ	1.8	3.5	1.5	7.9
327	S I 70	楔型石器	7.4	2.3	0.7	11.0
328	S I 70	二次加工のある剥片	5.6	4.3	1.5	36.8
329	S I 70	不定形石器	2.5	8.0	0.8	9.7
330	S I 70	不定形石器	5.8	5.2	0.7	16.0
331	S I 70	微小剥離痕有剥片	4.3	2.9	1.0	10.1
332	S I 70	微小剥離痕有剥片	3.6	2.6	0.8	4.7

第70図　SI70竪穴住居跡出土石器(1)

できない。197・200は胴上半部に逆e字状文が描かれている。200も197と同様に波状沈線で上下を区画し、下半部には縄文を施文するものであろう。Ⅱ群3類の破片ではA技法とB1・B3技法が多い。

第61図223~255は同一個体でB2技法の特徴をよく表している。223は横位にめぐる隆帯によって胴部が上下に区画され、胴上半には無文部の粘土隆帯によって文様が描かれ、下半は縦回転のLR縄文が施文されるが、隆帯の側面にも縄文が施文されており、隆帯貼付後に縄文が充填さ



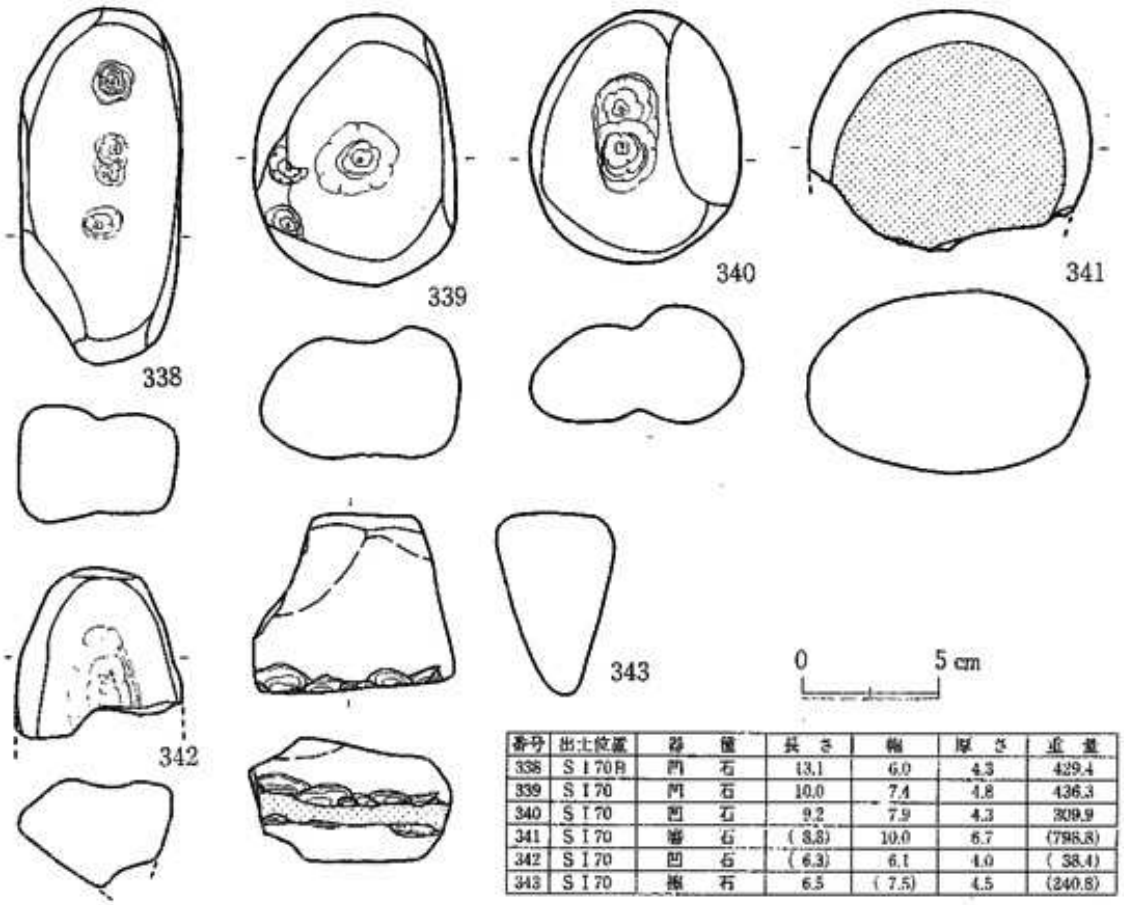
番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
333	S I 70	微小剥離痕剥片	3.9	5.7	1.3	16.6
334	S I 70	二次加工のある剥片	2.5	4.3	1.8	13.6
335	S I 70	微小剥離痕剥片	5.3	4.1	1.1	19.5
336	S I 70	石皿	(19.8)	(18.6)	6.9	(4000.0)
337	S I 70	磨製石斧	5.8	4.3	2.5	103.6

第71図　SI70竪穴住居跡出土石器(2)

れていることがわかる。胴上半ではこの後隆帯に沿って隆帯側面についた縄文を拭い取るように太い沈線が引かれる。第62図231はB3技法であるが、223～255とよく似ている。232は口縁部で無文部どうしの切り合いが認められる。233は縄文部の端部のみに隆帯を先に貼り付け、その後縄文を充填している。

第63図240・244は同一個体で口縁の内側に隆帯を貼り付けるものである。波頂部から曲線的に下がる隆帯が外反する口縁部のつけ根をめぐる。外面は口縁部に1本の横位沈線がめぐり、その下の弧を描く沈線によって区画された部分に縄文が施文されている。

第60図203、第64図252、第65図256～267はⅢ群土器である。第64図252は横から突き刺すような刺突を連続させている。刺突によって盛り上がった粘土が明瞭に残る。第60図203は内湾する波状口縁の4カ所の波頂部から弧状に下る沈線の中に、波頂部直下の刺突とそれを一端とする沈線で描かれた滴状のモチーフが入る。波頂部間には刺突を一端とする区画文が描かれる。文様は全体にR撚糸文を施文した後、細い沈線で描かれ、区画内は部分的に磨消されている。256～260は同一個体、261～264も同一個体である。256は横回転のLR縄文を全面に施文した後複数の太い沈線による文様を描いている。第66図268～第68図313はⅥ群である。



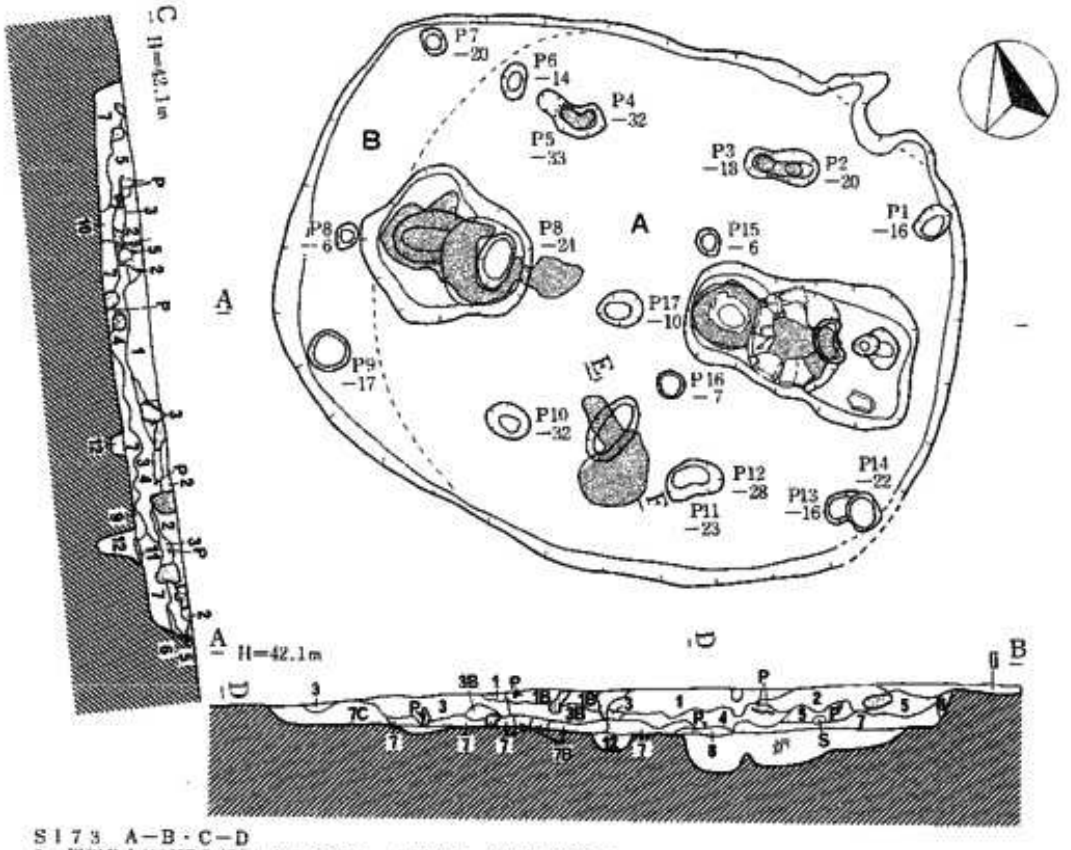
番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
338	S I 70 B	凹石	13.1	6.0	4.3	429.4
339	S I 70	凹石	10.0	7.4	4.8	436.3
340	S I 70	凹石	9.2	7.9	4.3	309.9
341	S I 70	磨石	(8.8)	10.0	6.7	(798.8)
342	S I 70	凹石	(6.3)	6.1	4.0	(38.4)
343	S I 70	敲石	6.5	(7.5)	4.5	(240.8)

第72図　SI70竪穴住居跡出土石器(3)

第64図255は三角形上製品で、表面に刺突を施している。

SI73（A・B）竪穴住居跡（第73図～第88図・第118図）

LR50・51、LS50・51グリッドで検出した。遺跡内の複式炉のある住居跡は、他にSI70・75竪穴住居跡があって、3軒はN-40°-Eの軸線上に約5mのほぼ等間隔に並び、SI73竪穴住居跡はその中間に位置する。南西にはSI100竪穴住居跡が近接する。本遺構は1度建て替えが行われ、

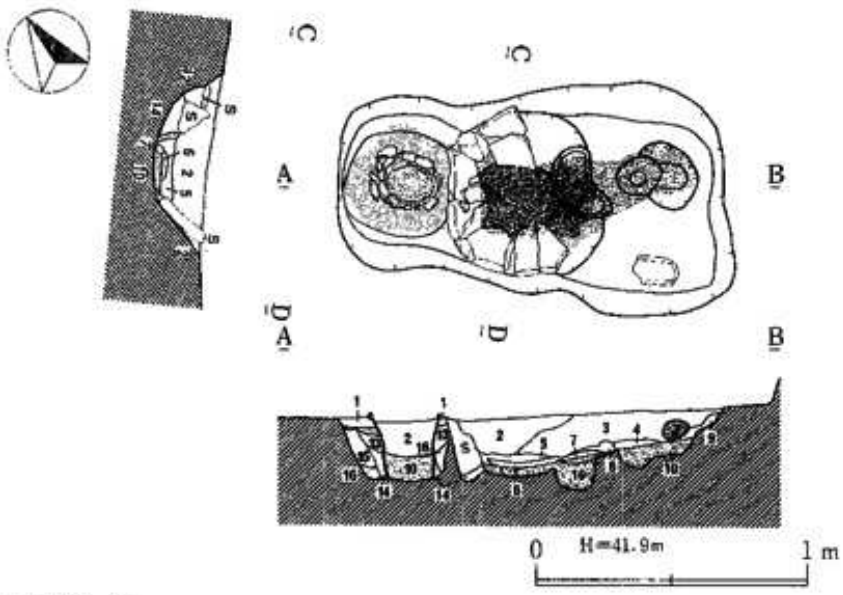


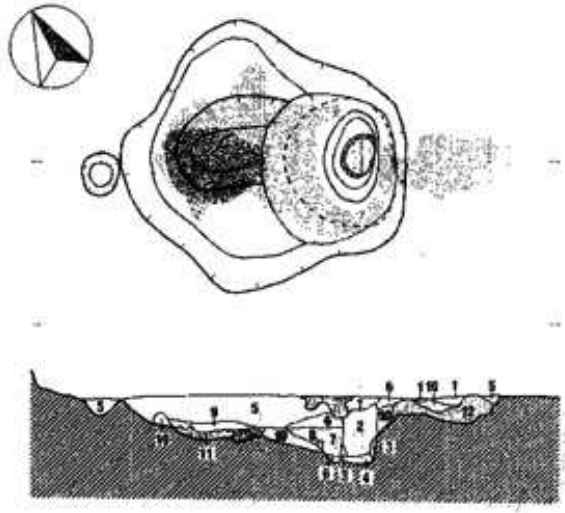
SI73　A−B・C−D
1．黒褐色土(10YR2/3)しまりややなし。粘性あり。炭化物微量含む。
2．暗褐色土(10YR3/4)しまりややあり。粘性ややあり。炭化物微量含む。
3．褐色土　(10YR4/4)しまりややあり。粘性あり。
4．褐色土　(10YR4/4)しまりあり。粘性あり。炭化物多量含む。
5．褐色土　(10YR4/6)しまりあり。粘性あり。褐色土(10YR4/4)混入。
6．褐色土　(10YR4/6)しまりややあり。粘性あり。地山崩壊土が多量に混入。
7．褐色土　(10YR4/6)きわめてしまりあり。粘性大。炭化物微量含む。
8．褐色土　(10YR4/6)きわめてしまりあり。粘性大。炭化物少量含む。
9．褐色土　(10YR4/4)しまりややあり。粘性あり。炭化物少量含む。
10．暗褐色土(10YR3/4)しまりややなし。粘性あり。炭化物少量含む。地山崩壊土が混入。
11．褐色土　(10YR4/6)しまりあり。粘性あり。焼土粒微量含む。炭化物微量含む。
12．褐色土　(10YR4/6)しまりあり。粘性あり。焼土粒少量含む。炭化物微量含む。
13．褐色土　(10YR4/6)きわめてしまりあり。強上。

SI73　焼上　E−F
1．赤褐色土（5YR4/6）焼上。焼土ブロック（2.5YR5/8）混入。
2．褐色土　(7.5YR4/6)　やや火熱を受けた焼土。

0　2m

第73図　SI73竪穴住居跡





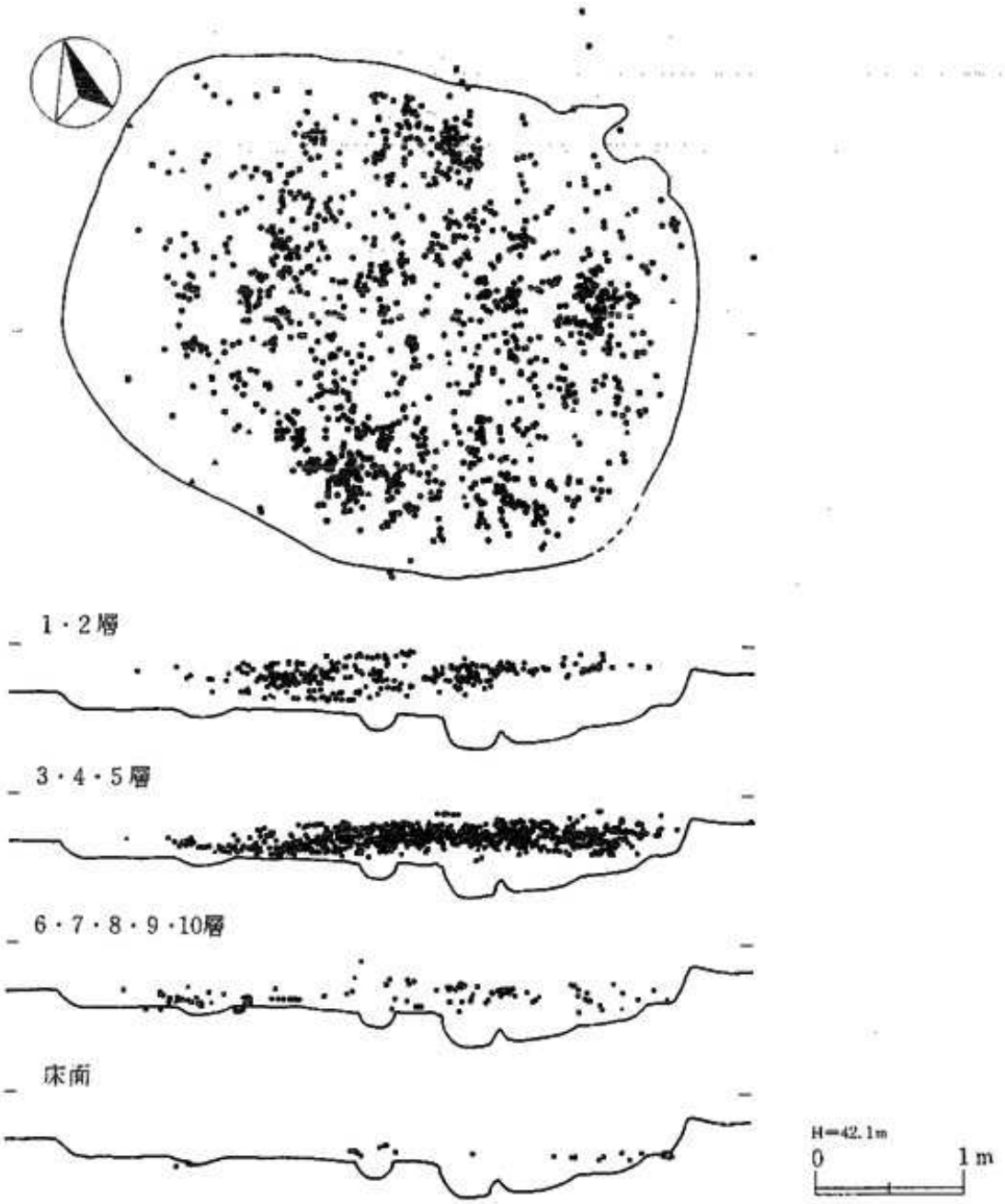
SI73A 炉

1．褐色土　(7.5YR4/6)　しまりあり。粘性なし。焼土粒少量含む。
2．褐色土　(10YR4/6)　しまりあり。粘性ややなし。炭化物少量含む。
3．褐色土　(10YR4/4)　しまりあり。粘性なし。炭化物多量含む。
4．暗褐色土 (10YR3/4)　しまりあり。粘性ややあり。炭化物少量含む。
5．暗褐色土 (10YR3/3)　しまりややなし。粘性あり。焼土粒少量含む。炭化物多量含む。地山崩壊土が混入。
6．褐色土　(7.5YR4/4)　しまりあり。粘性あり。焼土粒微量含む。炭化物少量含む。地山崩壊土が多量に混入。
7．褐色土　(7.5YR4/6)　焼土粒と地山崩壊土が多量に混入。
8．赤褐色土 (5YR4/8)　焼土。
9．褐色土　(10YR4/6)　壁の崩壊土。
10．黒色土　(10YR2/1)　炭化物層。
11．赤褐色土 (5YR4/6)　焼土。
12．黄褐色土 (10YR5/6)　きわめてしまりあり。炭化物・焼土粒・地山崩壊土が混入。
13．黄褐色土 (10YR5/6)　きわめてしまりあり。炭化物少量含む。地山崩壊土が混入。火熱を受け赤変している。
14．暗褐色土 (10YR3/3)　きわめてしまりあり。粘性なし。炭化物多量含む。
15．黄褐色土 (10YR5/8)　きわめてしまりあり。焼土粒・炭化物・地山崩壊土が混入。
16．黄褐色土 (10YR5/6)　きわめてしまりあり。炭化物・焼土粒・地山崩壊土が多量に混入。

SI73B 炉

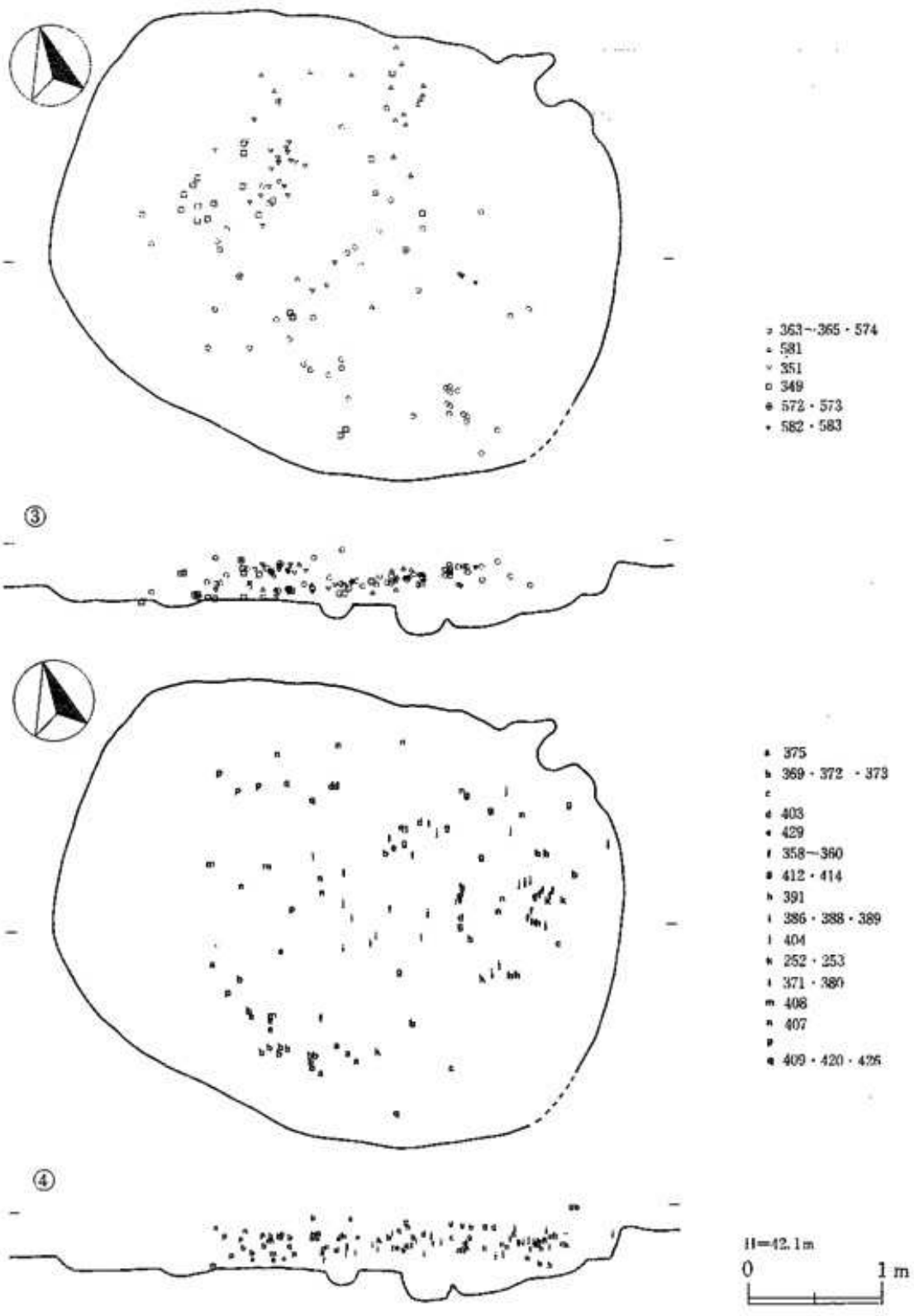
1．褐色土　(7.5YR4/6)　しまりあり。粘性なし。焼土粒少量含む。
2．褐色土　(10YR4/6)　しまりあり。粘性あり。焼土粒・炭化物微量含む。地山ブロック微量含む。
3．褐色土　(10YR4/6)　しまりあり。焼土混じりの壁崩壊土。
4．黄褐色土 (10YR5/6)　きわめてしまりあり。地山崩壊土が多量に混入。
5．褐色土　(10YR4/6)　しまりあり。粘性あり。炭化物微量含む。地山崩壊土が混入。
6．黄褐色土 (10YR5/6)　きわめてしまりあり。焼土粒・炭化物・地山崩壊土が混入。
7．黄褐色土 (10YR5/8)　きわめてしまりあり。焼土粒・炭化物・地山崩壊土が混入。
8．黄褐色土 (10YR5/8)　きわめてしまりあり。焼土粒多量含む。炭化物少量含む。地山崩壊土が混入。
9．褐色土　(10YR4/6)　しまりあり。粘性なし。焼土粒微量含む。炭化物多量含む。地山崩壊土が混入。
10．褐色土　(7.5YR4/4)　しまりあり。焼土粒多量含む。
11．黒色土　(10YR2/1)　炭化物層。
12．赤褐色土 (5YR4/6)　焼土。

第74図　SI73竪穴住居跡炉

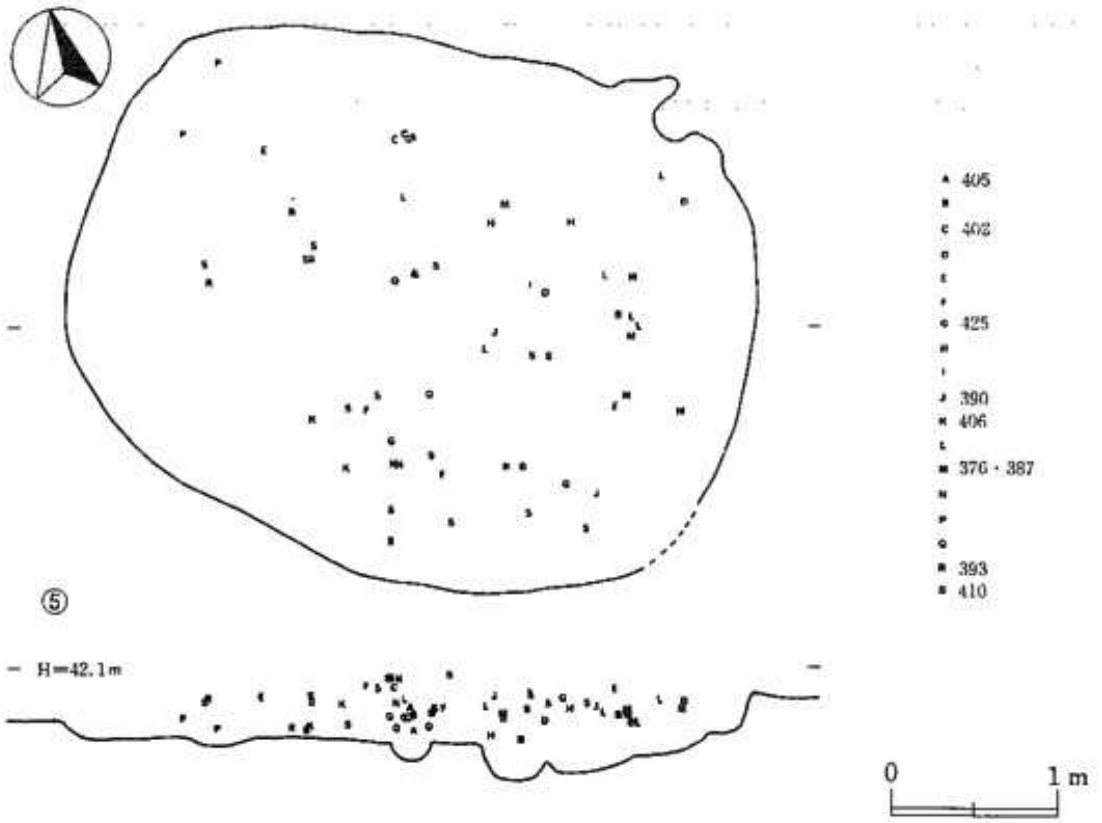


第75図　SI73竪穴住居跡遺物出土分布図

第76図　SI73竪穴住居跡接合・同一個体出土分布図(1)



第77図　SI73竪穴住居跡接合・同一個体出土分布図(2)



第78図　SI73竪穴住居跡接合・同一個体出土分布図(3)

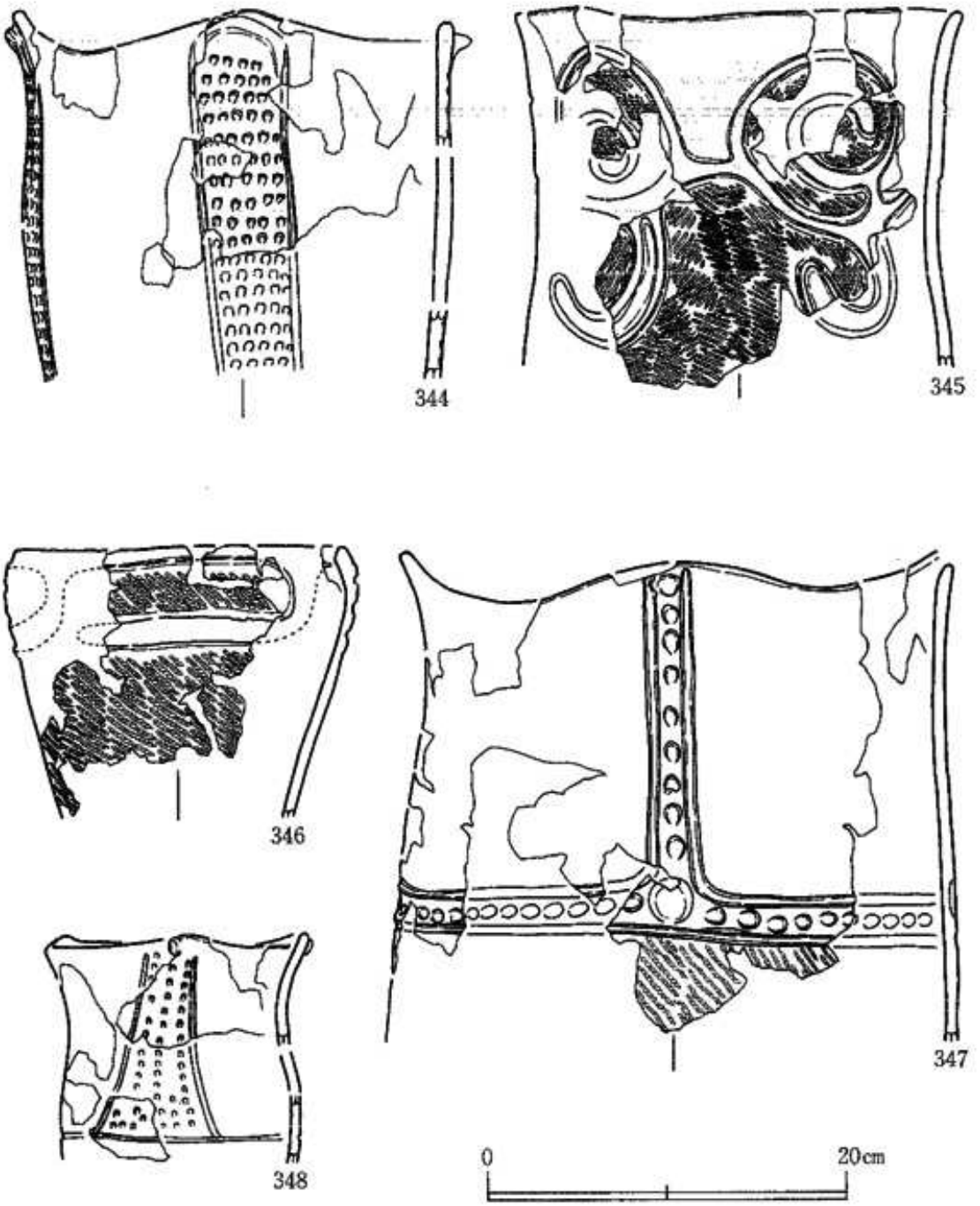
新旧2時期の竪穴住居跡が重複する。（新しいものをA、古いほうをBとする。）遺構確認面はⅣ層上面である。

SI73A

平面形は長径約3m60cm、短径約3m30cmの楕円形で、床面積は9.4㎡である。壁は床面からやや開き気味に立ち上がり16～25cmが残存する。

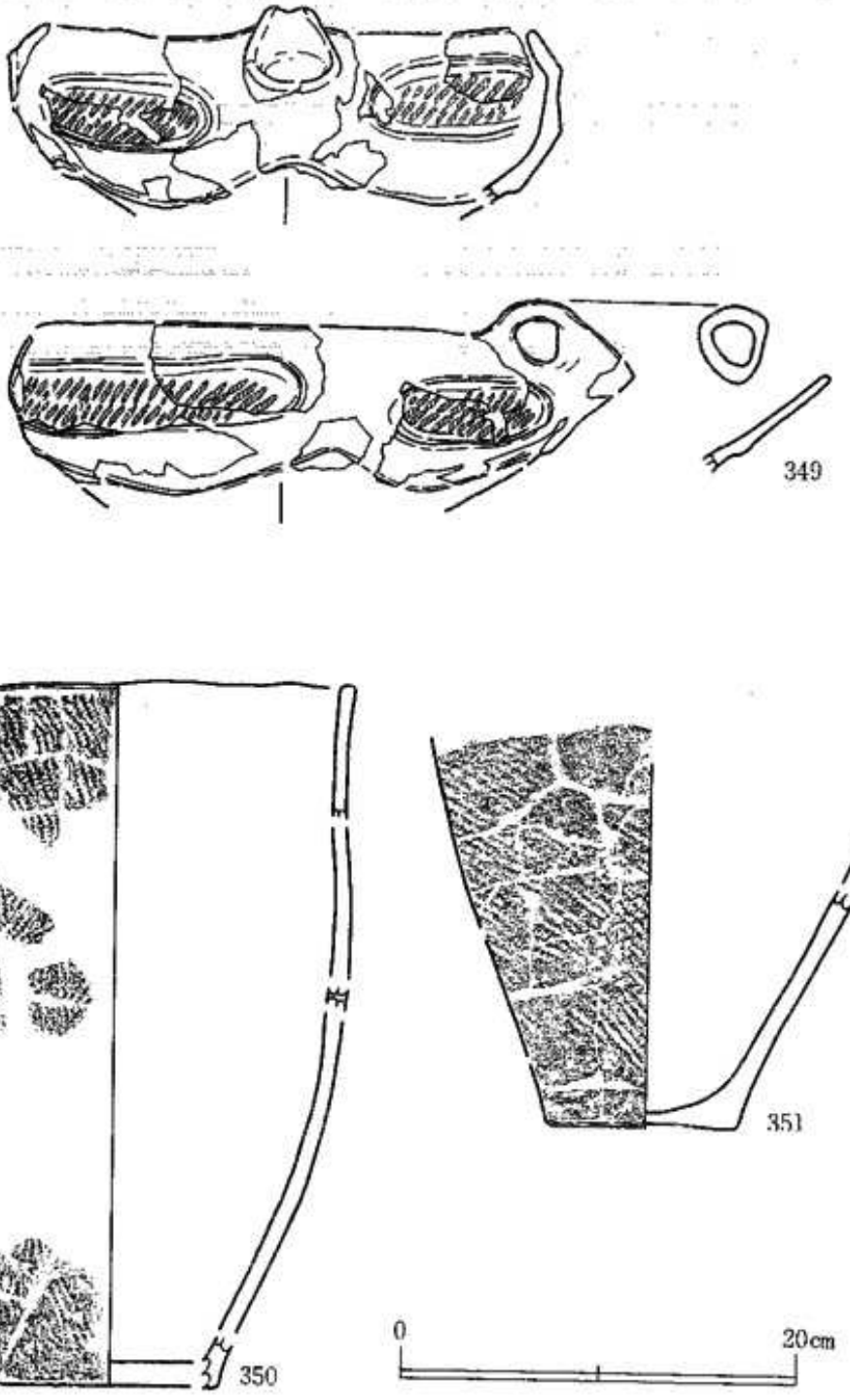
床面は平坦でSI73Bよりもやや低い。埋土は10層からなる自然堆積で、上位黒褐色土系（1・2層）中位暗褐色土系（3・4・5層）下位褐色土系（6・7・8・9・10層）に大別できる。柱穴はP1・P2・P4・P10・P12・P14が主柱穴でP15・P16・P8が付属すると推定される。

炉はSI73Bと反対に西側に土器埋設部・石囲部・掘り込み部からなる複式炉があり、主軸方位はN-60°-Wである。石囲部は床面からの深さ約15～20cmで、掘り込み部に向かい徐々に浅くなる。石囲部と土器埋設部との境界に長さ約35cm、幅約25cm、厚さ約7cmの石を置き、石囲部の左右には平石が並べられていた。底面には石を敷いていない。掘り込み部との境界には上部長径約25cm、短径約12cm、深さ約10cmのピットがある。掘り込み部は石囲部から東へ向かいさらに浅くなり、底面中央左よりに上部径約15cm、深さ約7cmのピットがある。埋設土器周囲と



番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
344	S I 73	炉埋設	深鉢	II	3	H	斜突充填部	
345	〃	3	〃	II	3	B 3	無文部	
346	〃	2	〃	II	3	B 3	不明	
347	〃	2	〃	II	3	H	斜突充填部	
348	〃		〃	II	3	H	斜突充填部	

第79図　SI73竪穴住居跡出土土器(1)



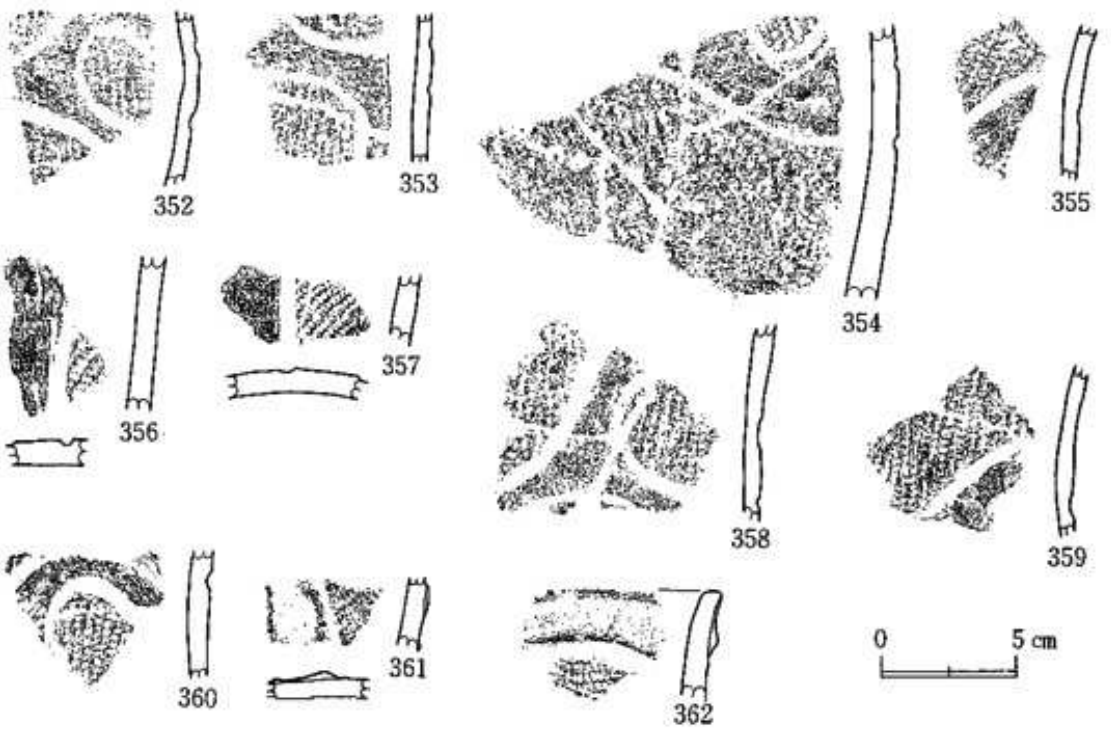
番号	出土位置	層位	器種	部	類	文様技法	文様表現	炭化物分析
349	S I 73	1	甕口	II	3	B 3	縄文部	(赤色彩色)
350	〃	1・2	深鉢	VI	口a		RL異方向回転	
351	〃	1・2	〃	VI	胴a		LR縦回転	

第80図　SI73竪穴住居跡出土土器(2)

石囲部底面は被熱して赤変していた。また、埋設土器中の最下層と石囲部の底面及び2つのピット内には炭化物が多量に堆積していた。P1の北側床面で剥片がまとまって出土した（第87図、第88図）。

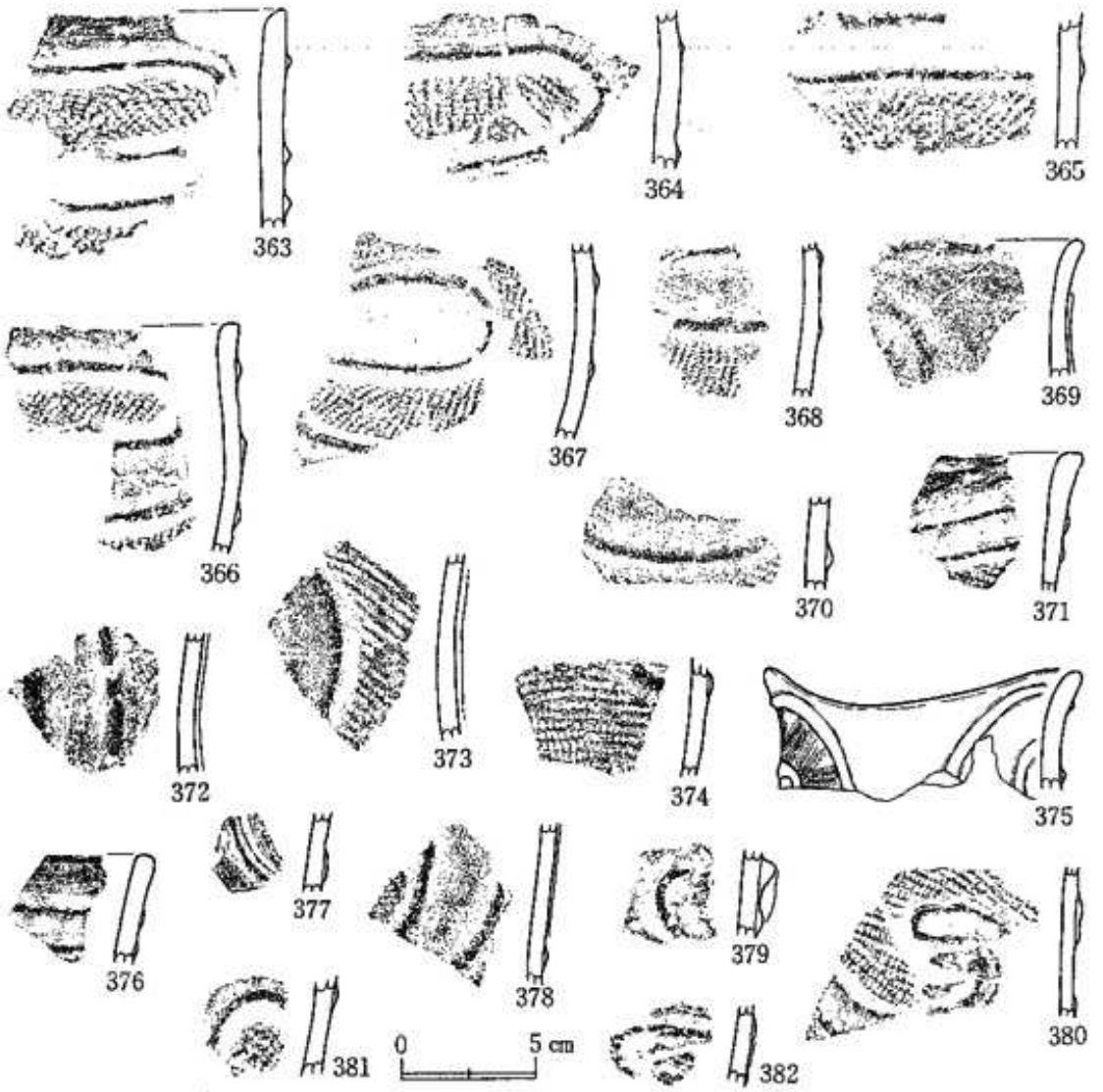
SI73B

西側の一部と複式炉が残るが、ほとんどの部分はSI73Aと重複する。西側壁は約11cm残っている。埋土はAの構築時に人為的に埋めたものである（7C層）。柱穴はP7・P8・P9と、P3・P5・P11で、本来P10の位置にもあったものと推定される。P3・P4・P5の埋土には多量の焼土が混じっていた。柱穴配置は壁に近いところに長軸方向に3本並び、中央の柱の間の中央やや西寄りに埋設土器がある。複式炉は西側壁寄りにあり、土器埋設部と掘り込み部が残る。主軸方位はN-60°-Wである。埋設土器は抜き取られその跡がAの柱穴となっている。掘り込み部の壁際中央には浅い柱穴が一本ある。



番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
352	SI73	2	深鉢	II	3	A	縄文部	表
353	〃	3	〃	II	3	A	〃	表
354	〃		〃	II	3	A	〃	裏
355	〃		〃	II	3	B1	不明	
356	〃		〃	II	3	B1	〃	
357	〃	2	〃	II	3	B1	〃	表
358	〃	2	〃	II	3	G	縄文部	表
359	〃	2	〃	II	3	B1	不明	表
360	〃	3・2	〃	II	3	B1	縄文部	表
361	〃		〃	II	3	B2	無文部	
362	〃	1	〃	II	3	B2	〃	

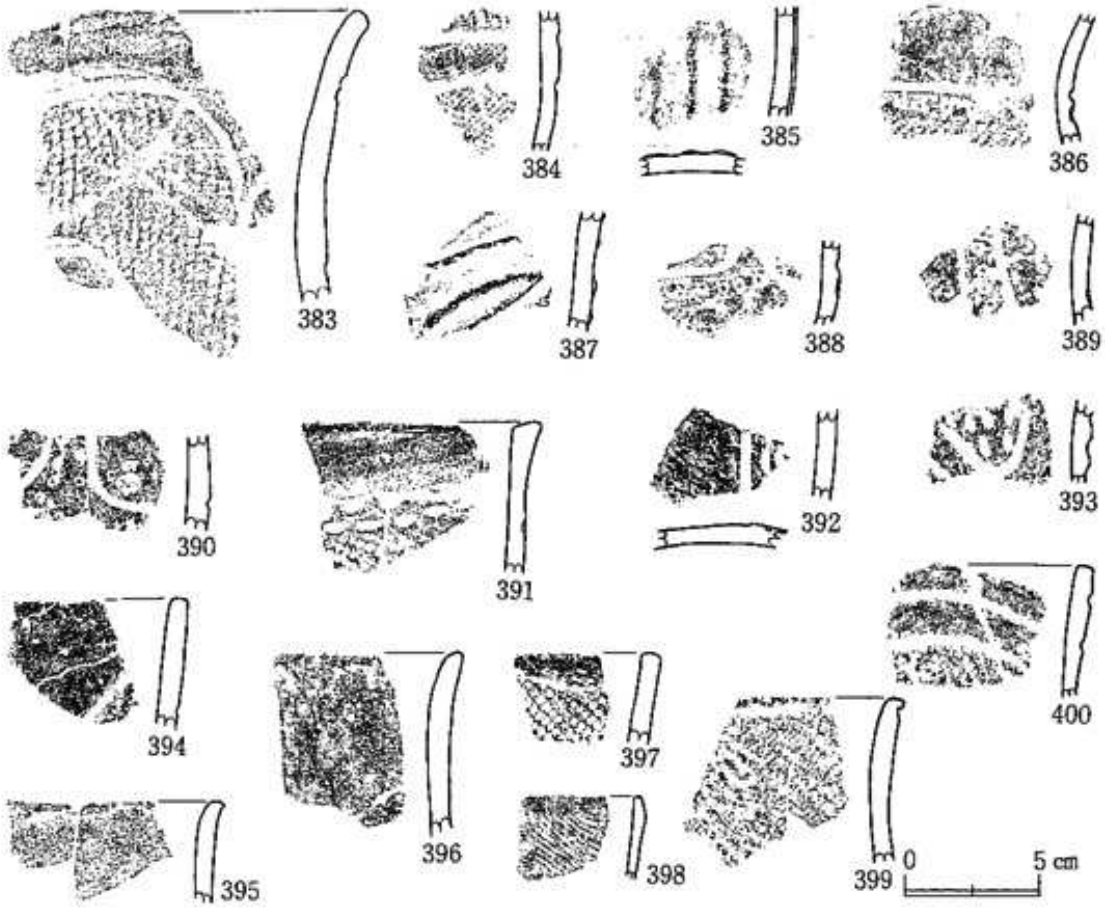
第81図　SI73竪穴住居跡出土土器(3)



番号	出土位置	層位	器種	胎	焼	文様技法	文様表現	炭化物付着
363	S I 70	3	深鉢	II	3	B 3	不　明	
364	S I 73	2	〃	II	3	B 3	〃	
365	S I 70		〃	II	3	B 3	〃	
366	S I 73		〃	II	3	B 3	〃	表
367	〃	2	〃	II	3	B 3	〃	表
368	〃		〃	II	3	B 3	〃	表
369	〃		〃	II	3	B 3	縄文部	
370	〃	2	〃	II	3	B 3	不　明	
371	〃	2	〃	II	3	B 3	無文部	
372	〃	2	〃	II	3	B 3	不　明	
373	〃	2	〃	II	3	B 3	〃	
374	〃	2	〃	II	3	B 3	〃	
375	〃	2・3	〃	II	3	B 3	縄文部	
376	〃	2	〃	II	3	B 3	無文部	
377	〃	2	〃	II	3	B 3	不　明	
378	〃	3	〃	II	3	B 3	〃	
379	〃	3	〃	II	3	B 3	無文部	
380	〃	2	〃	II	3	B 3	〃	
381	〃	2	〃	II	3	B 3	不　明	
382	〃	2	〃	II	3	B 3	無文部	

第82図　SI70・73竪穴住居跡出土土器(4)

遺物は埋土下位層と床面は少なく、上位・中位の垂直分布をみると埋土の形成過程に合わせてレンズ状に堆積していることがわかる。出土土器の中にはSB22建物跡、SI70・SI75竪穴住居跡出土土器と接合・同一個体のものもある。土器はII群3類が最も多く破片ではII群3類とVI群が多い。II群3類には各技法があるが、B3技法が多いようである。また沈線に沿っ



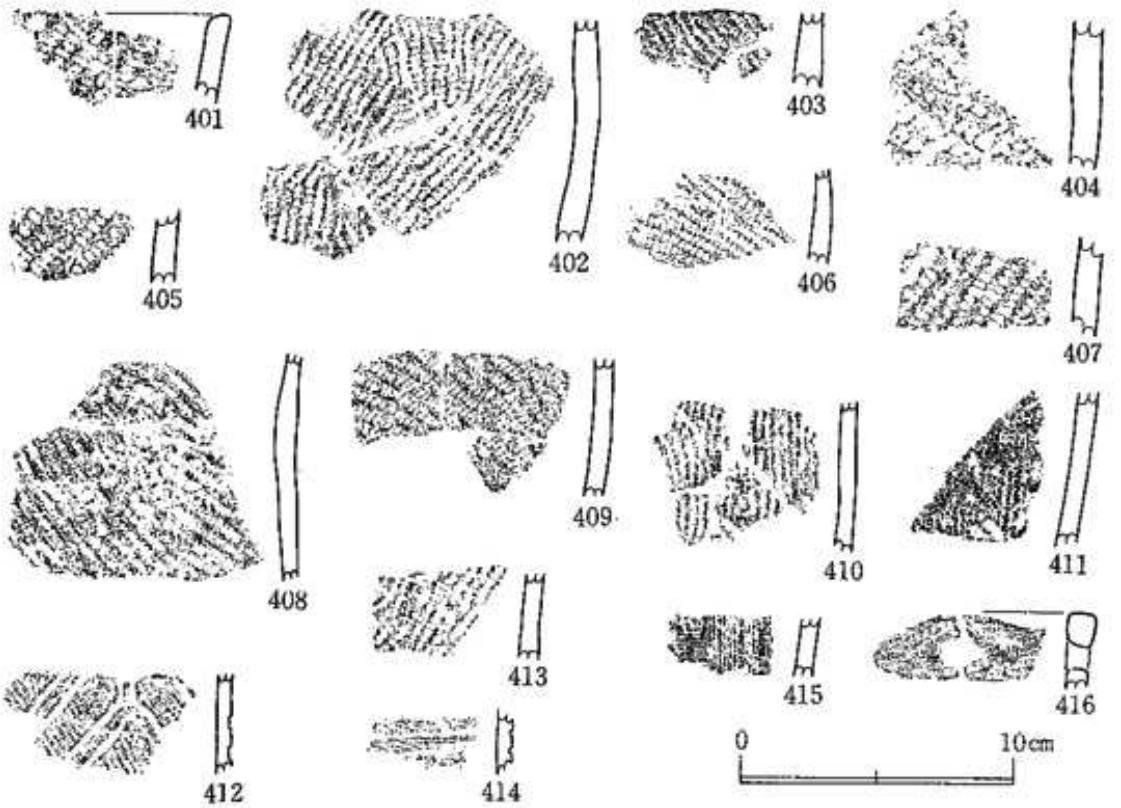
番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
383	SI73		深鉢	II	3	C1	無文部	表・裏
384	〃		〃	II	3	A	〃	
385	〃	2	〃	II	3	F	〃	
386	〃		〃	II	3	H		表
387	〃		〃	II	3	F		
388	〃	2	〃	II	3	H		
389	〃	2	〃	II	3	H		
390	〃		〃	II	3	H		
391	〃	1	〃	II	3	H		
392	〃	2	〃	II	3	H		表
393	〃	2	〃	II	3	H		
394	〃	2	〃	II	3	G1		
395	〃	2	〃	VI	口d			表
396	〃		〃	VI	口d			表
397	〃	2	〃	VI	口b		LR縄同転	表
398	〃	3	〃	VI	口b		〃	表
399	〃		〃	VI	口b		〃	
400	〃	1	〃	II	3	G	不明	

第83図　SI73竪穴住居跡出土土器(5)

て刺突をめぐらすものや、区画内に刺突を充填するものがある。

第79図344はSI73Aの炉埋設土器である。緩やかな4単位の波状口縁の波頂部から逆U字形の区画文が描かれ、その中に下から突き上げるように施文する刺突文が充填されている。波頂部直下は粘土隆線を貼り付け、両側は太い沈線である。区画線は下方で斜めに右側に曲がっている。

345は胴上半に断面形が台形の隆線に縁どられた区画文が描かれている。胴部中央には波頭文がめぐり、その上の無文部に縄文が充填されたe字状のモチーフを描く。胴下半の縄文部上端を区画する波頭文は縄文部に貫入する無文部によって表現される。



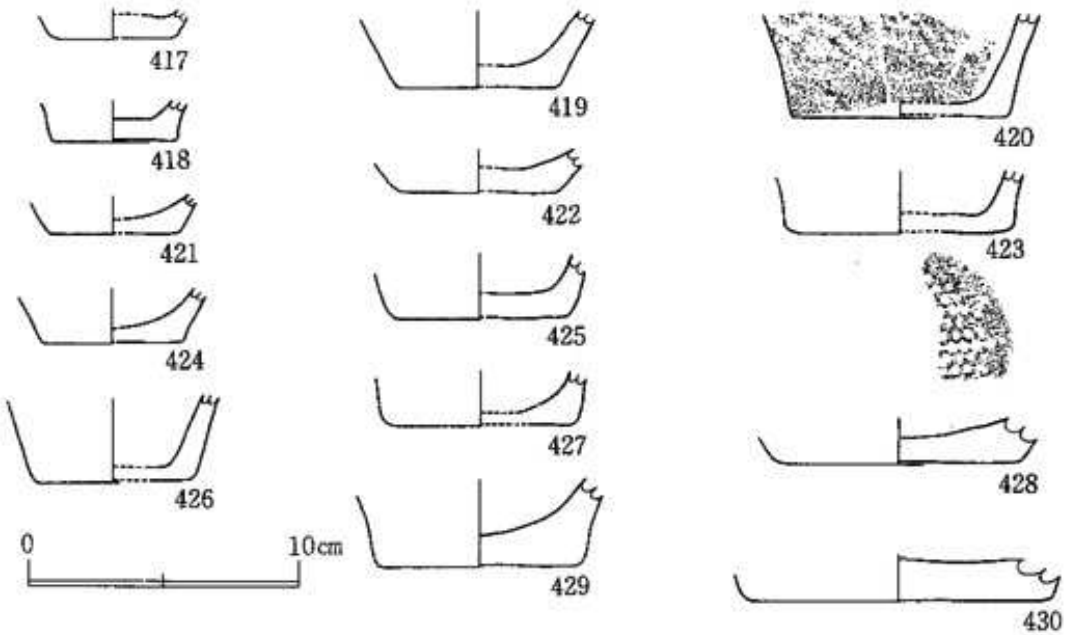
番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
401	SI73	2	深鉢	VI	胴a		RL縦回転	
402	〃	2	〃	VI	胴a		RL異方向回転	表
403	〃	2	〃	VI	胴a		LR横回転	
404	〃	2	〃	VI	胴a		〃	
405	〃	1	〃	VI	胴a		RL縦回転	表
406	〃		〃	VI	胴a		LR縦回転	
407	〃	2	〃	VI	胴a		RL縦回転	
408	〃		〃	VI	胴a		LR縦回転	炭
409	〃		〃	VI	胴a		〃	
410	〃		〃	VI	胴a		RL斜回転	炭
411	〃	2	〃	VI	胴b		R撚糸文	
412	〃		〃	III		D	沈線文	
413	〃	2	〃	VI	胴a		RL縦回転	
414	〃		〃	III		D	沈線文	
415	〃		〃	III		E	〃	
416	〃	2	浅鉢	II	3		不明	

第84図　SI73竪穴住居跡出土土器(6)

347は緩やかな4単位の波状口縁の波頂部から2本の沈線が垂下し、胴部中央で左右に折れ、さらに隣の波頂部から同様に垂下する沈線と連結して方形の区画を描く。胴部中央には横位に沈線がめぐり、これらの沈線間には下からまたは右から突き刺す大きな刺突が1列に充填される。この刺突によって土器内面に隆起が生じている。胴下半は縦回転のLR縄文である。348も波状口縁であるが、3単位と推定される。波頂部には粘土粒を貼り付けている。沈線による「ハ」字状の区画文の内部に下から突き上げる刺突を充填する。胴部中央に横位に沈線がめぐりその下は縦回転のRL縄文である。

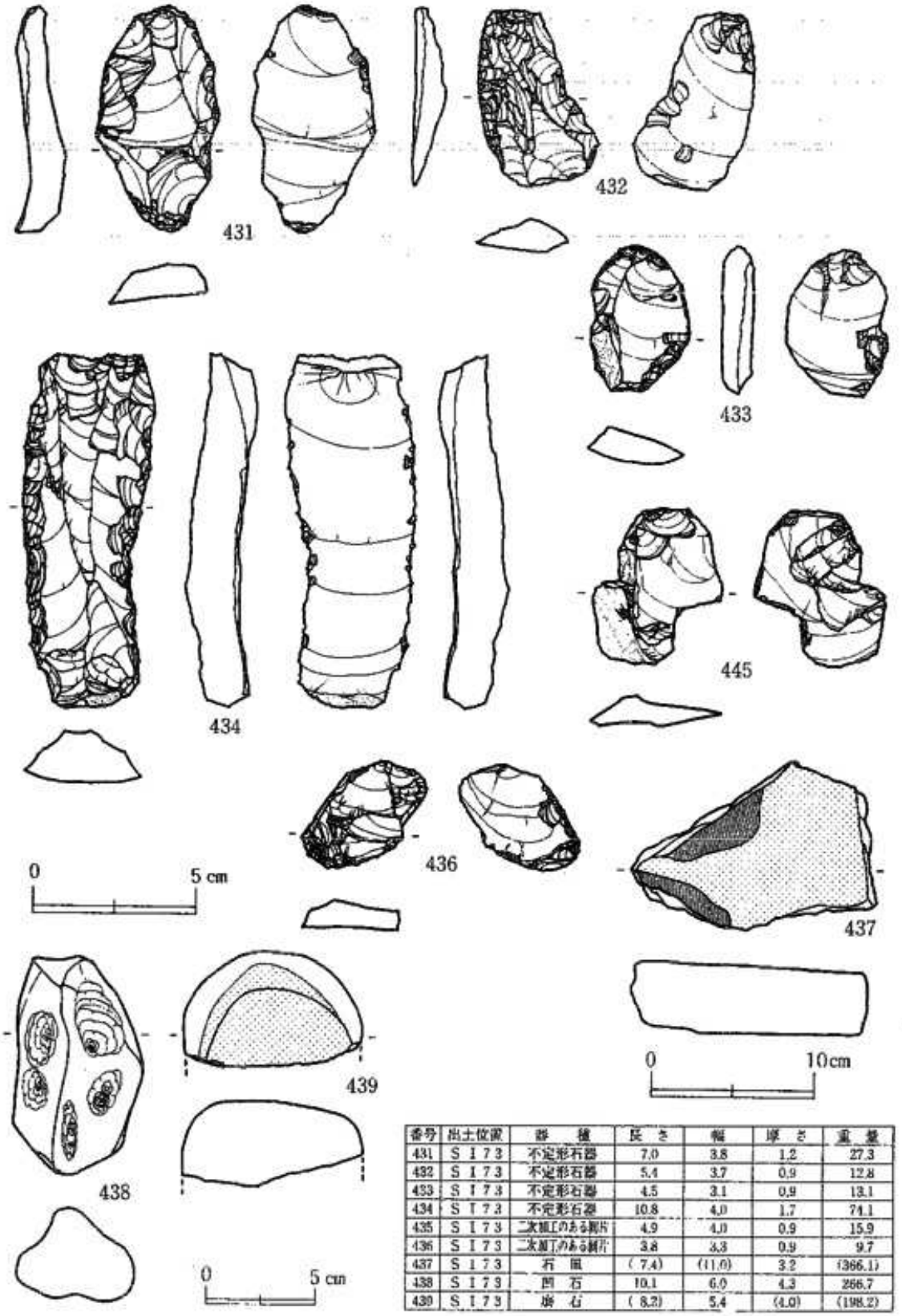
349は注口のつく浅鉢形土器である。口縁が内湾する平縁の浅鉢形土器の一端に注口があり、注口と口縁部を結ぶつり手がつく。胴部上半にはB3技法で横位楕円文が描かれ縄文が充填されている。波状の隆線で区切られた下半部は縄文が施文される。無文部は赤色に彩色されている。

石器ではP1柱穴の北側床面から14点の剥片が一括出土した。11枚は同一母岩で、10枚が接合



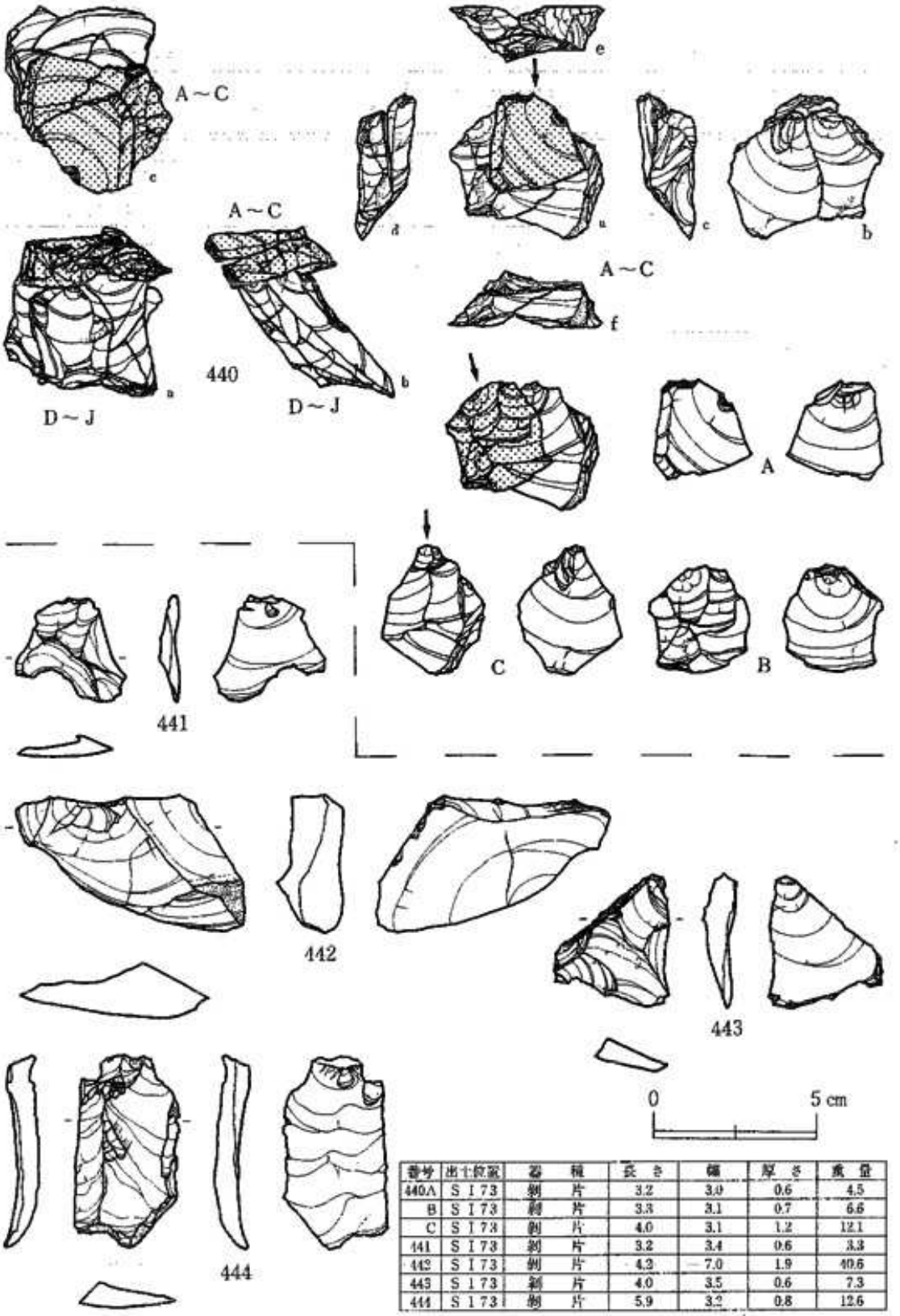
番号	出土位置	単位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
417	S I 73	2	浅鉢	VI	底d			
418	〃		〃	VI	底d			
419	〃		〃	VI	底d			
420	〃		〃	VI	底d			
421	〃	2	〃	VI	底d			
422	〃		〃	VI	底d			
423	〃	2	〃	VI	底a			内
424	〃		〃	VI	底d			
425	〃	2	〃	VI	底d			
426	〃		〃	VI	底d			外
427	〃	2	〃	VI	底d			
428	〃		〃	VI	底d			
429	〃	3	〃	VI	底d			内
430	〃		〃	VI	底d			

第85図　SI73竪穴住居跡出土土器(7)



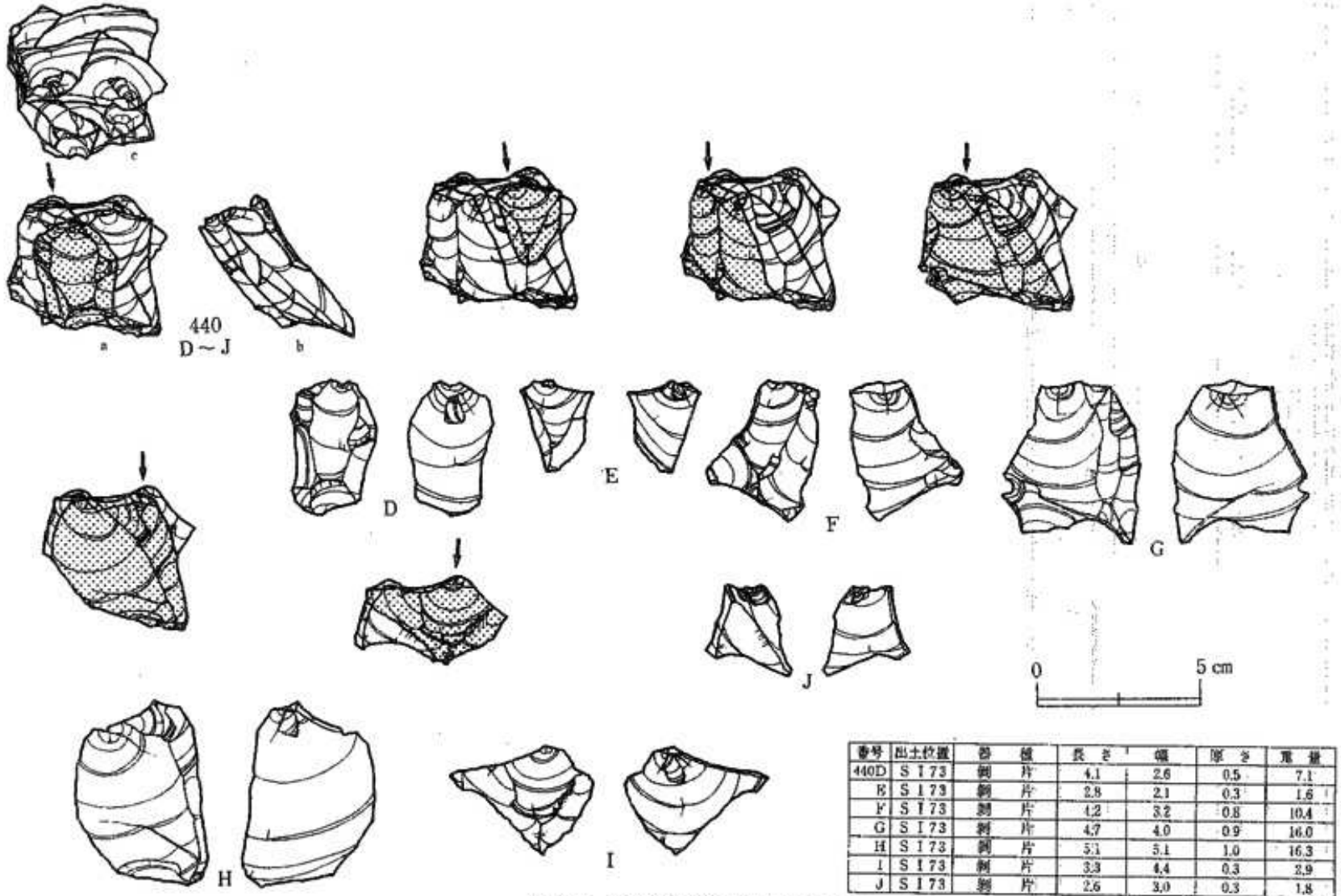
番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
431	S I 7 3	不定形石器	7.0	3.8	1.2	27.3
432	S I 7 3	不定形石器	5.4	3.7	0.9	12.8
433	S I 7 3	不定形石器	4.5	3.1	0.9	13.1
434	S I 7 3	不定形石器	10.8	4.0	1.7	74.1
435	S I 7 3	二次加工のある剥片	4.9	4.0	0.9	15.9
436	S I 7 3	二次加工のある剥片	3.8	3.3	0.9	9.7
437	S I 7 3	石　皿	(7.4)	(11.0)	3.2	(366.1)
438	S I 7 3	凹　石	10.1	6.0	4.3	266.7
439	S I 7 3	磨　石	(8.2)	5.4	(4.0)	(198.2)

第86図　SI73竪穴住居跡出土石器(1)



番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
440A	S I 73	剥片	3.2	3.0	0.6	4.5
B	S I 73	剥片	3.3	3.1	0.7	6.6
C	S I 73	剥片	4.0	3.1	1.2	12.1
441	S I 73	剥片	3.2	3.4	0.6	3.3
442	S I 73	剥片	4.3	7.0	1.9	40.6
443	S I 73	剥片	4.0	3.5	0.6	7.3
444	S I 73	剥片	5.9	3.2	0.8	12.6

第87図　SI73竪穴住居跡出土石器(2)



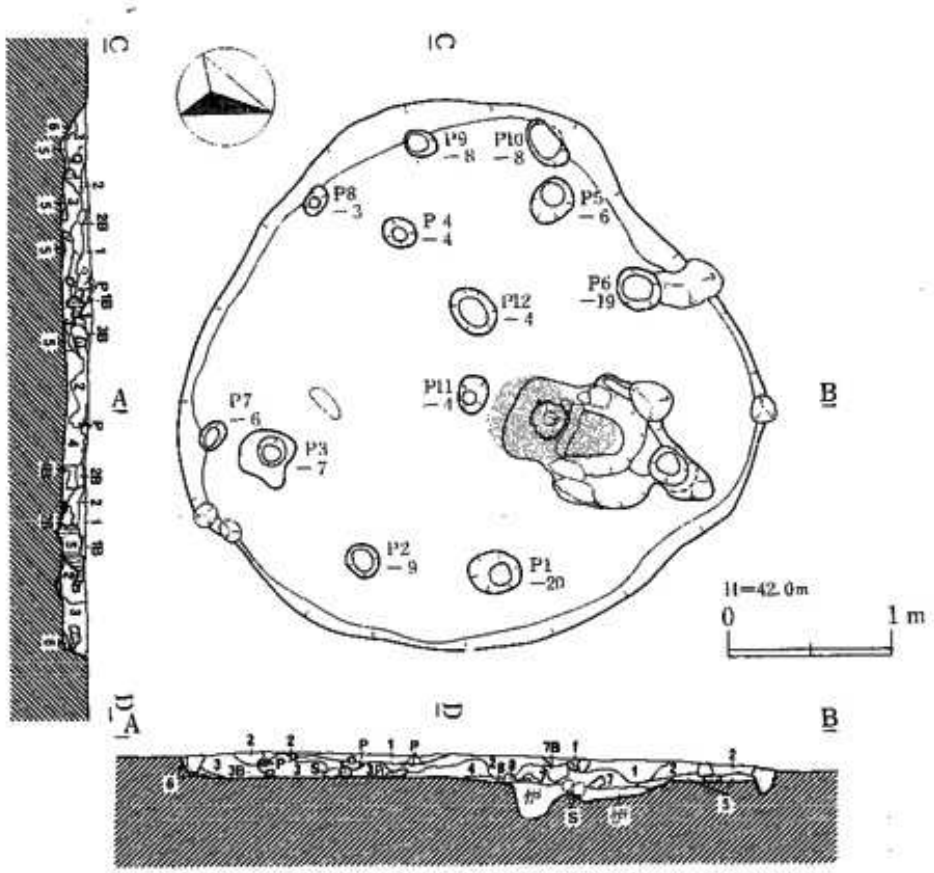
番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
440D	S I 73	剥片	4.1	2.6	0.5	7.1
E	S I 73	剥片	2.8	2.1	0.3	1.6
F	S I 73	剥片	4.2	3.2	0.8	10.4
G	S I 73	剥片	4.7	4.0	0.9	16.0
H	S I 73	剥片	5.1	5.1	1.0	16.3
I	S I 73	剥片	3.3	4.4	0.3	2.9
J	S I 73	剥片	2.6	3.0	0.3	1.8

第88図　SI73竪穴住居跡出土石器 (3)

した。第87図440は接合した状態である。はじめにａ面を打面として剥片Ａ～Ｃを剥ぎとり、打面を90度かえてａ面から剥片Ｄ～Ｊを生産している。Ａ～Ｃ・Ｄ～Ｊはそれぞれ同一方向の加撃で、打点をジグザクに移して行っている。441は同一母岩の剥片、442～444は伴出した剥片である。

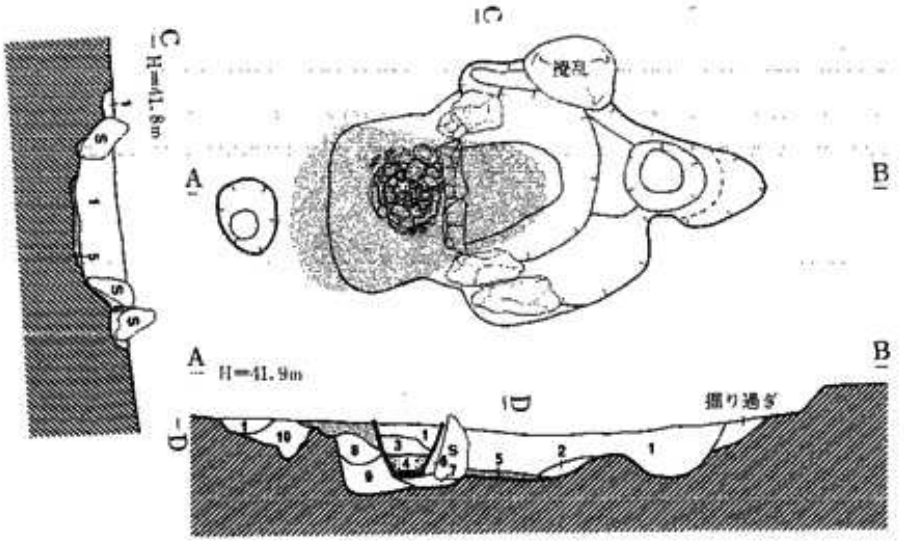
SI75竪穴住居跡（第89図～第95図・第118図）

LQ52・53、LR52・53グリッドで検出した。SK86土坑、SK90・91土坑と近接する。確認面はⅣ層上面である。平面形は径約３ｍ40cmの円形で北側がやや突出している。床面積は約9.4㎡である。床面は平坦で、壁は斜めに立ち上がり壁高は10～15cmである。柱穴は12本検出した。P1～8が主柱穴で、炉の埋設土器と石囲部の境界がP1とP6を結ぶ線上にあり、P1・P6はともに他

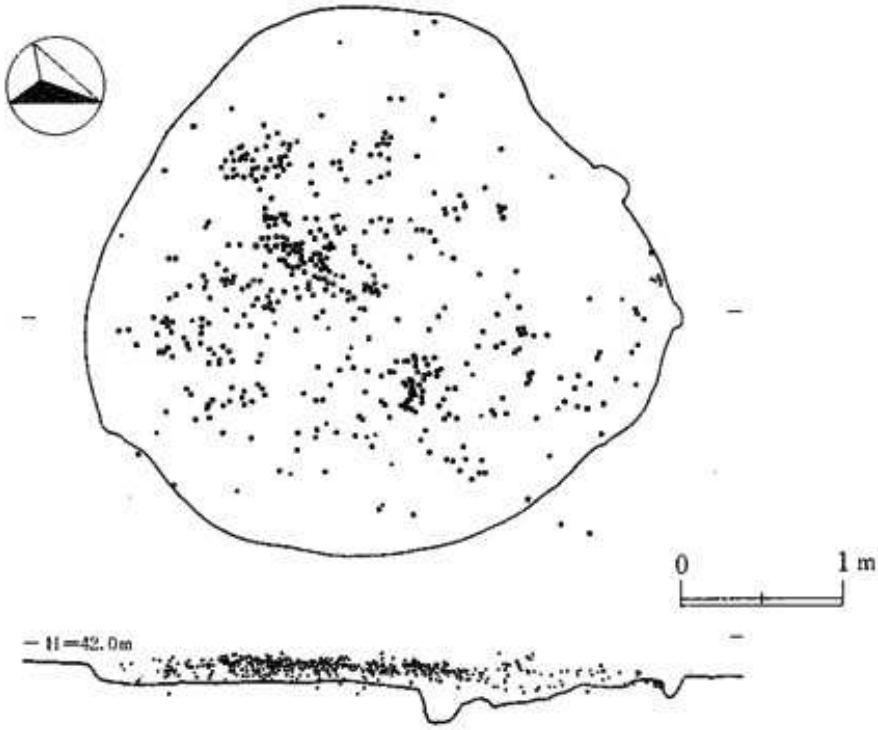


SI75
1．黒褐色土（10YR2/3）しまりややあり。粘性あり。炭化物微量含む。１Ｂはやや攪乱が入る部分。
2．暗褐色土（10YR3/4）しまりあり。粘性ややなし。炭化物微量含む。２Ｂはやや攪乱が入る部分。
3．褐色土（10YR4/6）しまりあり。粘性ややあり。炭化物少量含む。３Ｂはやや攪乱が入る部分。
4．褐色土（10YR4/6）しまりあり。粘性ややあり。炭化物多量含む。４Ｂはやや攪乱が入る部分。
5．褐色土（10YR4/6）しまりあり。粘性大。地山粘質土が混入。
6．黄褐色土（10YR5/6）しまりあり。粘性大。地山崩壊土が多量に混入。壁の崩壊土。
7．暗褐色土（10YR3/4）しまりあり。粘性ややなし。炭化物多量含む。７Ｂはやや攪乱が入る部分。
8．褐色土（10YR4/6）しまりあり。粘性大。焼土粒微量含む。炭化物多量含む。
9．褐色土（7.5YR4/6）焼土。

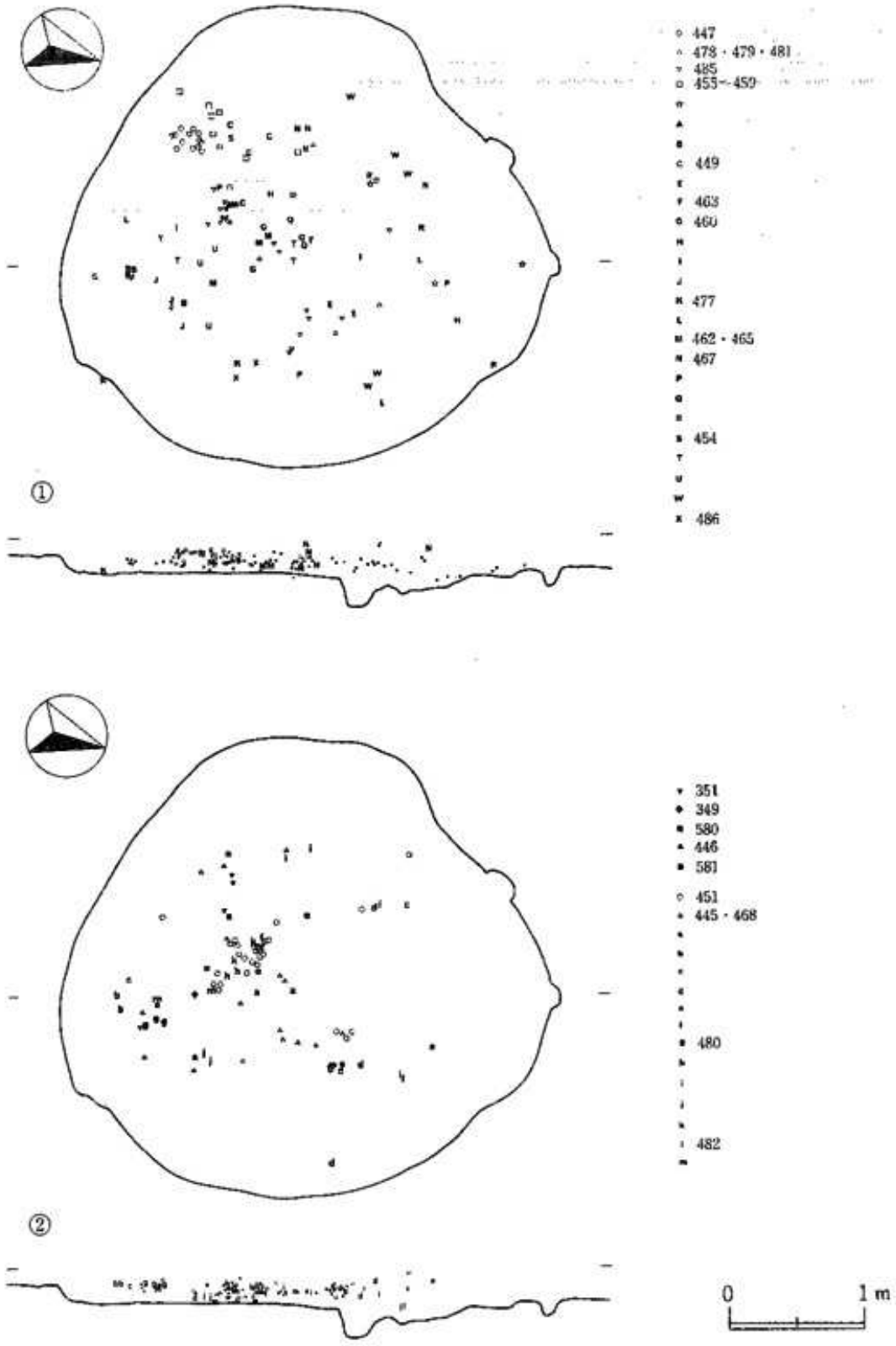
第89図　SI75竪穴住居跡



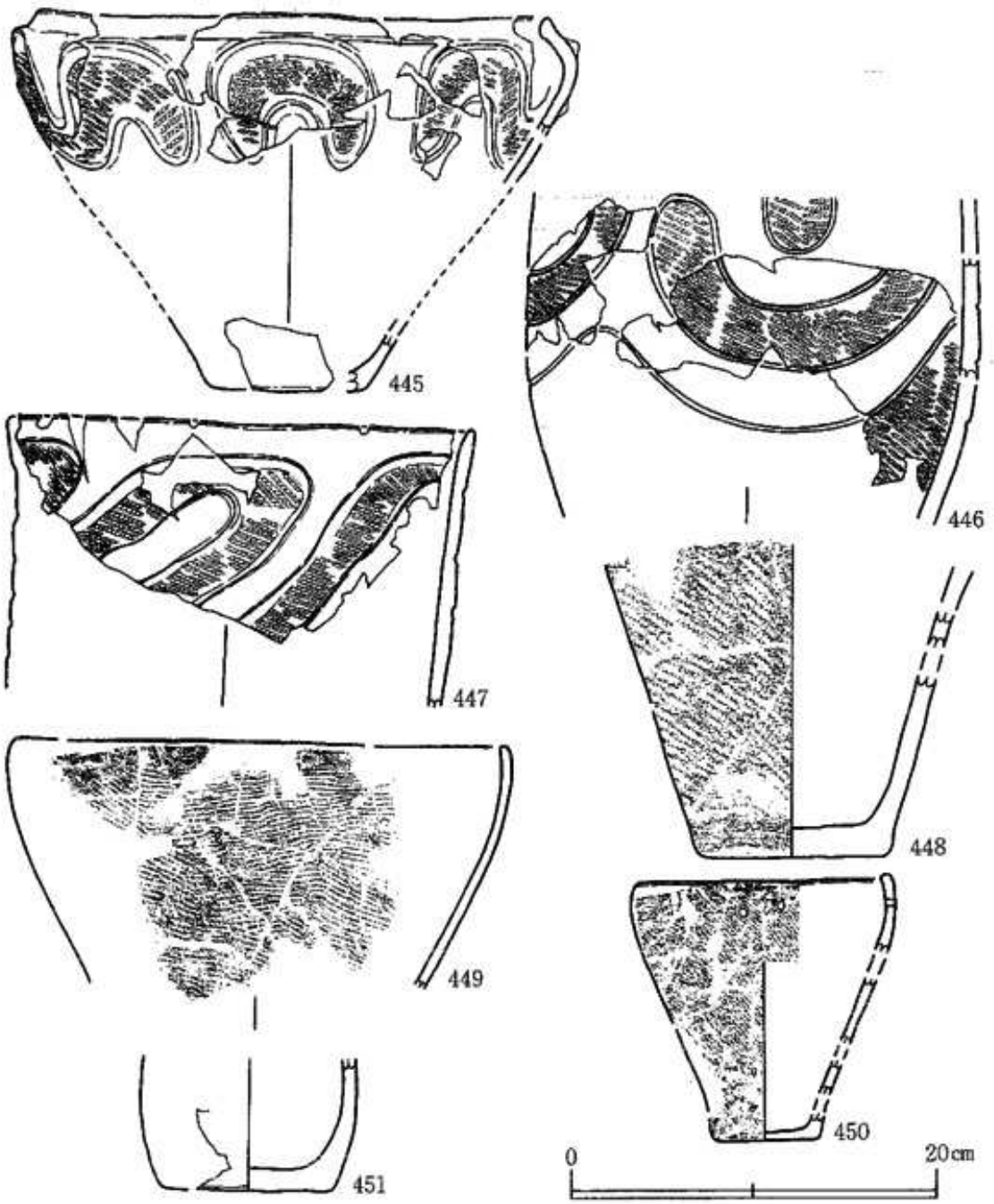
SI75 炉
1．褐色土　(10YR4/6) しまりあり。粘性あり。炭化物少量含む。
2．褐色土　(10YR4/6) しまりあり。粘性あり。焼土粒・炭化物・地山崩壊土が混入。
3．黒褐色土 (10YR2/3) しまりあり。粘性あり。焼土粒・炭化物少量含む。
4．黒色土　(10YR2/2) 炭化物層
5．赤褐色土 (5YR4/6) 焼土。
6．暗褐色土 (7.5YR3/4) しまりあり。粘性なし。上部が火熱を受けやや赤変している。
7．暗褐色土 (7.5YR3/4) 火熱を受け赤変している。
8．にぶい赤褐色土 (5YR4/4) きわめてしまりあり。粘性ややあり。焼土粒・炭化物・地山ブロックが多量に混入。
9．極暗褐色土 (7.5YR2/3) きわめてしまりあり。焼土粒・炭化物微量含む。地山ブロックが多量に混入。
10．褐色土　(7.5YR4/6) しまりあり。粘性なし。



第90図　SI75竪穴住居跡炉、遺物出土分布図

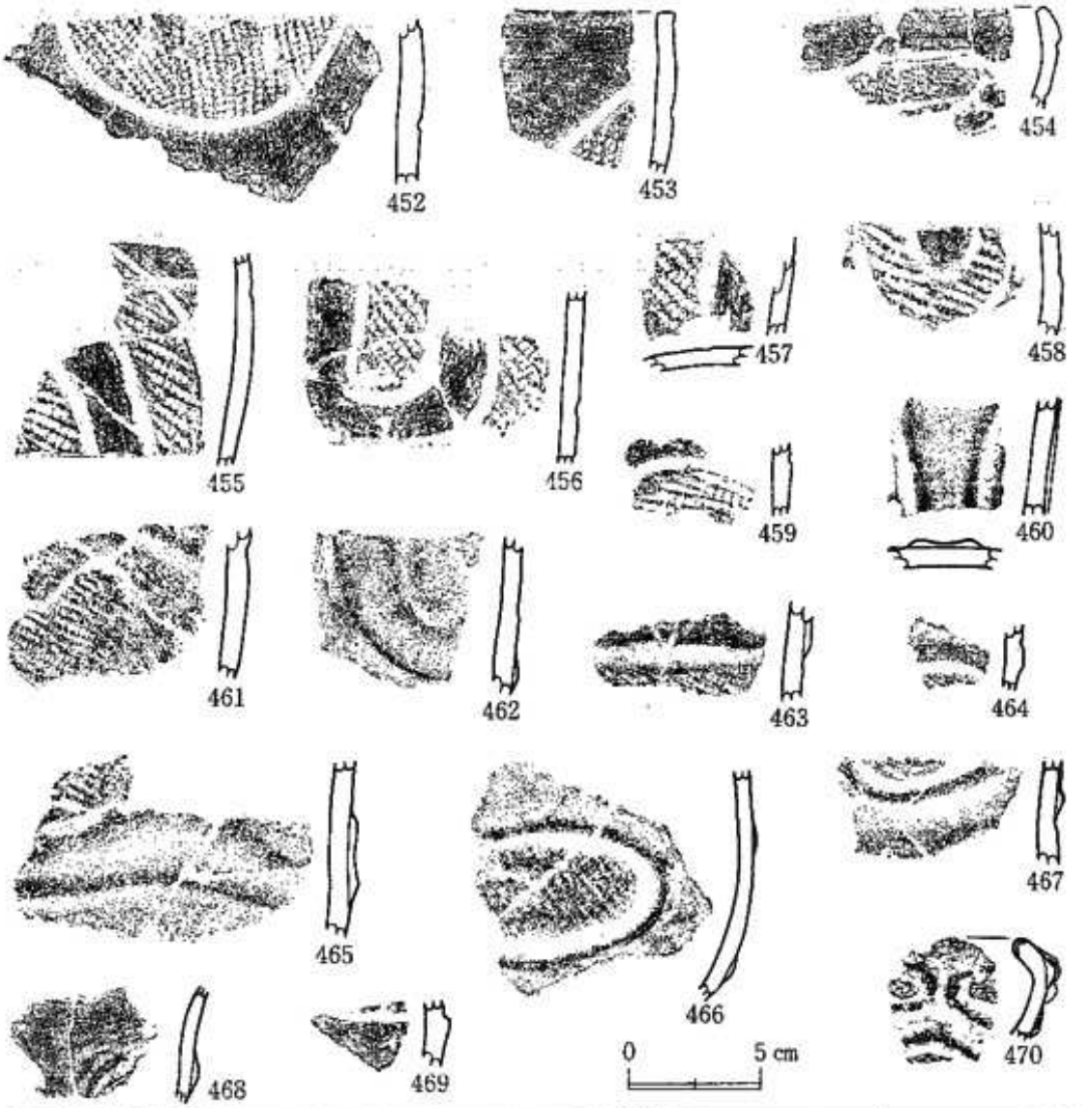


第91図　SI75竪穴住居跡接合・同一個体出土分布図



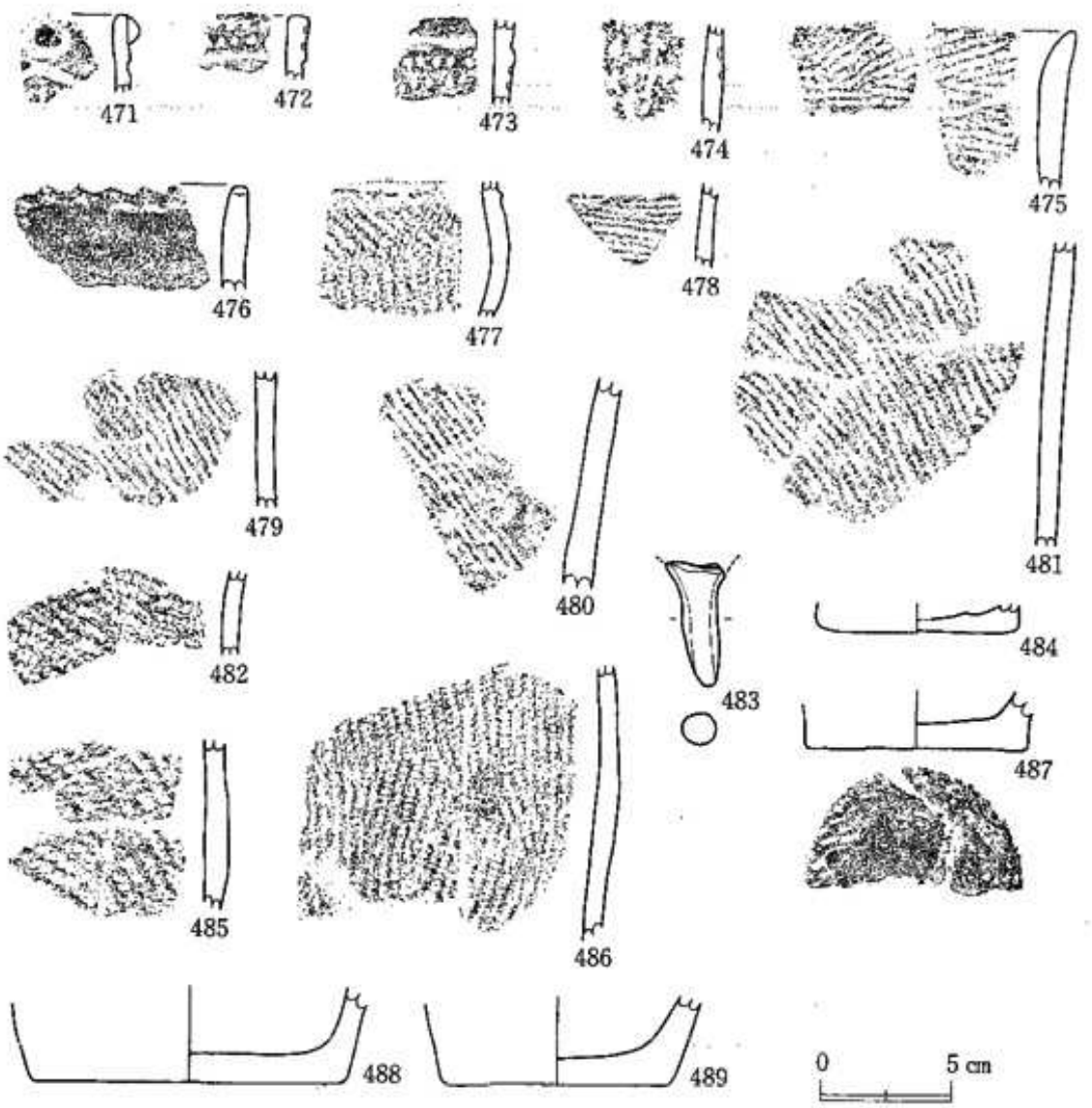
番号	出土位置	層位	器形	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
445	S175	1・2・3	浅鉢	II	3	B3	縄文部	表・炭
446	〃	1・3	深鉢	II	3	A	縄文部	
447	〃	1・2	〃	II	3	B2	無文部	炭
448	〃	加湖設	〃	VI	胴a		L R横回転	
449	〃	1・2	〃	VI	口b胴a		L R横回転	
450	〃		〃	VI	口b胴a		L R横回転	
451	〃	3	〃	VI	底d			

第92図　SI75竪穴住居跡出土土器(1)



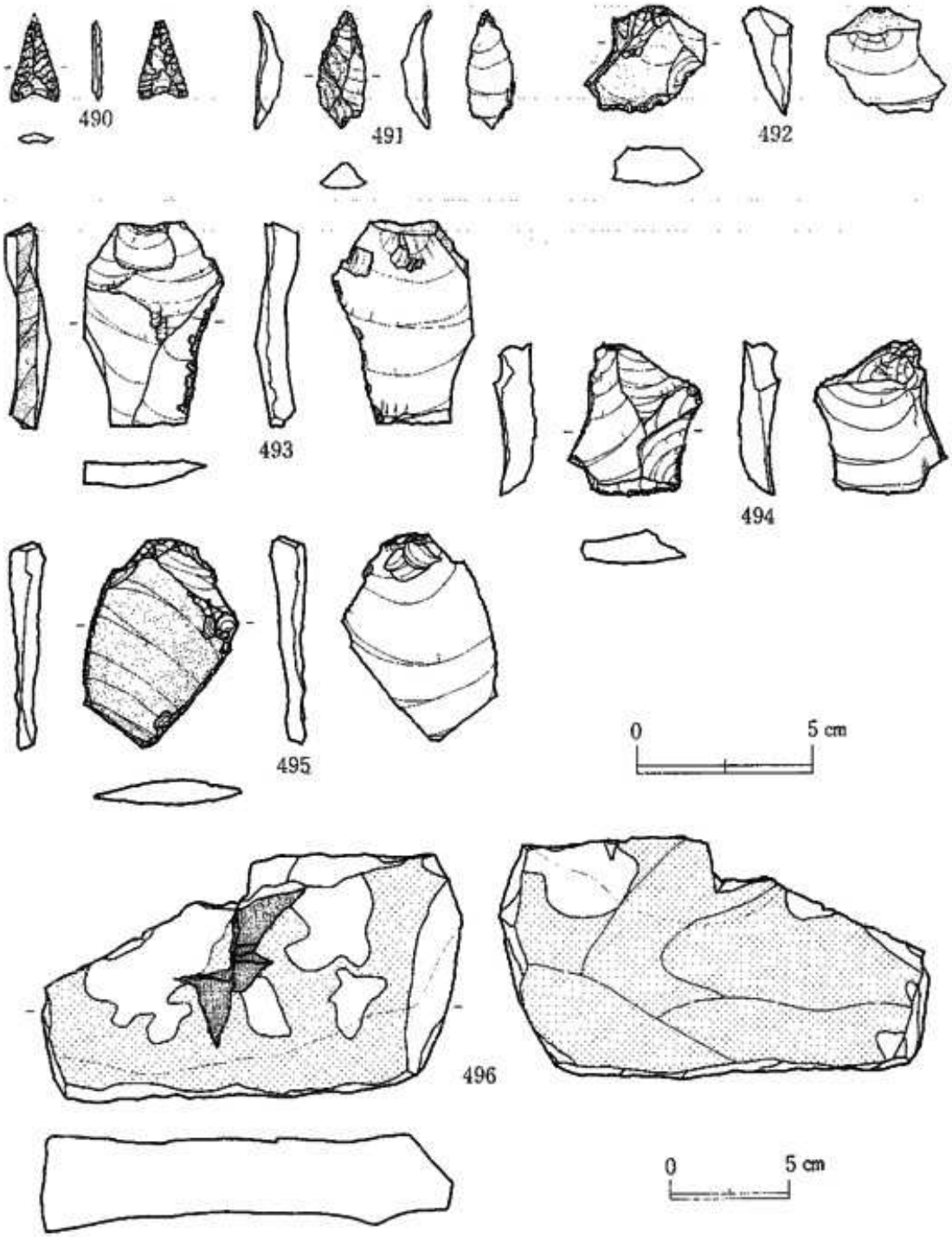
番号	出土位置	層位	器種	部	類	文様施文法	文様表現	炭化物付着
452	S I 75	3	深鉢	胴	3	A	縄文部	表
453	〃	1	〃	胴	3	A	〃	表・裏
454	〃	3	〃	胴	3	B 1	不明	
455	〃	1	〃	胴	3	B 1	縄文部	表
456	〃	1・3	〃	胴	3	B 1	〃	
457	〃	3	〃	胴	3	B 1	〃	
458	〃	3	〃	胴	3	B 1	〃	表
459	〃	1	〃	胴	3	B 1	〃	
460	〃	1	〃	胴	3	B 2	不明	
461	〃	3	〃	胴	3	B 2	〃	
462	〃	1	〃	胴	3	B 2	無文部	
463	〃	3	〃	胴	3	B 2	〃	
464	〃	2	〃	胴	3	B 2	不明	
465	〃	3	〃	胴	3	B 2	無文部	
466	〃		〃	胴	3	B 3	縄文部	
467	〃	2	〃	胴	3	B 3	不明	
468	〃	1	〃	胴	3	B 3	縄文部	
469	〃	1	〃	胴	3	G	不明	
470	〃	1	〃	胴	3	B 3	〃	表・裏

第93図　SI75竪穴住居跡出土土器(2)



番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
471	S I 75	3	深鉢	Ⅱ	3	H	(粘土帯貼付)	
472	〃	1	〃	Ⅱ	3	H		
473	〃	1	〃	Ⅱ	3	H		
474	〃		〃	Ⅱ	3	H		
475	〃		〃	Ⅵ	口a		LR異方向回転	
476	〃	1	〃	Ⅴ				表
477	〃	3	鉢	Ⅳ			RL横回転	
478	〃	1	深鉢	Ⅵ	胴a		LR横回転	
479	〃	1・2	〃	Ⅵ	胴a		〃	表
480	〃	1	〃	Ⅵ	胴a		〃	
481	〃	1	〃	Ⅵ	胴a		〃	表
482	〃		〃	Ⅵ	胴a		〃	
483	〃	2	(粘土製品)					
484	〃	2	深鉢	Ⅵ	底d			
485	〃	1	〃	Ⅵ	胴a		LR縦回転	
486	〃	1・3	〃	Ⅵ	胴a		RL異方向回転	
487	〃	2	〃	Ⅵ	底a			
488	〃		〃	Ⅵ	底d			
489	〃	1	〃	Ⅵ	底d			

第94図　SI75竪穴住居跡出土土器(3)



番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
490	S I 75	石鏃	(2.2)	1.4	0.3	(0.7)
491	S I 75	石鏃	3.3	1.4	0.7	2.3
492	S I 75	微小剥離痕剥片	3.0	3.1	1.3	9.6
493	S I 75	微小剥離痕剥片	5.8	4.0	0.8	20.6
494	S I 75	微小剥離痕剥片	4.3	3.8	1.1	15.4
495	S I 75	微小剥離痕剥片	5.8	4.4	1.0	18.4
496	S I 75	石核	(20.5)	(35.8)	8.0	(8600.0)

第95図　SI75竪穴住居跡出土石器

の柱穴よりも深い。床面中央にも柱穴（P11）がある。

炉は床面の北側に位置し、土器埋設部・石囲部・掘り込み部からなる複式炉である。炉埋設土器は胴部中央から上を欠く粗製の深鉢形土器である。石囲部は床面から深さ約15cm掘り込まれ、土器埋設部との境界に長さ約35cm、幅約20cm、厚さ約6cmの石皿が置かれ、その東側に長さ約20cmの石が2個、西側には1個掘り込みの壁に沿って置かれていた。西側では石の抜き取り痕があり、本来は左右対称に近い構造であったと推定される。掘り込み部は石囲部より一段高くほぼ中央に径約20cm、深さ約15cmのピットがある。埋設土器周囲及び石囲部底面は被熱し赤変していた。

埋土は9層からなる自然堆積を呈し、1・2層、3・4層、5～9層の3層に大別できる。遺物は埋土1～4層に多く含まれている。住居跡が廃絶した後に投棄または流入したものであろう。SB22建物跡、SI70・SI73竪穴住居跡出土土器と接合・同一個体のものもある。

土器は第Ⅱ群3類とⅥ群が主でⅤ群もわずかに混る。第92図445は口縁が内湾する深鉢で、B3技法で胴部上半に逆U字状の区画文が描かれている。446は胴部上半にA技法で入組横S字状の区画文が描かれ、波状沈線で胴部を上下に区分し、下半部は縦回転のLR縄文を施文する。447はB2技法により無文部で文様が表現される。455～459は同一個体で、B1技法で入組横S字状区画文を描くようである。471はSI73竪穴住居跡出土土器と同様に波状口縁の口唇部直下に瘤状の貼り付けがある。483は先端が細く反対側は傘状に広がるもので、蓋のつまみの可能性もある。石器は微小剥離痕のある剥片が4点と石鏃・石錐が各1点出土した。496は炉の石囲部に置かれていた石皿である。表面は被熱によって部分的にはじけている。また炉の北西に位置する床面壁ぎわで剥片がまとまって出土したが接合するものはなかった。

SI81竪穴住居跡（第18図・第96図）

LQ54、LR54グリッドで検出した。丘陵中央平坦部の北端からやや北に下がった位置にあり、やや離れて東にSI33竪穴住居跡、北西にSN82焼土遺構がある。

斜面を掘り込んで径約2mの平坦面を作出し、床面としている。平面形は南東部がやや突出した不整円形である。高さ約22cmの壁が斜面上部の南側のみに遺存する。柱穴、炉は検出されなかった。

埋土は基本的に1層で、礫が多く含まれている。遺物は少なく、土器はⅥ群のみである（第41図143）。他に不定形石器などが出土した。

SI100竪穴住居跡（第40図・第41図・第118図）

LS50グリッドで検出した。SI70・73竪穴住居跡の中間に位置する。確認面はⅣ層上面である。平面形は径約2m20cmの円形で、壁は北西側がほぼ垂直に立ち上がり高さ約3cm、南東側はゆるやかに立ち上がり高さ約10cmを測る。床面は平坦であり、埋土は褐色土1層である。柱穴は

4本検出した。P3を除き他は壁に取り付く。

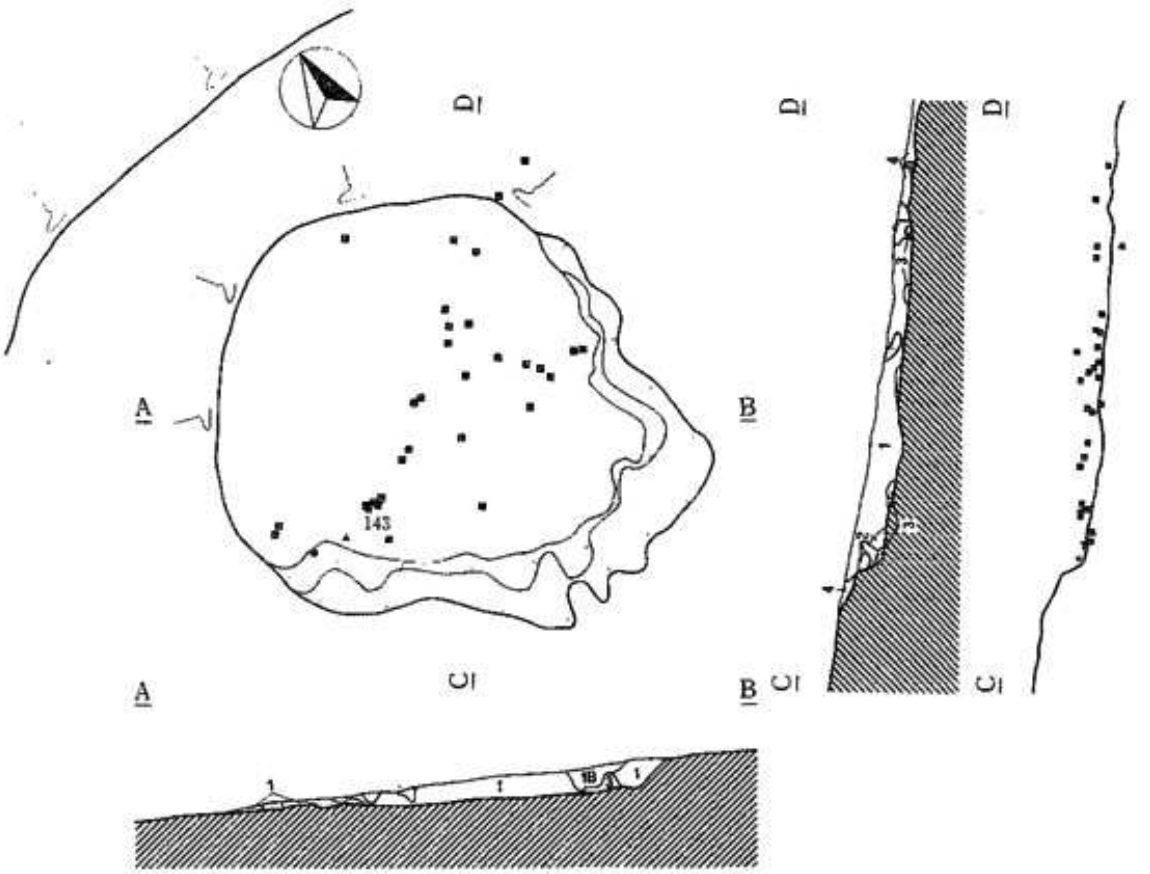
炉は北西側に位置し、2カ所の連結した掘り込みからなる。東側の掘り込みは径約35cm、深さ約22cmの燃焼部で焼土が堆積し最下層は炭化物層であった。西側の掘り込みは上部径約36cmで、底面は2カ所に凹部がある。これらを結んだ主軸方位はN-60°-Wである。

土器は埋土中・床面からII群3類、VI群が出土した。SI20・SI70竪穴住居跡から出土した遺物と接合、同一個体のものがある。

3　土坑

SK02土坑（第102図）

LM49・LN49グリッドで検出した。平面形は上端部径約90cm、底径約45cmの円形で、深さ約42cmである。底面はほぼ平坦で、壁は底面からまるみを帯びて立ち上がる。埋土は自然堆積で遺物は出土しなかった。本遺構とSK44土坑は遺構の集中する中央平坦部からやや離れたところ

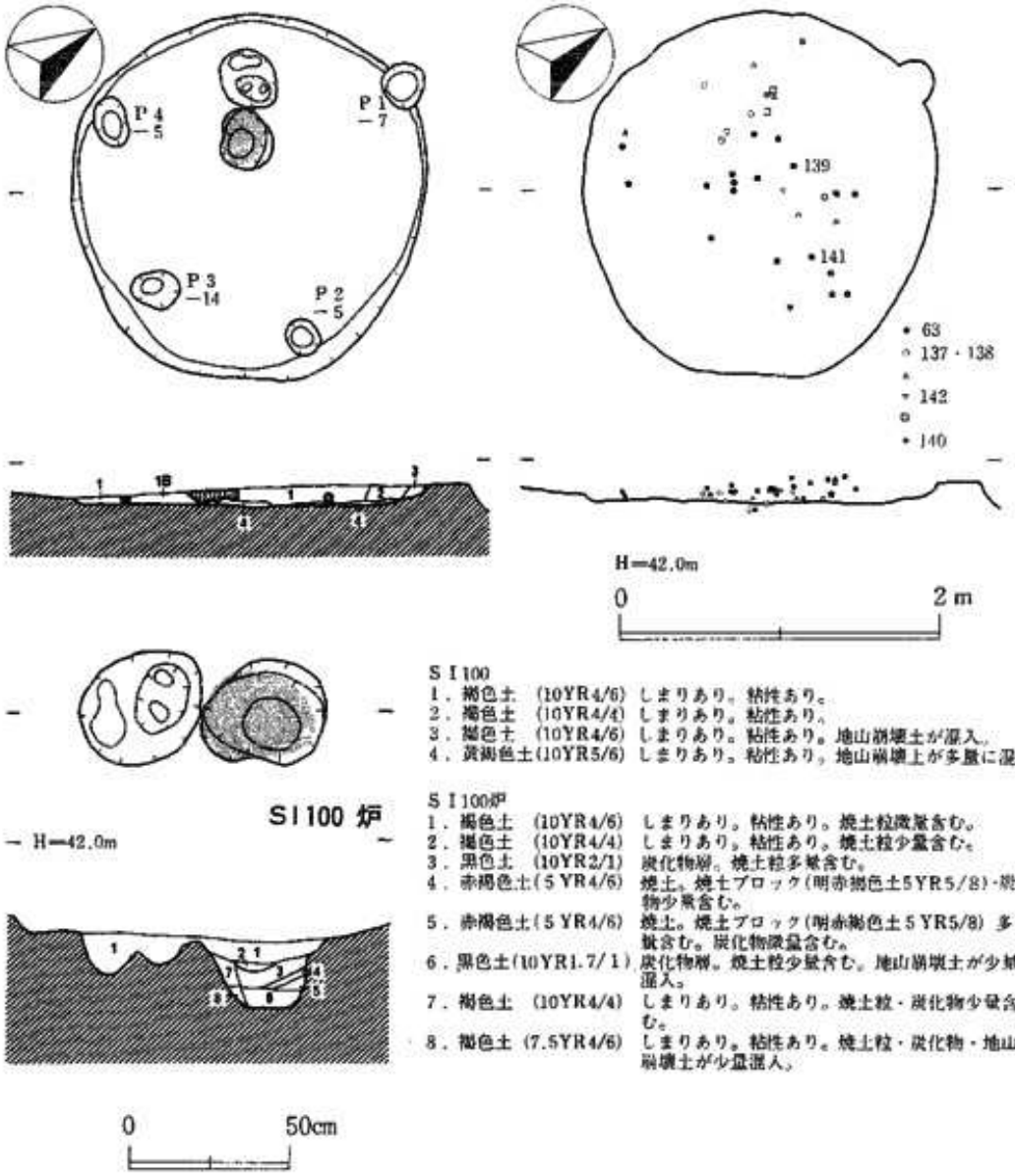


第96図　SI81竪穴住居跡

に位置することと、他の遺構の確認時の輪郭が不明瞭であったのに対し、黒褐色土の明瞭な円形プランが視認できたことから、新しい時期のものと思われる。

SK05土坑（第98図～第100図）

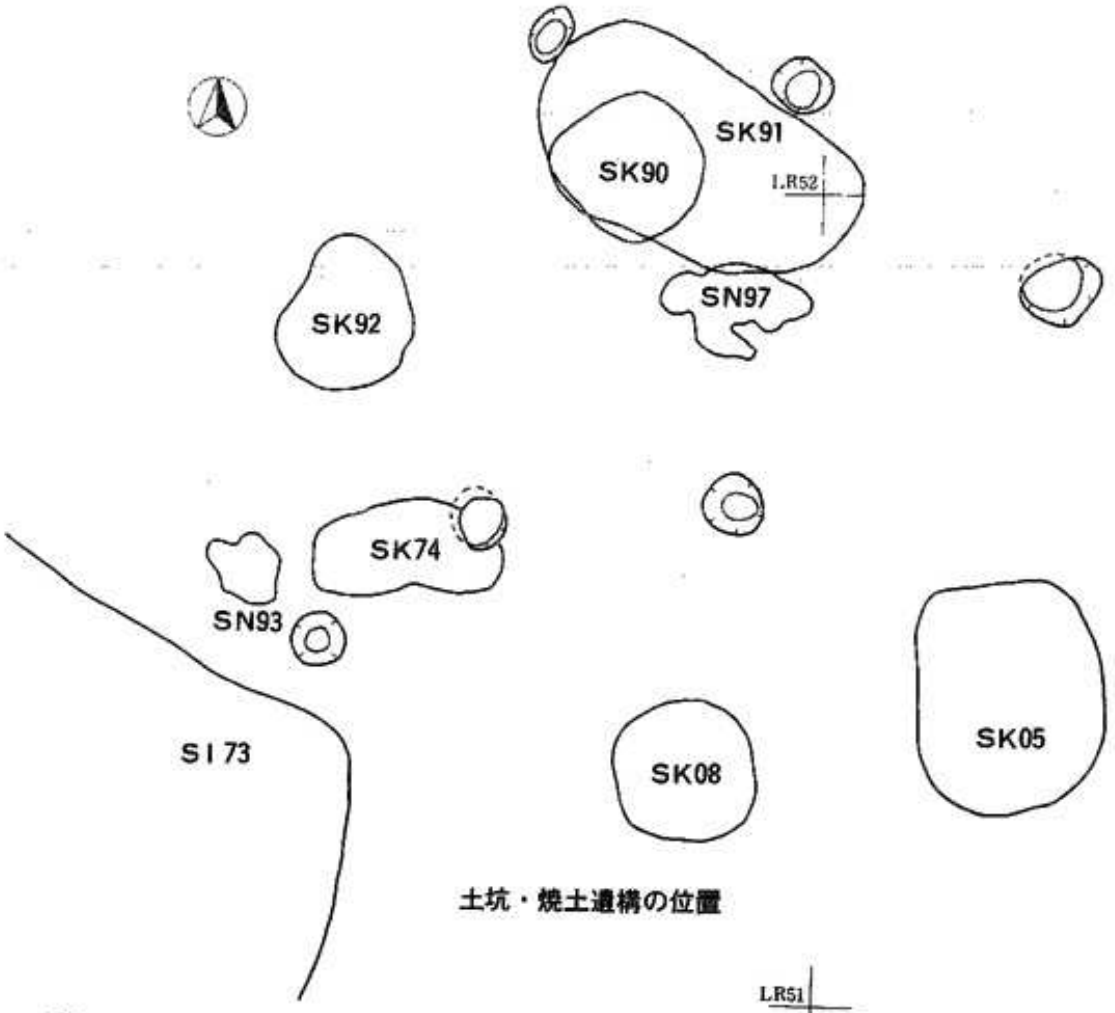
LQ51グリッドで検出した。SB30建物跡に隣接し約1m西側にSK08土坑がある。西側にはこのほか、SK74・90・91・92土坑、SN93・97焼土遺構が集中している（第98図）。平面形は上端部長径約1m12cm、短径約97cmの楕円形である。底面は底径約32cmの円形で深さは約50cmである。長軸方位はほぼ真北である。断面形は深めのすり鉢状であるが、北側で壁の中程から緩やかに外反して広がる。



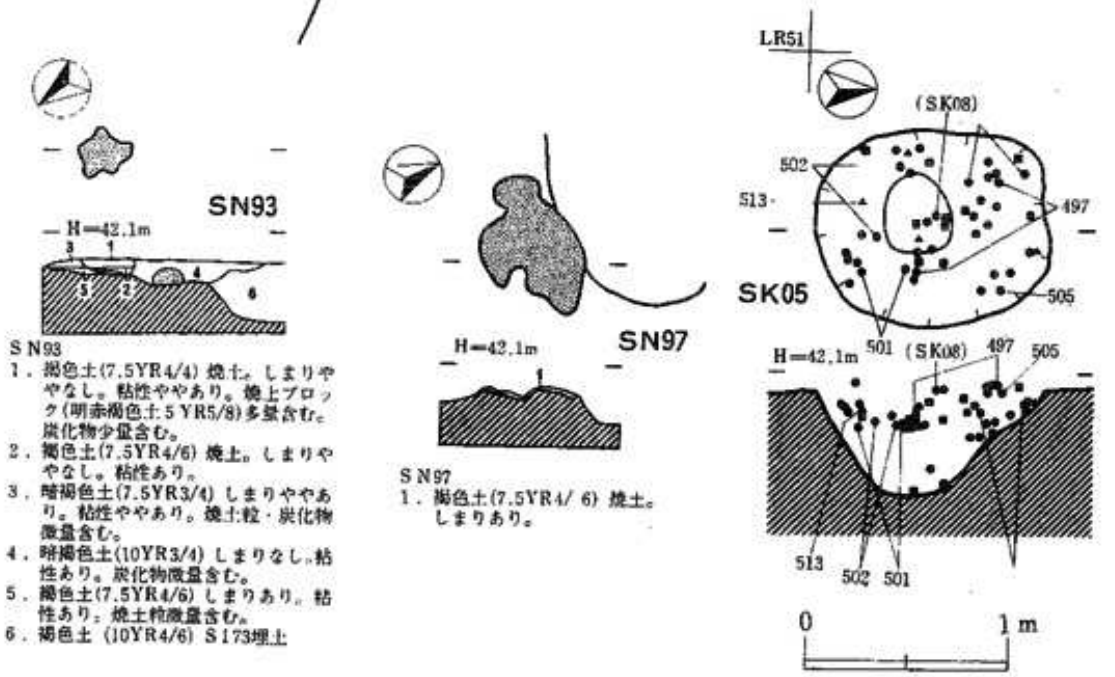
SI100
1．褐色土　(10YR4/6)　しまりあり。粘性あり。
2．褐色土　(10YR4/4)　しまりあり。粘性あり。
3．褐色土　(10YR4/6)　しまりあり。粘性あり。地山崩壊土が混入。
4．黄褐色土(10YR5/6)　しまりあり。粘性あり。地山崩壊土が多量に混入。

SI100炉
1．褐色土　(10YR4/6)　しまりあり。粘性あり。焼土粒微量含む。
2．褐色土　(10YR4/4)　しまりあり。粘性あり。焼土粒少量含む。
3．黒色土　(10YR2/1)　炭化物層。焼土粒多量含む。
4．赤褐色土(5YR4/6)　焼土。焼土ブロック(明赤褐色土5YR5/8)・炭化物少量含む。
5．赤褐色土(5YR4/6)　焼土。焼土ブロック(明赤褐色土5YR5/8)多量含む。炭化物微量含む。
6．黒色土(10YR1.7/1)　炭化物層。焼土粒少量含む。地山崩壊土が少量混入。
7．褐色土　(10YR4/4)　しまりあり。粘性あり。焼土粒・炭化物少量含む。
8．褐色土　(7.5YR4/6)　しまりあり。粘性あり。焼土粒・炭化物・地山崩壊土が少量混入。

第97図　SI100竪穴住居跡



土坑・焼土遺構の位置

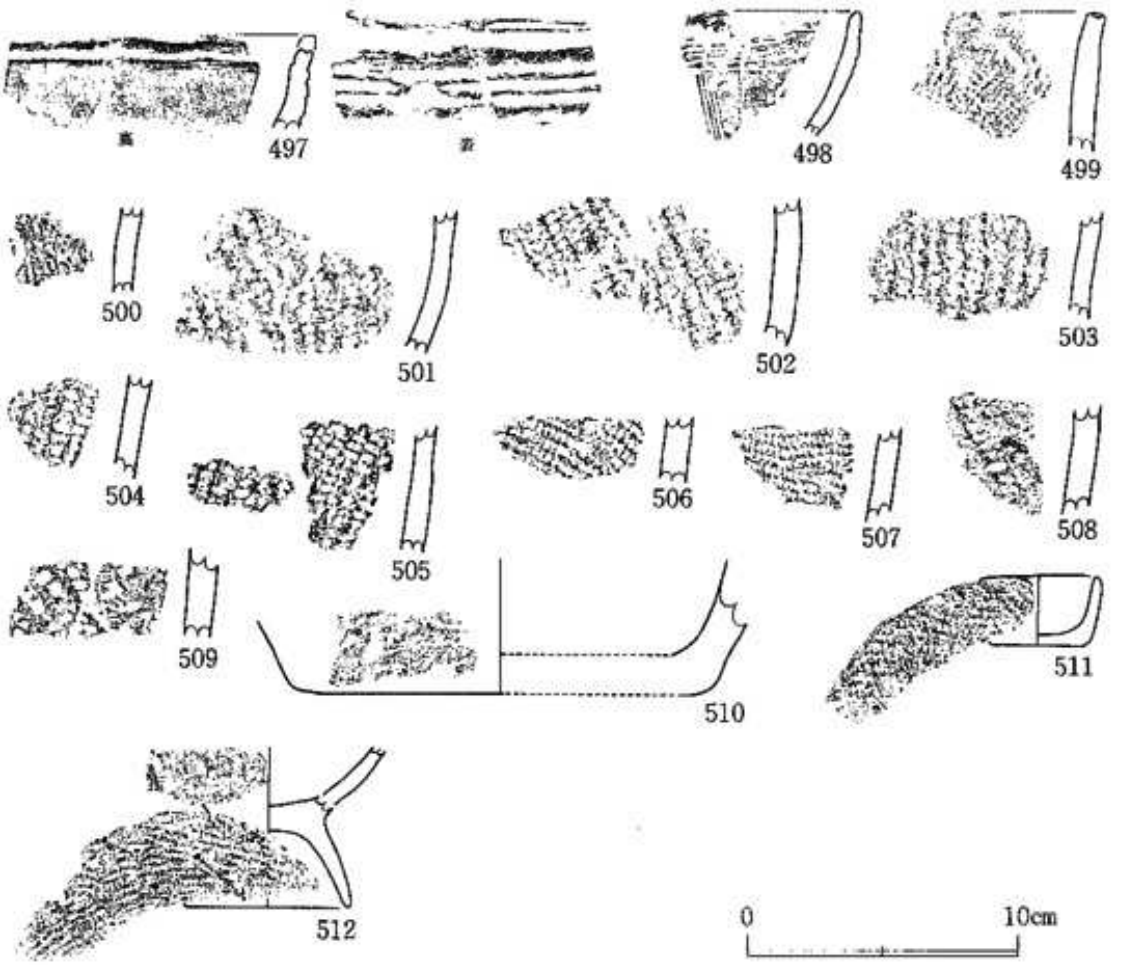


SN93
1．褐色土(7.5YR4/4) 焼土。しまりややなし。粘性ややあり。焼土ブロック(明赤褐色土5YR5/8)多量含む。炭化物少量含む。
2．褐色土(7.5YR4/6) 焼土。しまりややなし。粘性あり。
3．暗褐色土(7.5YR3/4) しまりややあり。粘性ややあり。焼土粒・炭化物微量含む。
4．暗褐色土(10YR3/4) しまりなし。粘性あり。炭化物微量含む。
5．褐色土(7.5YR4/6) しまりあり。粘性あり。焼土粒微量含む。
6．褐色土 (10YR4/6) SI73埋土

SN97
1．褐色土(7.5YR4/ 6) 焼土。しまりあり。

第98図　SN93・97焼土遺構、SK05土坑

遺物は上半部で多く出土した。第99図512の台付鉢は底面近くから出土した。SK06土坑、SK08土坑出土遺物と接合、同一個体のものもある。土器はⅣ群とⅥ群が主体である。土器片とともに石核が1点出土し、この石核から剥離された剥片が、SI70竪穴住居跡から出土した。



番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
497	SK05		鉢	Ⅳ			工字文	
498	〃		〃	Ⅳ			沈線文	表
499	〃		深鉢	Ⅰ			RL縄回転	
500	〃		〃	Ⅱ	3	G	不明	
501	SK05・06		〃	Ⅵ	調a		RL横回転	
502	SK05		〃	Ⅵ	〃		〃	
503	〃		〃	Ⅵ	〃		RL斜回転	表
504	〃		〃	Ⅵ	〃		〃	表
505	SK05・06		〃	Ⅵ	〃		〃	
506	SK05		〃	Ⅵ	〃		RL横回転	
507	〃		〃	Ⅵ	〃		RL縦回転	
508	〃		〃	Ⅵ	〃		LR縦回転	表
509	〃		〃	Ⅵ	〃		〃	
510	〃		〃	Ⅵ	底d			
511	〃		鉢	Ⅵ			RL横回転	
512	〃		台付鉢	Ⅵ			LR斜回転	内・外・台部内

第99図　SK05・06土坑出土土器

SK06土坑（第99図・第100図・第102図・第103図）

LO49グリッドで検出した。SX103柱穴群の範囲内にあり、南側にやや離れてSK95土坑がある。確認面はⅣ層上面であるが、遺物がⅢ層中からすでに出土していたことと、SK95土坑の掘り込みがⅢ層中から確認できたことから本遺構も構築面はⅢ層中であったと思われる。平面形は上部径約65cmの円形で深さは約15cmである。底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は自然堆積である。遺物は上部の中央に集中し、確認面で礫の片面を磨面とした大型の石皿が出土した。土器はⅡ群3類が主である。SK05土坑出土遺物と接合、同一個体の破片は埋土上部から出土した。第100図515は石核B類で、単独でみれば旧石器時代の石核ともみられるものである。本土坑は出土した土器と出土状況から縄文時代中期後葉の土坑で、SK05土坑出土土器との接合関係は二次的なものと考えられる。

SK08土坑（第101図・第103図）

LR51グリッドで検出した。東側にSK05土坑、西側に土坑4基、焼土遺構2カ所がある。平面形は上端部径約68cmの円形で、深さは約28cmである。断面形は鍋形で壁は底面から丸みを帯びて緩やかに立ち上がる。埋土は全体的に焼土や炭化物を含み地山ブロックも混入し、しまりがあることから人為的堆積と思われる。

遺物は埋土中からⅣ群土器が出土した。SK05土坑出土土器と接合・同一個体がある。本土坑の出土土器はⅣ群が主体であり、接合関係も認められることから、SK05土坑と同時期のものと考えられる。

SK11土坑（第102図）

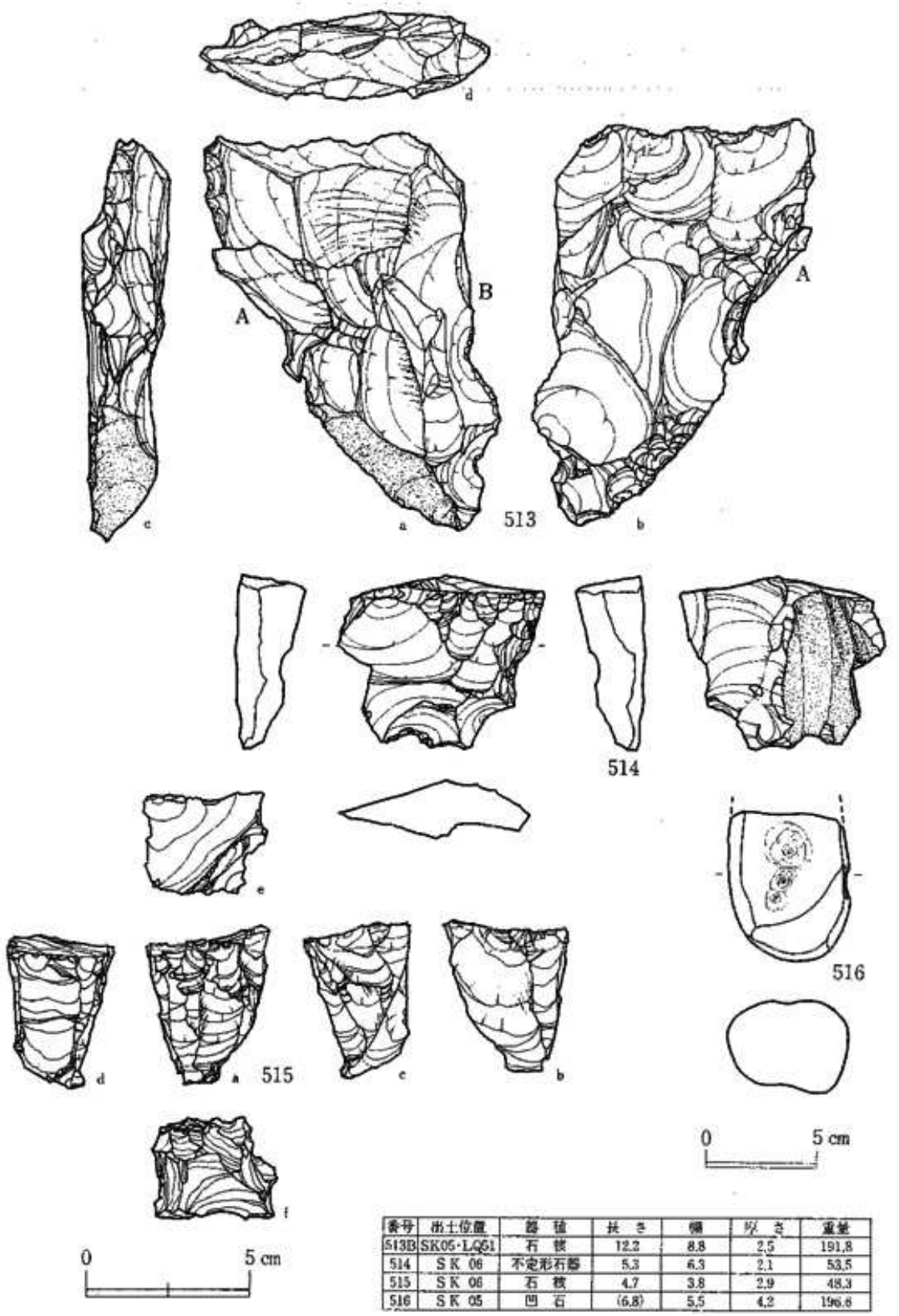
LP47グリッドで検出した。SX103柱穴群の範囲内にあり西側にSB98建物跡・SB63建物跡がある。上端部径約60cm、深さ約10cmの浅い不整円形の土坑である。遺物は出土しなかった。

SK15土坑（第102図）

LT47グリッドで検出した。SI20竪穴住居跡の西側に位置する。平面形は上部径約85cmの円形で、深さ約32cmである。断面形は鍋形を呈し、壁は底面と明確な稜をもたず緩やかに立ち上がる。底面から約5cm上に火熱をうけて焼土化した層（10層・11層）がある。その上位の埋土の3層・7層はきわめて固くしまっており埋土は人為的な堆積状況である。一度全体を掘った後黄褐色土（12層）を貼り、その上面で火を焚いた後掘り上げた地山土を再び人為的に埋め戻したものと推定される。

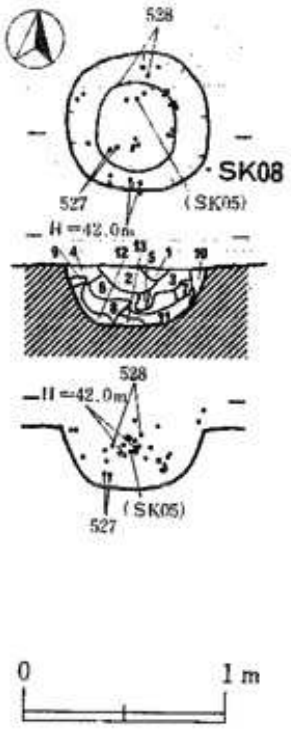
SK31土坑（第104図～第110図）

丘陵西斜面の中腹、MC48グリッドで検出した。長径約44cm、短径約29cm、深さ約10cmの楕円形のピットの北西側に袋状の張り出しがついた形態である。この張り出し部分から同一母岩の小剥片が371点とその石核がまとまって出土した。石核は半分に折れた状態であった。更に、埋

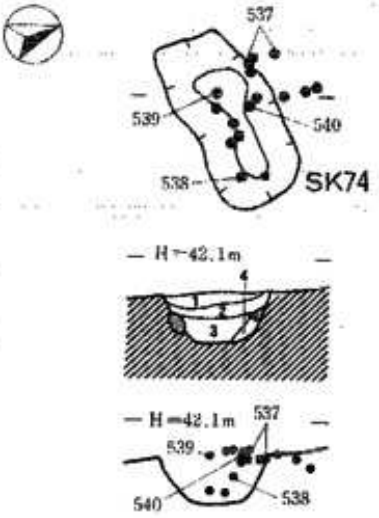


番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
513B	SK05・LQ51	石核	12.2	8.8	2.5	191.8
514	SK 06	不定形石器	5.3	6.3	2.1	53.5
515	SK 06	石核	4.7	3.8	2.9	48.3
516	SK 05	凹石	(6.8)	5.5	4.2	196.6

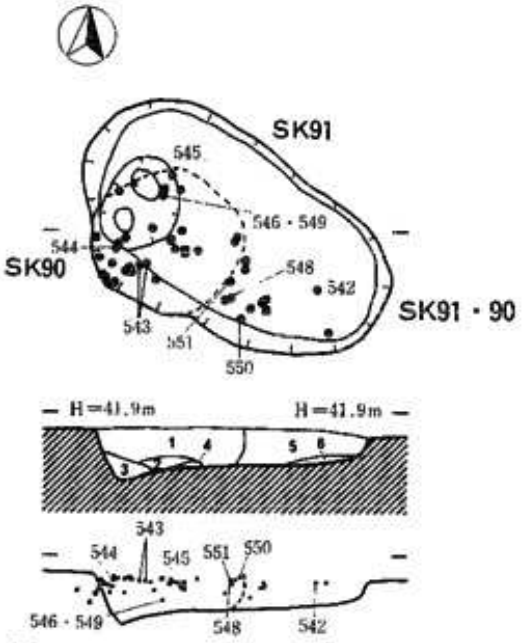
第100図　SK05・06土坑出土石器



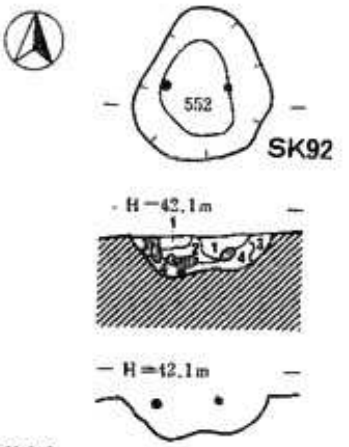
SK08
1．黒褐色土（10YR3/2）しまりややあり。焼土粒・炭化物微量含む。
2．暗褐色土（10YR3/4）しまりややあり。炭化物微量含む。
3．褐色土（10YR4/4）しまりややあり。炭化物微量含む。地山崩壊土が少量混入。
4．褐色土（10YR4/4）しまりあり。焼土粒・炭化物微量含む。
5．暗褐色土（10YR3/4）しまりややあり。炭化物微量含む。地山崩壊土が少量混入。
6．褐色土（10YR4/4）しまりややなし。孔隙多。炭化物微量含む。
7．暗褐色土（10YR3/4）しまりあり。粘性ややあり。炭化物微量含む。地山崩壊土が少量混入。
8．にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまりあり。粘性ややあり。炭化物微量含む。
9．黄褐色土（10YR5/6）地山ブロック。
10．黄褐色土（10YR5/6）地山ブロックの崩壊土に暗褐色土が混じる。
11．暗褐色土（10YR3/4）しまりあり。炭化物微量含む。地山崩壊土が少量混入。
12．暗褐色土（10YR3/3）しまりあり。粘性ややあり。炭化物微量含む。地山崩壊土が混入。
13．褐色土（10YR4/4）しまりあり。粘性あり。地山ブロックが多量に混入。



SK74
1．暗褐色土（10YR3/4）しまりややなし。粘性なし。
2．暗褐色土（10YR3/4）しまりややなし。粘性ややあり。
3．にぶい黄褐色土（10YR4/3）しまりあり。粘性あり。地山崩壊土が多量に混入。
4．褐色土（10YR4/4）きわめてしまりあり。粘性あり。地山崩壊土が混入。
5．褐色土（10YR4/6）きわめてしまりあり。粘性あり。

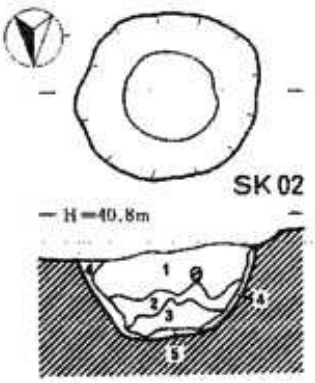


SK91・90
1．暗褐色土（10YR3/3）しまりややなし。粘性ややあり。
2．暗褐色土（10YR3/3）しまりややなし。粘性ややあり。孔隙多。
3．褐色土　（10YR4/6）きわめてしまりあり。粘性大。
4．黄褐色土（10YR5/6）しまりややなし。粘性ややあり。地山崩壊土が混入。
5．褐色土　（10YR4/4）しまりあり。粘性なし。炭化物微量含む。
6．黄褐色土（10YR5/6）しまりあり。粘性なし。炭化物微量含む。地山崩壊土が混入。

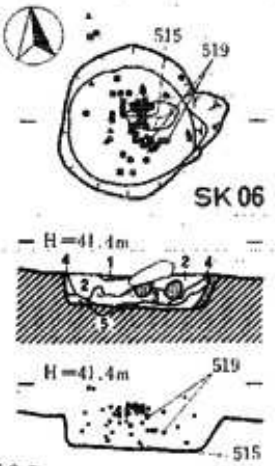


SK92
1．暗褐色土（10YR3/3）しまりややなし。粘性なし。
2．褐色土　（10YR4/4）しまりややなし。粘性あり。
3．褐色土　（10YR4/6）しまりあり。粘性あり。
4．黄褐色土（10YR5/6）しまりあり。粘性大。

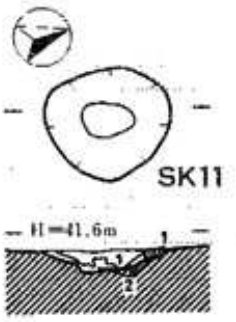
第101図　SK08・74・90・91・92土坑



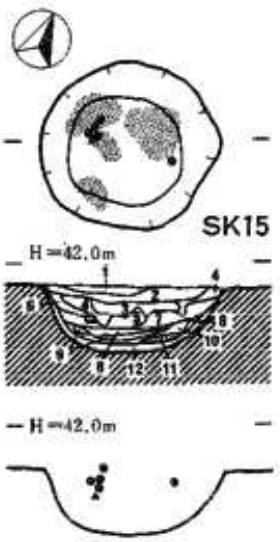
SK02
1．黒褐色土（10YR2/2）しまりややあり。炭化物微量含む。
2．黒褐色土（10YR2/2）しまりややあり。炭化物微量含む。地山崩壊土が微量混入。
3．黒褐色土（10YR2/2）しまりややあり。炭化物微量含む。地山崩壊土が少量混入。
4．黒褐色土（10YR2/3）しまりあり。地山崩壊土が多量に混入。
5．黒褐色土（10YR2/3）きわめてしまりあり。粘性ややあり。炭化物微量含む。地山崩壊土が微量混入。



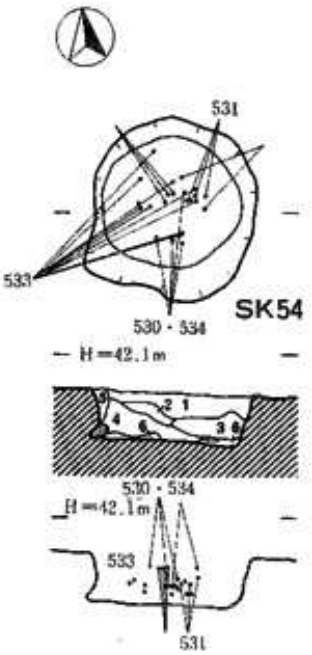
SK06
1．褐色土（10YR4/4）しまりややあり。
2．褐色土（10YR4/4）しまりややあり。炭化物少量含む。
3．暗褐色土（10YR3/4）しまりややあり。炭化物少量含む。地山崩壊土が少量混入。
4．褐色土（10YR4/4）しまりあり。炭化物微量含む。地山崩壊土が多量に混入。
5．褐色土（10YR4/6）しまりあり。炭化物微量含む。地山崩壊土が多量に混入。



SK11
1．褐色土（10YR4/6）しまりややあり。炭化物微量含む。
2．黄褐色土（10YR5/6）しまりあり。暗褐色土（10YR3/4）が混入。



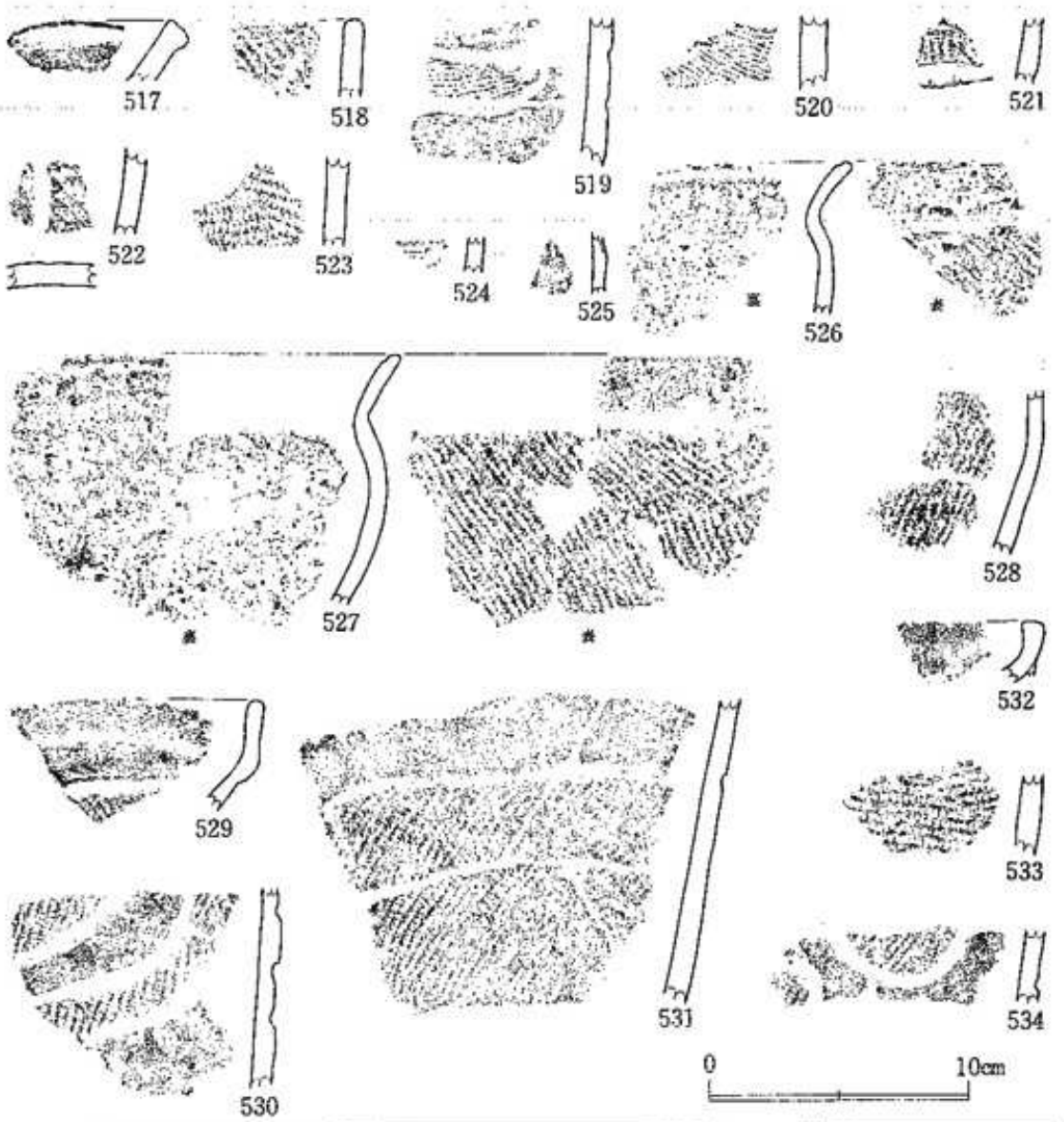
SK15
1．褐色土（10YR4/4）しまりややなし。炭化物微量含む。
2．褐色土（10YR4/6）しまりややあり。焼土粒微量含む。炭化物少量含む。
3．暗褐色土（10YR3/4）きわめてしまりあり。固い。粘性ややあり。炭化物少量含む。
4．褐色土（10YR4/6）しまりあり。炭化物微量含む。地山崩壊土が少量混入。
5．褐色土（10YR4/6）しまりあり。粘性ややあり。地山崩壊土が多量に混入。
6．黄褐色土（10YR5/6）きわめてしまりあり。地山崩壊土が混入。
7．黄褐色土（10YR5/6）きわめてしまりあり。地山ブロック混入。
8．黄褐色土（10YR5/6）地山ブロック層。しまりややあり。粘性小。炭化物微量含む。
9．黄褐色土（10YR5/6）地山ブロック層。しまりあり。粘性あり。炭化物微量含む。焼土化した地山ブロック少量含む。
10．褐色土（10YR4/4）しまりややあり。炭化物少量含む。地山ブロック少量混入。火熱を受けている。
11．明褐色土（7.5YR5/6）焼土。しまりややあり。火熱を受け赤変しているが軟質。炭化物多量含む。
12．黄褐色土（10YR5/6）しまりあり。



SK54
1．褐色土（10YR4/6）しまりややあり。炭化物微量含む。
2．黄褐色土（10YR5/6）しまりあり。粘性あり。炭化物微量含む。
3．褐色土（10YR4/4）しまりややあり。炭化物微量含む。
4．褐色土（10YR4/4）しまりあり。炭化物多量含む。
5．黄褐色土（10YR5/6）しまりあり。地山ブロック少量混入。
6．にぶい黄褐色土（10YR5/4）しまりあり。粘性あり。地山崩壊土が多量に混入。

0　1m

第102図　SK02・06・11・15・54土坑



番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
517	SK06		浅鉢	II	3	F	不明	
518	〃		深鉢	VI	I Ia		LR縦回転	
519	〃		〃	II	3	A	縄文部	
520	〃		〃	II	3	A	不明	
521	〃		〃	II	3	G		
522	〃		〃	II	3	A	不明	
523	〃		〃	VI	胴a		LR斜回転	表
524	〃		〃	IV			工字文	
525	〃		〃	II	3	H		
526	SK08		鉢	IV				
527	〃		〃	IV			RL縦回転	表・裏
528	〃		深鉢	IV			〃	表
529	SK54		浅鉢	II	3	B2	不明	
530	〃		深鉢	II	3	B2		
531	〃		〃	II	3	B2	無文部	表
532	SK08		浅鉢	II	3	B3	不明	表
533	SK54		深鉢	VI	胴a		LR縦回転	表
534	〃		〃	II	3	B2	不明	表

第103図　SK06・08・54土坑出土土器

土を水洗いしふるいにかけたところ、チップが多数含まれていた。出土状況は、MA50グリッドで検出した剥片集中出土地点と類似する。石核と剥片、剥片どうしの接合資料は12件あった。

第105図～第107図535は大型の剥片素材の石核に10枚の剥片が接合したものである。c面を打面、a面を作業面としてA・Bを剥ぎ取った後、a面側からc面の加撃をくりかえして、調整打面を作出し、さらにa面を作業面とする剥片剥離作業を行っている。縦長剥片Cはc面からb面へ打点を90度転移して剥ぎ取られたものである。この後、c面を打面として横長剥片、b面を打面として縦長剥片が生産されている。石核Kは上下両縁に打面調整のための細かな剥離痕が残り篦状石器の未整品のようでもある。

第108図～第110図536は19枚の剥片が接合したものである。加撃は打面を替えながらa面の側縁からa面を作業面として求心的に行っている。これらはすべて剥片で石核・石器は含まれていない。剥片の形態は多様で、目的的な剥片は得られていない。535・536及び出土した他の剥片からみて剥片石器の素材としての剥片を得ようとする意識は薄いようで、石器素材の埋納地点（デポ）とは考えにくい。本土坑から出土した石器類の中で、石器の素材として想定できるのは535Kの石核であり、打製石斧か篦状石器を製作する途中で剥離された剥片とチップを最終段階で2つに折れてしまった未製品とともにまとめて投棄したものとも考えられる。

SK44土坑（第111図）

遺構の集中する中央平坦部からやや離れた北東側緩斜面のLN52グリッドで検出した。東側にはSB40建物跡がある。平面形は上部径約65cmの円形で、深さは約15cmである。底面はほぼ平坦で壁は斜めに立ち上がる。覆土は自然堆積であり、確認状況等はSK02土坑と似ている。遺物は出土しなかった。

SK54土坑（第102図・第103図）

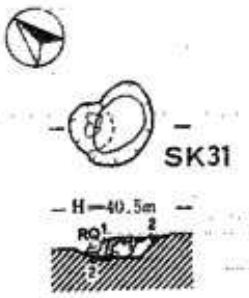
LS47グリッドで検出した。SB32建物跡とSI20竪穴住居跡に挟まれた位置にある。平面形は上端部径約80cmの円形で、深さは約22cmである。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土は6層からなる自然堆積である。遺物は中央に集中して出土した。

土器はⅡ群3類でB2技法のものとⅥ群である。

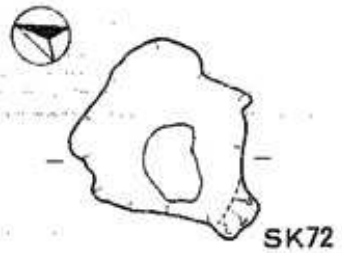
SK72土坑（第104図）

調査区西端のMJ51グリッドで検出した。周囲にはほかに遺構はなく、遺物も出土していない。本遺跡の中にあって特異な位置にある。平面形は径約85cmの不整円形で、深さは約18cmである。壁は底部から緩やかに上端部に続き洗面器状の形態である。

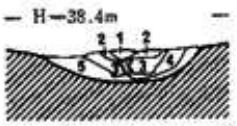
埋土中からSK31土坑と同様に同一母岩の剥片とチップが314点かたまって出土した。埋土をふるいにかけたところ多数のチップも含まれていた。出土した剥片はMD50グリッドやSK31土坑で出土した剥片よりも全体にさらに小さくて剥片石器の素材とはならないもので、剥片・チッ

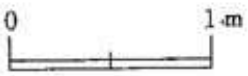


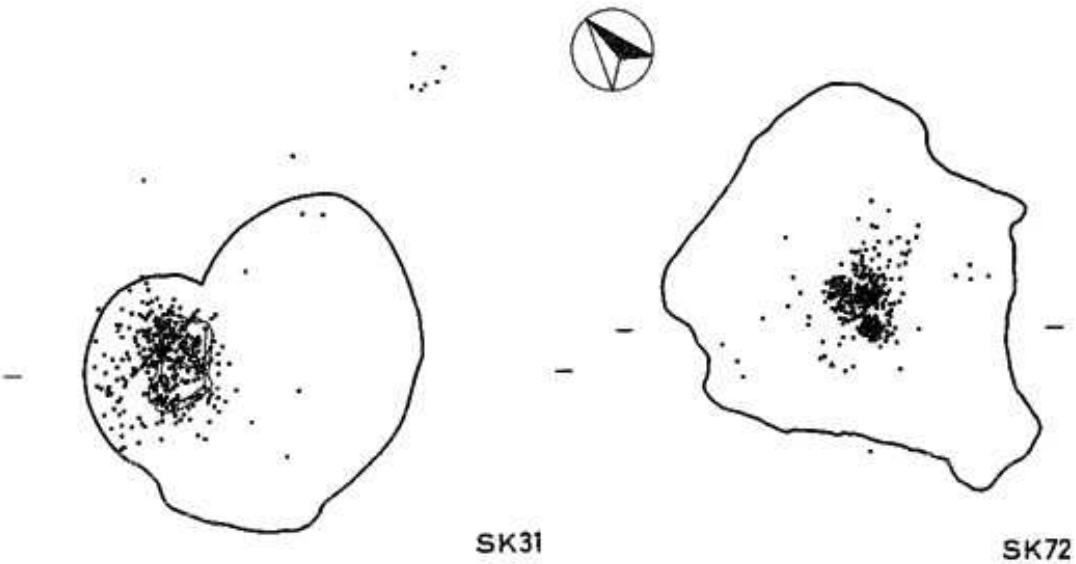
SK31
1．褐色土（10YR4/4）しまりややあり。炭化物微量含む。地山崩壊土が多量に混入。
2．黄褐色土(10YR5/8)　しまりあり。地山崩壊土が少量混入。

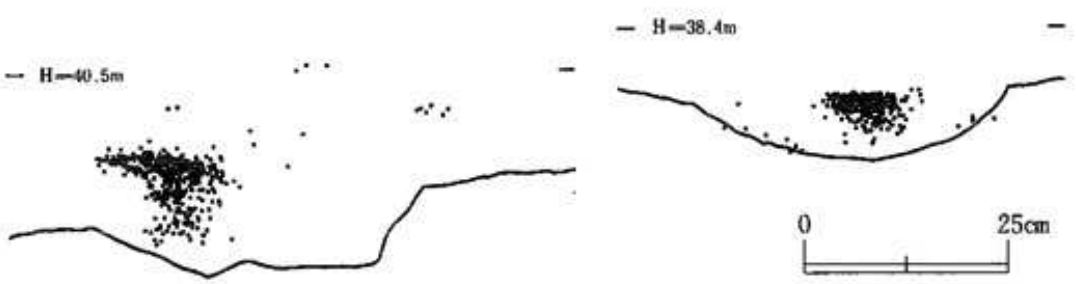


SK72
1．黒褐色土(10YR2/3)　基本層位の第Ⅱ層。しまりややなし。
2．暗褐色土(10YR3/3)　しまりややなし。
3．暗褐色土(10YR3/4)　しまりあり。地山崩壊土が少量混入。
4．褐色土(10YR4/4)　しまりあり。粘性ややあり。炭化物微量含む。地山崩壊土が多量に混入。
5．にぶい黄褐色土(10YR5/4)　しまりあり。炭化物微量含む。地山崩壊土が多量に混入。

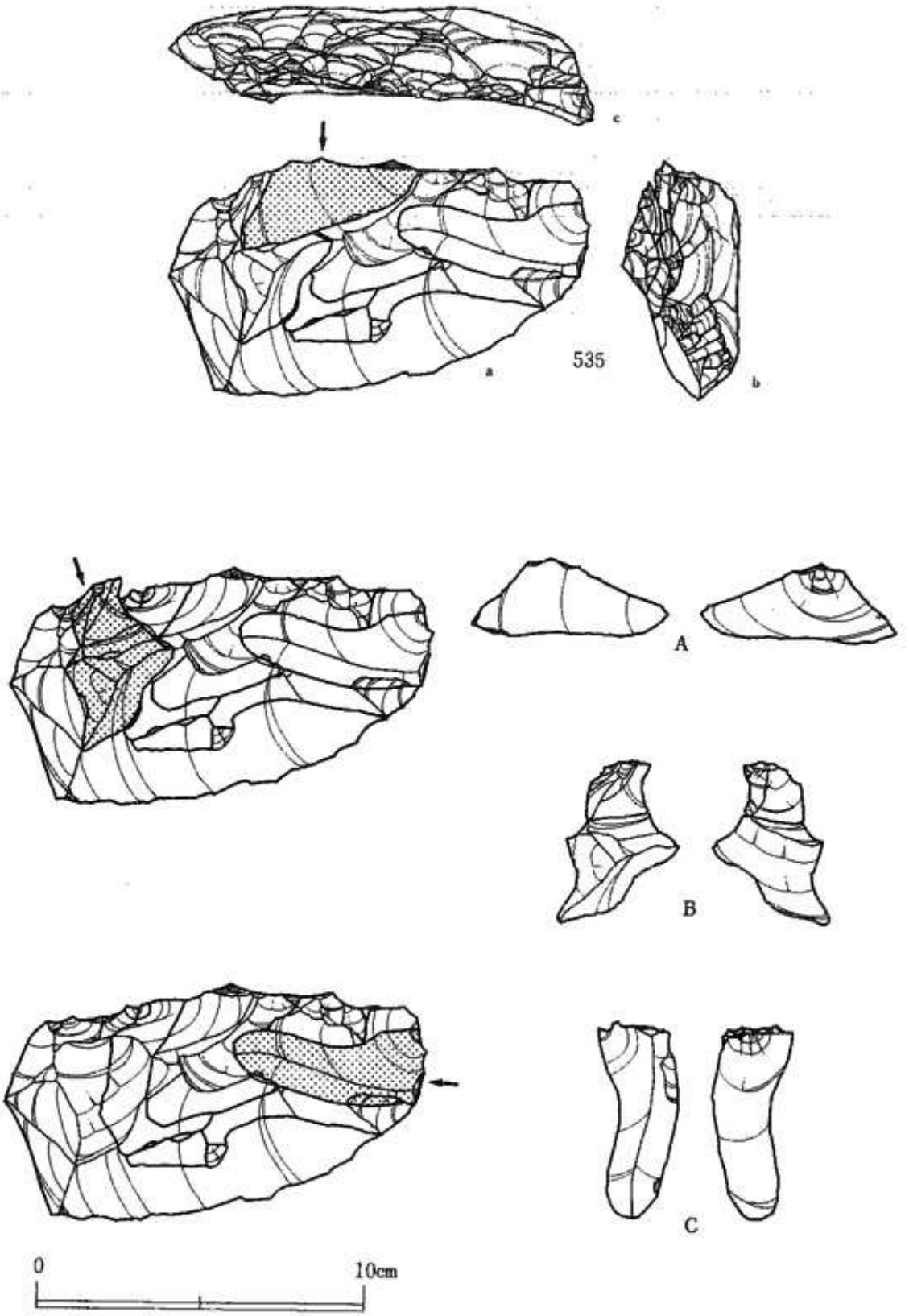




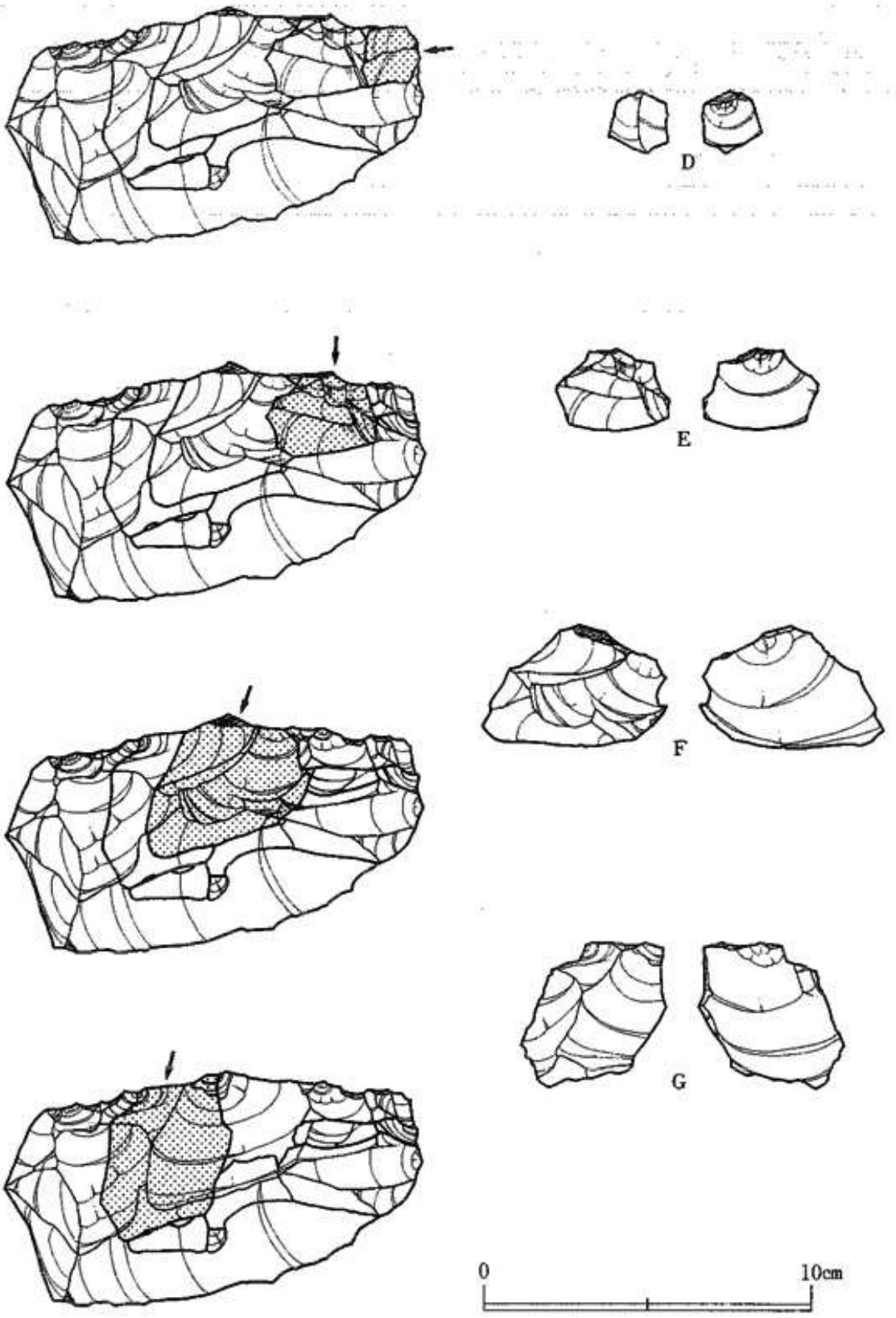




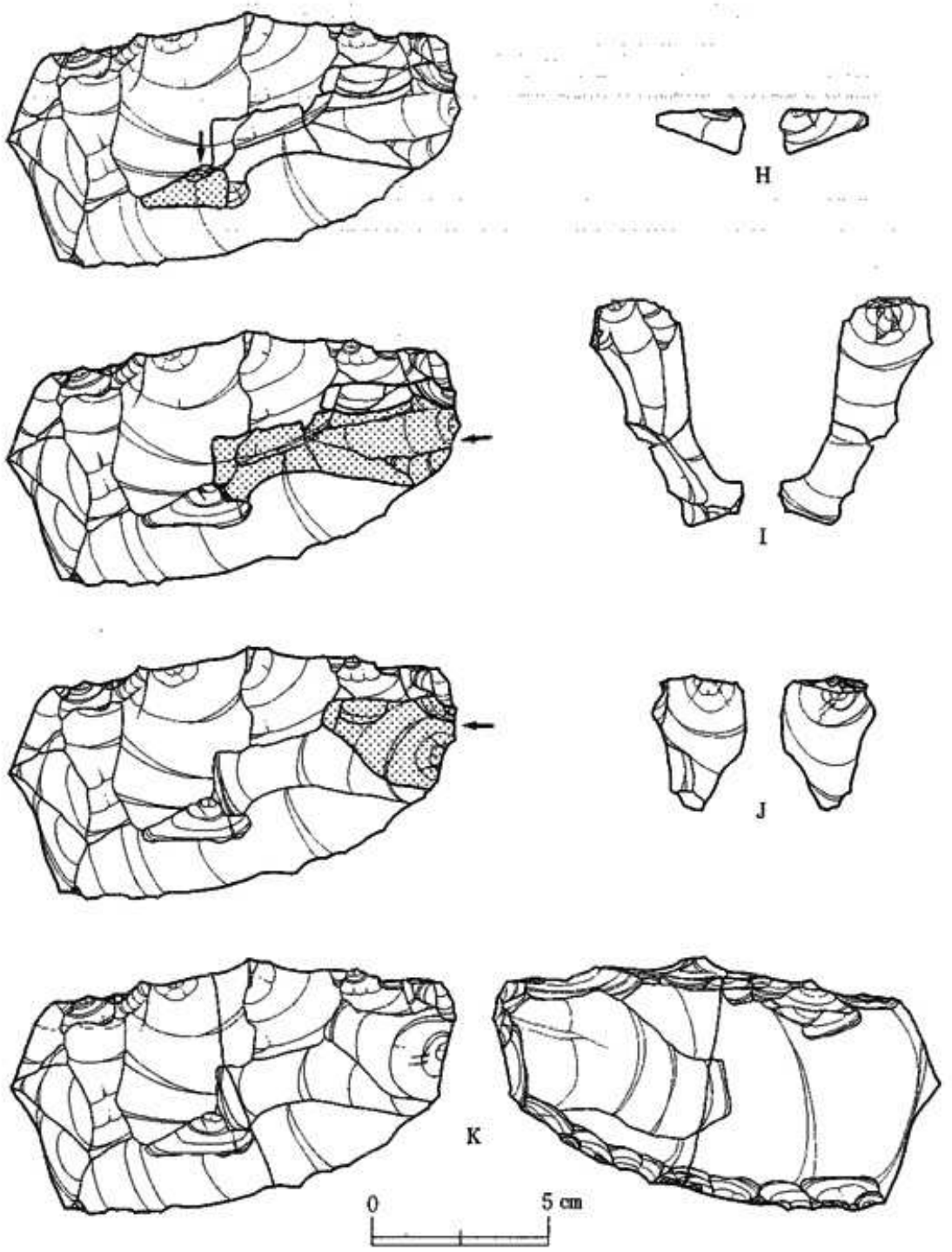
第104図　SK31・72土坑



第105図　SK31土坑出土石器(1)

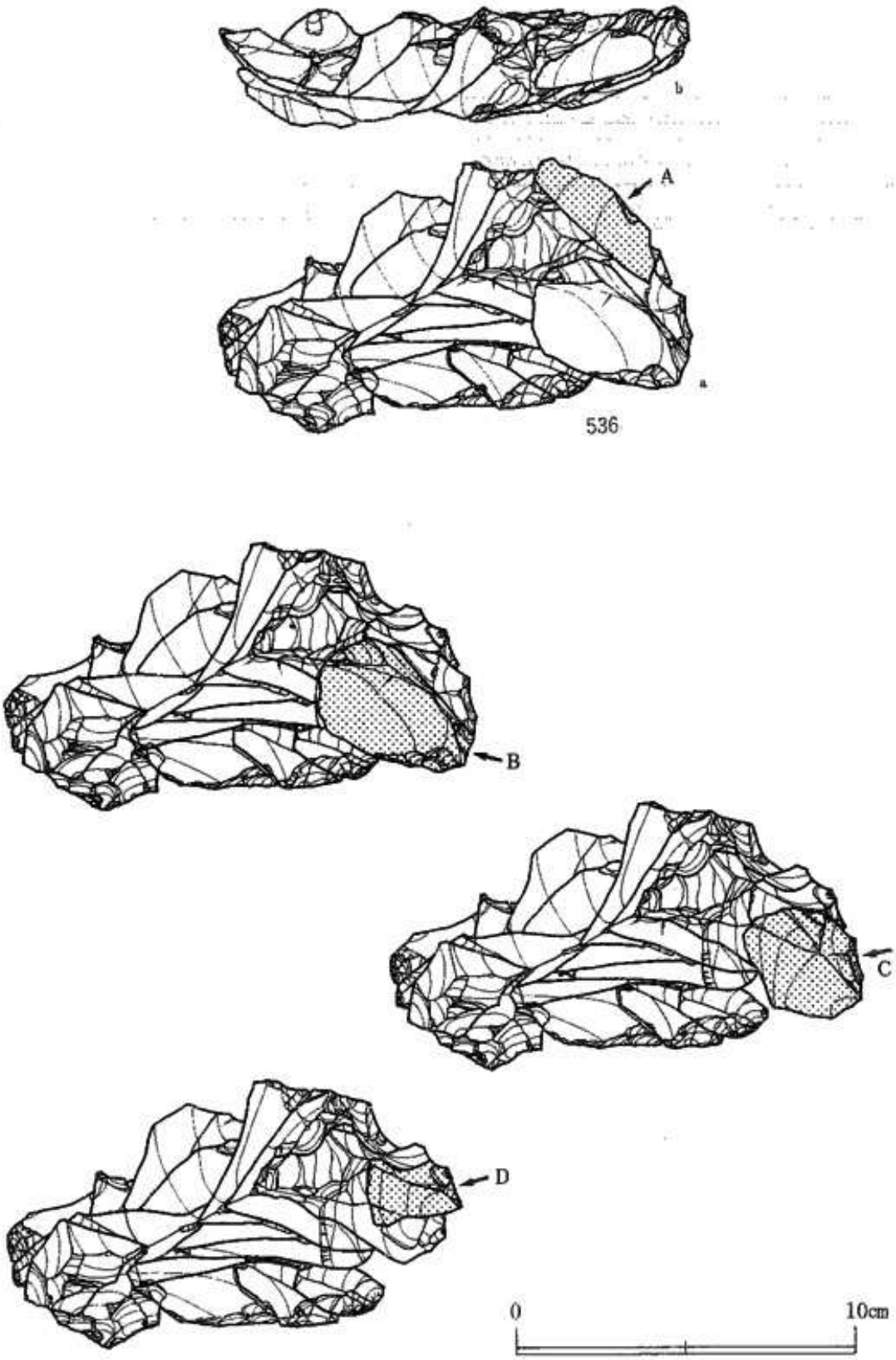


第106図　SK31土坑出土石器(2)

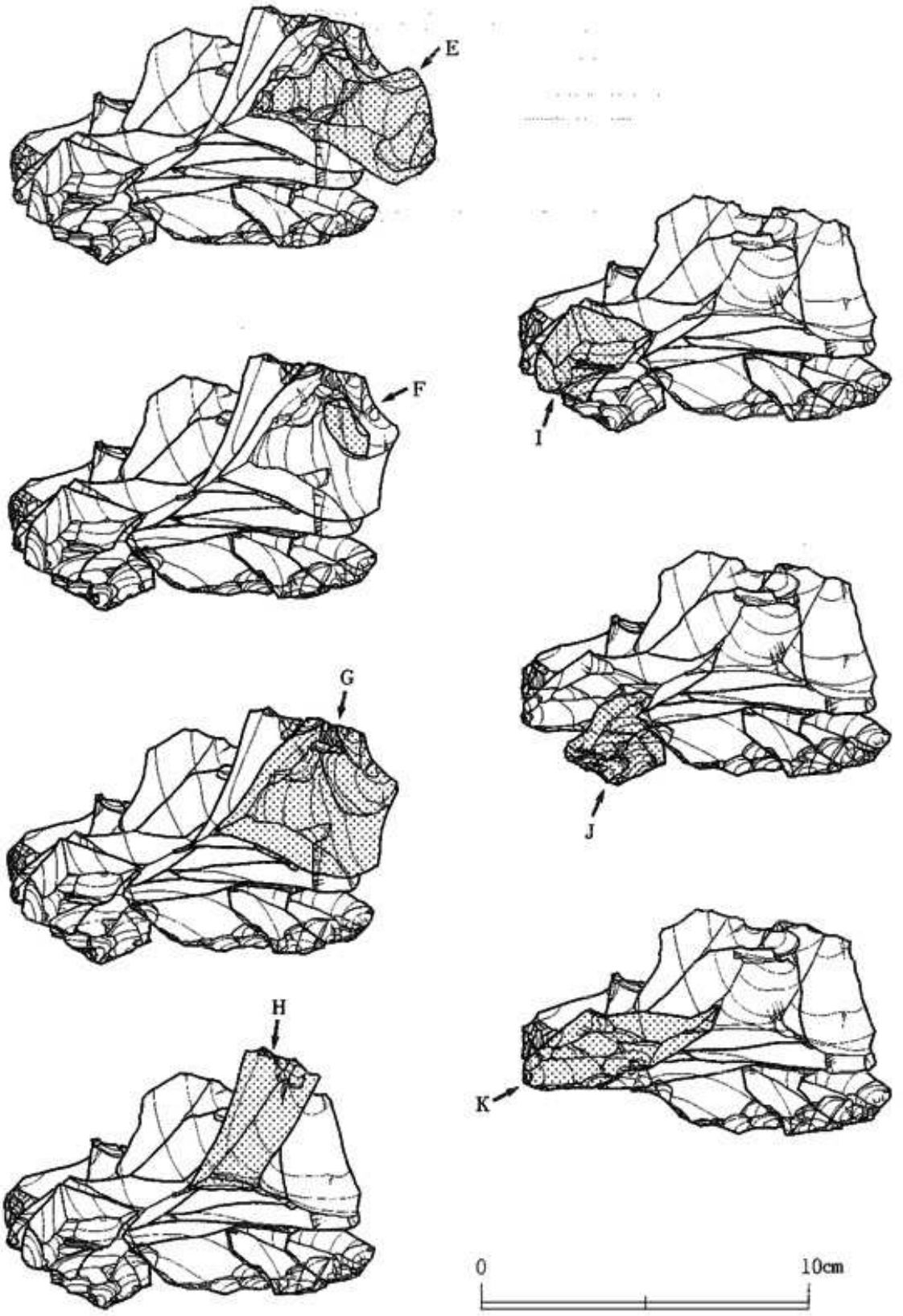


番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量	番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
535A	SK31	剥片	2.6	6.0	0.5	4.2	G	SK31	剥片	4.2	5.2	1.0	12.6
B	SK31	剥片	4.9	3.7	0.7	6.1	H	SK31	剥片	2.0	2.4	0.3	0.6
C	SK31	剥片	5.9	2.6	1.2	7.4	I	SK31	剥片	6.4	4.4	0.6	7.2
D	SK31	剥片	1.9	1.8	0.4	1.1	J	SK31	剥片	3.9	2.7	0.6	2.8
E	SK31	剥片	2.5	3.6	0.6	4.6	K	SK31	石核	12.6	7.2	2.0	195.5
F	SK31	剥片	3.5	5.8	1.2	17.7							

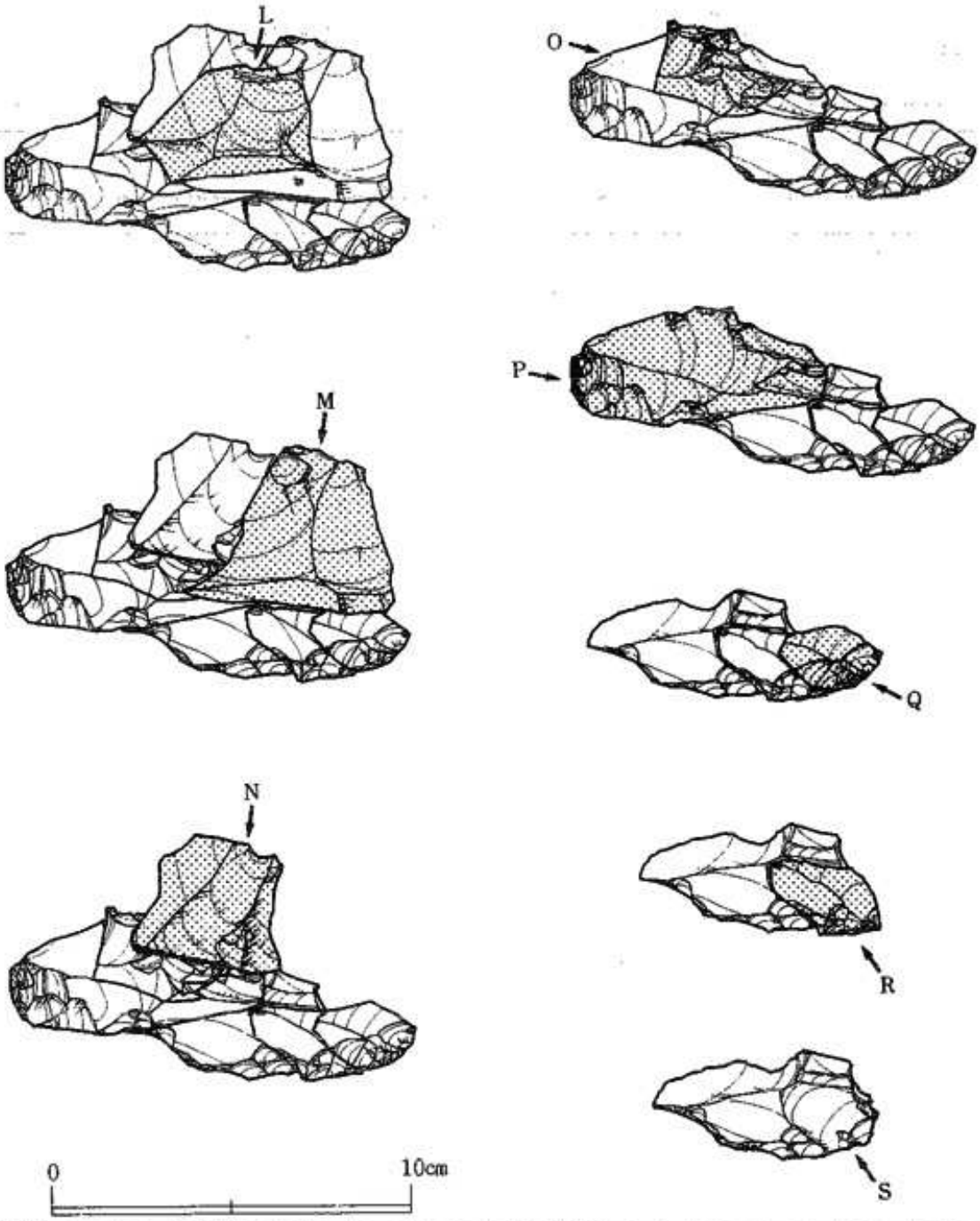
第107図　SK31土坑出土石器(3)



第108図　SK31土坑出土石器(4)

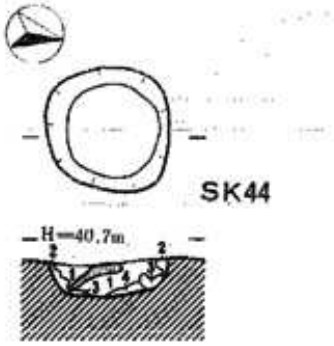


第109図　SK31土坑出土石器(5)

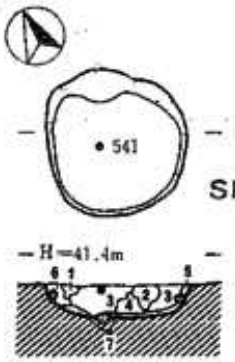


番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量	番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
536A	SK31	剥片	2.1	4.9	0.8	6.4	560K	SK31	剥片	6.5	2.0	0.6	5.9
B	SK31	剥片	5.3	3.5	0.8	9.6	L	SK31	剥片	3.5	4.9	0.9	11.9
C	SK31	剥片	3.6	3.8	1.3	9.2	M	SK31	剥片	4.8	6.0	0.8	16.0
D	SK31	剥片	2.9	3.3	0.6	2.4	N	SK31	剥片	4.0	4.3	0.4	7.4
E	SK31	剥片	6.4	3.7	0.8	12.2	O	SK31	剥片	3.6	2.8	0.5	3.9
F	SK31	剥片	1.3	2.6	0.4	0.8	P	SK31	剥片	3.3	7.2	0.9	18.0
G	SK31	剥片	4.8	6.3	1.7	29.9	Q	SK31	剥片	2.1	2.5	0.5	1.9
H	SK31	剥片	5.6	2.6	1.0	7.3	R	SK31	剥片	3.8	2.1	0.4	2.1
I	SK31	剥片	3.0	3.0	0.9	6.4	S	SK31	剥片	3.1	5.3	0.6	6.9
J	SK31	剥片	4.0	2.9	0.7	3.9							

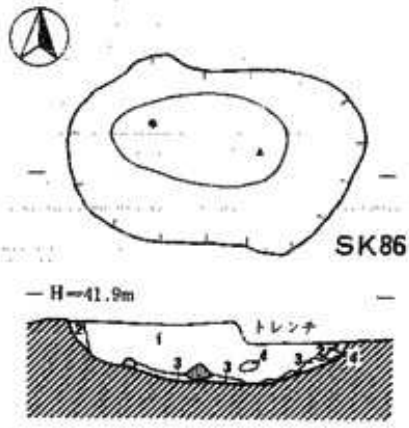
第110図　SK31土坑出土石器(6)



SK44
1．黒褐色土(10YR2/3) しまりややあり。粘性なし。炭化物少量含む。
2．褐色土　(10YR4/6) しまりあり。粘性あり。壁崩壊土。
3．褐色土　(10YR4/6) しまりあり。粘性あり。炭化物少量含む。
4．暗褐色土(10YR3/3) しまりあり。粘性あり。炭化物少量含む。



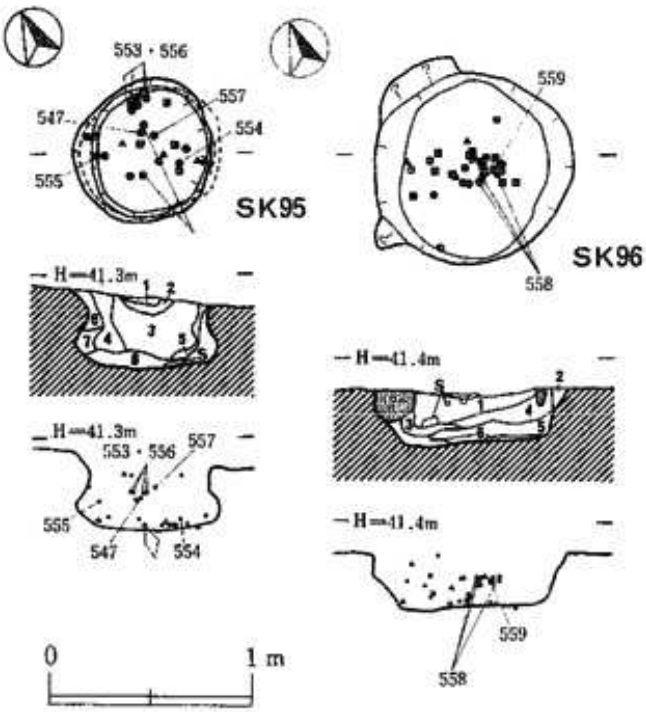
SK80
1.褐色土　(10YR4/6) しまりややなし。粘性ややあり。地山崩壊土が多量に混入。
2.暗褐色土(10YR3/3) しまりややなし。粘性ややあり。地山崩壊土が微量に混入。
3.暗褐色土(10YR3/4) しまりあり。粘性あり。焼土粒・炭化物微量含む。
4.暗褐色土(10YR3/4) しまりややあり。凡線ややあり。粘性あり。焼土粒・炭化物微量含む。
5.褐色土　(10YR4/6) しまりあり。粘性あり。地山崩壊土が少量混入。
6.褐色土　(10YR4/6) しまりあり。粘性あり。地山崩壊土が多量混入。
7.黄褐色土(10YR5/6) しまりややなし。粘性大。



SK86
1.褐色土　(10YR4/4) しまりややなし。粘性あり。炭化物微量含む。
2.褐色土(10YR4/6)　しまりあり。粘性あり。地山崩壊土が混入。
3.黄褐色土(10YR5/6) しまりあり。粘性大。地山崩壊土が多量に混入。
4.黄褐色土(10YR5/6) 地山ブロック。

SK95
1.暗褐色土(10YR3/3) しまりややあり。炭化物少量含む。
2.暗褐色土(10YR3/4) しまりややあり。炭化物少量含む。
3.褐色土　(10YR4/4) しまりややあり。炭化物多量含む。
4.暗褐色土(10YR3/4) しまりあり。粘性あり。炭化物多量含む。
5.褐色土　(10YR4/4) しまりあり。炭化物微量含む。
6.にぶい黄褐色土(10YR4/3) きわめてしまりあり。炭化物微量含む。地山崩壊土が多量に混入。
7.暗褐色土(10YR3/3) しまりあり。炭化物少量含む。地山ブロックが多量に混入。
8.黒褐色土(10YR2/3) しまりあり。粘性ややあり。炭化物多量含む。地山崩壊土が少量混入。

SK96
1.褐色土　(10YR4/6) しまりややあり。炭化物少量含む。
2.黄褐色土(10YR5/6) きわめてしまりあり。炭化物微量含む。地山崩壊土が多量に混入。
3.暗褐色土(10YR3/4) しまりあり。炭化物多量含む。
4.褐色土　(10YR4/6) しまりあり。炭化物微量含む。
5.褐色土　(10YR4/6) きわめてしまりあり。炭化物微量含む。
6.褐色土　(10YR4/4) しまりあり。炭化物微量含む。地山崩壊土が多量に混入。

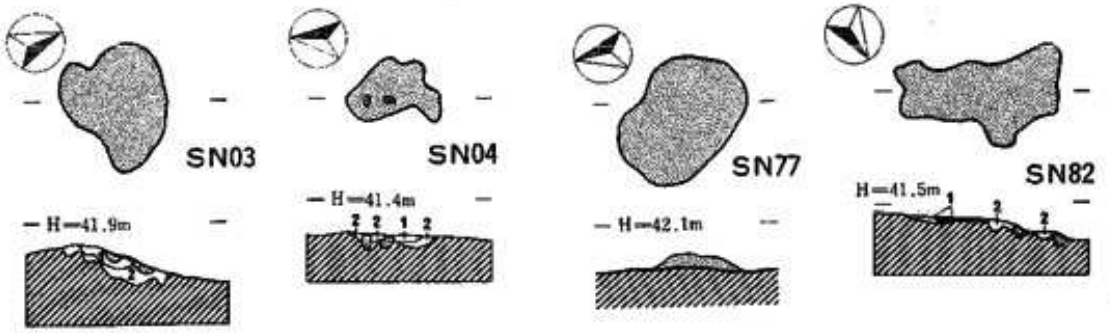


第111図　SK44・80・86・95・96土坑

プ類をまとめて投棄したものと推定される。

SK74土坑（第101図・第113図）

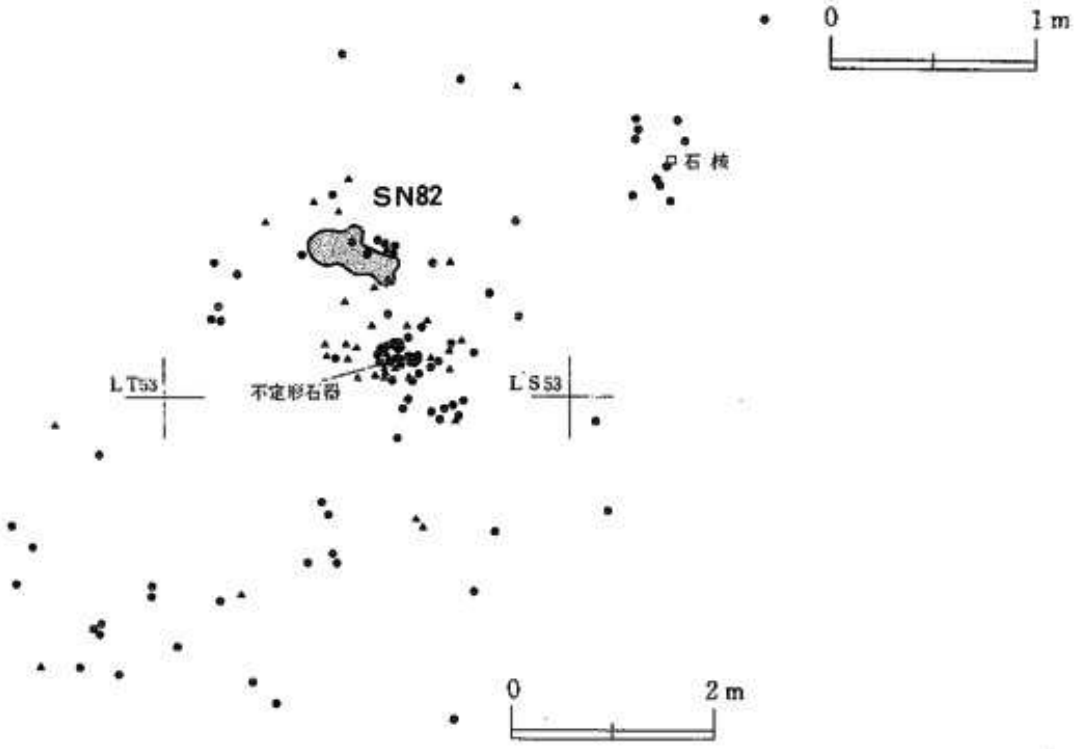
LR51グリッドで検出した。SI73竪穴住居跡、SK92土坑・SN93焼土遺構が近接する。平面形は長軸約90cm、短軸約45cmの楕円形で、深さは約23cmである。自然堆積土の状態の埋土中から、Ⅳ群とⅥ群の土器片が出土した。



SN03
1．赤褐色土（5YR4/6）焼土。しまりあり。粘性なし。
2．褐色土（7.5YR4/6）焼土。しまりあり。粘性なし。炭化物微量含む。

SN04
1．赤褐色土（5YR4/6）焼土。しまりあり。粘性なし。
2．褐色土（7.5YR4/6）焼土。しまりあり。粘性ややあり。

SN82
1．褐色土（7.5YR4/4）焼土。しまりあり。粘性あり。
2．褐色土（7.5YR4/6）焼土。しまりややなし。粘性ややなし。



第112図　SN03・04・77・82焼土遺構

SK80土坑（第111図・第113図）

LP53グリッドで検出した。北側のSI33竪穴住居跡Cと重複があり、本遺構が新しい。南側にSI01竪穴住居跡が隣接する。平面形は上端部径約68cmの不整円形で深さは約15cmである。底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がり、南側がやや内湾している。埋土中からⅢ群土器が1点出土した。

SK86土坑（第111図）

LQ53グリッドで検出した。丘陵中央平坦面の北端に位置し、SI75竪穴住居跡とSI01竪穴住居跡の間にある。確認面はⅣ層上面である。平面形は上端長径約1m42cm、短径約85cmの楕円形で、深さは約28cmである。長軸方位は東西方向に一致する。壁は底面と明確な稜をもたず緩やかに立ち上がる。埋土は底部近くに地山ブロックを含む層があり、その上部は褐色土1層で人為的堆積である。遺物はⅥ群土器1点、剥片1点が出土した。

SK90土坑（第101図・第113図）

LR52グリッドで検出した。SK91北側と重複しており、SK91の埋土を掘り込んでいる。推定される平面形は上端部径約70cmの円形で深さは約18cmである。明確な壁は南側のみ遺存し、底面から斜めに立ち上がる。埋土は全体にしまりがない。遺物は確認面近くでⅤ群土器が出土した。弥生時代の土坑である。

SK91土坑（第101図・第113図）

SK90と重複する。平面形は上端部長径約1m64cm、短径約87cmの楕円形で深さは約18cmである。主軸方位はN-45°-Wである。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は確認面で少量出土した。土器はⅥ群とⅤ群である。本土坑も弥生時代の遺構である。

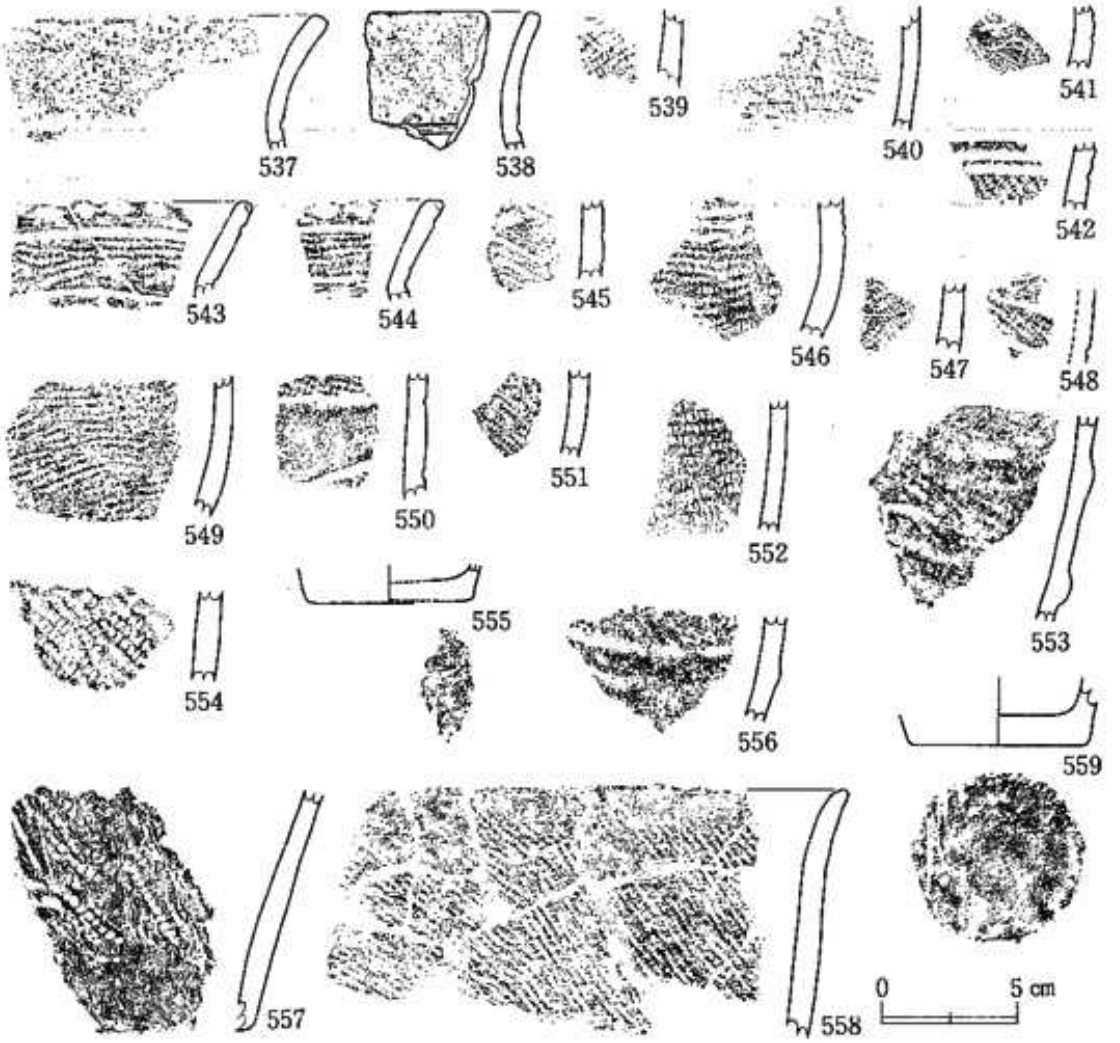
SK92土坑（第101図・第113図）

LR51グリッドで検出した。SK90・91土坑、SK74土坑などと近接する。平面形は上端部長径76cm、短径68cmの卵形である。底面は凹凸があり、壁は緩やかに立ち上がる。埋土中からⅥ群土器が1点出土した。

SK95土坑（第111図・第113図）

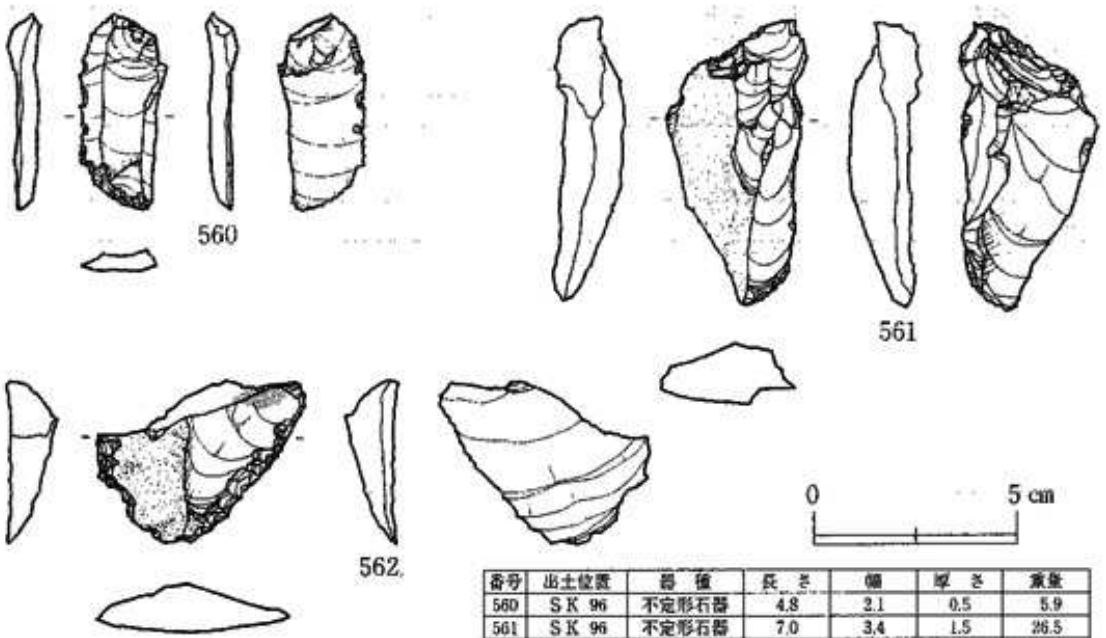
LO48グリッドで検出した。平面形はほぼ円形で、断面形は袋状を呈する。開口部径約70cm、頸部径約65cm、最大径約80cm、底部径約63cmである。底面は平坦で壁は底面と明確な稜をもたずゆるやかに立ち上がり、内湾したのち再び斜めに外反する。確認面はⅣ層上面であるが本遺構は南側が部分的に東西の土層観察ベルトにかかっていたものであり、土層観察によればⅢ層からの掘り込みであった。土坑の頸部が若干崩落した後、埋土が自然に流入したものと思われる。

出土土器はⅡ群3類とⅣ群で、第113図553はB3技法を用い無文部で文様を表現している。



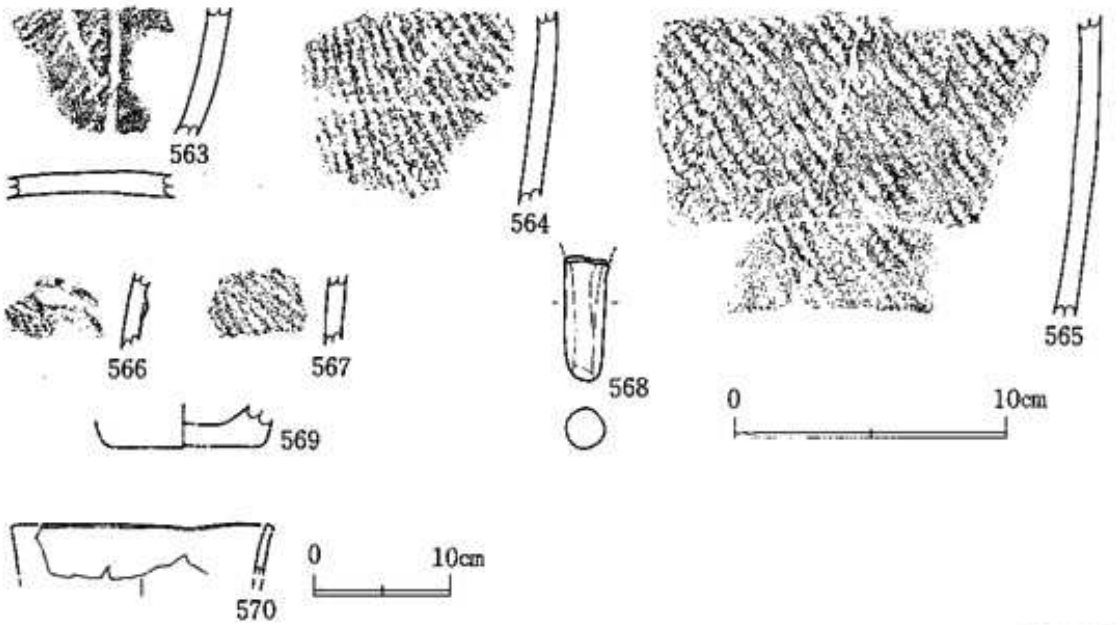
番号	出土位置	備考	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
537	SK74		鉢	IV			頸部横位沈線	表
538	〃		〃	IV			〃	表
539	〃		深鉢	VI	胴a		LR縦回転	
540	〃		〃	VI	胴a		RL横回転	
541	SK80		〃	II		E		
542	SK91		〃	IV		平行沈線文	RL横回転	
543	SK90		壺	V		沈線文	LR斜回転	表・裏
544	〃		〃	V		〃	〃	表・裏
545	〃		深鉢	II		E		表
546	〃		壺	V		縄前状沈線文	LR横回転	表
547	SK95		深鉢	III		D		表
548	SK91		壺	V		沈線文	RL横回転	表
549	SK90		深鉢	VI	胴a		〃	表
550	SK91		壺	V		沈線文	LR斜回転	表
551	〃		〃	VI	胴a		LR縦回転	裏
552	SK92		〃	VI	胴a		〃	裏
553	SK95		深鉢	II	3	B3	無文部	
554	〃		〃	VI	胴a		LR縦回転	
555	〃		〃	VI	底d			
556	〃		〃	II	3	B3	不明	表
557	〃		〃	VI	胴a		LR縦回転	
558	SK96		〃	VI	口b		〃	
559	〃		〃	VI	底d			

第113図　SK74・80・90・91・92・95・96土坑出土土器



番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
560	SK 96	不定形石器	4.8	2.1	0.5	5.9
561	SK 96	不定形石器	7.0	3.4	1.5	26.5
562	SK 96	不定形石器	4.0	5.1	1.3	14.2

第114図　SK96土坑出土石器



番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
563	SK105		深鉢	II	3	A1	不　明	
564	〃		〃	VI	胴a		LR縦回転	
565	〃		〃	VI	胴a		〃	
566	〃		〃	II	3	B3	不　明	
567	〃		〃	VI	胴a		LR縦回転	
568	〃		（粘土製品）					
569	〃		深鉢	VI	底d			
570	〃		〃	VI	胴d			

第115図　SK105土坑出土土器

SK96土坑（第111図・第113図・第114図）

LS49グリッドで検出した。SB32建物跡とSI70竪穴住居跡に挟まれた平坦面にある。平面形は上端部径約95cmの円形で、深さは約24cmである。底面は平坦で壁は斜めに立ち上がり、中ほどからやや外反する。埋土は自然堆積である。

遺物は埋土中と床面からⅥ群土器が出土した。第113図558・559は同一個体である。石器は不定形石器3点と磨石1点が出土した。

SK105土坑（第30図・第31図・第98図・第115図）

丘陵中央平坦面のほぼ中央部、LQ50グリッドで検出した。SB62・63建物跡と重複する。新旧関係は不明である。埋土中から中央付近に集中して遺物が出土した。土器はⅡ群3類とⅥ群である。第115図568は棒状の土製品で、一端が折損している。折損部より先は広がるようで、蓋のつまみの可能性がある。

4　焼土遺構

SN03焼土遺構（第112図）

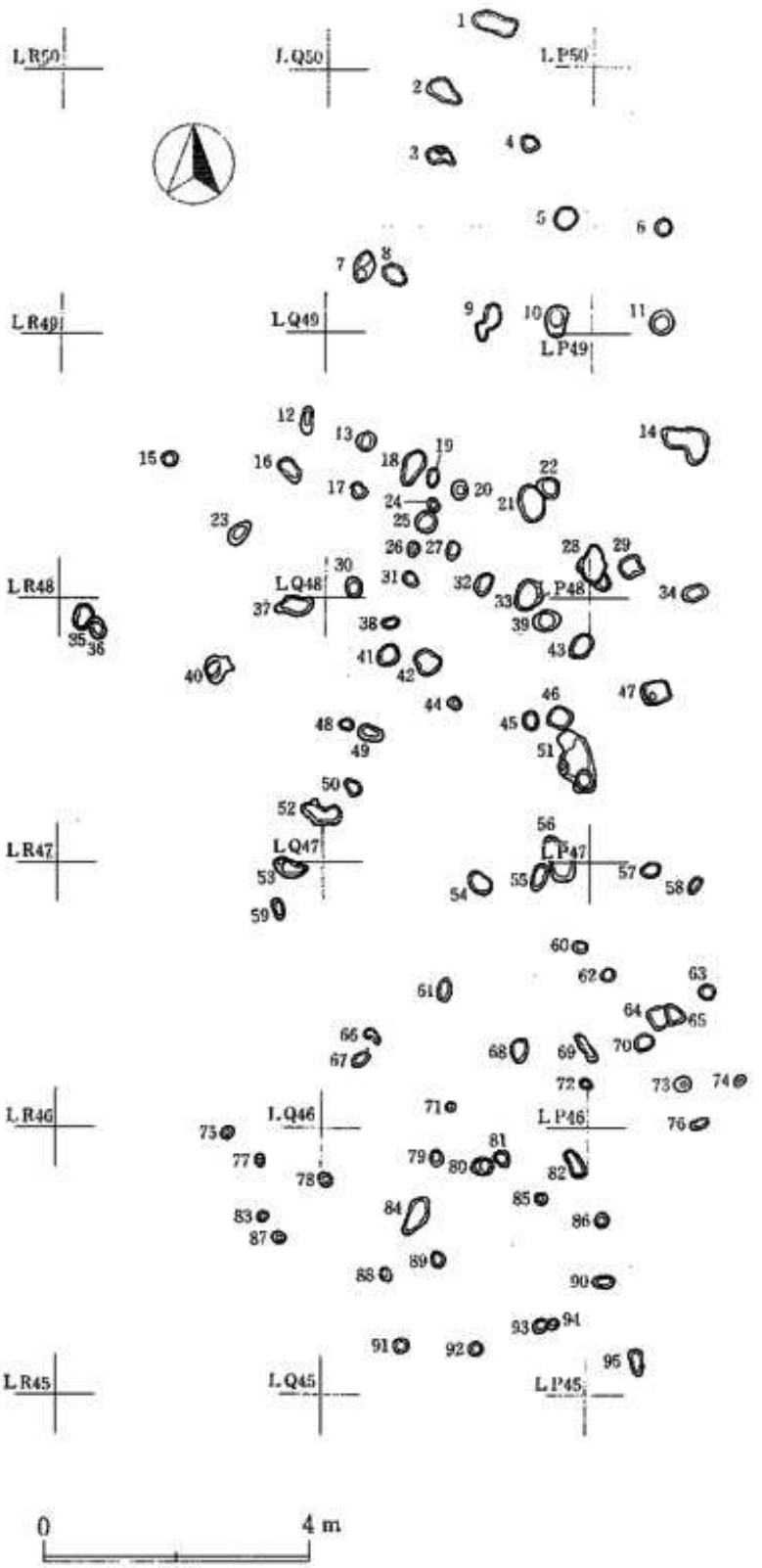
LP52グリッドで検出した。SN04焼土遺構・SI01竪穴住居跡などと近接する。不整形の焼土で地山面上で火を焚いた地床炉である。

SN04焼土遺構（第112図）

LO53グリッドで検出した。SN03焼土遺構同様に不整形の焼土である。地山面上の地床炉である。

番号	出土位置	層位	器種	部	類	文様技法	文様出現	炭化物付着
571	SN82		深鉢	Ⅲ			沈線文	

第116図　SN82焼土遺構出土土器



第117図　SX103柱穴群

番号	深さ(m)	底面標高(m)	番号	深さ(m)	底面標高(m)
1	25	41.15	49	—	—
2	.25	41.17	50	18	41.26
3	17	41.25	51	15	41.02
4	21	41.14	52	10	41.39
5	21	41.06	53	15	41.39
6	22	40.97	54	19	41.11
7	33	41.16	55	7	41.16
8	18	41.29	56	8	41.15
9	21	41.08	57	7	40.96
10	29	41.97	58	9	41.03
11	26	40.91	59	10	41.38
12	35	41.18	60	9	41.09
13	27	41.20	61	8	41.22
14	16	40.95	62	7	41.06
15	26	41.35	63	7	40.95
16	16	41.38	64	7	41.01
17	31	41.21	65	8	40.99
18	29	41.13	66	22	41.15
19	8	41.30	67	25	41.12
20	12	41.22	68	7	41.14
21	28	41.00	69	8	41.07
22	31	40.96	70	6	41.05
23	51	41.07	71	19	41.07
24	—	—	72	12	41.05
25	—	—	73	13	40.95
26	13	41.27	74	8	40.92
27	34	41.04	75	21	41.25
28	15	41.06	76	7	40.98
29	18	40.99	77	16	41.23
30	50	40.98	78	22	41.12
31	27	41.15	79	25	41.03
32	33	41.00	80	48	40.89
33	9	41.19	81	29	40.93
34	15	40.90	82	7	41.10
35	16	41.51	83	14	41.22
36	18	41.47	84	8	41.20
37	11	41.46	85	36	40.81
38	12	41.28	86	42	40.71
39	9	41.16	87	28	41.07
40	31	41.30	88	20	41.05
41	35	41.06	89	34	40.88
42	33	41.05	90	33	40.78
43	1	40.86	91	25	40.98
44	11	41.23	92	29	40.90
45	29	40.97	93	29	40.90
46	15	41.02	94	40	40.73
47	15	40.96	95	11	40.93
48	16	41.29			

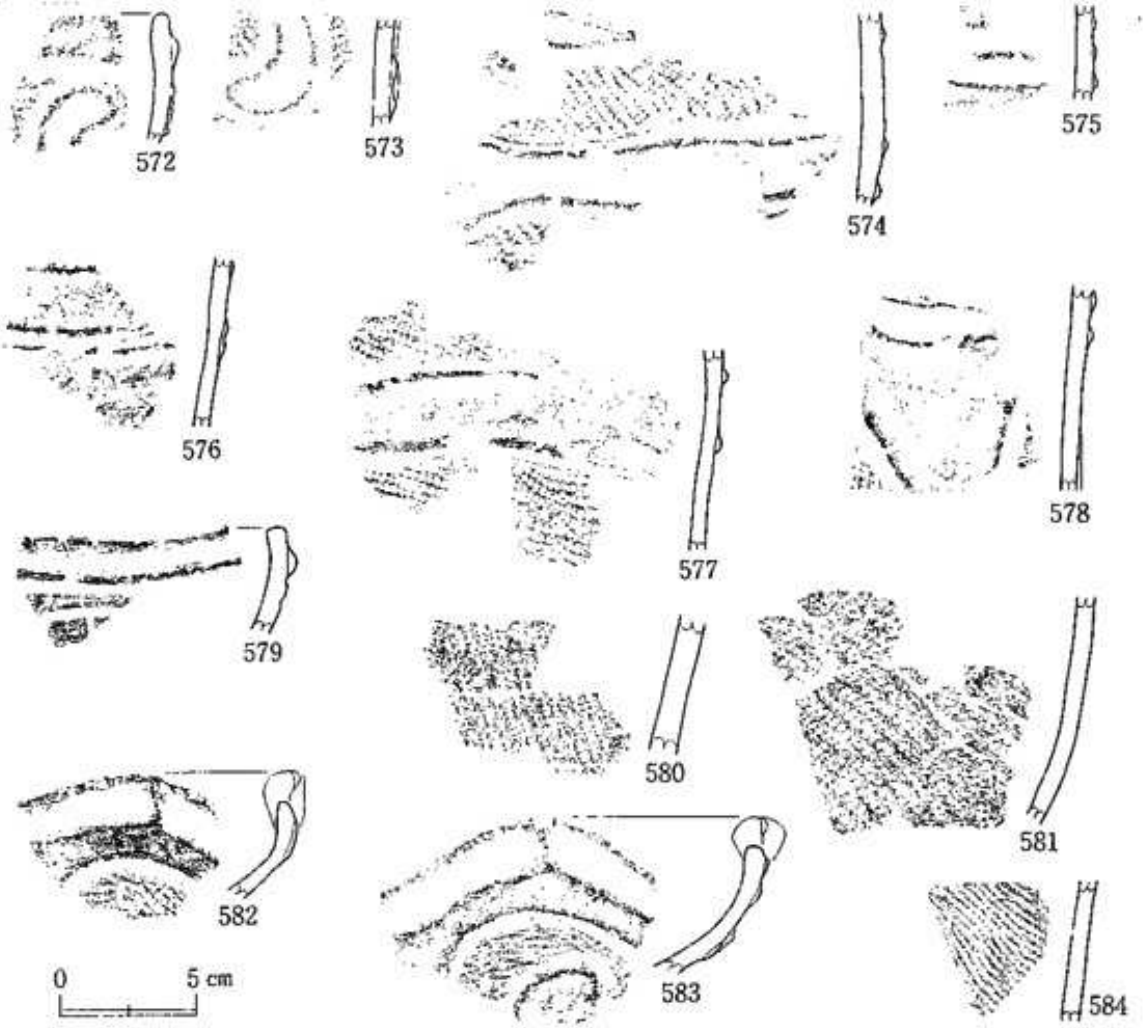
第2表　柱穴計測表

SN77焼土遺構（第112図）

LS48グリッド杭付近で検出した。すぐ東側にSB107建物跡が近接する。Ⅳ層中で火を焚いた不整楕円形の地床炉である。SB107建物跡に付属する屋外炉の可能性がある。

SN82焼土遺構（第112図・第116図・第187図・第199図）

LS53グリッドで検出した。丘陵中央平坦面北端からやや西側に下がった位置にある。長さ約



番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
572	S I 70	3	深鉢	Ⅱ	3	B 3		
573	S I 20	1	〃	Ⅱ	3	B 3		
574	S I 73	2・3	〃	Ⅱ	3	B 3		表
575	S I 20		〃	Ⅱ	3	F		
576	S I 100		〃	Ⅱ	3	B 3		
577	S170・S122 SK 101	3	〃	Ⅱ	3	B 3		
578	S170・100		〃	Ⅱ	3	B 3		
579	S I 70	3	〃	Ⅱ	3	F		
580	S170・75	1	〃	Ⅵ	胴a		L R横回転	
581	S I 75	1	〃	Ⅵ	胴a		〃	
582	S I 73		浅鉢	Ⅱ	3	B 2		
583	S K 05		〃	Ⅱ	3	B 2		
584	S B 22	3		Ⅵ	胴a		L R L縦回転	

第118図　遺構間接合土器

80cm、幅約40cmの不整形で、地山面上の地床炉である。周囲からは遺物が多く出土した。焼土南側には特に遺物の集中する地点があり、第116図571の土器が出土した。細い二本一組の沈線で器面全体を上下左右になでるように沈線文を施文している。施文工具は複数である。また近くから多くの石器類が出土し、接合資料もある（第188図1087B・C・D、第200図1111A）。

SN93焼土遺構（第98図）

LR51グリッドで検出した。SK74・SK92土坑、SI73竪穴住居跡と近接する。径約25cmに広がる不整形で漸移層中に火焼面がある。

SN97焼土遺構（第98図）

LR51グリッドで検出した。SK91土坑の埋土上面にあり土坑よりも新しい。長さ約75cm、幅約45cmの不整形である。

5　柱穴群

SX103柱穴群（第46図・第117図）

建物跡の密集する丘陵中央平坦部の東側に続く緩斜面の東西約12m、南北約20mの範囲で合計95基の柱穴を検出した。何棟かの建物跡が重複すると思われるがプランを明らかにできないので、一括して柱穴群として掲載する。柱穴中からは磨滅した縄文土器も出土しているが時期の明らかなものはなく、本柱穴群の時期・性格を判断するに至らなかった。この範囲内では石皿（第46図171）が出土している。

6　炭焼遺構

SW83炭焼遺構（第210図）

LG47グリッドで検出した。調査区東側尾根の西斜面中腹よりやや下った斜面にある。斜面下側に焚口、上側に煙り出しがある。地山を長径約1m10cm、短径約85cmの楕円形に掘り込み、その中に凝灰岩の平石を敷きつめて床面とし、厚さ10cm程度に切り出した凝灰岩で窯体を構築している。窯体の平面形は楕円形に近いが正面奥は「コ」字形に張り出す。この部分の床面は石敷きではない。床、壁ともに非常に強く被熱しておりもろい。埋土中には多量の炭、焼土、壁材が入る。

斜面上部と両側にはこの窯体を半円形に囲む溝がめぐる。溝は幅約20cm、地山面での深さ約10cmで、上部の一部と両側は掘り込みが地山面に達している。焚口の左側には一辺が約30cmの隅丸方形の土坑があり埋土中には炭が多量に含まれていた。窯体に接して杉の大木があり、切株の年輪は1988年時点で51年を数えることから、本遺構の下限年代は1937年頃である。

小　結

遺構が営まれた時期は出土遺物・遺物出土状況等から次のように考えられる。

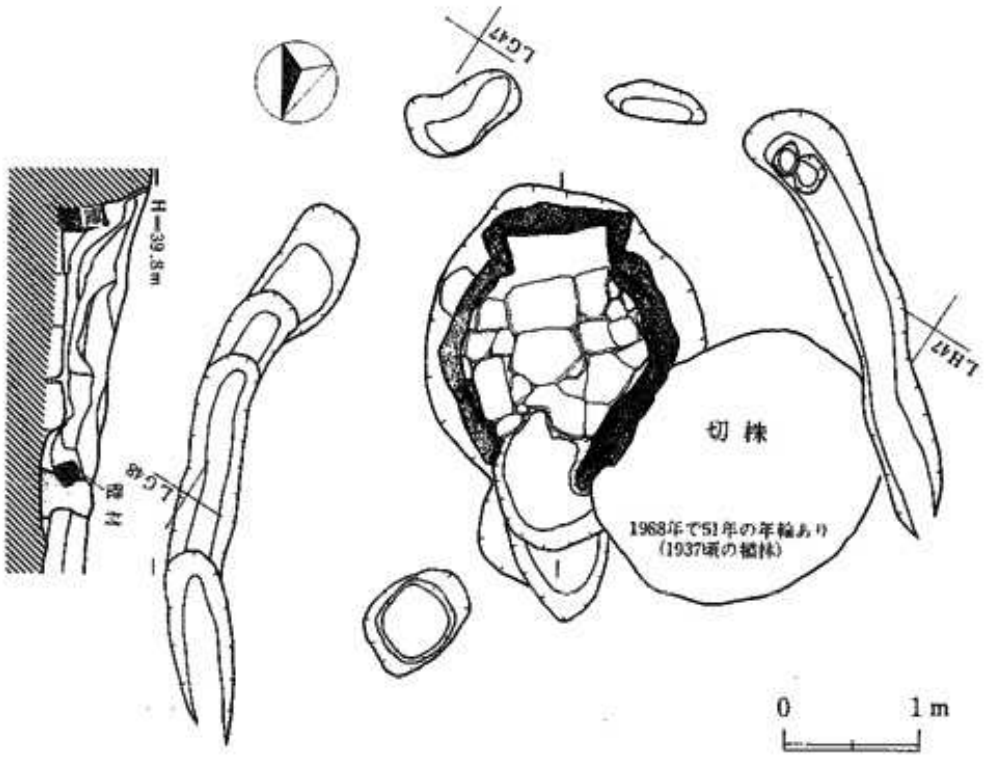
縄文時代中期後葉　SB22・30・32・62・63・89・107建物跡、SI20・SI33(A・B・C)・SI70(A・B・C・D)・SI73(A・B)・SI75・81・100竪穴住居跡、SK06・15・31・54・72・74・95・96・105土坑

後期初頭　SB40建物跡、SK80土坑、SN82焼土遺構

晩期後葉　SK05・SK08・SK74土坑

弥生時代中期　SK90・SK91土坑

近現代　SW83炭焼遺構、SK02・40土坑



SW83
1．黒褐色土　(10YR3/2)　しまりなし。孔隙多。焼土粒・炭化物・地山崩壊土が少量混入。
2．黒褐色土　(10YR2/3)　しまりなし。孔隙多。焼土粒少量含む。炭化物多量含む。窯壁の崩落ブロック含む。
3．黒色土　(7.5YR2/2)　しまりなし。窯壁の崩落ブロック多量含む。炭化物多量含む。
4．黒褐色土　(10YR2/3)　しまりややなし。炭化物多量含む。
5．暗赤褐色土(5YR3/4)　しまりなし。焼土ブロック多量含む。炭化物多量含む。
6．暗赤褐色土(5YR3/3)　しまりなし。窯壁の崩落ブロック多量含む。炭化物多量含む。
7．にぶい赤褐色土(5YR4/4)　しまりややあり。軟質。粘性ややあり。焼土粒多量含む。炭化物少量含む。地山崩壊土が混入。
8．明赤褐色土(5YR5/8)　強粘質。ボロボロしていて粘性なし。
9．黒色土　(10YR1.7/1)　炭化物層。
10．黒色土　(7.5YR2/2)　しまりなし。孔隙多。焼土粒・炭化物多量含む。

第119図　SW83炭焼遺構

時期不明　　SI01竪穴住居跡、SK11・86・92土坑、SN03・04・93・97焼土遺構、SX103建物群

本遺跡では縄文時代中期後葉の建物跡と竪穴住居跡が多数検出された。これらの遺構間では重複するものが少なく、前後関係が明確ではないので同時期存在の遺構を決定することは難しいが、遺構間で接合・同一個体関係にある遺物の出土状況と遺構の配置等から推定を試みる。

遺構の重複からSB89建物跡→SB22建物跡、SI70竪穴住居跡D・C→B→A、SI73竪穴住居跡B→Aである。SB62建物跡とSB63建物跡、SB62建物跡とSB89建物跡は同時存在ではないが前後関係は不明である。

遺構間で接合・同一個体関係にある遺物の出土状況は第3表に掲げた。これらから推測される遺構廃絶時期の前後関係は以下のとおりである。

① SB22建物跡床・炉出土土器とSI70A、SI73A、SI75竪穴住居跡埋土土器の接合・同一個体の出土状況からSB22建物跡は、複式炉のあるSI70・SI73・SI75竪穴住居跡よりも新しい。またこれら3軒の竪穴住居跡の中でもSI70A・SI75竪穴住居跡よりもSI73A竪穴住居跡が新しい。

② SB22とSB30はあまり時間差がないようであるが、きわめて接近した位置にあり同時存在は考えにくい。SB22は出土遺物が多いが、遺構に所属する遺物の他に廃絶後の投棄遺物も含まれるような出土分布とも考えられ、SB22からSB30への変遷を想定したい。したがってSB89→SB22→SB30となる。

③ SB32建物跡出土土器（第22図・63）と同一個体の破片がSI70B竪穴住居跡の埋土中に含まれているので、SI70B竪穴住居跡を埋め立ててSI70A竪穴住居跡を構築する時点でSB32建物跡は存在していた。したがってSI70B・SI70A竪穴住居跡と並行する時期がある。

④ SI100竪穴住居跡はSI73竪穴住居跡ときわめて接近し同時存在は考えにくい。

遺構番号	118図	118図	118図	116図	118図 41図	118図 41図		118図	118図 82図	59図	118図	92図			17図	80図	118図	80図	21図
遺物番号	572	577	580	584	578 142	575 576 140		581	574 363～365	199	579	446			40	351	582 583	349	63
分類	Ⅱ3B3	Ⅱ3B3	Ⅵ	Ⅵ	Ⅱ3B3 Ⅵ	Ⅱ3F Ⅱ3B3 Ⅵ		Ⅵ	Ⅱ3B3 Ⅱ3B3	Ⅵ	Ⅱ3F	Ⅱ3A			Ⅵ	Ⅵ	Ⅱ3B2	Ⅱ3B2	Ⅵ
SB22	3	7	10	1						101	2	17	1	1	1				
SB30				2									1	1	2				
SB62		1																	2
SI20	1					1	5												
SI70	2	3	5		1		9		15	2	1								3
SI73	3							20	51							23	1	31	
SI75			5	5				6				5				2		1	
SI100					2	2													1
SK05															1		1		

第3表　遺構間接合・同一個体土器破片数一覧表

⑤　SI20竪穴住居跡とSB89建物跡はともにSB22建物跡よりも古い。SI20竪穴住居跡炉内出土土器と、SB89建物跡のすぐ横（LP50グリッド）から出土した土器が接合しており、両者はほぼ同時期のものと推定される。

以上から建物跡と複式炉のある竪穴住居跡の並行する時期（SB32、SI70A・B）とその後の建物跡のみとなる時期（SB22・SB30）に大きく区分できる。

SB22建物跡より古いSB89建物跡、またSI70A竪穴住居跡より新しいSI73A竪穴住居跡、SB32・89・22・30建物跡とよく似た柱穴配置と炉をもつSI20竪穴住居跡もこのような建物跡と竪穴住居跡の並存状態の中で営まれたものと推測する。

中期後葉の大木9式期直後においては、複式炉のある竪穴住居跡によって構成される集落の多い中で、本遺跡では2カ所の地床炉を8本の柱穴が取り囲む長方形または楕円形プランの建物跡が複式炉のある竪穴住居跡と一定期間並存し、その後竪穴住居跡を伴わず建物跡が主体となる構成の集落へと変遷する。(註1)

さらに後期初頭には土器片囲炉のあるSB40建物跡が1軒営まれる。中期後葉と後期初頭の間をつなぐ時期の建物跡が検出されていないことから連続的な変遷ではないが、複式炉のある竪穴住居跡から建物跡へ、複数の施設から単数の施設へと集落の景観が変わっていくようである。(註2)

註1　2カ所の焼土をとり囲む長方形または楕円形の建物跡は上野台遺跡で検出例があり時期は後期初頭である。本遺跡の後期初頭にはSB40建物跡が営まれており、建物跡の構造と時期が上野台遺跡とは若干異なる。SB40建物跡は柱穴配置・炉の形態とも中期後葉のものとは異なり1軒単独で営まれている。

註2　建物跡と複式炉のある竪穴住居跡が並存する場合その機能の違いが問題となる。SB22・SB30建物跡では片方の炉の周辺に遺物が多く、また床面も一方がやや低く、2カ所の炉にも機能差があることを推測させる。またSB22建物跡やSI20竪穴住居跡は炉の近くで石皿や凹石が出土し、食料加工、煮炊きといった行為が行われていたと考えられる。一方、SI70・SI73竪穴住居跡は石皿・凹石も埋土中の出土であり床面出土遺物は少なく煮炊きや食料加工の形跡はうすいので、両者並存の時期においては機能を分担し、たとえば竪穴住居では祭祀と寝泊まり、建物では食料加工、食事、その他の作業を行うといった状況も想定される。しかし建物を主体とする集落に変わり、さらに同時期に複数の住居があったものから、後期初頭に至って単数へと変わることの背景は不明である。とりあえず本遺構の事例を報告し今後の類例の増加を期待したい。

第2節　A区の遺構外出土遺物

1　土器・土製品

出土土器は時代・時期によって、次のように群別した。

Ⅰ群　縄文時代前期の土器

Ⅱ群　縄文時代中期の土器

Ⅲ群　縄文時代後期の土器

Ⅳ群　縄文時代晩期の土器

Ⅴ群　弥生時代中期の土器

Ⅵ群　Ⅰ～Ⅴ群のいずれに所属するか判別し難いもの、区画文や沈線文が施文されず縄文や撚糸文のみが施文されるもの、無文のもの、底部資料を一括する。

Ⅰ群土器（第120図）

585・586は同一個体である。口唇部に表裏両面から交互に指頭押圧を施す。587は横位に粘土紐を貼り付けた隆帯上に、撚紐結節部を押圧したものである。588は隆帯上に撚紐原体を斜位に押圧している。

Ⅱ群土器（第121図～第133図）

Ⅱ群土器の文様はいろいろな手法で器面に区画を作出し、その区画の中に縄文が施文されているものが多い。そこで、縄文が施文される部分（縄文部）と無文の部分（無文部）を描き分けていく工程と手法（文様表出技法）と器面に描き出される文様モチーフを製作者が縄文部と無文部のどちらで表現することを意図していたのか（文様表現）ということに着目して土器の把握を試みることとする。土器の文様表出技法と文様表現方法を次のように分類した。

◎文様表出技法

A　（器面に文様を割り付ける）→縄文部となる部分へ縄文を施文する→無文部となる部分にまではみ出して施文された縄文を磨り消して縄文部と無文部からなる文様を描く→縄文部と無文部の境界を太い棒状工具でなぞって太い沈線を引く

区画文内に施文されている縄文が区画の形に合わせて施文方向を変えていることから最終的に縄文部で描くことになるモチーフを縄文施文以前に器面に割り付けていた可能性が高い。その方法としてははじめに縄文を施文する前に器面を指でなぞったり、浅い沈線を引いたりして文様を描く方法や、次の工程を一体化して、最終的に縄文部で描くモチーフに近い形で直接器面に縄文を施文していき、無文部となる部分を磨り消しながら縄文部となる部分を整形して残す方法が考えられる。

土器には次のような特徴がある。

・無文部と縄文部の厚さを比べるとほぼ同じか無文部がやや薄くなる。

・縄文部の縄文は区画の形に合わせて施文方向を変えている。

・縄文部と無文部の境界には縄文施文及び磨り消しの後最終工程で太い沈線が引かれている。

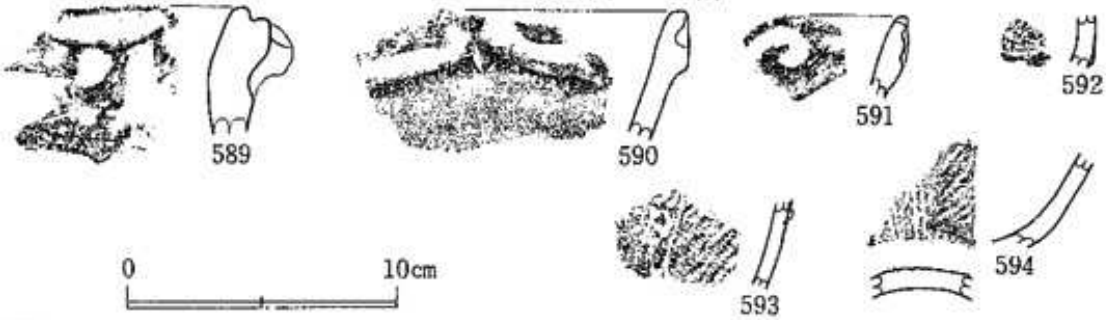
B　（器面へ文様を割り付ける）→無文部となる部分に粘土を貼り付ける→縄文部となる部分に縄文を施文する→縄文部と無文部の境界を太い棒状工具でなぞって太い沈線を引く

器面への文様割り付けは指でなぞったり浅い沈線を引いたりして文様を描く方法や次の工程と一体化して縄文部となる部分の形を残しながら、無文部となる部分に粘土を貼り付けることにより文様を描く方法が考えられる。

貼り付ける粘土の形状は次の3種類に大別される。

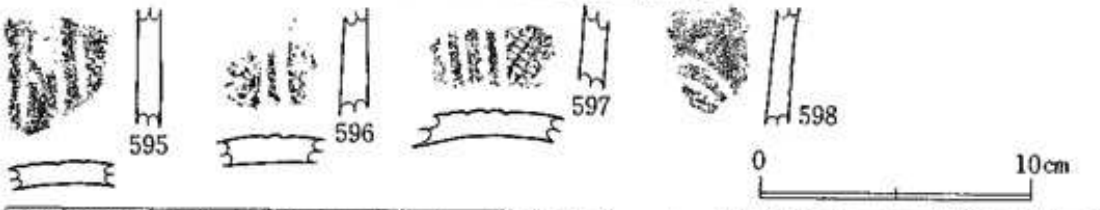
番号	出土位置	層位	器種	部	類	文様技法・文様表現	炭化物付着
585	L Q47	Ⅲ	深鉢	I		口縁部交互指頭押圧	
586	L Q48	Ⅲ	〃	I		〃	
587	L J52		〃	I		隆帯上横位単体結節部押圧	
588	L J52		〃	I		〃　斜位押圧	

第120図　遺構外出土土器(1)



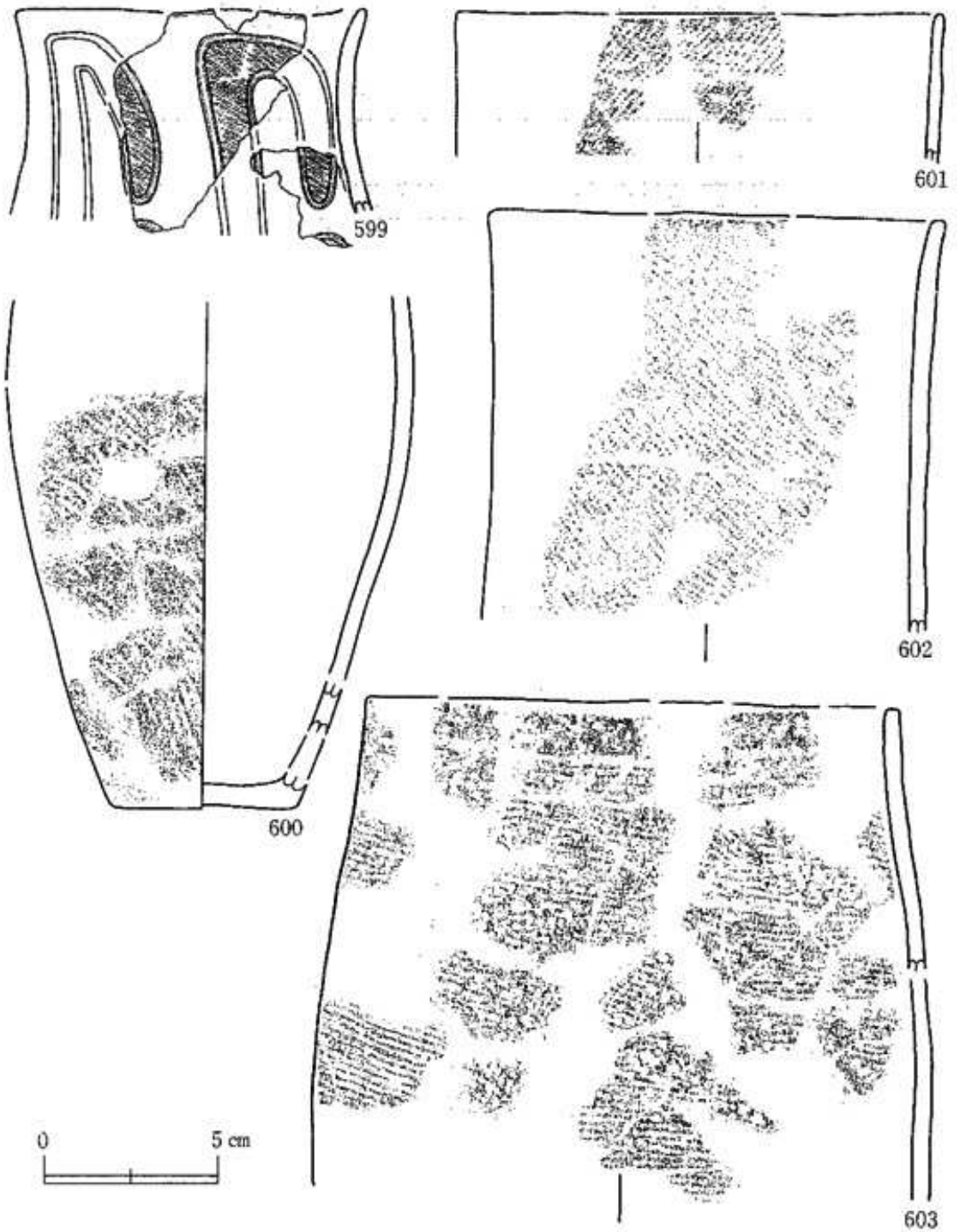
番号	出土位置	層位	器種	部	類	文様技法・文様表現	炭化物付着
589	L P49		深鉢	II	1	口縁部肥厚，渦巻文	
590	L P47		〃	II	1	〃	
591	M A47	Ⅲ	〃	II	1	〃	
592	L S51		〃	II	1	粘土紐貼付	
593	L S51		〃	II	1	垂下沈線文，渦巻文	表
594	L S51		〃	II	1	垂下沈線文	

第121図　遺構外出土土器(2)



番号	出土位置	層位	器種	部	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
595	L Q41		深鉢	II	2			表
596	L S46		〃	II	2			
597	L R50		〃	II	2			
598	L P50		〃	II	2			

第122図　遺構外出土土器(3)



番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
599	LR55	II	深鉢	II	3	B1	縄文部	
600	LR55		〃	VI	底d			
601	LP50	III	〃	VI	IIa			
602	LR55	II	〃	VI	IIb			
603	LO52	I	〃	VI	IIb			

第123図　遺構外出土土器(4)

1.縄文部をとり囲むように面的な広がりをもって薄く貼り付ける。

2.幅の広い帯状に張り付ける。1に比べて無文部を強調するようにやや厚く貼り付ける。断面形は中央がやや凹み、両端が少し盛り上がり気味のものが多い（隆帯）。

3.無文部と縄文部の境界に断面形が三角形の粘土紐を線状に貼り付ける（隆線）。

土器には次のような特徴がある。

・無文部と縄文部の厚さを比べると、無文部が縄文部よりも厚い。

・縄文部の縄文は区画の形に合わせて施文方向を変えている。

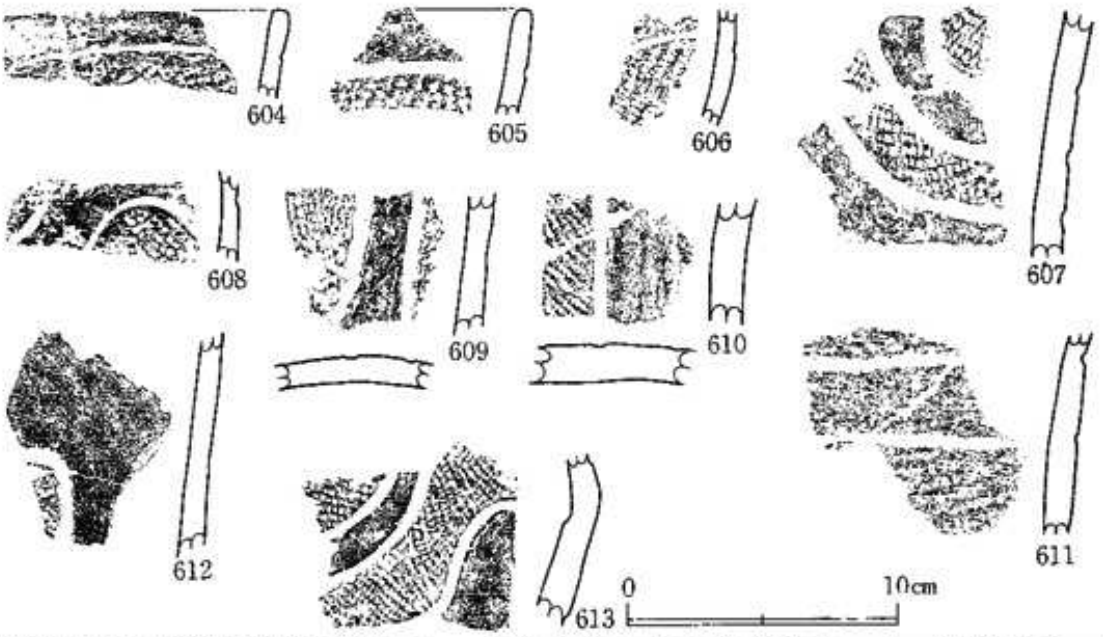
・縄文部と無文部の境界には最終工程で太い沈線が引かれている。

C　器面全体に縄文または撚糸文を施文する→磨り消しまたは粘土貼付によって無文部を作出する。

無文部の作出方法には次の3種類がある

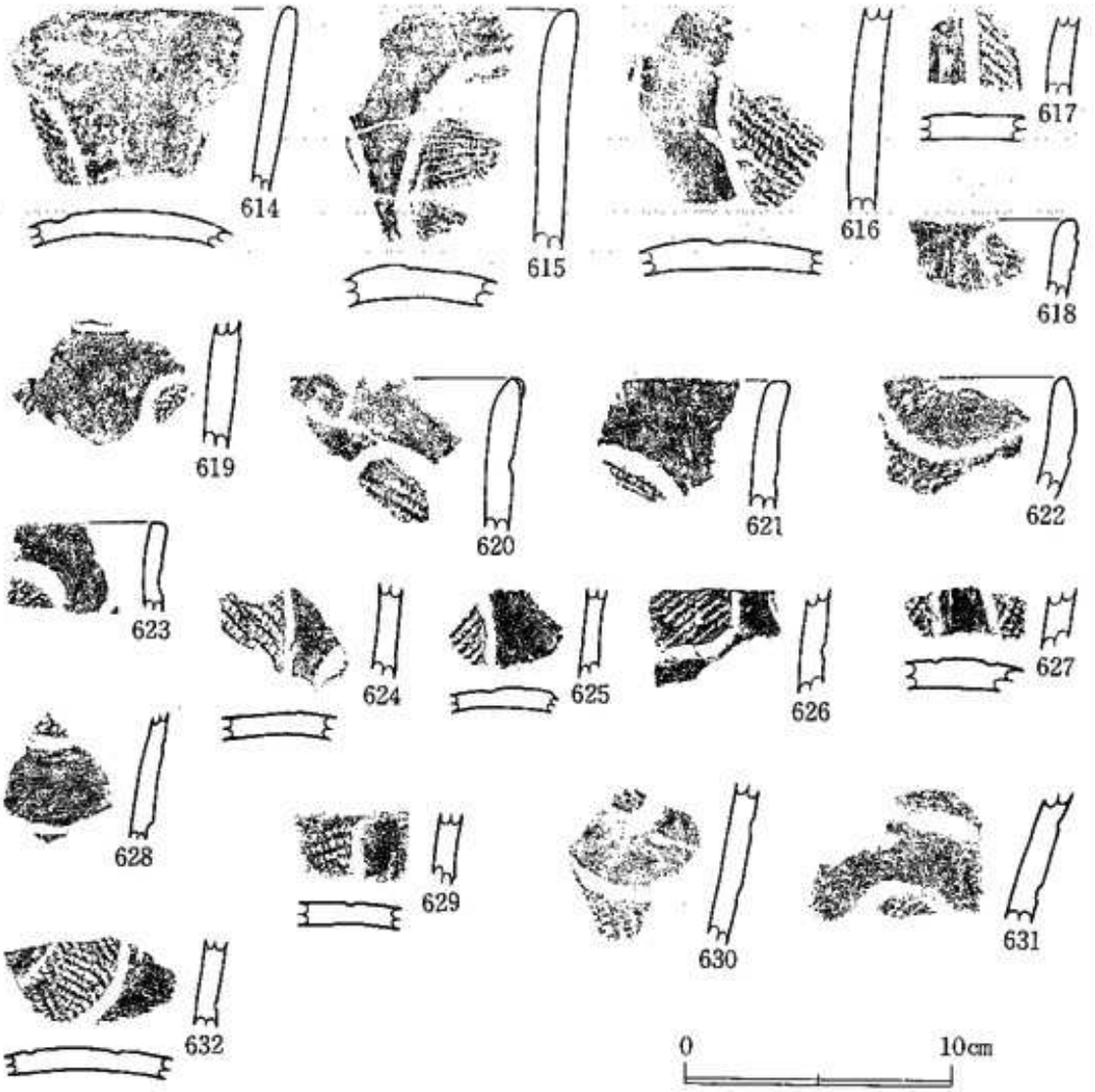
1.沈線で区画文を描き、区画の中を磨り消す。この後の縄文部と無文部の境界に再度沈線を引くものもある。

2.無文部となるべき所に粘土を貼り付ける。この後に縄文部と無文部の境界に太い沈線を引



番号	出土位置	層位	器種	部	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
604	LP40・49		深鉢	Ⅱ	3	A	縄文帯	表
605	LP50	Ⅰ	〃	Ⅱ	3	A	〃	表・裏
606	LP50	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	A	〃	
607	LP49		〃	Ⅱ	3	A	〃	表
608	LP48	Ⅰ	〃	Ⅱ	3	A	〃	
609	LQ48	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	A	〃	
610	LO48	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	A	不明	
611	LQ51	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	A	縄文部	
612	LO48	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	A	不明	表
613	LQ51	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	A	縄文部	

第124図　遺構外出土土器(5)



番号	出土位置	層位	器種	部	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
614	L P47	Ⅲ	深鉢	Ⅱ	3	B 1	縄文部	
615	L N46	Ⅰ	〃	Ⅱ	3	B 1	〃	
616	L P47	Ⅰ	〃	Ⅱ	3	B 1	〃	
617	L O54	Ⅱ	〃	Ⅱ	3	B 1	〃	
618	L P52	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B 1	〃	
619	L P47		〃	Ⅱ	3	B 1	〃	
620	L Q51	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B 1	〃	
621	L Q53		〃	Ⅱ	3	B 1	〃	
622	L P52	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B 1	〃	
623	表　採		〃	Ⅱ	3	B 1	〃	
624	L O48	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B 1	〃	炭
625	L P50	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B 1	〃	炭・滓
626	L Q49	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B 1	無文部	
627	L S53	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B 1	縄文部	
628	L Q51	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B 1	〃	
629	L P45	Ⅰ	〃	Ⅱ	3	B 1	〃	
630	L P48	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B 1	〃	炭
631	L M50		〃	Ⅱ	3	B 1	〃	炭
632	M C49	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B 1	〃	

第125図　遺構外出土土器(6)

く。

土器には次のような特徴がある。

・Ｃ１の場合は無文部と縄文部の厚さを比べるとほぼ同じか無文部がやや薄くなる。Ｃ２の場合は無文部が縄文部より厚い。

・縄文部の縄文は区画の形にかかわらず一定方向に施文されている。

・縄文部と無文部の境界に引かれている沈線は無文部磨り消し後に引かれたものと、無文部磨り消し前に引かれたものの両者がある。

D　器面全体に縄文または撚糸文を施文する→沈線で文様を描く

無文部がなく、沈線のみによって文様を表現するものである。

E　無文の器面に沈線のみで文様を描くものである。

F　無文の器面に粘土の貼り付けのみによって文様を描くものである。

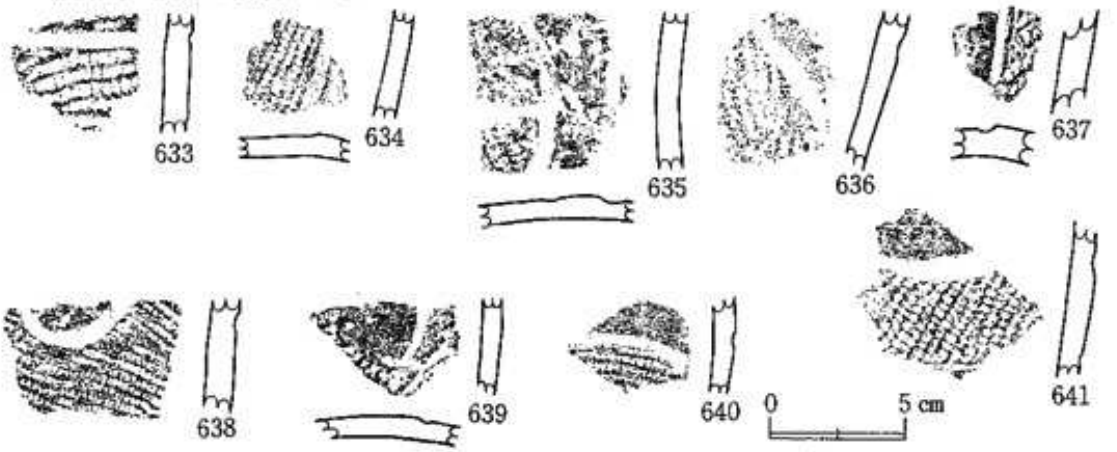
G　AまたはＣ１であるか、縄文部の施文が区画に合わせて施文をしているか器面全体に施文したものか判断できないものや、小破片のため文様表出技法を特定できないものである。

H　区画の中を刺突文で充填したり、区画線に沿った刺突を行うなど、刺突を多用するものである。

◎文様表現

・縄文部で文様を表現するもの

・無文部で文様を表現するもの



番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
633	L O51	Ⅲ	深鉢	Ⅱ	3	B1	不明	
634	表採		〃	Ⅱ	3	B1	〃	
635	L R52	Ⅰ	〃	Ⅱ	3	B1	縄文部	
636	L Q48	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B1	不明	
637	L R52	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B1	〃	表
638	表採		〃	Ⅱ	3	B1	無文部	表
639	L R52	Ⅰ	〃	Ⅱ	3	B1	不明	
640	L R52	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B1	〃	
641	L M50		〃	Ⅱ	3	B1	〃	

第126図　遺構外出土土器(7)

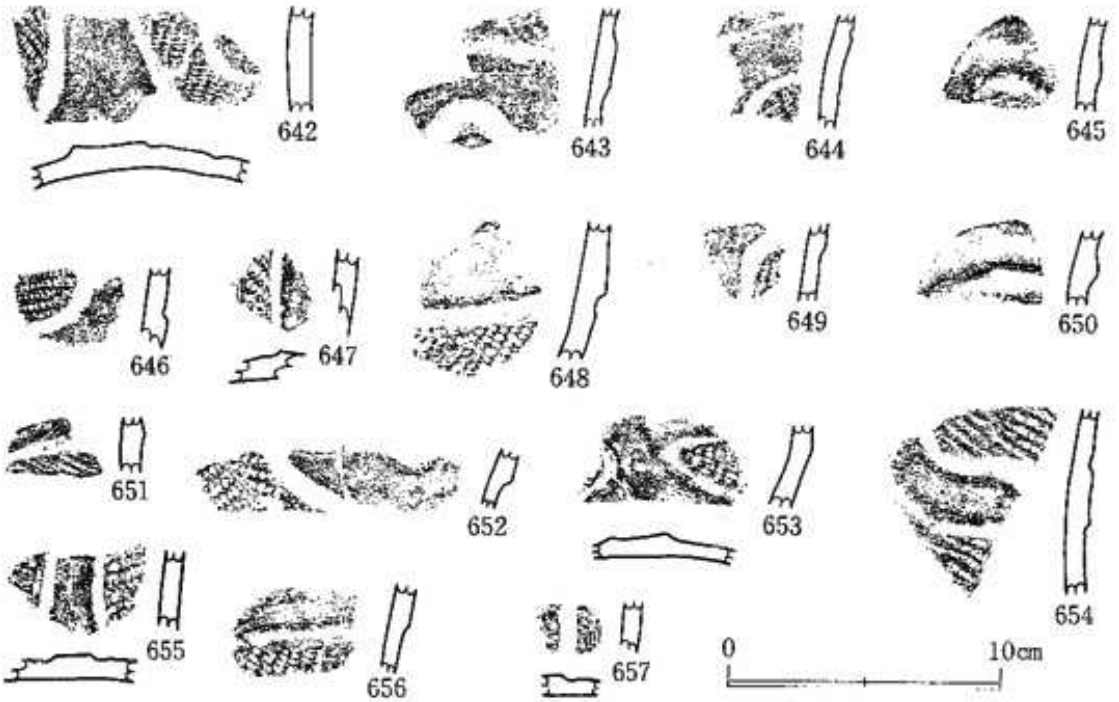
・縄文部と無文部に描き分けず沈線で文様を表現するもの

1類　沈線または隆帯貼付により渦巻文を描くもの。（第121図）

589・590は波状口縁の口唇部を肥厚させて肉彫的な沈線をめぐらし、波頂部で渦巻文をもつ土器である。口唇部直下は無文帯となる591は口唇部を肥厚させないで渦巻文を描く。592は縄文施文後に細い粘土紐を貼り付け文様を描くものである。593・594は同一個体で、垂下する沈線の途中に渦巻文がある。出土量はごく少量であった。

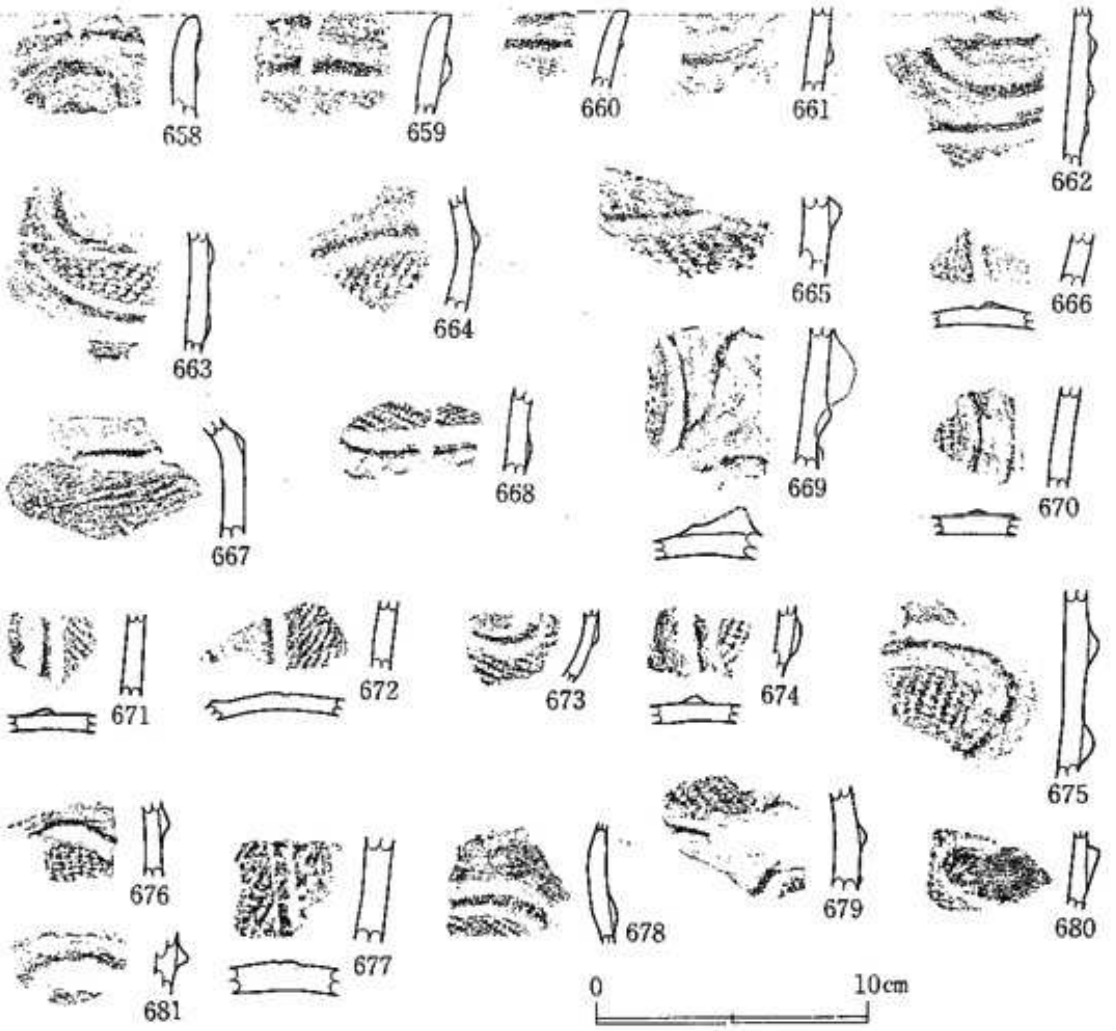
2類　縄文が施文された器面を複数の沈線が垂下するもの。（第122図）

595・596・598は2本一組の太い沈線が、縦位に描かれた破片である。597の太い沈線もおそらく2本一組の沈線文が2組描かれたものであろう。598は文様の上部で逆U字形のモチーフに



番号	出土位置	層位	器種	胎	個	文様技法	文様表現	炭化物付着
642	LO53	Ⅱ	深鉢	Ⅱ	3	B2	縄文部	表
643	LQ54	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B2	〃	表
644	LO48	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B2	不明	
645	LP51	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B2	縄文部	
646	LR52	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B2	不明	
647	LP48	Ⅰ	〃	Ⅱ	3	B2	〃	
648	LM50		〃	Ⅱ	3	B2	〃	
649	LO52	Ⅱ	〃	Ⅱ	3	B2	〃	
650	LO48	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B2	〃	
651	LP51	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B2	〃	表
652	LQ54	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B2	無文部	
653	LO49	Ⅰ	〃	Ⅱ	3	B2	縄文部	
654	LO49		〃	Ⅱ	3	B2	無文部	
655	LO48	Ⅰ	〃	Ⅱ	3	B2	不明	
656	表採		〃	Ⅱ	3	B2	〃	
657	MC50	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	C2	〃	

第127図　遺構外出土土器(8)



番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
658	LP51	Ⅲ	深鉢	Ⅱ	3	B3	縄文部	
659	LO52	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B3	不明	
660	LO48	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B3	〃	(補修孔あり)
661	LO54	Ⅱ	〃	Ⅱ	3	B3	無文部	
662	LP50	Ⅱ	〃	Ⅱ	3	B3	〃	表・炭
663	LR44	Ⅱ	〃	Ⅱ	3	B3	不明	表・裏
664	LP51	Ⅱ	〃	Ⅱ	3	B3	〃	
665	LR52	Ⅱ	〃	Ⅱ	3	B3	〃	表・裏
666	LQ51	Ⅱ	〃	Ⅱ	3	B3	〃	
667	LS50	Ⅰ	〃	Ⅱ	3	B3	〃	(無文部赤色顔料)
668	LP47	Ⅱ	〃	Ⅱ	3	B3	〃	
669	LT45	Ⅰ	〃	Ⅱ	3	B3	無文部	(無文部赤色顔料)
670	LR52	Ⅰ	〃	Ⅱ	3	B3	不明	
671	LO53	Ⅰ	〃	Ⅱ	3	B3	〃	
672	LO52	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B3	〃	表
673	LQ52	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B3	無文部	表・裏
674	表採		〃	Ⅱ	3	B3	不明	
675	LM50		〃	Ⅱ	3	B3	縄文部	
676	LQ46	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B3	不明	
677	LR48	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B3	〃	
678	MA51	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B3	縄文部	
679	LP49	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B3	〃	
680	LO49	Ⅰ	〃	Ⅱ	3	B3	無文部	
681	LQ55	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B3	不明	

第128図　遺構外出土土器(9)

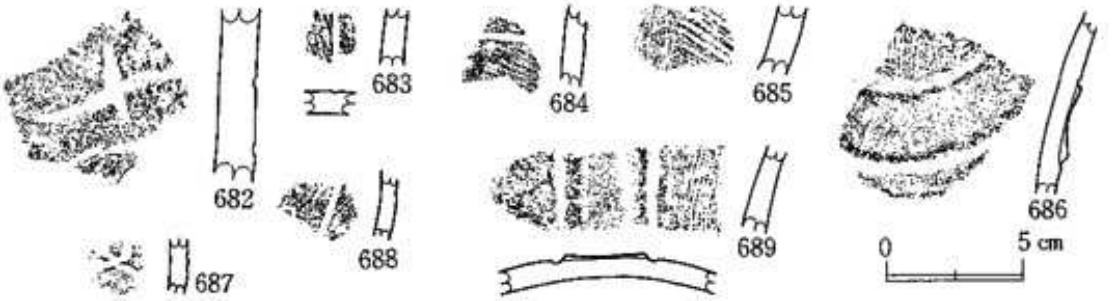
なる。この沈線で分けられたうちの片側に縄文部、他の側に無文部が形成されるようであるがいずれも磨滅した小破片のため、よくわからない。

3類　縄文部と無文部からなる区画文のあるもの（第123図～第133図）

本遺跡で出土した地文以外の文様が施文された土器の中では本類が最も多く、遺跡の主体となる土器である。文様モチーフや器形が明らかな復元土器は比較的少なく、破片資料が多いので、主に上述の文様表出技法と文様表現の手法によって分けて記述する。

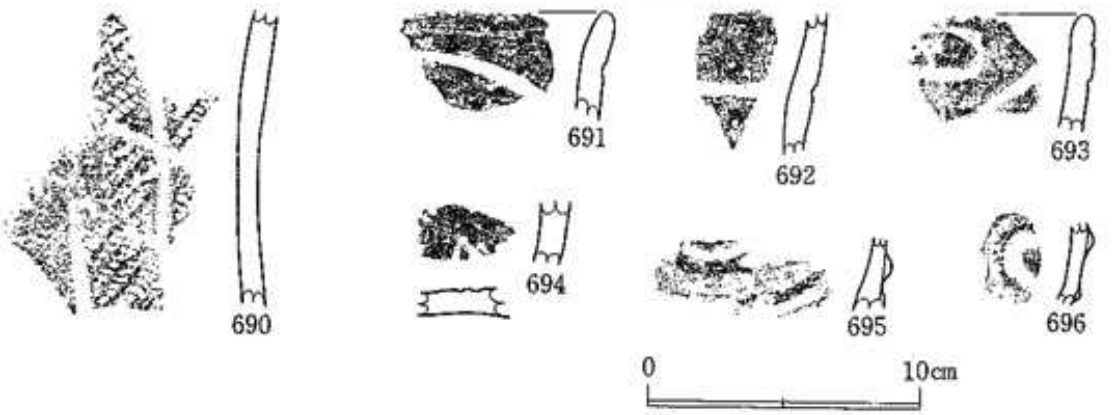
文様表出技法A（第124図）

いずれも区画文内の縄文施文が、充填縄文である。無文部より縄文部がやや厚い。611はほぼ



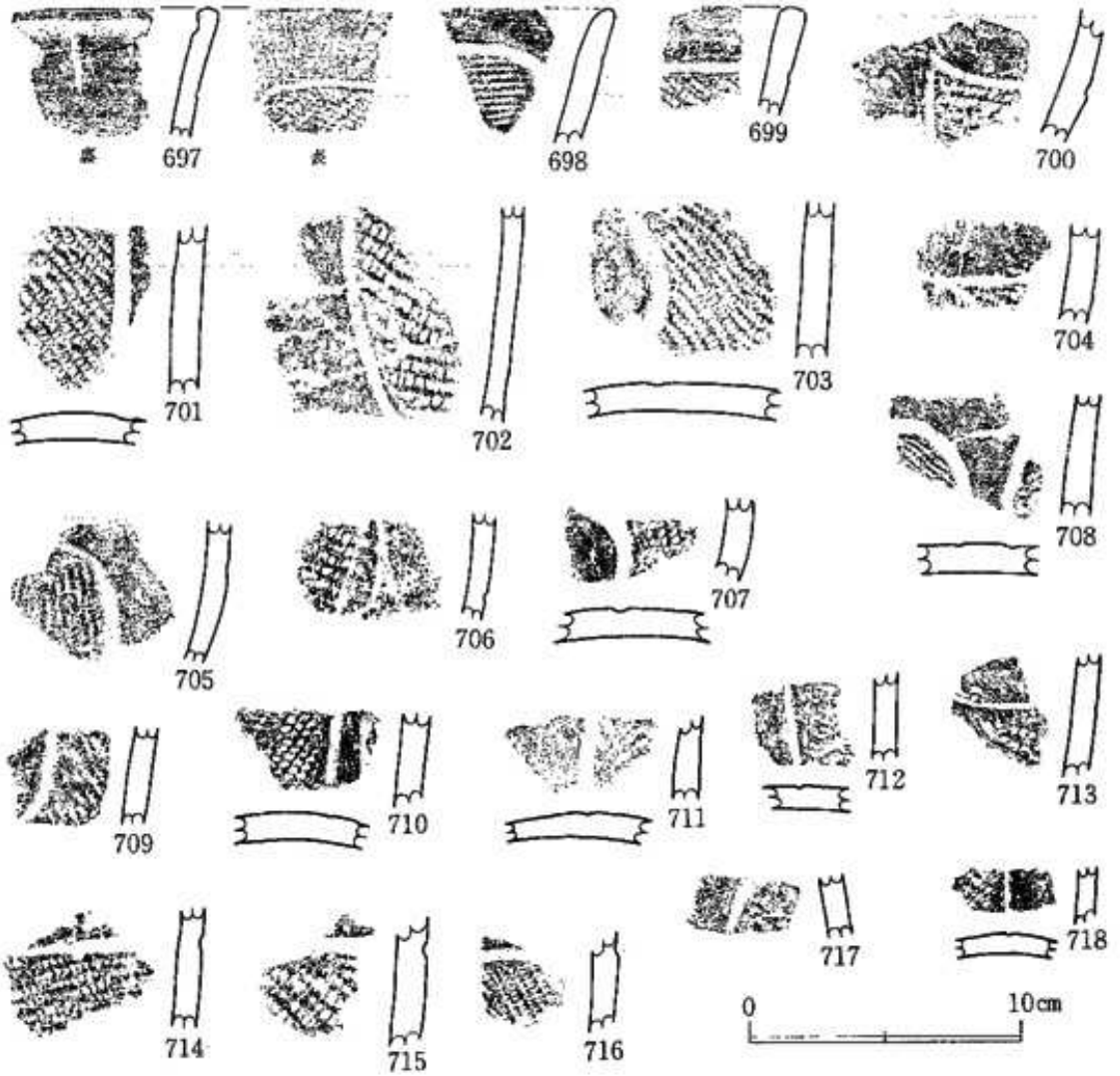
番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
682	LN48		深鉢	II	3	C1	縄文部	
683	MA47		〃	II	3	C1	不明	表
684	LQ46	III	〃	II	3	C1	〃	
685	LQ45	I	〃	II	3	C1	〃	
686	MC51	III	〃	II	3	C2	無文部	裏
687	LQ46	III	〃	II	3	C1	〃	
688	LQ46	III	〃	II	3	C1	〃	
689	MC51		〃	II	3	C2	〃	裏

第129図　遺構外出土土器(10)



番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
690	LR55	II	深鉢	II	3	D	縄文部	表
691	LS51	I	〃	II	3	E	無文部	表
692	LQ54		〃	II	3	E	〃	
693	LP49	III	〃	II	3	E	〃	
694	LL52	II	〃	II	3	E	〃	
695	LO56	II	〃	II	3	F	〃	表赤色顔料
696	LP46	II	〃	II	3	F	〃	〃

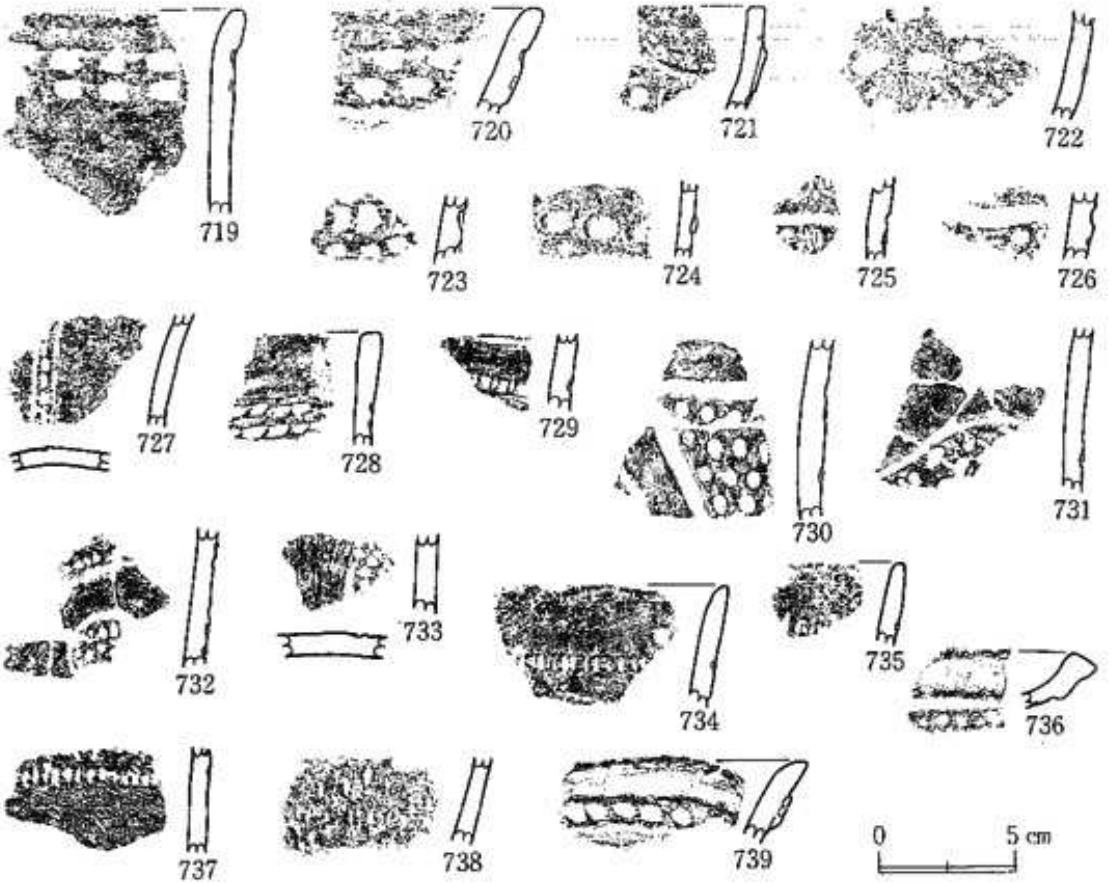
第130図　遺構外出土土器(11)



番号	出土位置	層位	器種	部	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
697	L P56	Ⅱ	深鉢	Ⅱ	3	G	縄文部	表
698	L Q47	Ⅰ	＊	Ⅱ	3	G	＊	
699	L R48	Ⅲ	＊	Ⅱ	3	G	不明	
700	L K52	Ⅱ	＊	Ⅱ	3	G	無文部	
701	L R53	Ⅰ	＊	Ⅱ	3	G	不明	
702	L M52	Ⅰ	＊	Ⅱ	3	G	縄文部	
703	L R54	Ⅰ	＊	Ⅱ	3	G	不明	
704	L L51	Ⅱ	＊	Ⅱ	3	G	＊	
705	L N46	Ⅰ	＊	Ⅱ	3	G	縄文部	
706	L L51	Ⅱ	＊	Ⅱ	3	G	＊	
707	L Q51	Ⅲ	＊	Ⅱ	3	G	不明	
708	L O54	Ⅱ	＊	Ⅱ	3	G	縄文部	
709	L Q46	Ⅱ	＊	Ⅱ	3	G	不明	
710	L Q46	Ⅲ	＊	Ⅱ	3	G	＊	
711	L Q51	Ⅲ	＊	Ⅱ	3	G	＊	
712	L L53		＊	Ⅱ	3	G	＊	
713	L L54	Ⅱ	＊	Ⅱ	3	G	＊	表
714	L Q47	Ⅲ	＊	Ⅱ	3	G	＊	
715	L P51	Ⅲ	＊	Ⅱ	3	G	＊	
716	L O47	Ⅰ	＊	Ⅱ	3	G	＊	
717	L N45	Ⅰ	＊	Ⅱ	3	G	＊	
718	L P53	Ⅰ	＊	Ⅱ	3	G	＊	

第131図　遺構外出土土器(12)

平行な2本の沈線によって区画された帯状の無文帯をもち、この帯状の無文部で文様を表現しているか、あるいは下の沈線が胴部上半文様帯と胴部下半文様帯を区画する線で、上の沈線が独立した区画文を描いているものである。総じてA技法の破片は少ないが、G技法が比較的多いので、本来A技法のものも含まれていると思われる。607・608・612・613は所謂独立アルファ



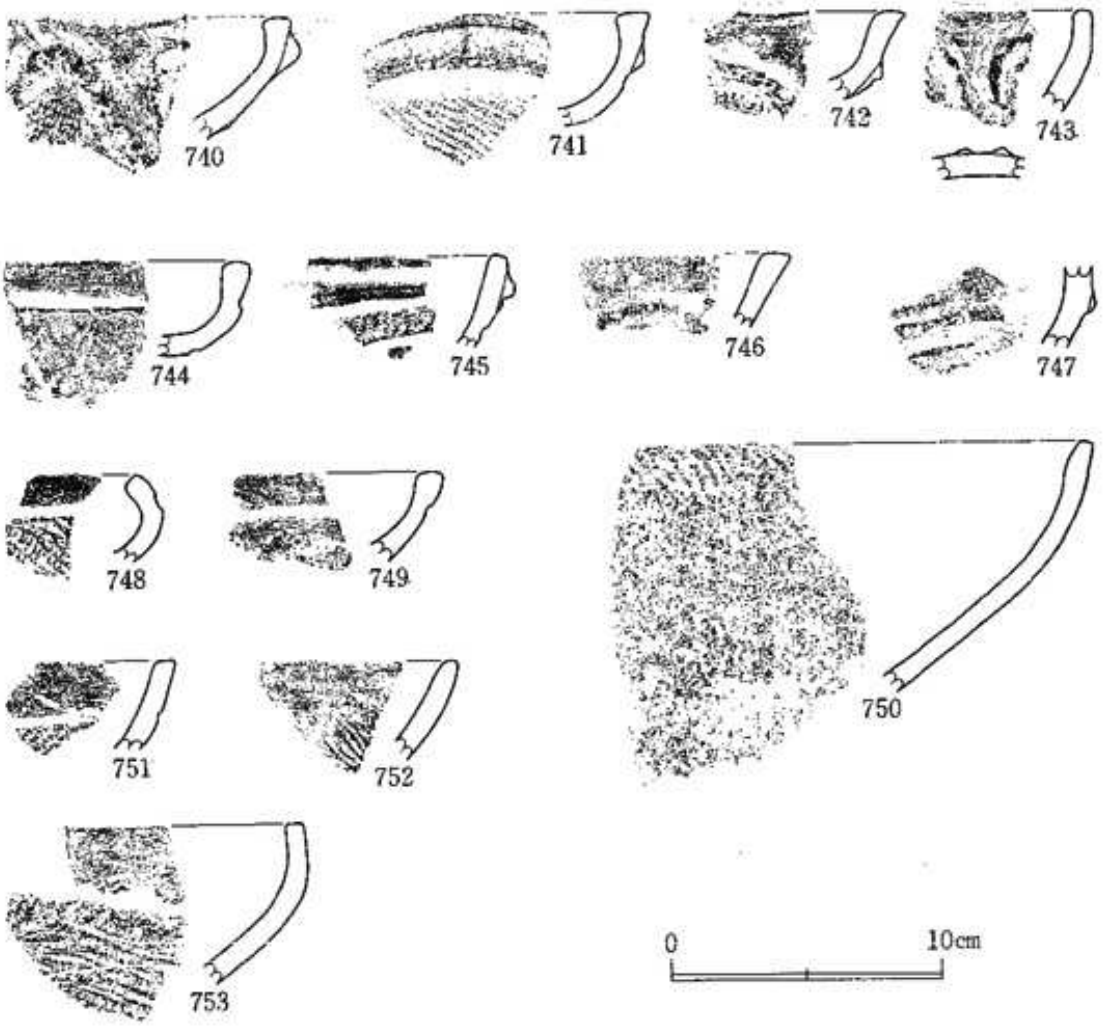
番号	出土位置	層位	器種	部	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
719	LM50		深鉢	II	3	H	横位2段刺突列	
720	LN51	I	〃	II	3	H	〃	
721	LR47	III	〃	III		H	隆線縁取刺突列	
722	LP47	I	〃	III		H	横位刺突文	
723	LQ47		〃	III		H	〃	
724	LR47		〃	III		H	〃	
725	LN54	III	〃	III		H	沈線区画＋刺突	
726	LQ49	III	〃	II	3	H	沈線区画縁取刺突列	
727	LTS1B	III	〃	II	3	H	段位沈線内刺突列	
728	表採		〃	II	3	H	横位沈線上刺突列	
729	LL53		〃	II	3	H	〃	表
730	LQ53	I	〃	II	3	H	区画文内刺突充填	
731	LS50	III	〃	II	3	H	〃	
732	LS50	III	〃	II	3	H	〃	
733	LS50	I	〃	II	3	H	〃	表
734	LP49	I	〃	II	3	H	横位刺突列	
735	MB46	I	〃	II	3	H	〃	
736	LR49	III	浅鉢	II	3	H・B2	区画文内刺突充填	
737	LP49	III	深鉢	II	3	H	横位刺突列	表
738	LR55		〃	II	3	H	全面刺突文	表
739	表採		浅鉢	II	3	H・B3	肥厚上刺突列	

第132図　遺構外出土土器(13)

ペット文のようなモチーフである。

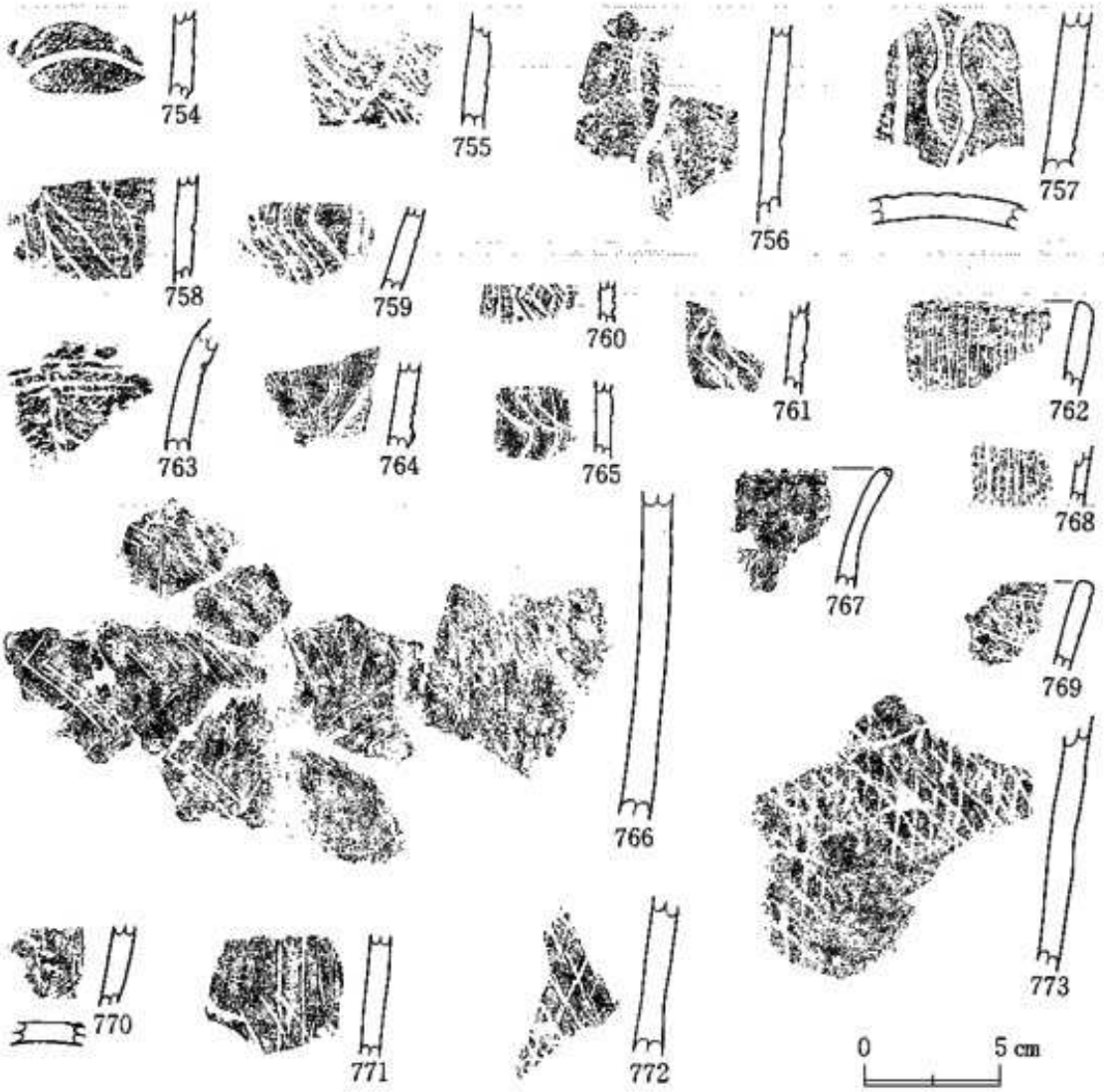
文様表出技法Ｂ１（第123図599、第125図・第126図）

文様モチーフがわかるのは、第123図599である。縄文部によってＣ字状のモチーフが表現されている。所謂独立アルファベット文である。体部を上下に区分する沈線があるかどうかは不



番号	出土位置	地区	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
740	L P47	Ⅱ	浅鉢	Ⅱ	3	B3	縄文部	
741	L P47	Ⅱ	〃	Ⅱ	3	B3	〃	
742	M B50	Ⅱ	〃	Ⅱ	3	B3	〃	表
743	L Q51	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B3	不明	表
744	L Q55	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B1	〃	表
745	L Q49		〃	Ⅱ	3	B3	〃	表
746	L Q51	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B1	〃	
747	L Q54		〃	Ⅱ	3	B3	〃	
748	L O48		〃	Ⅱ	3	G	〃	
749	L R46	Ⅲ	〃	Ⅱ	3	B1	〃	
750	L O48	Ⅰ	〃	Ⅵ			RL横回転	表・裏
751	M A50		〃	Ⅱ	3	G	不明	表
752	L S46		〃	Ⅵ			RL縦回転	
753	L O51	Ⅲ	〃	Ⅵ			〃	表

第133図　遺構外出土土器(14)



番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
754	LT46	I	深鉢	III		D		
755	MA46	I	〃	III		D		
756	LR49		〃	III		E		
757	LR47		〃	III		C1		表
758	LR46		〃	III		C1		
759	LJ53		〃	III		E		
760	LO54	II	〃	III		E		
761	LQ54		〃	III		E		
762	LK51	II	〃	III		E		
763	MD49	II	〃	III		D		
764	LN54	III	〃	III		E		
765	LQ55	III	〃	III		E		
766	MA51	III	〃	III		E		
767	LN55	III	〃	III		E		
768	LL52	III	〃	III		E		
769	LR49		〃	III		E		
770	LQ51	III	〃	III		E		
771	LM51	III	〃	III		E		表
772	LQ53		〃	VI			網目状撚糸文	
773	LN54	II	〃	VI			〃	

第134図　遺構外出土土器(15)

明。破片資料で判明するものはほとんどが縄文部で文様を表現しており、モチーフもこれとほぼ類似する。638は縄文部の中に無文部で区画文を描くようにもみえる。しかし、胴部中央下半付近の破片であり、拓影に現われている沈線は胴部を上下に区画する波状沈線でその下は縄文のみが施文され、上部は無文部の中に縄文部による区画文が描かれている可能性もある。

浅鉢では、第133図744・746・749がある。

文様表出技法Ｂ２（第127図）

文様表現は縄文部で描くものもあるが明瞭に無文部で描くものもある。小破片では視覚的に判断できないものが多い。654は縄文部の中に先端の丸く閉じた無文の隆帯が貫入する。また653のように、無文部を縄文部に区画されているだけでなく無文部の内部にも隆帯の交叉による描き分けがされるものもある。

文様表出技法Ｂ３（第128図・第133図）

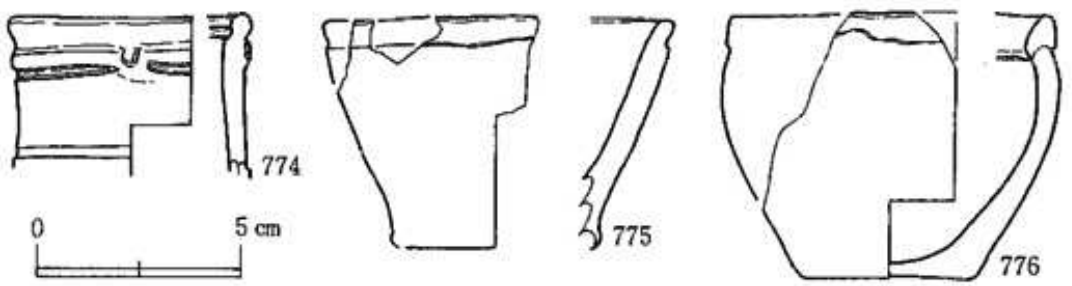
無文部に貼り付けられる粘土隆帯は、Ｂ２技法の隆帯の両側縁を山形に尖らせたもの（663・665・666・668・670・680など）と、無文部と縄文部の境界に断面三角形の細い粘土紐を貼り付け、区画部分を縁どりするもの(667・671・673～676・678・679・681など)がある。文様を無文部で表現するものと縄文部で表現するものとがあるが、Ｂ２技法に近いものは無文部が強調されるようである。680はＢ２技法の第127図654とほぼ同一モチーフだが、無文部の末端が強く隆起し、ヒレ状になるものである。

浅鉢では第133図740～743・745・747・748がある。浅鉢は、ＳＩ73竪穴住居跡出土の注口付の浅鉢も含め、Ｂ３技法を用いて縄文部で文様を表現するものである。

文様表出技法Ｃ１（第129図）

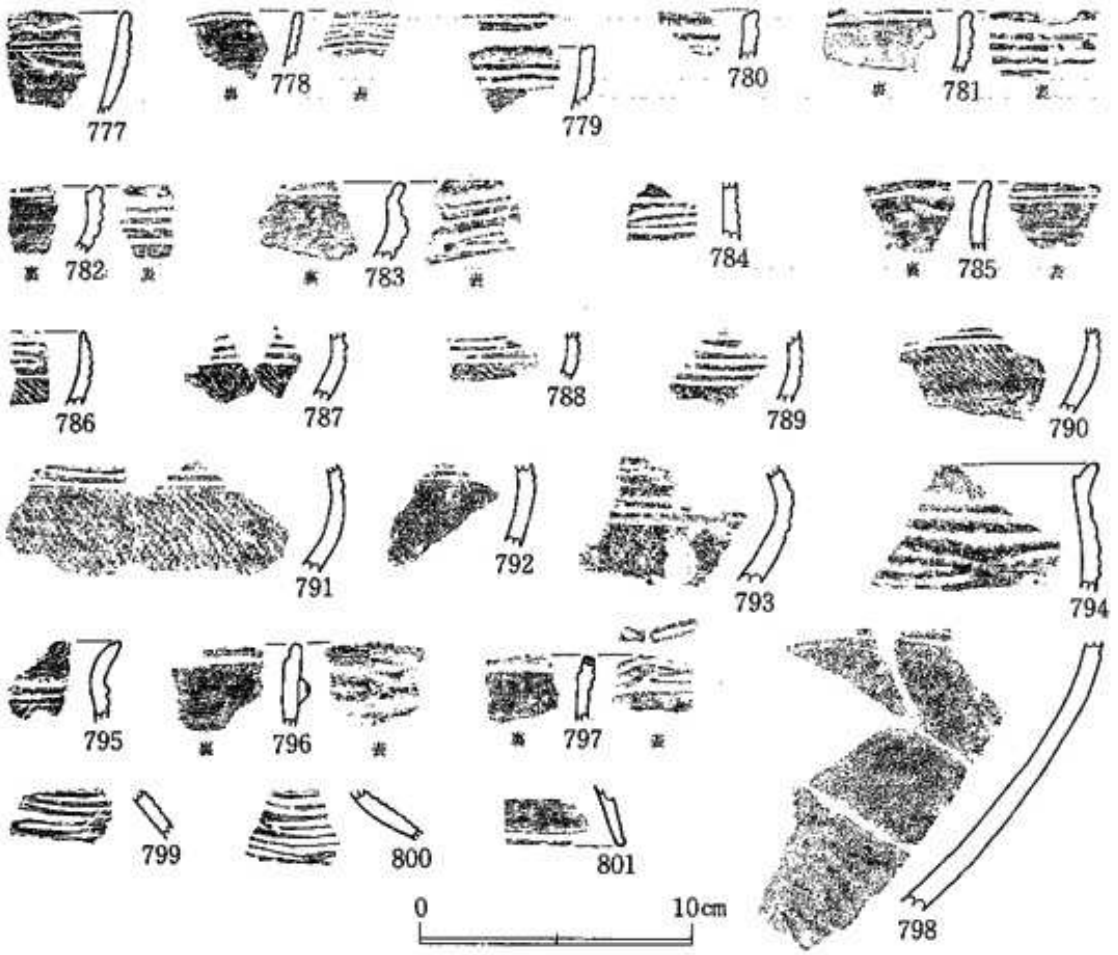
文様表出技法Ｃ２（第127図・第129図）

これらはきわめて少数である。686・689は同一個体で、Ｂ２技法とよく似るが、撚糸文を全



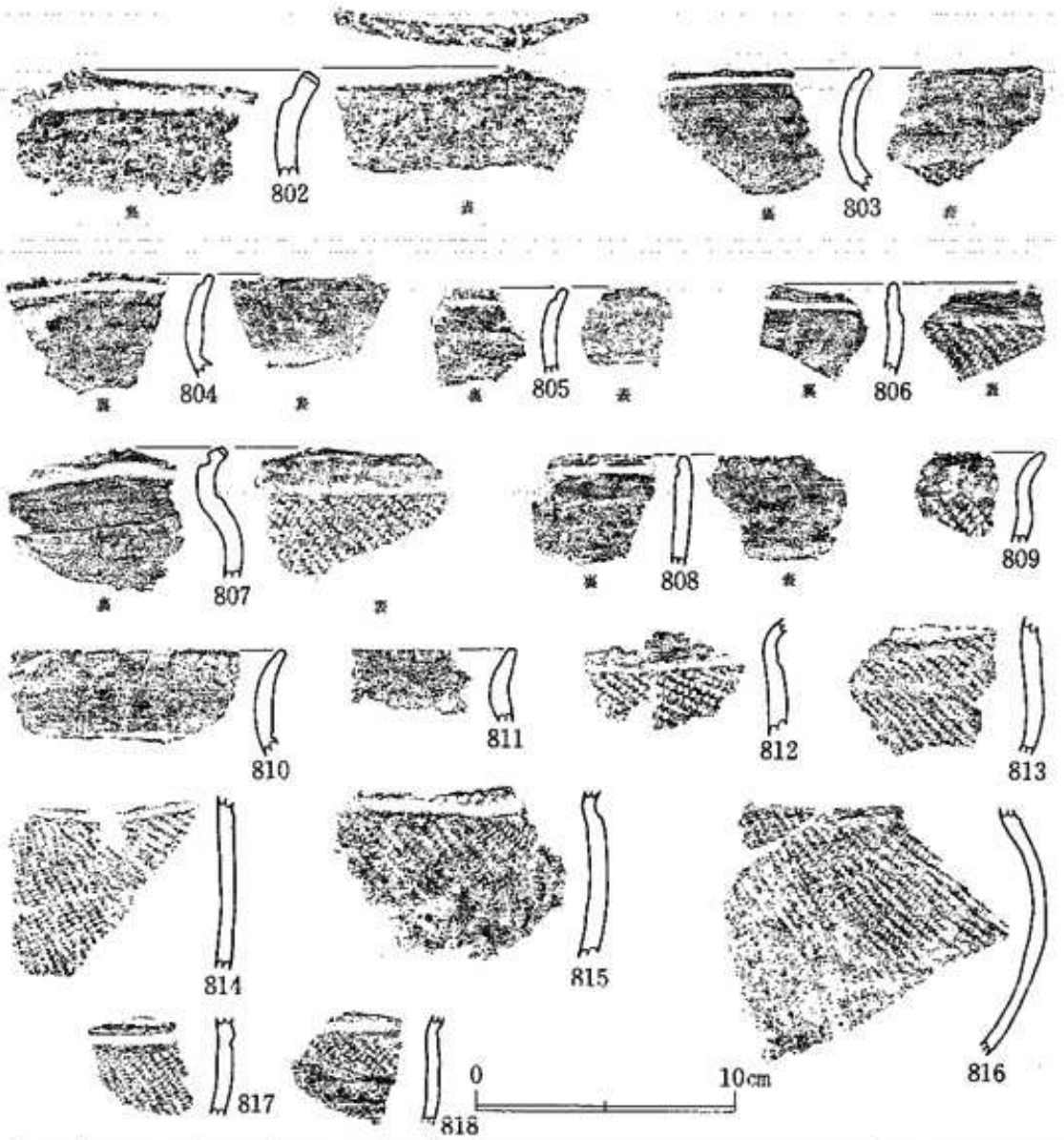
番号	出土位置	層位	器種	群	文様	炭化物付着
774	LN54・55	1	壺	Ⅳ	沈線文・4ヶ所に突起あり	
775	LO　52	1	鉢	Ⅳ	沈線文	
776	LN　45	1	鉢	Ⅳ	沈線文	内面

第135図　遺構外出土土器(16)



番号	出土位置	層位	器種	群	文様	炭化物付着
777	LQ 50	Ⅲ	鉢	Ⅳ	工字文	
778	LN 55		〃	Ⅳ	〃	
779	LR 48	Ⅲ	〃	Ⅳ	〃	表・裏
780	LQ 51	Ⅲ	〃	Ⅳ	〃	
781	LN 55	Ⅱ	〃	Ⅳ	〃	
782	LN 55	Ⅱ	〃	Ⅳ	〃	
783	LP 47	Ⅲ	〃	Ⅳ	〃	
784	LR 46	Ⅲ	〃	Ⅳ	〃	
785	LN 54	Ⅱ	〃	Ⅳ	〃	
786	LP 48	Ⅲ	〃	Ⅳ	〃 RL縄文	裏
787	LN 45	Ⅰ	〃	Ⅳ	〃 〃	
788	MA 49	Ⅰ	〃	Ⅳ	〃 〃	
789	LN 55	Ⅱ	〃	Ⅳ	〃	
790	LS 49	Ⅰ	〃	Ⅳ	〃 RL縄文	
791	LN 54 LN 45	Ⅲ Ⅱ	〃	Ⅳ	〃 〃	
792	LQ 51	Ⅰ	〃	Ⅳ	〃	
793	LP 47	Ⅰ	〃	Ⅳ	〃	
794	LR 44	Ⅰ	〃	Ⅳ	〃	
795	LN 54	Ⅱ	〃	Ⅳ	〃	
796	LR 52	Ⅲ	壺	Ⅳ	〃	
797	LQ 51	Ⅲ	鉢	Ⅳ	〃	
798	LP 47	Ⅲ	鉢	Ⅳ	沈線	
799	LN 54	Ⅱ	壺	Ⅳ	工字文	表赤色彩色
800	LQ 51	黒	〃	Ⅳ	〃	
801	LQ 47	Ⅲ	台部	Ⅳ	沈線	表・裏

第136図　遺構外出土土器(17)



番号	出土位置	層位	器種	群	文様	炭化物付着
802	LN 55		鉢	Ⅳ	口縁内面沈線	
803	LS 44	Ⅲ	〃	Ⅳ	〃　RL縄文	
804	LR 44	Ⅰ	〃	Ⅳ	〃	
805	LT 46	Ⅰ	〃	Ⅳ	〃	
806	LR 48	Ⅰ	〃	Ⅳ	〃　RL縄文	表・裏
807	LN 48		〃	Ⅳ	〃　〃	表・裏
808	LN 55	Ⅲ	壺	Ⅳ	〃	表
809	LP 46	Ⅰ	鉢	Ⅳ	RL縄文	表
810	LO 49	Ⅰ	甕	Ⅳ	頸部沈線	表・裏
811	LN 53	Ⅰ	〃	Ⅳ	無　文	表
812	LO 52	Ⅰ	鉢	Ⅳ	RL縄文	
813	LN 55	Ⅲ	〃	Ⅳ	〃	表
814	LN 54 LN 54	Ⅱ Ⅱ	〃	Ⅳ	〃	
815	LN 45	Ⅰ	〃	Ⅳ	〃	表
816	LN 55 LN 56	Ⅱ Ⅲ	〃	Ⅳ	〃	表
817	LS 48	Ⅲ	〃	Ⅳ	〃　沈線	
818	LR 43	Ⅲ	〃	Ⅳ	〃	

第137図　遺構外出土土器(18)

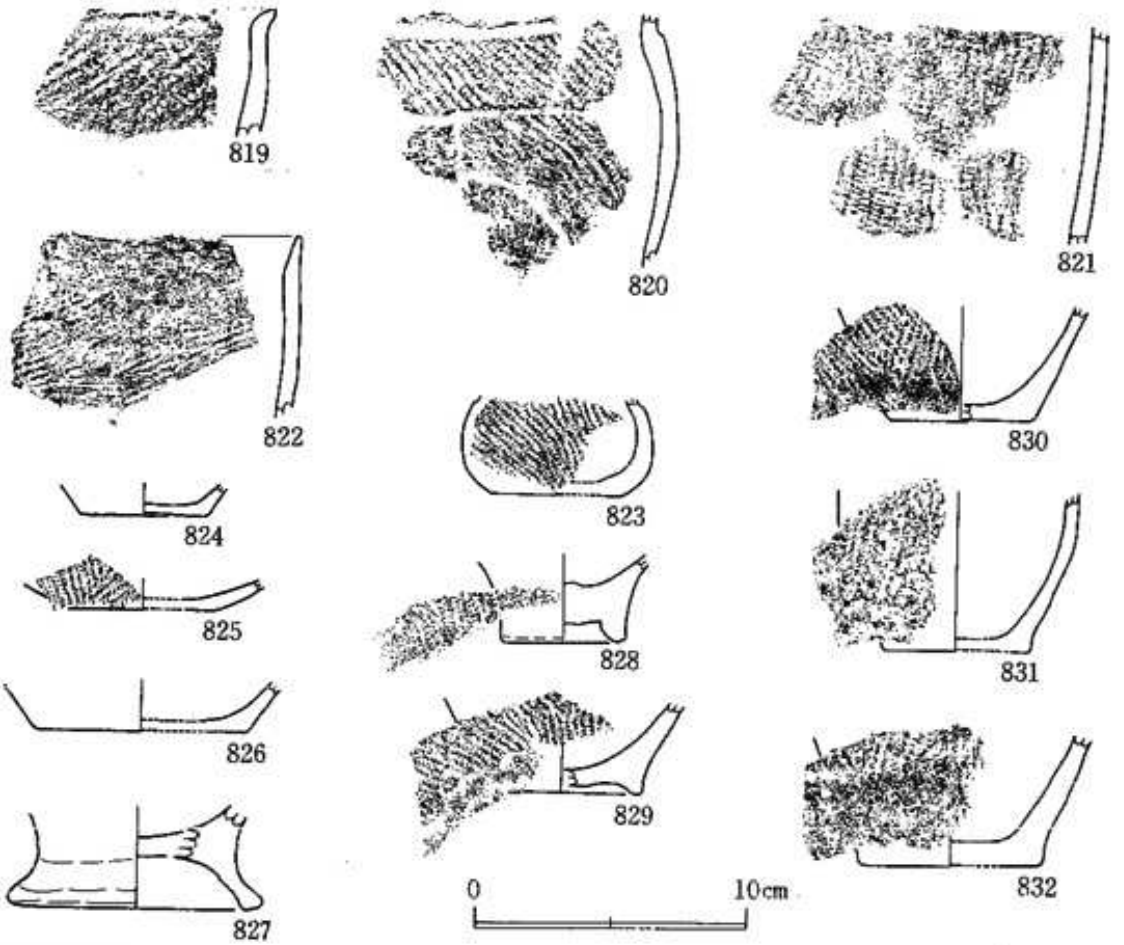
面に施文した後に粘土隆帯を貼り付けている。

文様表出技法D（第130図）

文様表出技法E（第130図）

文様表出技法F（第130図）

これらもきわめて少量である。FはB3技法をした第127図654のような土器の一部で、同一個体の他の部分に縄文が施文された部分のある個体の可能性がある。



番号	出土位置	層位	器種	群	文様	炭化物付着
819	LN 48		甕	Ⅳ	LR縄文	表・裏
820	LN 54	Ⅱ	〃	Ⅳ	RL縄文	表
821	LS 48	Ⅲ	〃	Ⅳ	〃	
822	LN 51	Ⅲ	〃	Ⅳ	L縄文	表・裏
823	LN 55	Ⅱ	壺	Ⅳ	RL縄文	表赤色彩色
824	LN 55	Ⅲ	鉢	Ⅳ	無文	
825	LQ 42	Ⅰ	〃	Ⅳ	LR縄文	
826	LR 45	Ⅰ	〃	Ⅳ	無文	
827	表採		台付鉢	Ⅳ	〃	
828	LP 47	Ⅲ	〃	Ⅳ	LR縄文	
829	LM 46	Ⅱ	〃	Ⅳ	RL縄文	内
830	LP 52	Ⅲ	甕	Ⅳ	〃	内
831	LN 55	Ⅱ	〃	Ⅳ	〃	外
832	LN 55		〃	Ⅳ	〃	

第138図　遺構外出土土器(19)

文様表出技法G（第131図・第133図）

文様を縄文部で表現するものがやや多いが、これらはA技法である可能性が高い。しかし、縄文部の縄文施文が区画に合わせて回転方向を変えていることが明らかでないものはGとした。700・704は、縄文部の区画が連続する曲線ではなくて、鋭角に折れ曲がる。無文部による文様表現を意識しているものであろう。

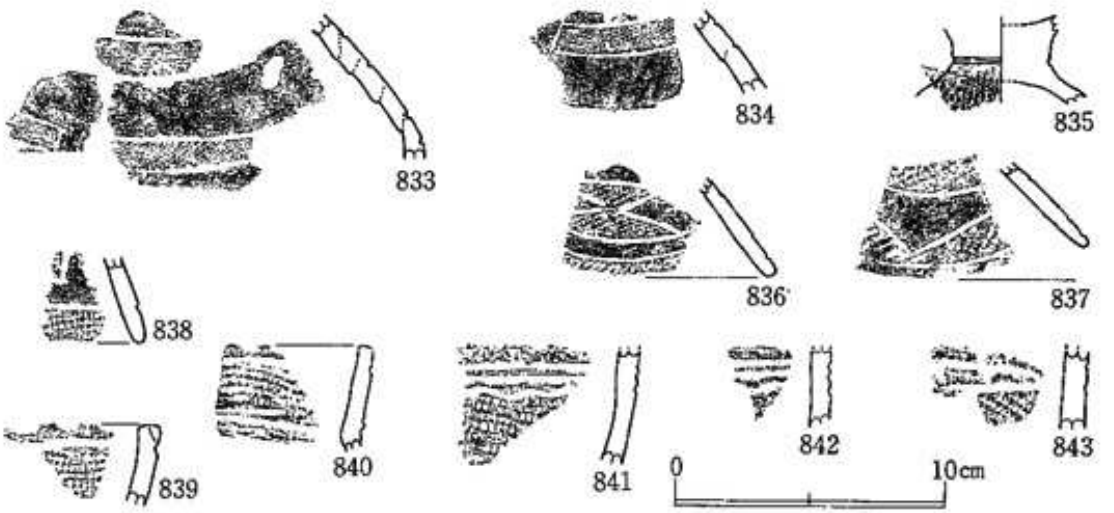
浅鉢では、第133図748・751がある。751はやや無文部が薄く、AまたはC1技法と思われる。

文様表出技法H（第132図719・720・726～739）

719・720は口縁部に沿って太い棒状工具の先端で横位に突き刺すように2列に刺突列をめぐらせている。726・727・728・729・736・739は、沈線に沿って、または沈線の中に刺突列が連続するものである。734・735は、沈線が明瞭ではないが、729と同様の連続刺突が横位に1列にめぐる。737は2列が認められる。730・731・732・734は沈線区画内に刺突を充填するものである。732はB1技法と同様に無文部に粘土を貼り付けて厚くしている。

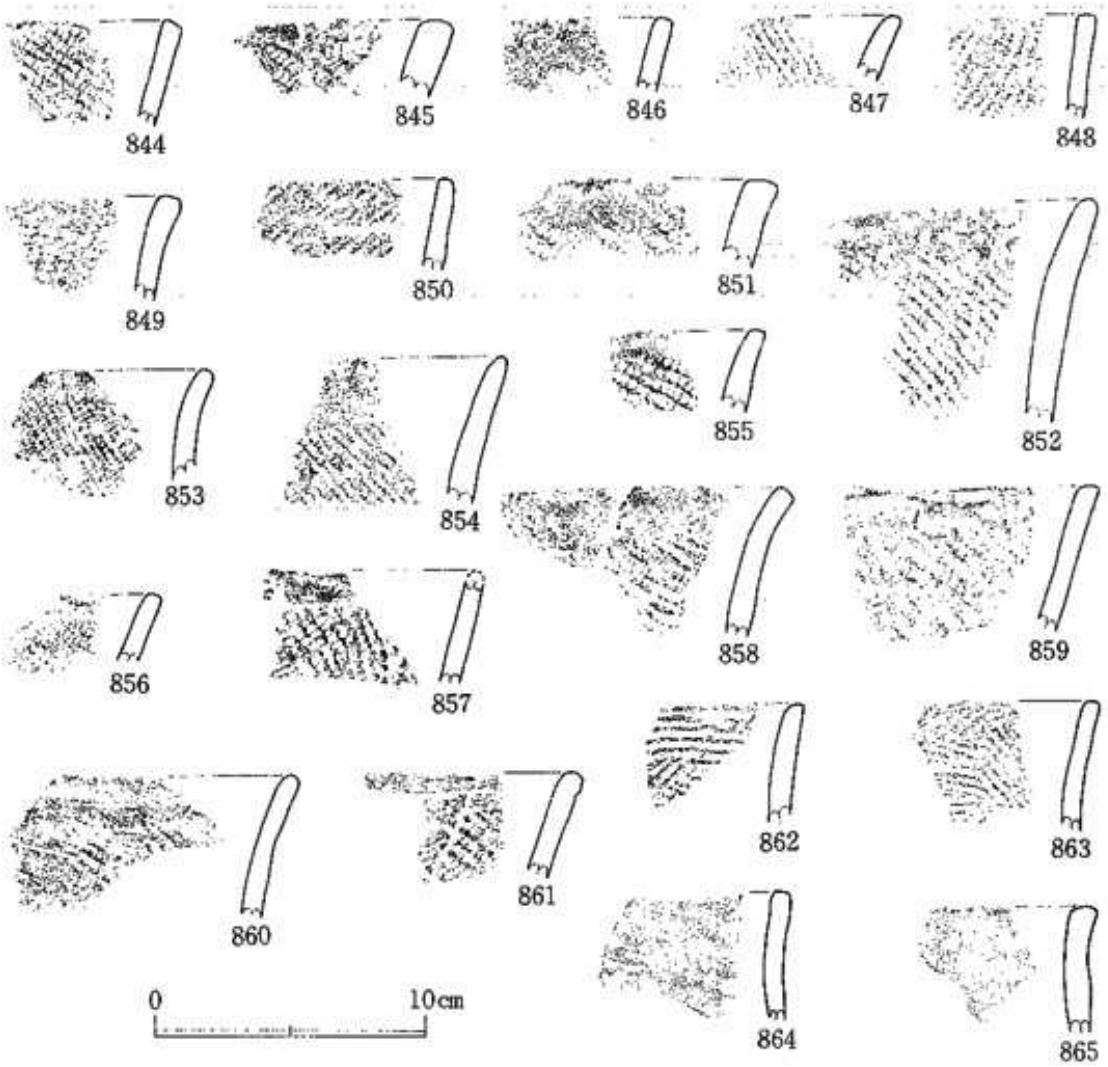
Ⅲ群土器（第132図721～725・第134図）

722・723・724は横に突き刺すような刺突を連続させている。724ではそれによって盛り上がった粘土が明瞭に残る。754・755は縄文または撚糸文を器面全体に施文した後、沈線で区画文を



番号	出土位置	層位	器種	群	文様	炭化物付着
833	LO62・LP35 LQ55	Ⅰ・Ⅱ Ⅲ	鉢	V	区画文内LR縄文充填	
834	LP 54	Ⅰ	〃	V	〃	
835	LQ 54	Ⅲ	鉢	V	LR縄文	赤色彩色
836	LQ 51	Ⅲ	〃	V	区画文内LR縄文	〃
837	LP 52	Ⅰ	〃	V	〃	〃
838	LO 51	Ⅲ	〃	V	〃	〃
839	LR 51		壺	V	口唇部指頭押圧、沈線文、LR縄文	表
840	LR 51		〃	V	〃 〃 〃	表
841	表採		〃	V	〃 縄横状沈線文、LR縄文	表
842	LR 51		〃	V	沈線文、LR縄文	表
843	LR 51		〃	V	〃 RL縄文	表（裏赤色彩色）

第139図　遺構外出土土器(20)



番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭・化物付着
844	LO48	Ⅲ	深鉢	Ⅵ	Ⅱa		LR縦回転	
845	LQ46		〃	Ⅵ	Ⅱa		〃	
846	LN45	Ⅰ	〃	Ⅵ	Ⅱa		〃	
847	LP45	Ⅰ	〃	Ⅵ	Ⅱa		〃	
848	LP50	Ⅲ	〃	Ⅵ	Ⅱa		RL縦回転	表
849	LO49	Ⅲ	〃	Ⅵ	Ⅱa		〃	
850	LO54		〃	Ⅵ	Ⅱa		LR横回転	表
851	LP46	Ⅰ	〃	Ⅵ	Ⅱb		LR縦回転	
852	LR47		〃	Ⅵ	Ⅱb		〃	表
853	LT49		〃	Ⅵ	Ⅱb		〃	
854	LQ54	Ⅱ	〃	Ⅵ	Ⅱb		〃	表
855	LO53		〃	Ⅵ	Ⅱb		RL横回転	
856	LP51	Ⅲ	〃	Ⅵ	Ⅱb		LR縦回転	
857	LR48	Ⅲ	〃	Ⅵ	Ⅱb		〃	裏
858	LQ54	Ⅲ	〃	Ⅵ	Ⅱb		〃	
859	LO49	Ⅲ	〃	Ⅵ	Ⅱb		〃	
860	LM52	Ⅰ	〃	Ⅵ	Ⅱb		〃	
861	MA47		〃	Ⅵ	Ⅱc		〃	表
862	LR51	Ⅲ	〃	Ⅵ	Ⅱa		LR異方向回転	
863	LP51	Ⅱ	〃	Ⅵ	Ⅱa		L異方向回転	
864	LP49	Ⅲ	〃	Ⅵ	Ⅱd			表
865	LP51	Ⅲ	〃	Ⅵ	Ⅱd			表

第140図　遺構外出土土器(21)

描く。波状に垂下する沈線文を描くもの（756・757・758）や、半截竹管工具による2本一組の細い沈線で、縦位波状文や鋸歯状文を描くもの（759～732、734～736）、縦位に櫛歯状沈線文を描くもの（762・768）がある。

Ⅳ群土器（第135図～第138図）

壺形土器（第135図774、第136図796・799・800）

774は口縁部に2本の沈線がめぐり、4カ所の突起で連結させる。796は2本の隆線がめぐる。799・800は肩部に工字文が施文される。

鉢形土器（第135図775・776、第136図797～795、797・798・801、第137図802～807、809、812～808、第138図824～829）

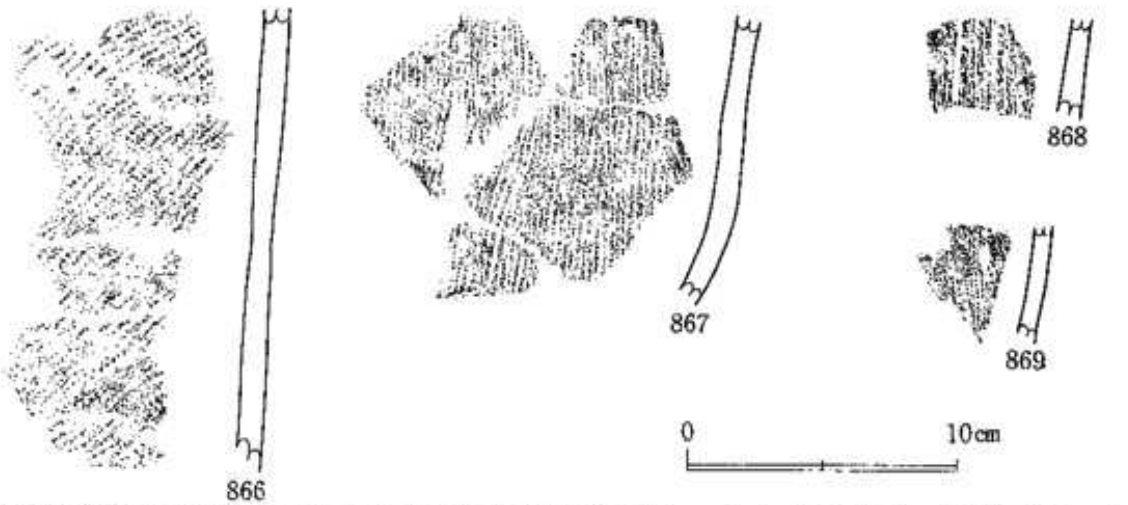
台付の鉢も含めた。801は台付鉢の台部で、沈線が1条めぐる。この他にも台付鉢は多いと思われるが、明確に台部とわかる破片は少ない。胴部全体に工字文が描かれたもの、胴部上半に工字文、下半に縄文が施文されるものがある。口唇部内面に沈線がめぐる。後者は台付鉢の可能性もある。

甕形土器（第137図808・810・811、第138図819～822、830～832）

器面全体に縄文が施文される。無文の口縁部が短く外反するものが多く、底部に短い台のつくものもある。

Ⅴ群土器（第139図）

遺構外からは図示した11点のみ出土した。833・834は同一個体の壺で細い沈線で矩形の区画文を描きその中に縄文を施文する。裏面には成形の際の粘土紐巻上げ痕が明瞭に残る。835～838



番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
866	MC45	Ⅲ	深鉢	Ⅵ	胴a		LR横回転	
867	LQ55	Ⅱ	〃	Ⅵ	胴b		R縄糸文	
868	LP49	Ⅲ	〃	Ⅵ	胴c		ハケ目状沈線文	
869	LP51	Ⅲ	〃	Ⅵ	胴c		〃	

第141図　遺構外出土土器(22)

は蓋で、いずれも縄文部が赤色に彩色されている。836・837は鋸歯状、838は矩形の区画文が描かれている。839～843は甕形土器である。839・840はやや外反する口縁部の上下に沈線をめぐらし、その中に縄文を施文する。841は平行沈線と鋸歯状沈線文がめぐる。

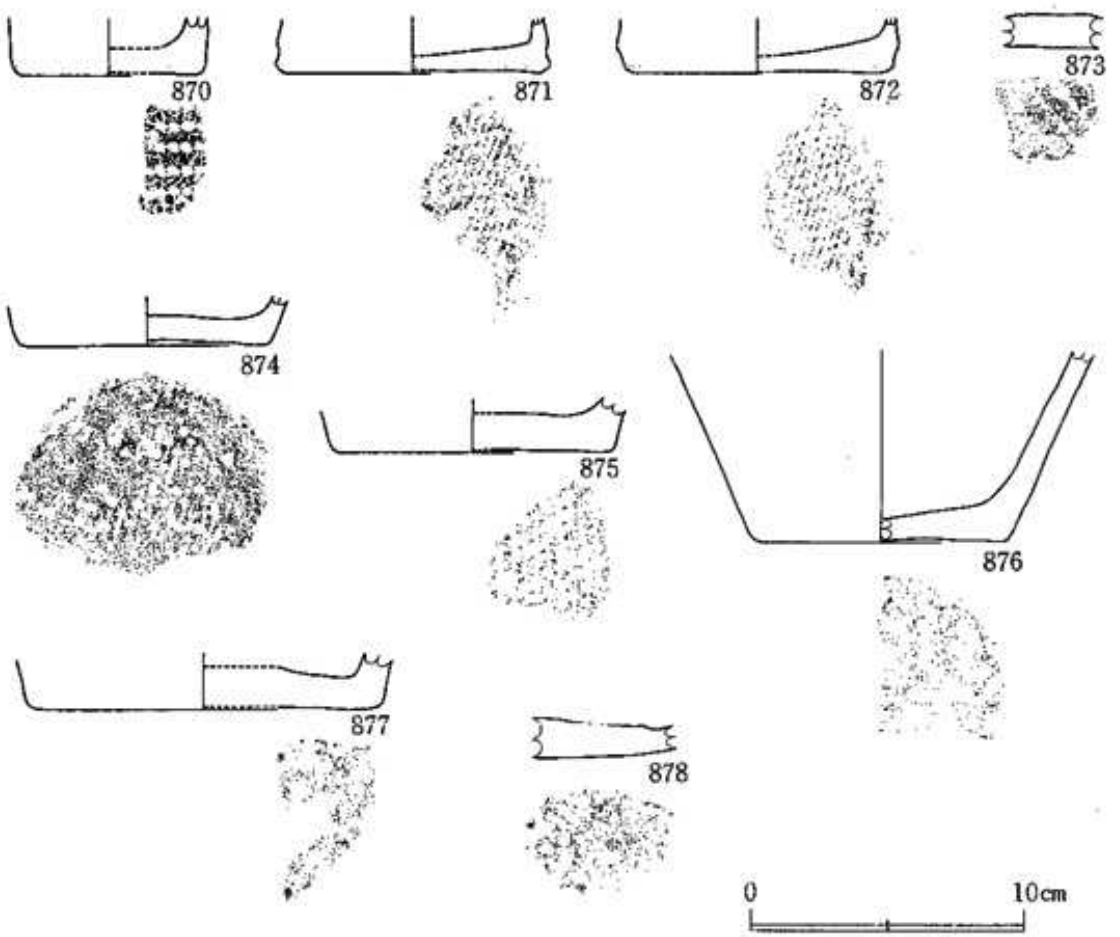
Ⅵ群土器（第133図・第134図・第140図～第144図）

部位別に以下のように分類する。

口縁部　a類　口唇直下まで縄文を施文するもの

b類　口唇部直下に無文帯があるもの

c類　口唇部直下の無文帯の下端に沈線がめぐるもの



番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
870	表採		深鉢	Ⅵ	底a			
871	LP46	Ⅰ	〃	Ⅵ	底a			
872	LP46	Ⅰ	〃	Ⅵ	底a			
873	表採		〃	Ⅵ	底a			
874	LO53	Ⅲ	〃	Ⅵ	底a			
875	LT49	Ⅰ	〃	Ⅵ	底a			
876	LQ46		〃	Ⅵ	底a			
877	LG39		〃	Ⅵ	底a			
878	LG39		〃	Ⅵ	底a			割れ口

第142図　遺構外出土土器(23)

d類　無文のもの

胴　部　a類　縄文

b類　撚糸文

c類　ハケ目状沈線文

底　部　a類　底面に網代痕跡のあるもの

b類　底面に棒状痕跡のあるもの

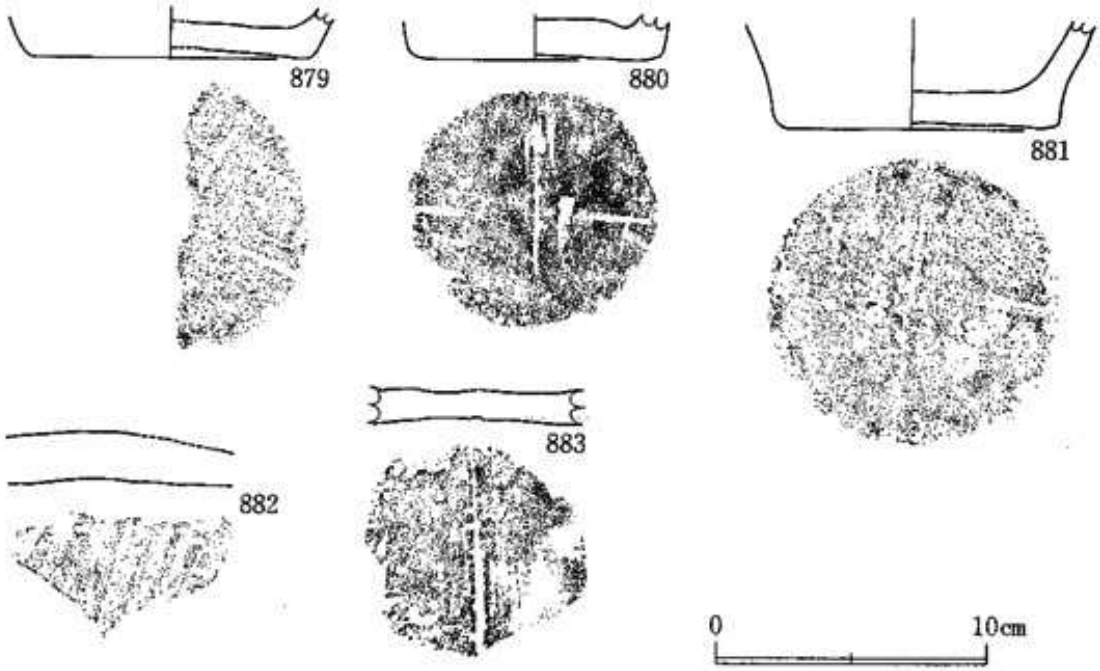
c類　底面に板目痕跡のあるもの

d類　底面が無文のもの

縄文は縦回転のものが多いが、第141図866のように横回転の明瞭なものもある。浅鉢形土器では、第133図750・752・753がある。752・753は内弯する口縁部が無文である。750の表面はス状・裏面はタール状の炭化物が厚く付着している。底面は無文のものが最も多く網代痕等の残るものは少ない。

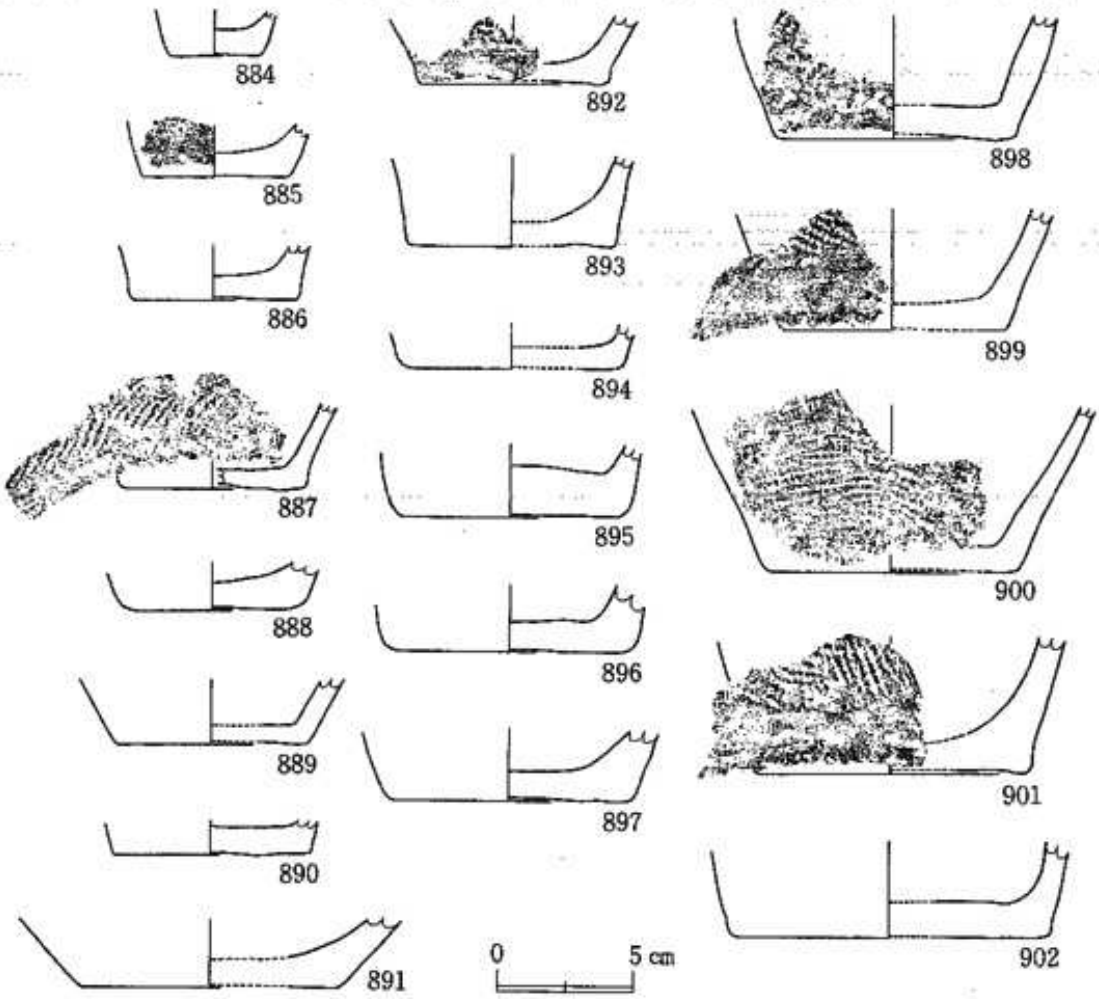
土製品（第145図）

903は楕円柱形の土製品で、端部が外側に広がり、その中が凹んでいる。端部の1カ所には穿孔がある。904・905は円柱形で一端が傘状に開く。蓋形土器のつまみ部分と思われる。906・909・



番号	出土位置	層位	器種	部	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
879	L R46	Ⅲ	深鉢	Ⅵ	底b			
880	M B51		＊	Ⅵ	底b			
881	L R55		＊	Ⅵ	底b			
882	L Q47	Ⅱ	＊	Ⅵ	底c			
883	L Q47	Ⅰ	＊	Ⅵ	底c			

第143図　遺構外出土土器(24)



番号	出土位置	層位	器種	群	類	文様技法	文様表現	炭化物付着
884	L Q49		深鉢	VI	底d			
885	L Q53		〃	VI	底d			内面
886	L Q55	Ⅲ	〃	VI	底d			
887	L N54	Ⅱ	〃	VI	底d			
888	L P48	I	〃	VI	底d			
889	L T49	Ⅲ	〃	VI	底d			
890	L R53	Ⅲ	〃	VI	底d			内面・胴れ口
891	表採		〃	VI	底d			
892	L O49	I	〃	VI	底d			
893	L P53	Ⅲ	〃	VI	底d			
894	L P51	Ⅲ	〃	VI	底d			
895	L N51	Ⅲ	〃	VI	底d			
896	L O50	I	〃	VI	底d			
897	L O51	Ⅲ	〃	VI	底d			
898	表採		〃	VI	底d			
899	L O49	I	〃	VI	底d			
900	L P47	I	〃	VI	底d			
901	L P48	I	〃	VI	底d			
902	L S43	Ⅲ	〃	VI	底d			

第144図　遺構外出土土器(25)

910は土器片を利用した円盤状土製品である。906・910はⅡ群3類、909はⅢ群土器を利用している。907は小円盤状の粘土盤の両面に刺突を施したものである。908はドングリ圧痕のついた土器片である。

小　結

Ⅰ群土器

胎土に繊維を含む縄文時代前期の土器である。第120図585・586は口唇部を表裏交互に押圧し鋸歯状となることから大木5式、587・588は隆帯貼り付けとその上に施文する特徴から円筒下層b式の可能性がある。

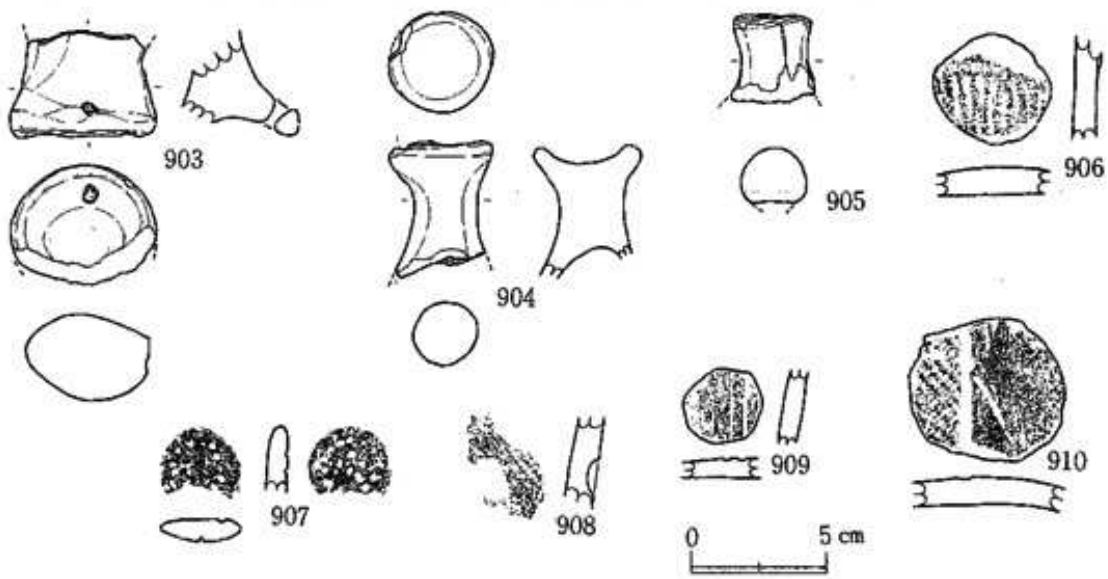
Ⅱ群土器

1類は大木8b式、2類は大木9式である。

3類はいろいろなモチーフの区画文内に縄文が施文される土器である。胴部中央付近に上下を区画する沈線がめぐり、それより上位に区画文、下位に縄文を施文する構成をとるものがほとんどである。区画文のモチーフには入り組み横S字状文、(逆)e字状文、(逆)U字状文、波頭文などがある。大木9式に後続する中期後葉の土器群で、丹羽茂氏の大木10式第Ⅱ段階、柳沢清一氏の大木9－10中間式の新しい部分である。

3類土器の出土状況は竪穴住居跡の炉埋設土器、竪穴住居跡廃絶後の凹地を利用した捨場に投棄されたもの、建物跡の炉周辺に遺棄されたもの等があり、それらはすべて同時期ではなく若干の時期差がある。

本遺跡出土の3類は文様表出技法と区画文の文様表現から次のような特徴を指摘できる。



第145図　遺構外出土土器(26)・土製品

① A技法では文様を縄文部で表現するものが多く、無文部で表現するものは少ない。

② B1技法もA技法同様に文様を縄文部で表現するものが多く、無文部で表現するものはない。

③ B2技法では明らかに無文部で表現するものがあり、縄文部で表現するものもある。

④ B3技法では縄文部で文様を表現するものと、無文部で表現するものがある。

⑤ 浅鉢形土器はほとんどB3技法で、縄文部で文様を表現している。

⑥ 口縁近くはB1技法であるが、胴部では縄文部と無文部の厚さに差がなくなり、A技法またはC1技法（＝G技法）のものがある。

以上の特徴から、縄文部で表現する区画文から無文部で表現する区画文への変化の中に無文部の磨り消しによる作出から粘土貼付による無文部の作出という文様表出技法の変化が介在し、

1　無文部磨消＝縄文部表現（A技法）

→2　無文部粘土貼付＝縄文部表現（B1技法、B3技法）

→3　無文部粘土貼付＝無文部表現（B2技法、B3技法）

→4　無文部磨消＝無文部表現（C1、C2技法）

という4段階の流れが想定される。

1段階から2段階への契機としては、前記⑥の特徴から1段階における文様創付工程で、無文部とするべき部分に粘土を貼り付けて、縄文充填部分を若干低くしておく手法の存在が考えられる。そして低い部分に縄文を充填し、貼付けた粘土の側面にまで縄文が施文されたり、逆に貼付けた粘土との間に無文部が残ったりするものを消す機能をはたす工程として、縄文部と無文部の間を比較的太い棒状工具でなぞって調整することにより、結果的に太い沈線が引かれるものであろう。このようにして区画の境界線に最終工程で引かれる太い沈線は縄文を区画文モチーフに合わせて施文するA、B1、B2、B3の各技法に基本的に共通する。

1段階の土器にはSI70竪穴住居跡の埋設土器（第59図196）がある。入組横S字状文をA技法で描いている。SI20竪穴住居跡出土の小型深鉢土器（第45図165）は2段階の土器である。SI73竪穴住居跡出土の第79図345は2から3への過程を示す土器である。

3段階の土器にはSI70竪穴住居跡埋土出土の第61図223がある。この土器は粘土隆帯貼付→縄文充填の後に行うべき境界の沈線区画を一部にしか施さず隆帯の側面に縄文が残ったままの部分がある。4段階に相当する土器は少ないが、SI70竪穴住居跡埋土出土の第63図240、244はこれに相当する。

1→4の過程を経て、文様表現の意識が縄文部による文様表現から無文部による文様表現へと変化したことが、無文部どうしの切り合いや、無文部どうしの接する境界への粘土貼付けという変化の方向への出発点となるものと推測される。そして無文部による文様表現は縄文を文

様モチーフに充填施文して描く手法から、地文として縄文（撚糸文）を施文してある器面に文様を描き、表現しようとする無文部だけを磨り消す手法への移行をも予測させる。さらに推測を重ねれば、区画に用いる太い沈線は前述のように無文部と縄文部の境界を調整する目的があったと考えられるので、充填縄文手法による無文部主体の文様構成がさらに全面に縄文（撚糸文）を施文し文様部分を磨り消す手法による文様構成になった時点で、その重要な役割は一応果し終えることとなり、中期末から後期初頭にみられる細い沈線に変容するのではなかろうか。

Ⅲ群土器

Ⅲ群土器は後期初頭～前葉のものである。第132図721～724は三十稲場式に類似する土器で秋田県内でも出土例が蓄積されつつある。第134図754～758、SI70竪穴住居跡埋土出土の第60図203、第65図261～265は後期初頭の門前式並行、256～260は宮戸Ⅰb式である。

SB40建物跡の土器片開炉に使用された土器と、炉周辺及び炉内から出土した土器（第27図70、71）はいずれも区画文内に葉脈状文が描かれ、器形と口縁部以外は強い類似性が認められる共伴資料である。葉脈状文が施文される土器の破片は、県内では海岸部から雄物川町根羽子沢遺跡や田沢湖町黒倉B遺跡まで分布するが、器形や文様構成は明らかではなかったのでこの2個体の土器は貴重な例である。70の口縁部は岩手県上村遺跡Ce64住居跡出土土器に類似する。方形区画に近い文様モチーフは大木10式～門前式に並行する土器に散見される。近くでは小出Ⅲ遺跡の竪穴住居跡内で鎖状隆線のある土器片と伴出した例があり、70、71は後期初頭の土器と考えられる。本間宏氏は上村遺跡Ce64住居跡出土土器を標識とする上村式を提唱し、韮窪式の前段階に置いているが、韮窪式の一部土器にみられる隆起帯による矢羽根状縦位区画文が中期末～後期初頭に散見される葉脈状文と直接的な系譜関係で把えられるかどうかは今後類例の増加を待って検討したい。

第134図の759～771は後期前葉のものである。

Ⅳ群土器

Ⅳ群土器は精製土器が少なく、判然としないが、壺形土器や鉢形土器の特徴からみて晩期後葉の大洞A式を中心とする時期のものである。

Ⅴ群土器

弥生中期の宇津ノ台式である。器種には壺、蓋、甕があるが、鉢、高坏を欠く。壺胴体部に縄文帯による渦巻文を施文したものはなく、平行沈線による連弧文を描くものはないなど宇津ノ台遺跡出土土器によって設定された宇津ノ台式の内容に完全に一致するわけではないが、蓋の文様は宇津ノ式台遺跡出土A類と類似する。

2　石器

遺構外出土の総数は2242点で、そのうち剥片と遺跡内に収集された自然礫を除く石器は432点である（第6～8表）。石器類は調査区中央部を中心に遺構の密集する範囲に多かったが、遺構のない西側斜面で石器類の集中出土地点（ブロック）を4カ所検出した（第211図）。これらのブロックから出土した石器類には、ブロック間及び遺構のある区域のグリッド出土のものと接合するものもある。

石鏃　（第146図911～913）

石鏃は遺構内から2点、遺構外は図示した3点の合わせて5点出土した。

石槍　（第146図914～916）

914・915は基部を欠く。916は先端がやや丸みをおびる。

石錐　（第146図917・918）

いずれも縦長剥片の末端に刃部を作出する。二次加工を施して基部を整形するものはなく、基部は素材剥片のままである。

箆状石器　（第146図919～第148図930）

主要剥離面の中央を大きく残し、側面と背面全体に二次加工を施して短冊型または三角形に近い台形の形状に整形するもの（919～926・928）、同様の形態で主要剥離面側にほとんど加工を施さないもの（927）、断面形が半円形で、背面に細かな二次加工を施すものがある。前二者は直刃、後者は凸刃である。

石匙　（第148図931～第149図944）

横型石匙は1点のみで、他は縦型石匙である。先端が平坦なもの、丸いもの、尖るものがある。側縁の一方には刃部、他方には刃つぶしの二次加工が施される。

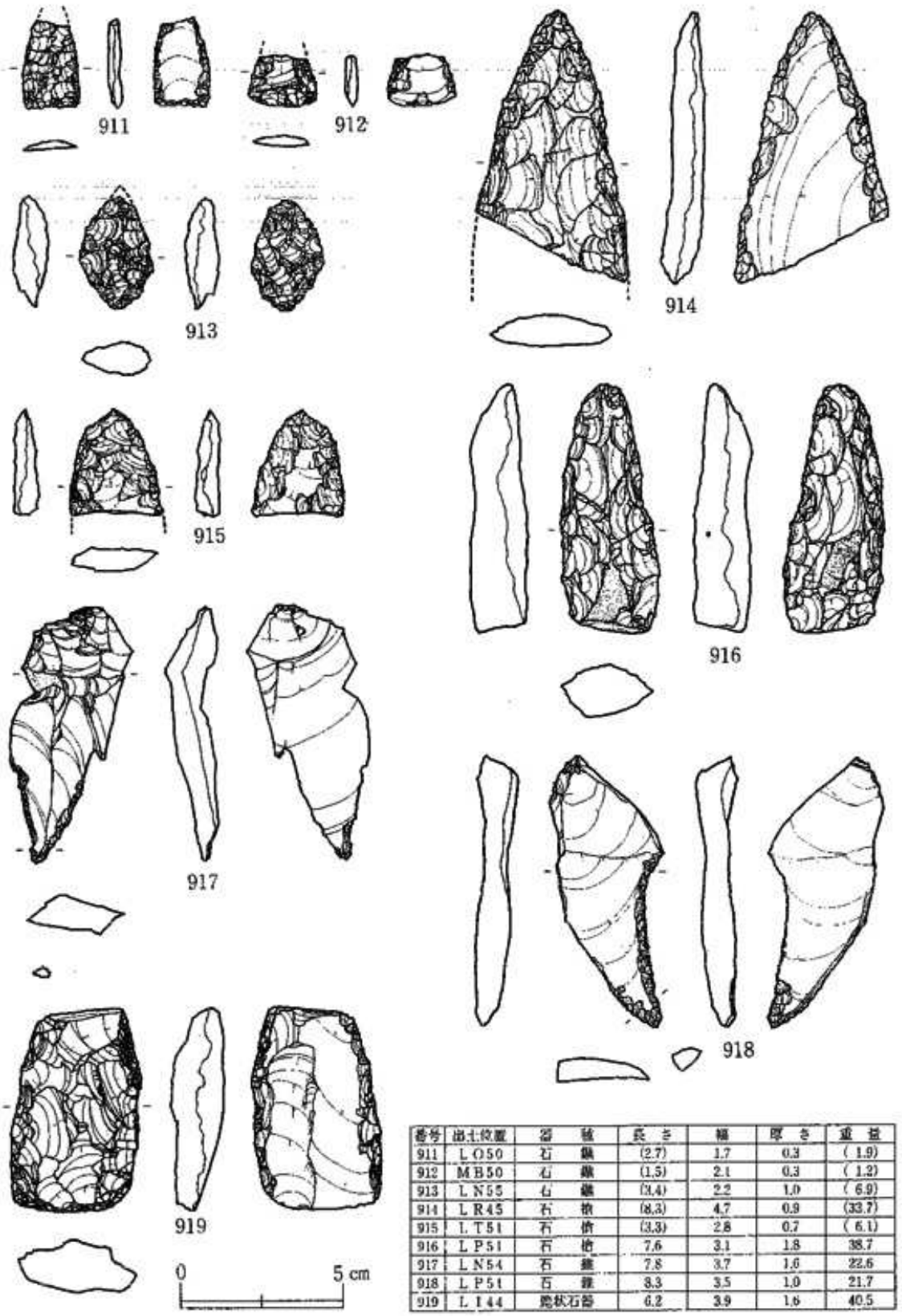
不定形石器　不定形石器は以下の14類に分類した。

a類　（第150図945～第151図956）

末端が主要剥離面側に湾曲する厚みのある縦長の剥片を素材とし、背面の末端または両側縁にかけて急角度の二次加工を施し、丸凸刃を形成する。長さと幅の相互関係から、㋐長さが5cm未満のもの（945～948）、㋑長さが5cm以上のもの（949～954）、㋒幅が4cm以上のもの（955・956）の3タイプに分かれる。㋐は末端のみに二次加工を施すが、㋑は側縁にも施し刃部としている。956は末端から背面左側縁全体が刃部である。

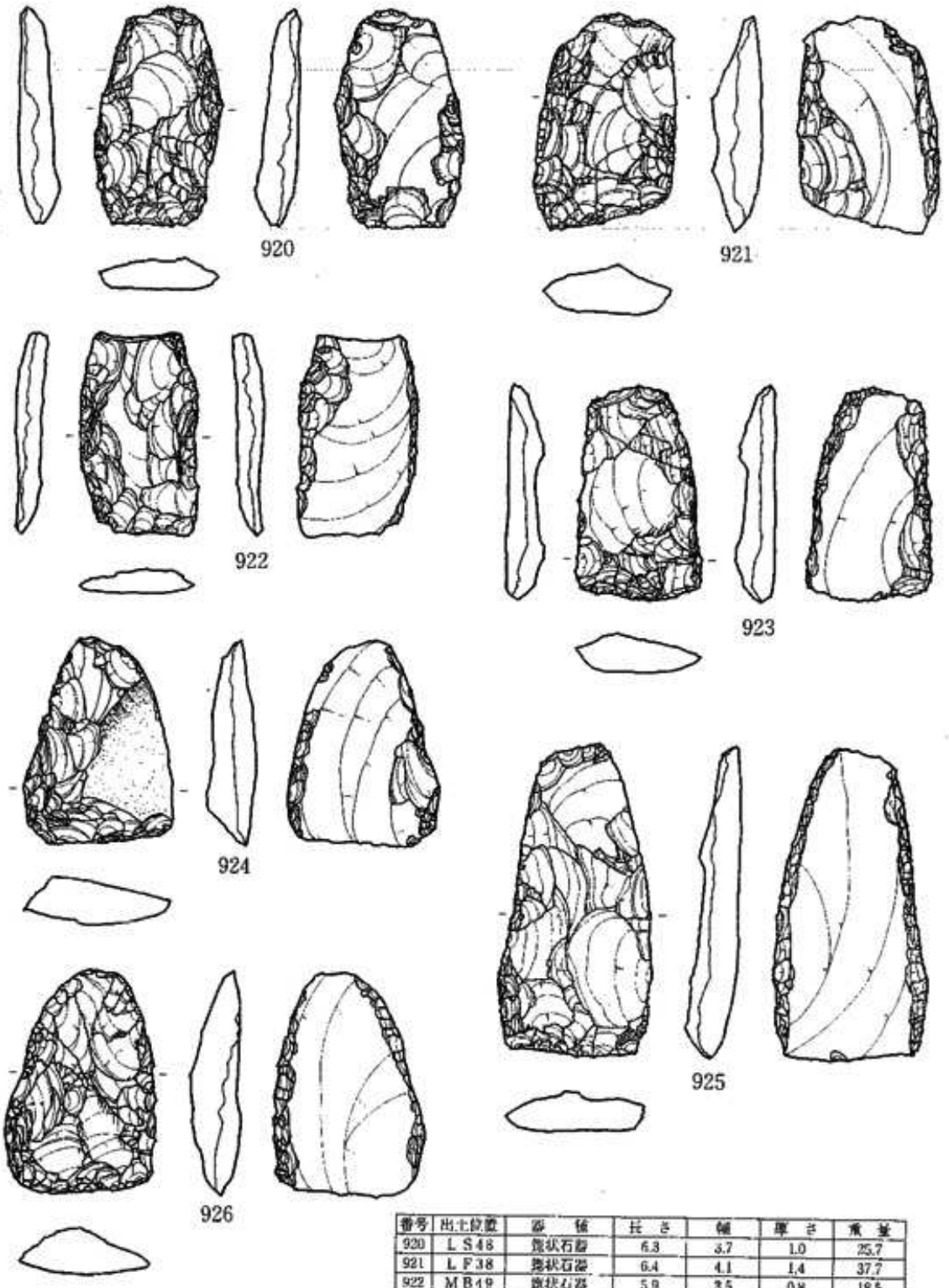
b類　（第151図957～第152図962、第167図1033）

縦長剥片背面の一側縁にやや急角度の刃部を形成するもので、958以外はその対辺に自然面が残る。958は対辺が折断面である。960・961は刃部の対辺に刃つぶしの二次加工を施す。



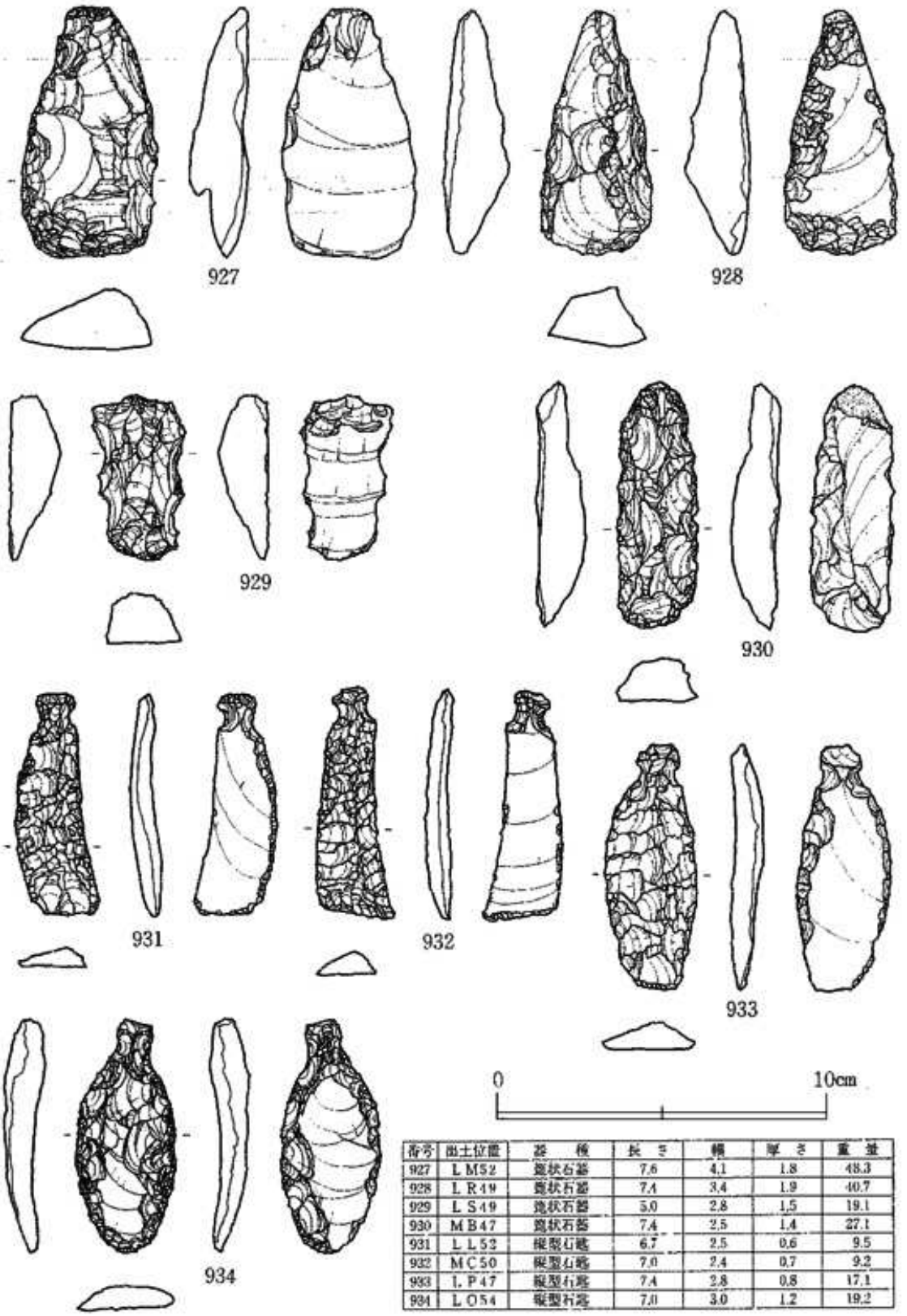
番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
911	L O50	石鏃	(2.7)	1.7	0.3	(1.9)
912	M B50	石鏃	(1.5)	2.1	0.3	(1.2)
913	L N55	石鏃	(3.4)	2.2	1.0	(6.9)
914	L R45	石槍	(8.3)	4.7	0.9	(33.7)
915	L T51	石錐	(3.3)	2.8	0.7	(6.1)
916	L P51	石錐	7.6	3.1	1.8	38.7
917	L N54	石錐	7.8	3.7	1.6	22.6
918	L P51	石錐	8.3	3.5	1.0	21.7
919	L I44	楔状石器	6.2	3.9	1.6	40.5

第146図　遺構外出土石器(1)



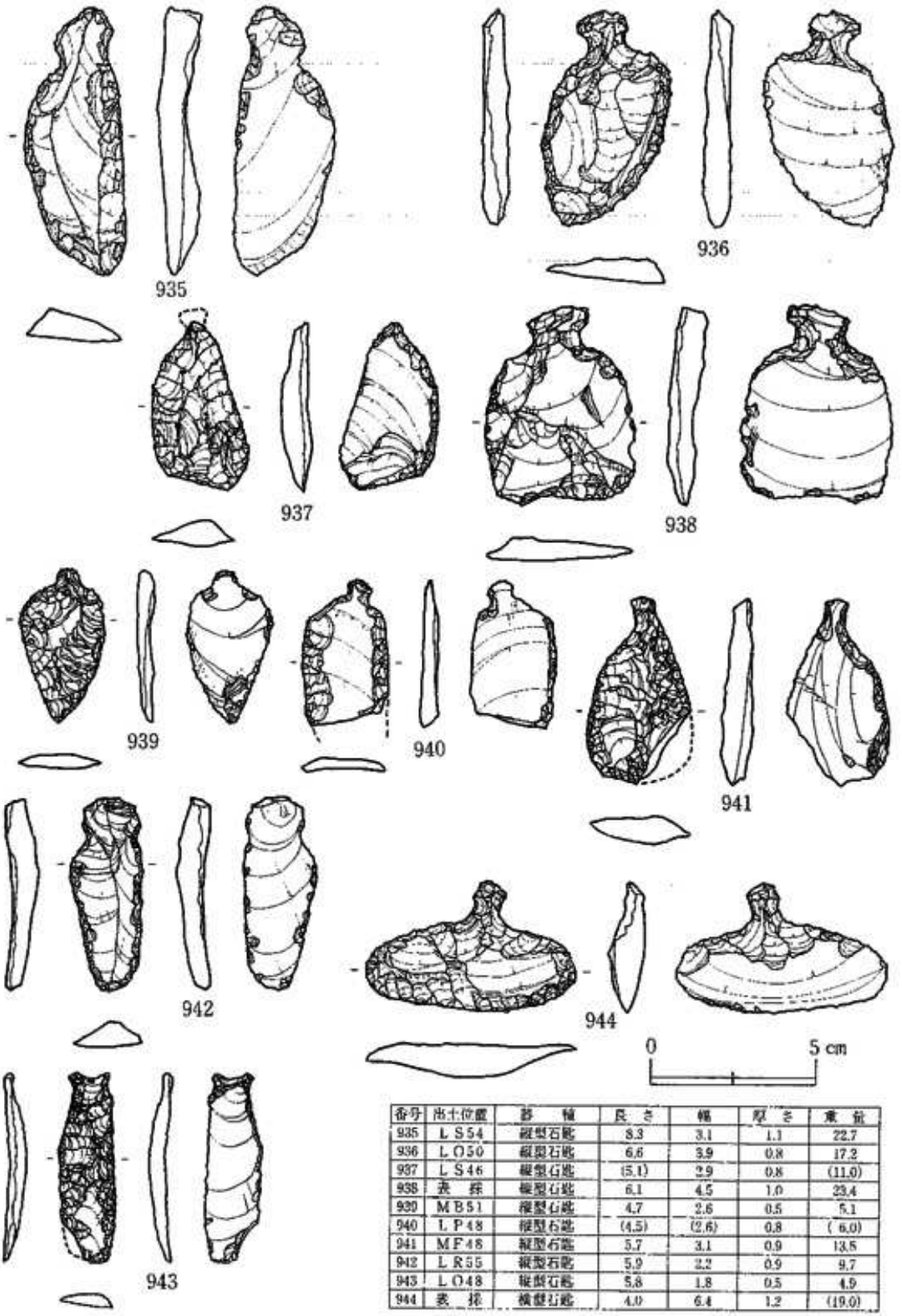
番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
920	L S48	楔状石器	6.3	3.7	1.0	25.7
921	L F38	楔状石器	6.4	4.1	1.4	37.7
922	M B49	楔状石器	5.9	3.5	0.8	18.5
923	L P55	楔状石器	6.2	3.7	1.1	27.2
924	M C49	楔状石器	6.0	4.3	1.4	36.6
925	M C52	楔状石器	9.2	4.4	1.1	58.7
926	L R45	楔状石器	6.5	4.4	1.5	39.6

第147図　遺構外出土石器(2)



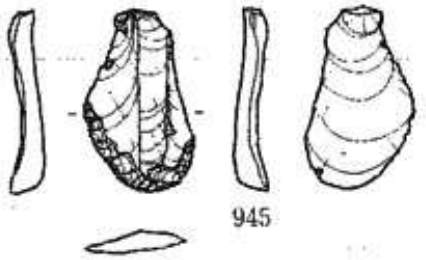
番号	出土位置	器　種	長　さ	幅	厚　さ	重　量
927	LM52	楔状石器	7.6	4.1	1.8	48.3
928	LR49	楔状石器	7.4	3.4	1.9	40.7
929	LS49	楔状石器	5.0	2.8	1.5	19.1
930	MB47	楔状石器	7.4	2.5	1.4	27.1
931	LL52	楔型石鏃	6.7	2.5	0.6	9.5
932	MC50	楔型石鏃	7.0	2.4	0.7	9.2
933	LP47	楔型石鏃	7.4	2.8	0.8	17.1
934	LO54	楔型石鏃	7.0	3.0	1.2	19.2

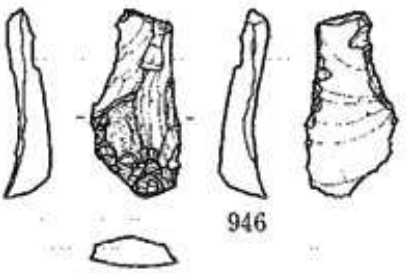
第148図　遺構外出土石器(3)

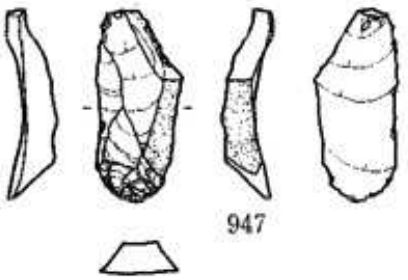


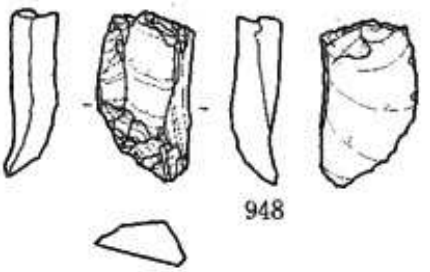
番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
935	L S54	縦型石匙	8.3	3.1	1.1	22.7
936	L O50	縦型石匙	6.6	3.9	0.8	17.2
937	L S46	縦型石匙	(5.1)	2.9	0.8	(11.0)
938	表　採	縦型石匙	6.1	4.5	1.0	23.4
939	M B51	縦型石匙	4.7	2.6	0.5	5.1
940	L P48	縦型石匙	(4.5)	(2.6)	0.8	(6.0)
941	M F48	縦型石匙	5.7	3.1	0.9	13.5
942	L R55	縦型石匙	5.9	2.2	0.9	9.7
943	L O48	縦型石匙	5.8	1.8	0.5	4.9
944	表　採	横型石匙	4.0	6.4	1.2	(19.0)

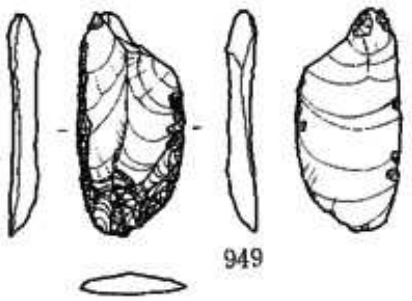
第149図　遺構外出土石器(4)

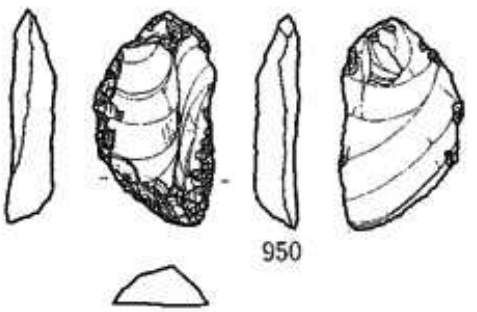


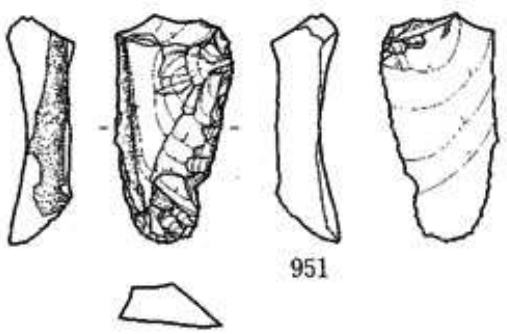


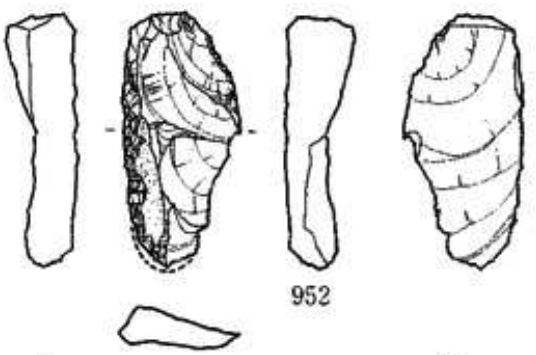


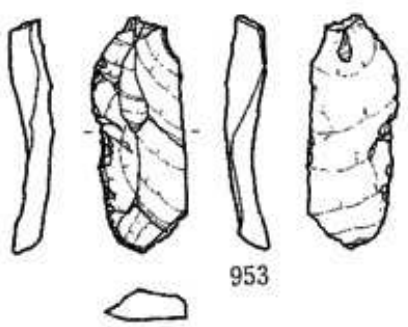






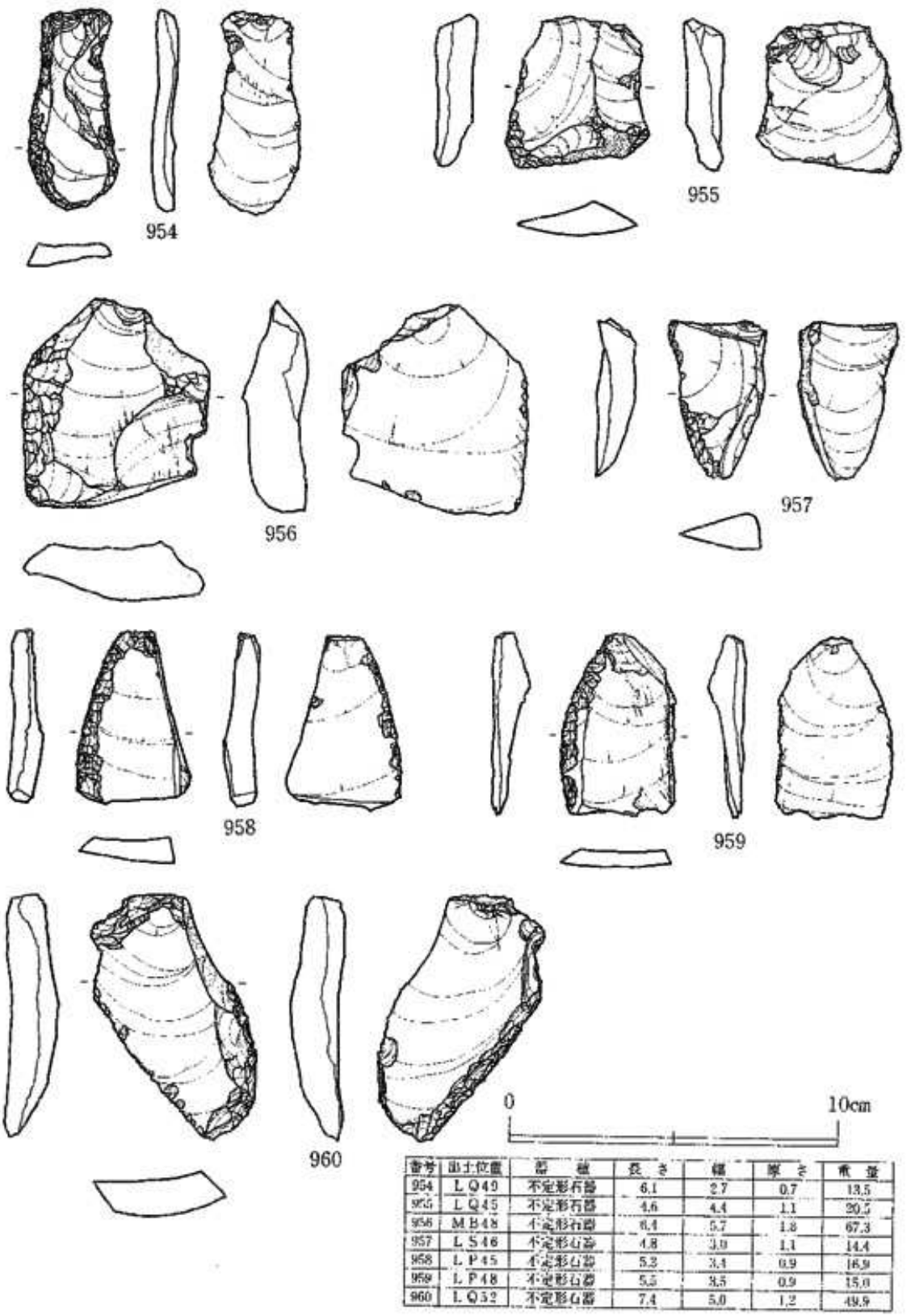






番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
945	MB46	不定形石器	4.4	2.7	0.7	6.5
946	LP51	不定形石器	4.5	2.2	0.9	8.3
947	LP51	不定形石器	4.7	2.1	0.9	8.0
948	LP56	不定形石器	4.1	2.3	1.1	12.3
949	LS46	不定形石器	5.5	2.6	0.6	9.1
950	LR46	不定形石器	5.2	3.0	1.0	14.9
951	LT48	不定形石器	5.5	2.9	1.4	20.8
952	LR47	不定形石器	6.2	3.0	1.2	20.2
953	LO52	不定形石器	5.7	2.3	0.7	11.1

第150図　遺構外出土石器(5)



番号	出土位置	器　種	長　さ	幅	厚　さ	重　量
954	LQ49	不定形石器	6.1	2.7	0.7	13.5
955	LQ45	不定形石器	4.6	4.4	1.1	20.5
956	MB48	不定形石器	6.4	5.7	1.8	67.3
957	LS46	不定形石器	4.8	3.9	1.1	14.4
958	LP45	不定形石器	5.2	3.4	0.9	16.9
959	LP48	不定形石器	5.5	3.5	0.9	15.0
960	LQ52	不定形石器	7.4	5.0	1.2	49.9

第151図　遺構外出土石器(6)

c類　(第153図963・964・966)

剥片の一側縁に刃部、対辺に交互剥離状の刃つぶしの二次加工を施し楕円形に近い形態に整形したものである。刃部はゆるい凸刃である。966は横長剥片、そのほかは縦長剥片を素材とする。

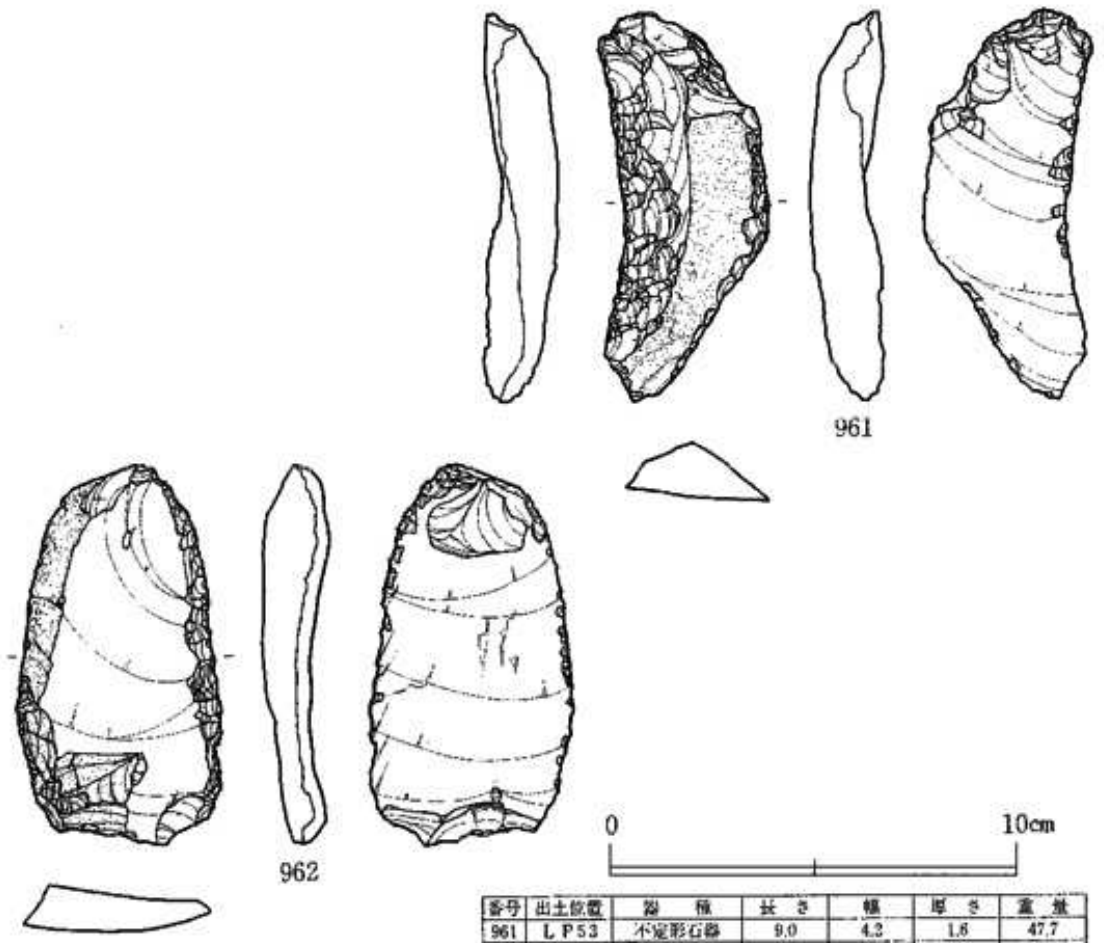
d類　(第154図967～970)

横長剥片の一側縁に凸刃を形成し、末端と打面側に刃つぶしを施したものである。968・969の刃部は、剥片の鋭い縁辺をそのまま利用している。

e類　(第155図971・972)

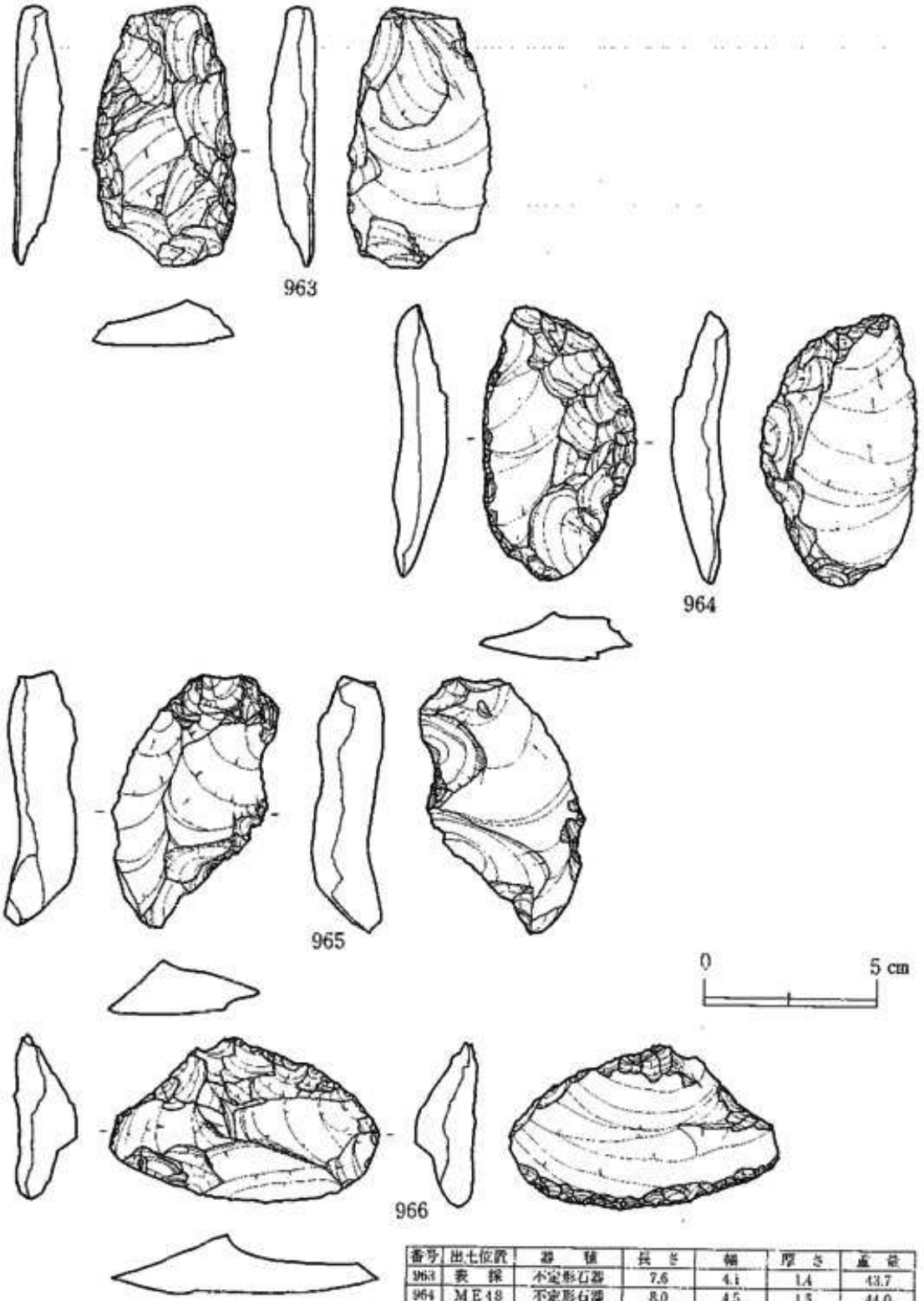
縦長剥片を素材とし、末端に尖頭部がある形態である。刃部は側縁に形成されゆるやかな凸刃である。

f類　(第153図965・第155図974～979・第156図982・984・985・第157図993・第165図1023・第173図1043)



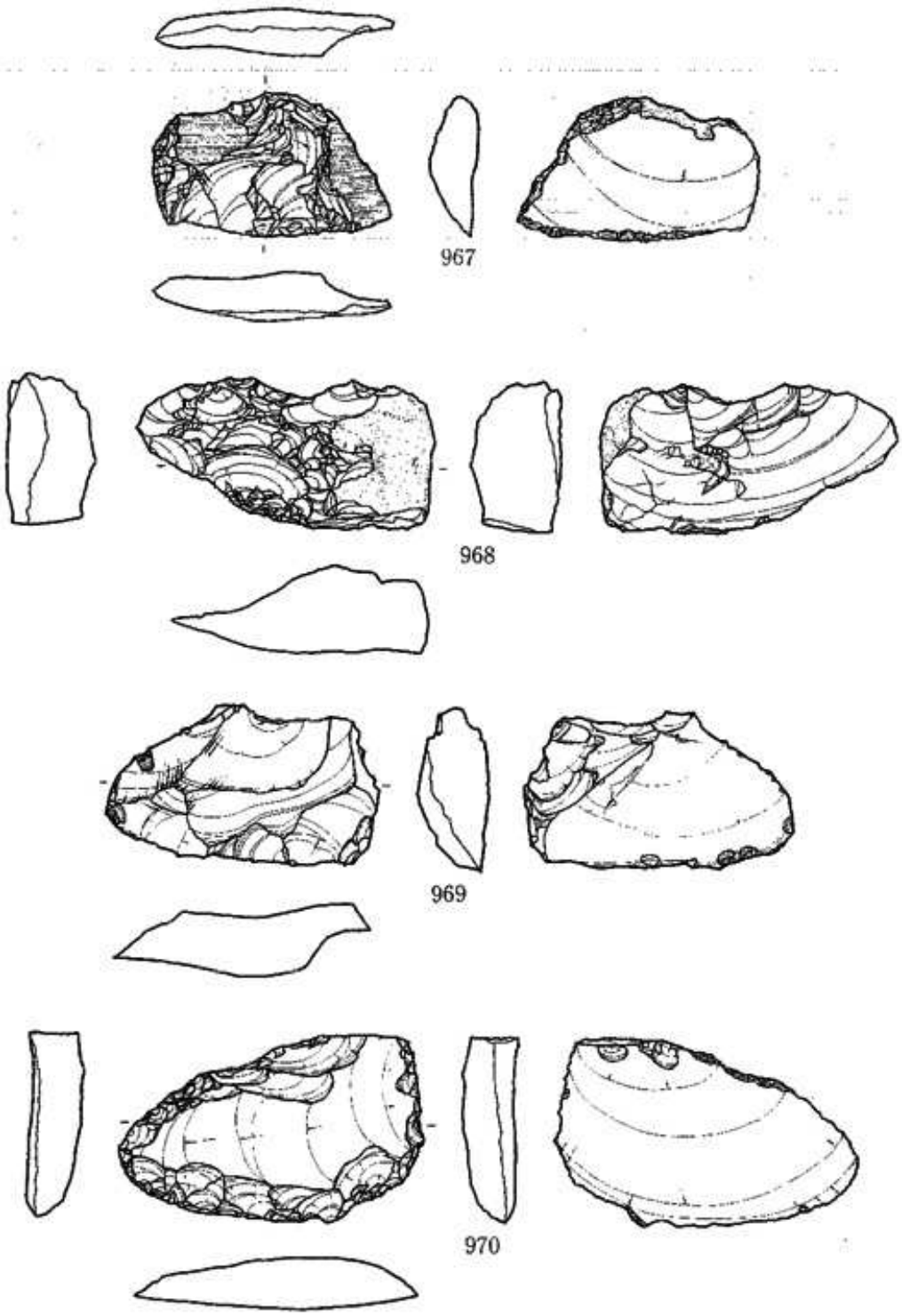
番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
961	L P53	不定形石器	9.0	4.3	1.8	47.7
962	L R49	不定形石器	9.3	5.0	1.2	66.5

第152図　遺構外出土石器(7)



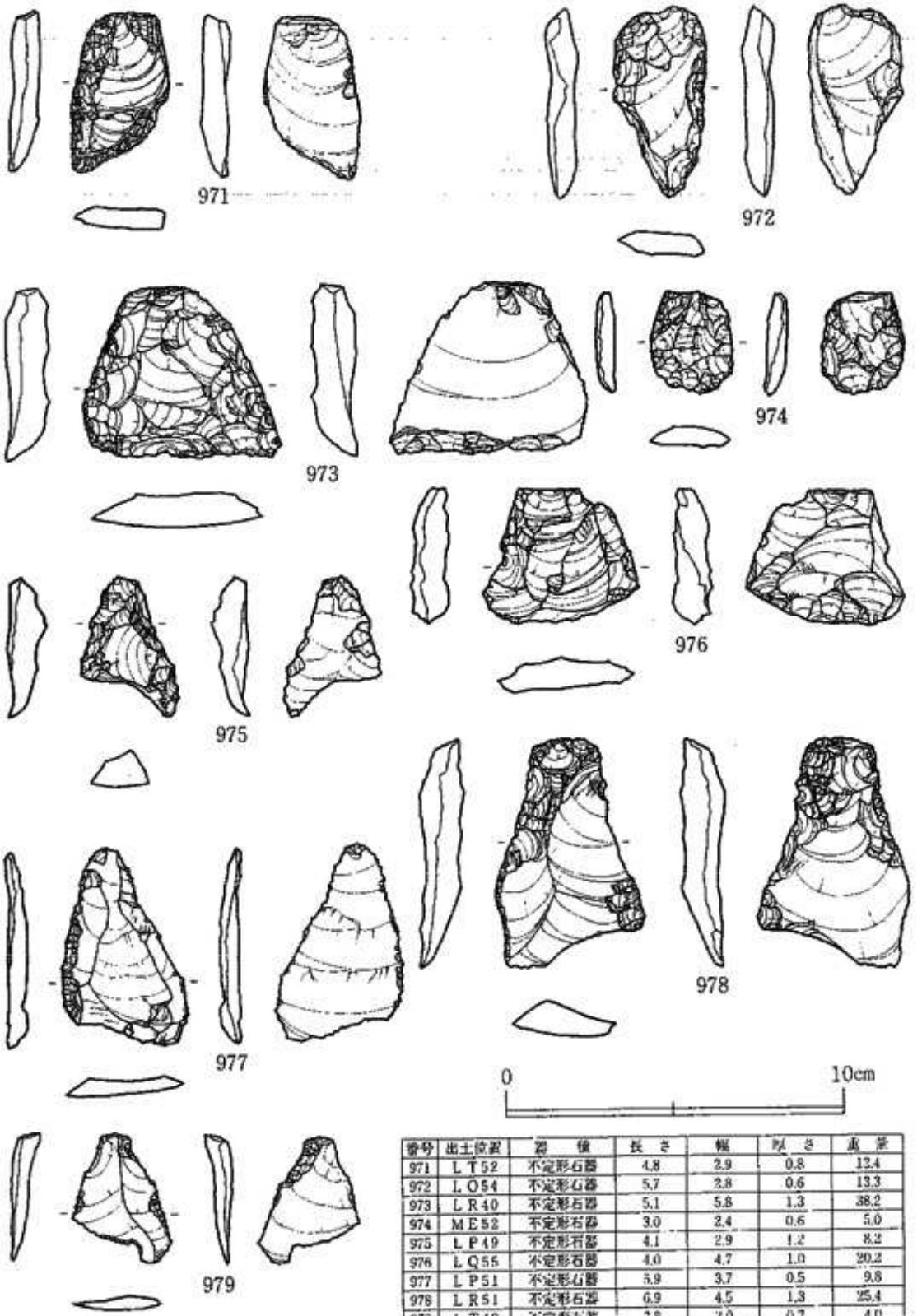
番号	出土位置	器　種	長　さ	幅	厚　さ	重　量
963	表　採	不定形石器	7.6	4.1	1.4	43.7
964	ME18	不定形石器	8.0	4.5	1.5	44.0
965	LQ48	不定形石器	7.5	4.8	2.0	51.4
966	表　採	不定形石器	4.9	7.9	1.7	47.6

第153図　遺構外出土石器(8)



番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
967	L Q46	不定形石器	6.6	5.0	1.3	29.6
968	L S53	不定形石器	4.1	8.3	2.4	83.1
969	L Q52	不定形石器	4.3	6.5	1.7	54.8
970	表採	不定形石器	5.2	8.1	1.4	65.4

第154図　遺構外出土石器(9)



番号	出土位置	器　種	長　さ	幅	厚　さ	重　量
971	LT52	不定形石器	4.8	2.9	0.8	12.4
972	LO54	不定形石器	5.7	2.8	0.6	13.3
973	LR40	不定形石器	5.1	5.8	1.3	38.2
974	ME52	不定形石器	3.0	2.4	0.6	5.0
975	LP49	不定形石器	4.1	2.9	1.2	8.2
976	LQ55	不定形石器	4.0	4.7	1.0	20.2
977	LP51	不定形石器	5.9	3.7	0.5	9.8
978	LR51	不定形石器	6.9	4.5	1.3	25.4
979	LT48	不定形石器	3.8	3.0	0.7	4.0

第155図　遺構外出土石器(10)

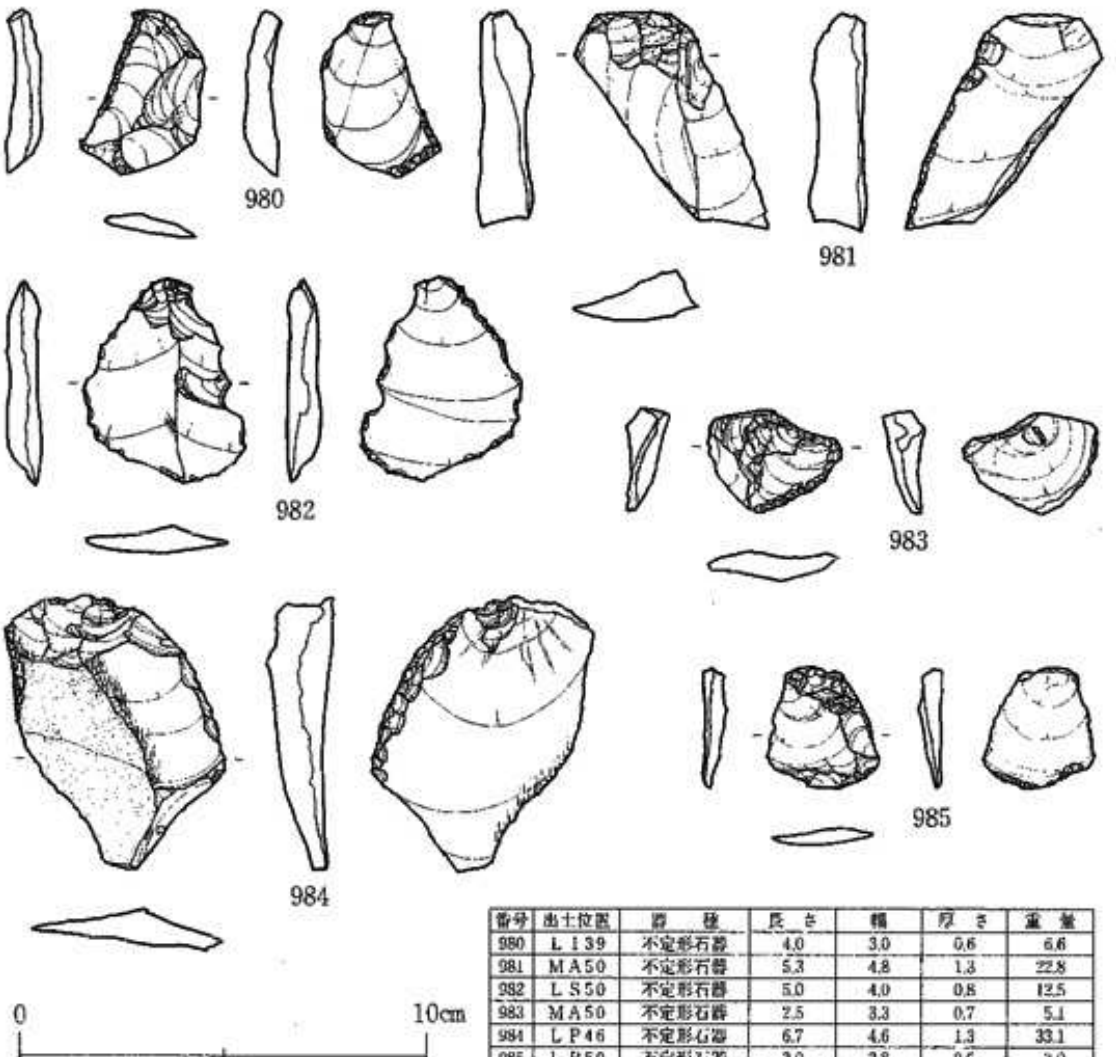
素材剥片の一縁辺に刃部を形成し、他の縁辺に刃つぶしの二次加工を施したものである。刃部は、素材剥片の鋭利な縁辺をそのまま利用するもの（976～979・982・985・1023）と、背面に二次加工を施して作出するもの（965・974・975・984・993・1043）がある。

g類　（第155図973）

台形の剥片の背面に二次加工を施し、主要剥離面側に内湾する末端の左側から左側縁にかけてa類と同様のエンドスクレイパー状刃部、右側縁には直刃の刃部を形成している。

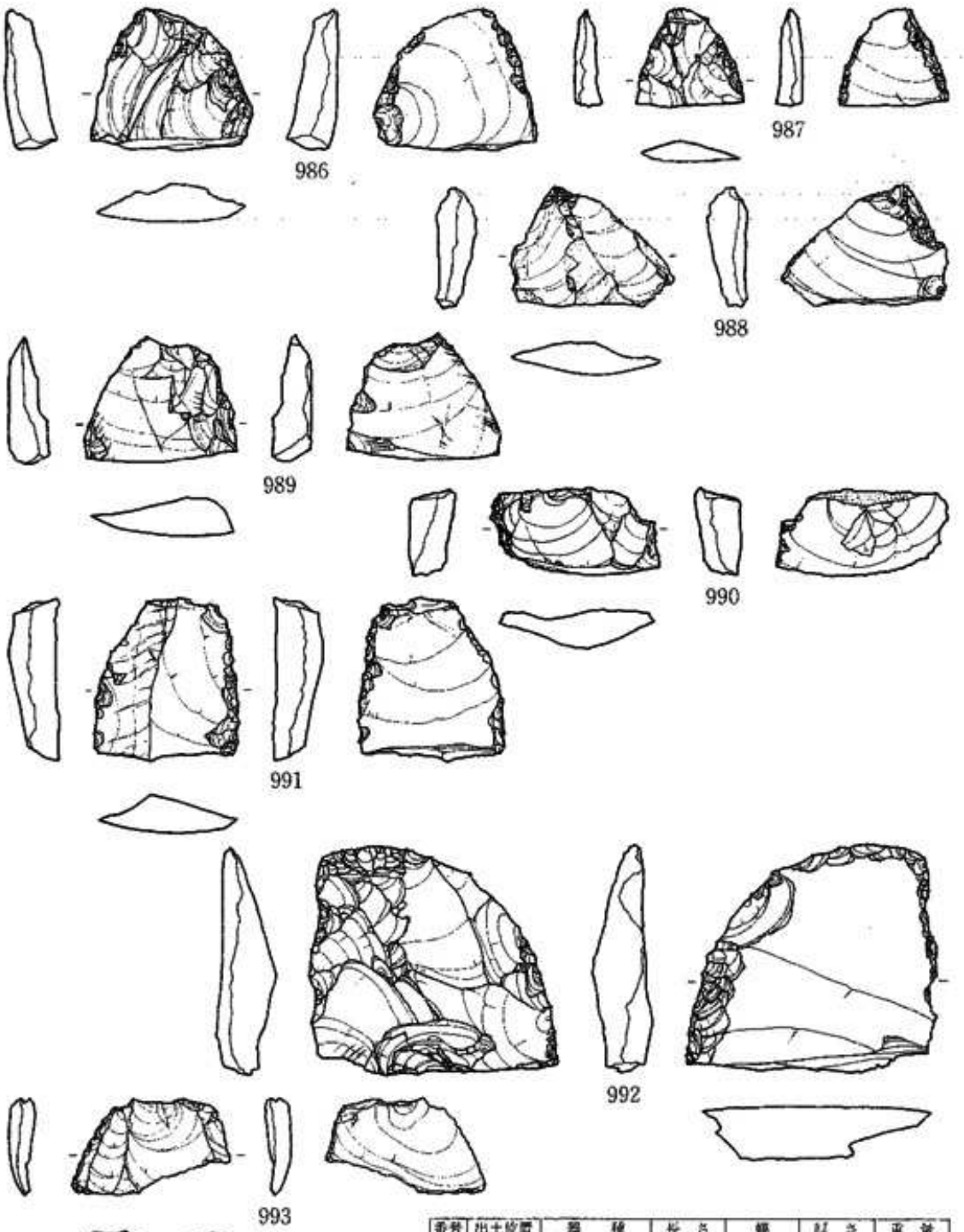
h類　（第156図980・981・983・第168～170図1034）

縦長剥片の一側縁に直刃の刃部を形成し、他の縁辺には刃つぶしを施さないものである。1034はLP50グリッドで出土した剥片Gの末端に刃部が作出されている。MB45グリッドでは、A・C・D・E・Fがまとまって一カ所から出土し（図版9）、剥片貯蔵（埋納）場所と思われる。



番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
980	L139	不定形石器	4.0	3.0	0.6	6.6
981	MA50	不定形石器	5.3	4.8	1.3	22.8
982	LS50	不定形石器	5.0	4.0	0.8	12.5
983	MA50	不定形石器	2.5	3.3	0.7	5.1
984	LP46	不定形石器	6.7	4.6	1.3	33.1
985	LP50	不定形石器	3.0	2.8	0.5	3.0

第156図　遺構外出土石器(11)



番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
986	表採	不定形石器	4.0	4.6	1.3	22.6
987	L S47	不定形石器	2.8	3.0	0.8	5.6
988	L Q54	不定形石器	3.4	4.7	1.1	12.3
989	L Q54	不定形石器	3.6	4.4	1.1	15.6
990	M G50	不定形石器	2.5	4.9	1.2	14.7
991	L P46	不定形石器	4.7	4.2	1.3	24.5
992	L N48	不定形石器	6.5	7.1	1.7	77.1
993	L O53	不定形石器	2.7	4.6	0.5	5.8

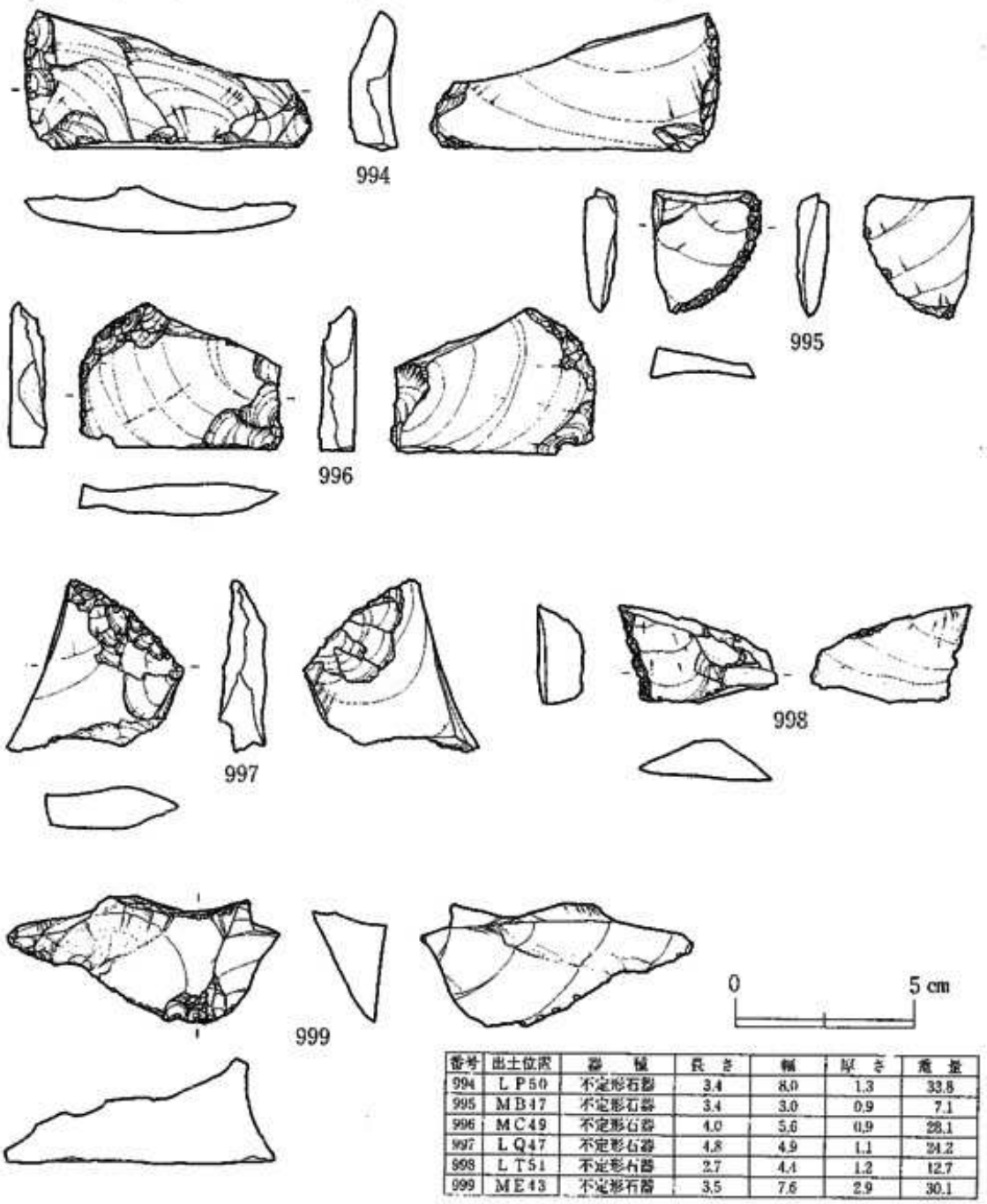
0　10cm

第157図　遺構外出土石器(12)

不定形石器である剥片Gが出土したLP50グリッドはSB22・SB89建物跡に近く、他にも石器や剥片が多く出土している。

i類　(第157図986~989・991・992)

素材剥片を切断して切断面を底辺とする三角形を形成し、他の二辺のうち一辺に刃つぶし、一辺に刃部があるものである。刃部は素材剥片の鋭利な縁辺を利用するもの(988・989・991)



番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
994	LP50	不定形石器	3.4	8.0	1.3	33.8
995	MB47	不定形石器	3.4	3.0	0.9	7.1
996	MC49	不定形石器	4.0	5.6	0.9	28.1
997	LQ47	不定形石器	4.8	4.9	1.1	24.2
998	LT51	不定形石器	2.7	4.4	1.2	12.7
999	ME43	不定形石器	3.5	7.6	2.9	30.1

第158図　遺構外出土石器(13)

と、片面に細かい剥離で刃部を作出するもの（986・987・992）がある。

j類　（第157図990・第158図994・996）

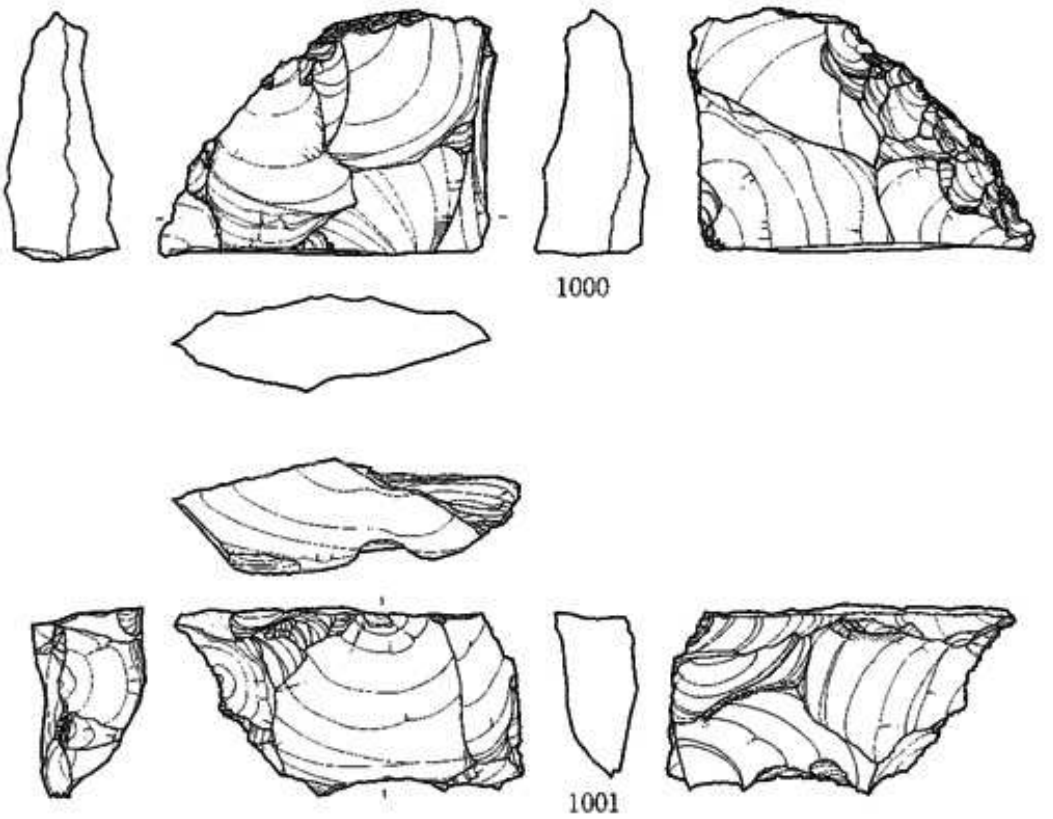
素材剥片を切断して切断面を長辺とする台形に成形し、短辺の一方を刃部とし、他方に刃つぶしを施す。刃部は素材の鋭利な縁辺を利用している。

k類　（第158図995・997～999・第160図1002～1004・第166図1029・第167図1030・1031）

素材剥片を切断して成形し、縁辺の一辺に刃部を作出するが、他の縁辺の刃つぶしは行わないものである。1004は縁辺ではなく表面の末端が大きくヒンジフラクチャーになる剥離痕の末端部に、刃部を作出している。

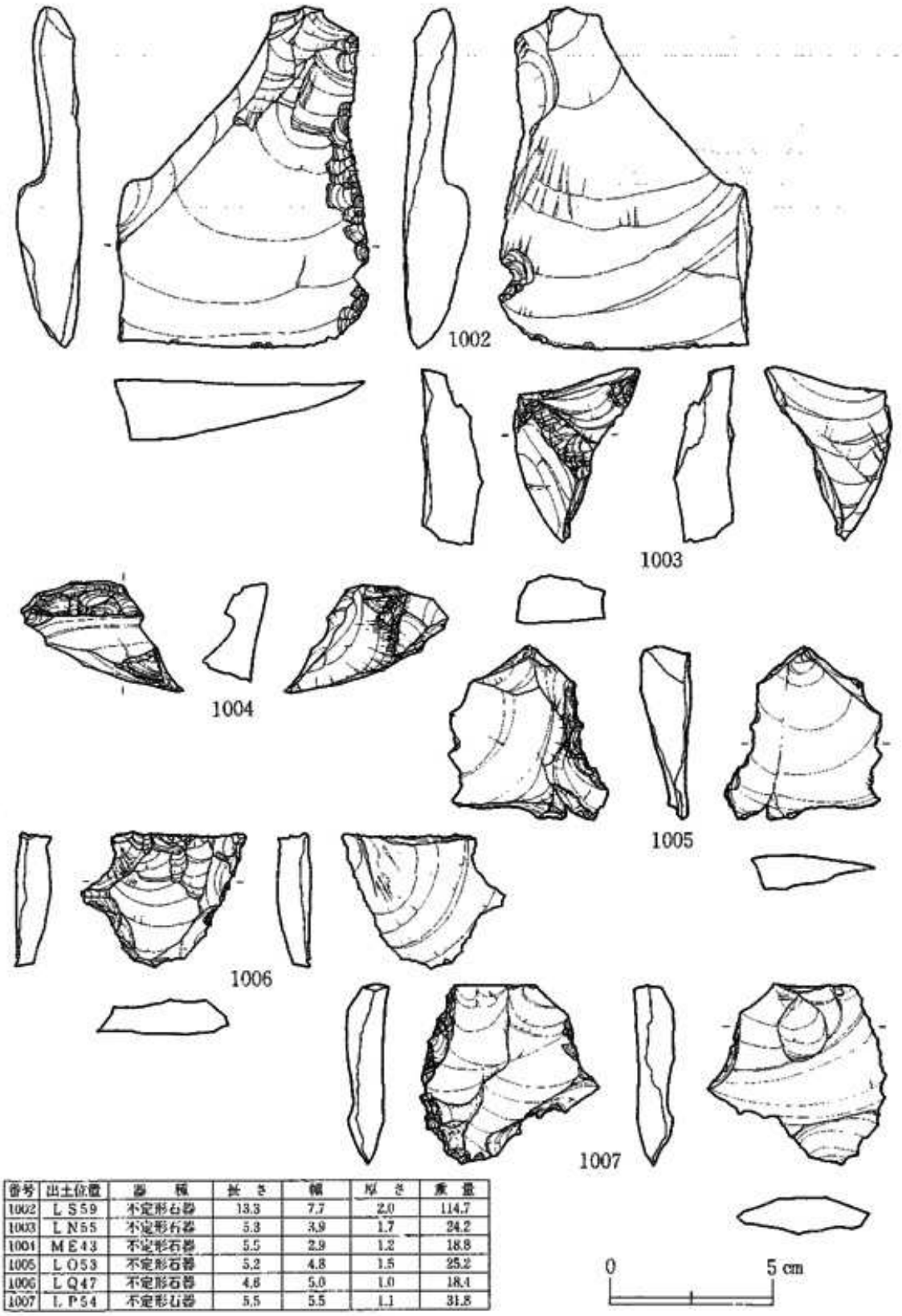
l類　（第160図1005～1007・第161図1008・1009）

剥片に正面観が鋸歯状で急角度の刃部を作出したもので、一側縁に刃部のあるもの（1005・1008・1009）と、両側に刃部のあるもの（1006・1007）がある。



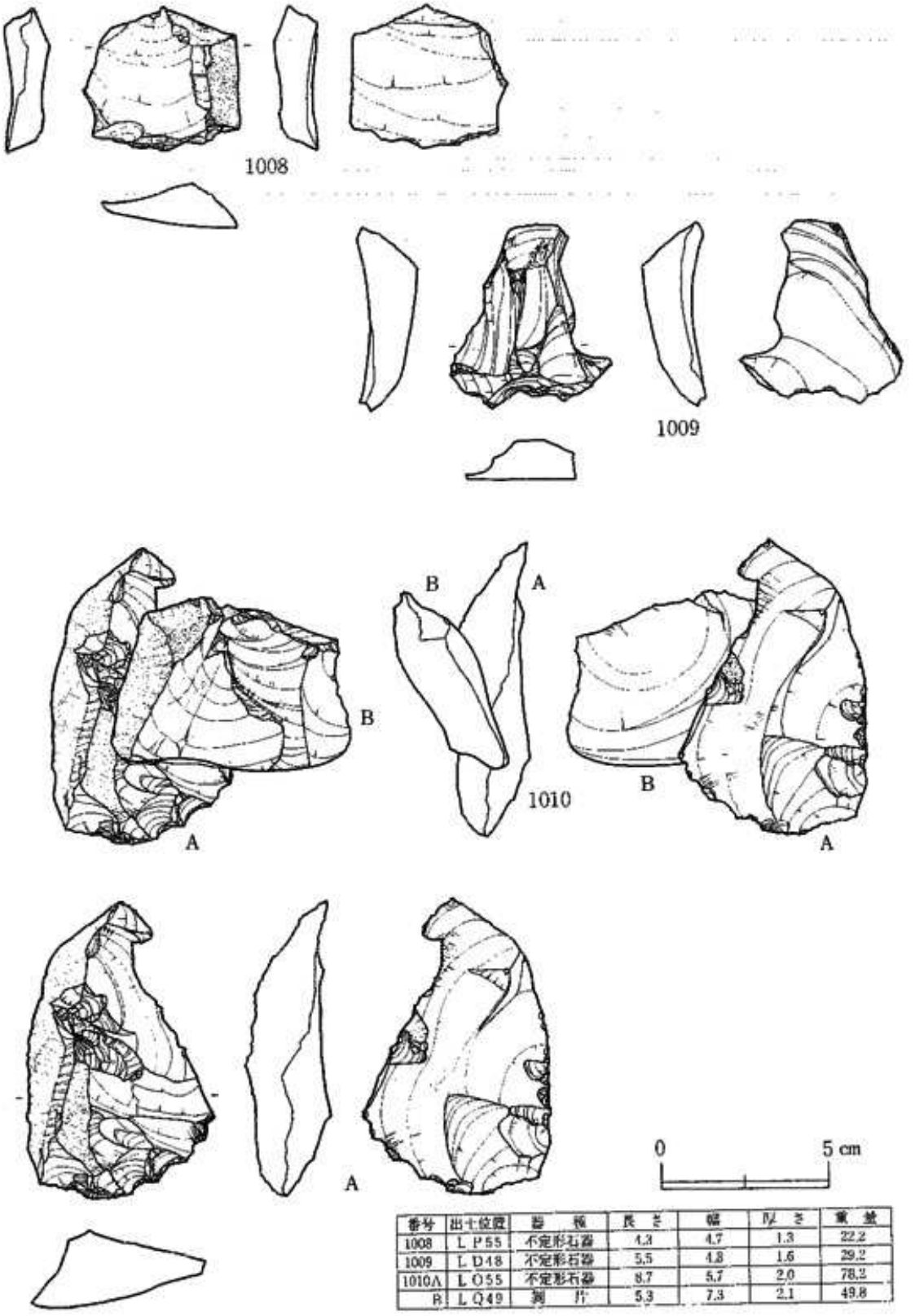
番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
1000	MD45	不定形石器	6.0	8.3	3.6	100.7
1001	MD45	石核	4.6	8.5	2.9	94.0
	ME43	剥片	5.5	5.2	2.1	32.6

第159図　遺構外出土石器(14)



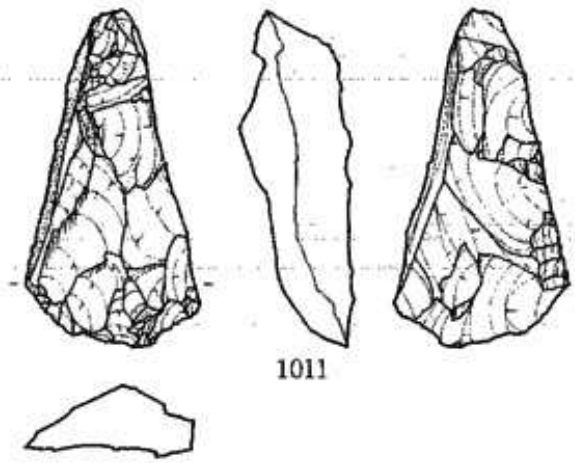
番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
1002	L S59	不定形石器	13.3	7.7	2.0	114.7
1003	L N55	不定形石器	5.3	3.9	1.7	24.2
1004	M E43	不定形石器	5.5	2.9	1.2	18.8
1005	L O53	不定形石器	5.2	4.8	1.5	25.2
1006	L Q47	不定形石器	4.6	5.0	1.0	18.4
1007	L P54	不定形石器	5.5	5.5	1.1	31.8

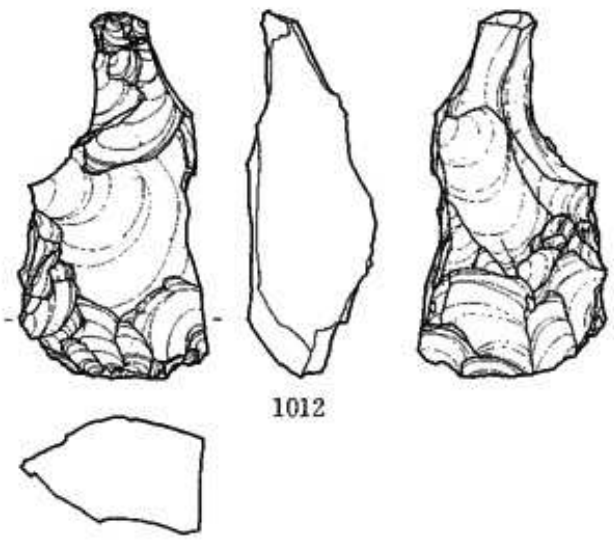
第160図　遺構外出土石器(15)

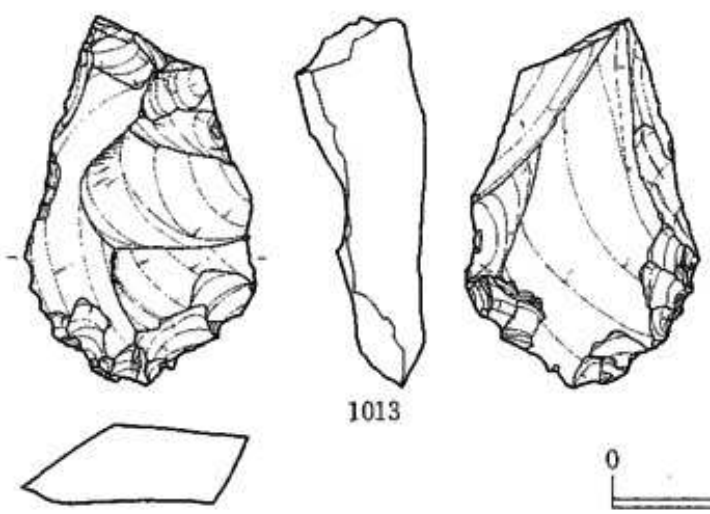


番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
1008	L P55	不定形石器	4.3	4.7	1.3	22.2
1009	L D48	不定形石器	5.5	4.8	1.6	29.2
1010A	L O55	不定形石器	8.7	5.7	2.0	78.2
B	L Q49	剥片	5.3	7.3	2.1	49.8

第161図　遺構外出土石器(16)

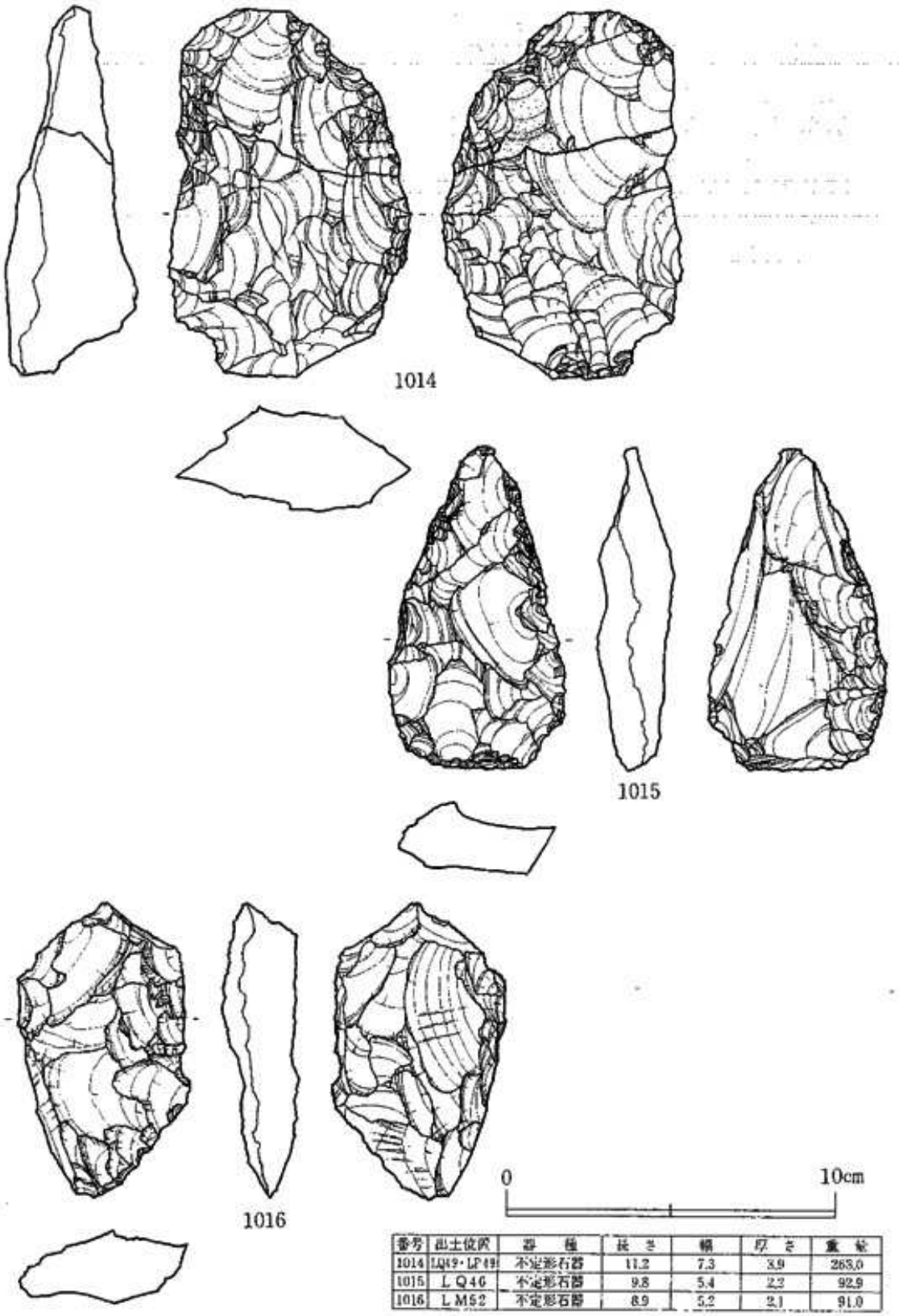






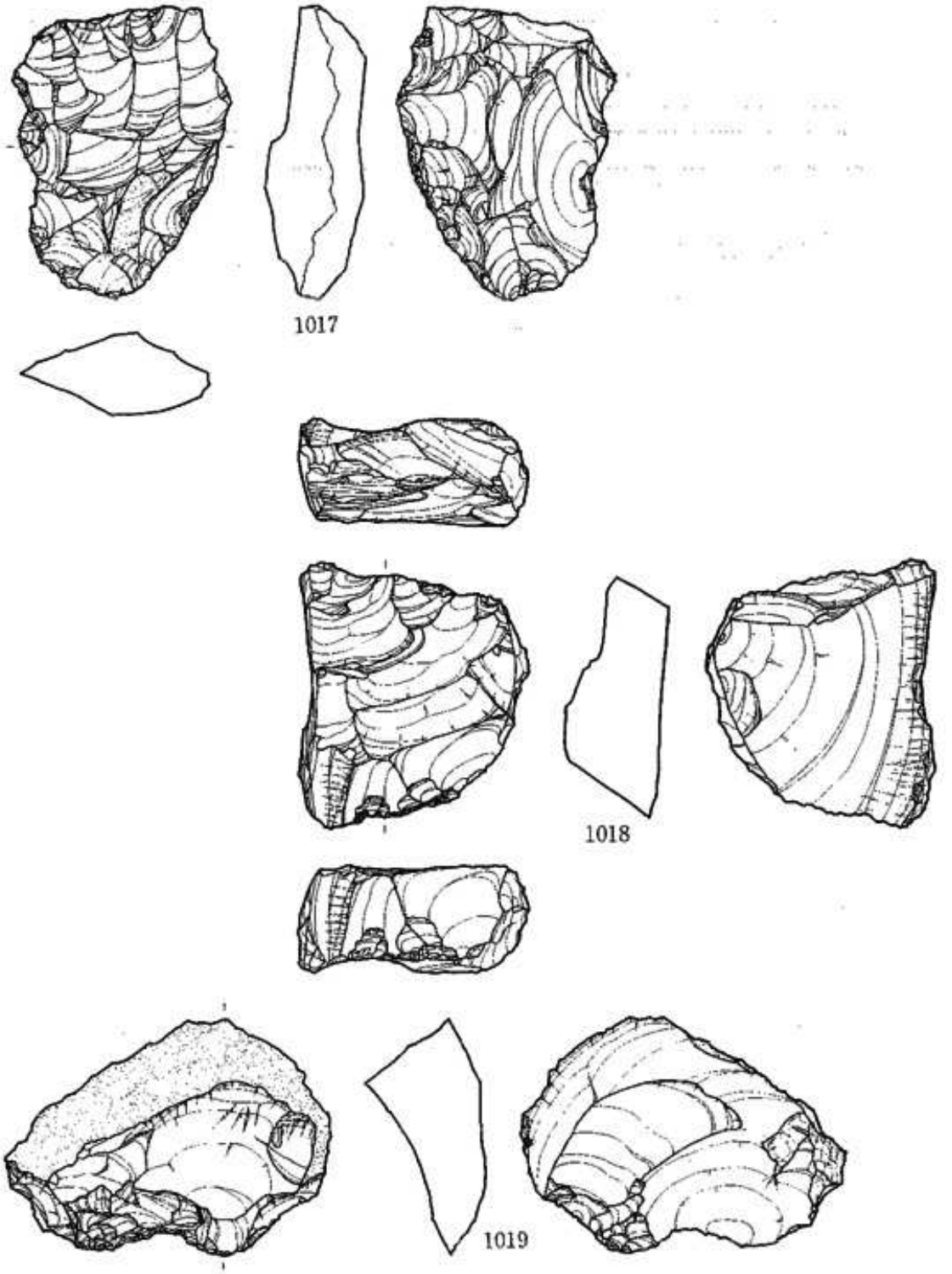
番号	出土位置	器　種	長　さ	幅	厚　さ	重　量
1011	ＬＱ55	不定形石器	8.3	4.3	2.7	68.4
1012	ＬＱ48	不定形石器	9.0	4.5	3.1	105.7
1013	ＬＱ48	不定形石器	9.0	5.7	2.9	117.0

第162図　遺構外出土石器(17)



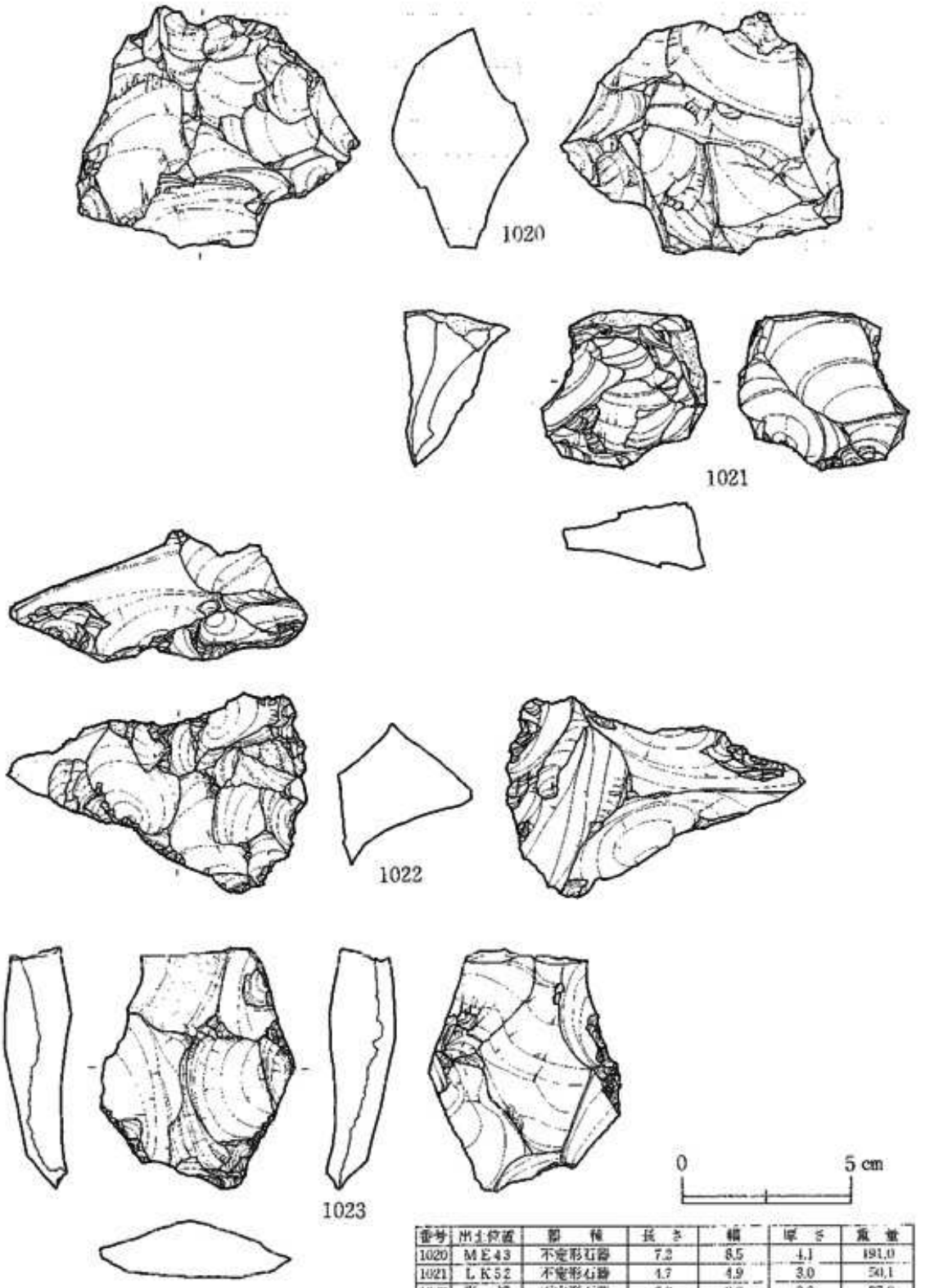
番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
1014	LQ49・LP49	不定形石器	11.2	7.3	3.9	263.0
1015	L Q46	不定形石器	9.8	5.4	2.2	92.9
1016	L M52	不定形石器	8.9	5.2	2.1	91.0

第163図　遺構外出土石器(18)



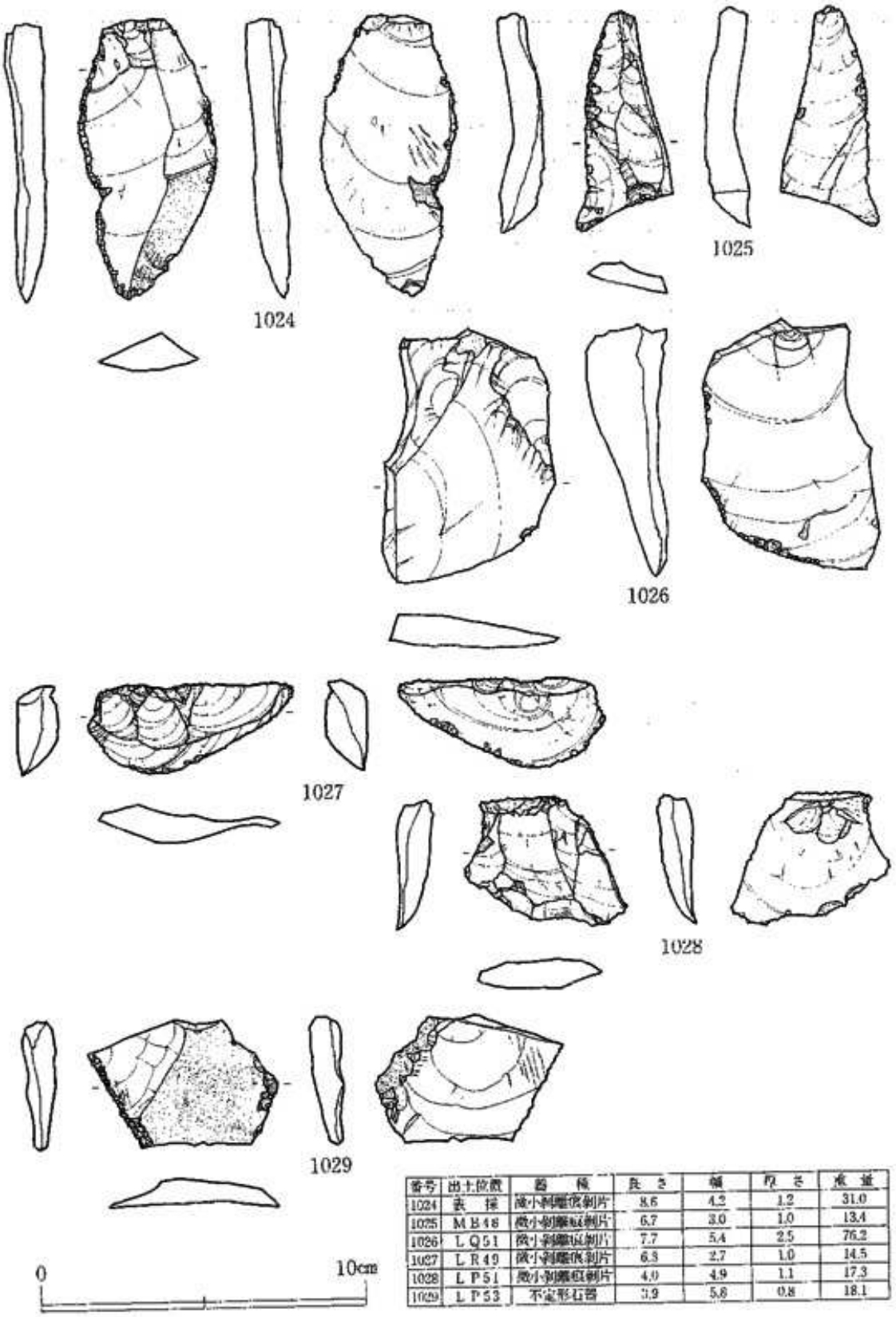
番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
1017	L R49	不定形石器	8.5	6.3	2.9	128.1
1018	L Q47	不定形石器	7.7	6.6	3.1	154.6
1019	L T52	不定形石器	6.8	9.4	3.9	210.4

第164図　遺構外出土石器(19)



番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
1020	ＭＥ43	不定形石器	7.2	8.5	4.1	191.0
1021	ＬＫ52	不定形石器	4.7	4.9	3.0	54.1
1022	表　採	不定形石器	6.0	8.9	3.8	97.0
1023	ＬＴ47	不定形石器	7.2	5.8	2.0	68.8

第165図　遺構外出土石器(20)



番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重量
1024	表採	微小剥離痕剥片	8.6	4.2	1.2	31.0
1025	M B48	微小剥離痕剥片	6.7	3.0	1.0	13.4
1026	L Q51	微小剥離痕剥片	7.7	5.4	2.5	76.2
1027	L R49	微小剥離痕剥片	6.3	2.7	1.0	14.5
1028	L P51	微小剥離痕剥片	4.0	4.9	1.1	17.3
1029	L P53	不定形石器	3.9	5.8	0.8	18.1

第166図　遺構外出土石器(21)